鹿角市文化財調査資料38

大湯環状列石

周辺遺跡発掘調査報告書(6)

1990－3

秋田県鹿角市教育委員会

序

特別史跡「大湯環状列石」及びその周辺の解明を目的として継続してまいりました大湯環状列石周辺遺跡の発掘調査も、本年度で6年目を迎えました。

本年度は、万座環状列石の北北西150ｍ地点と北東250ｍ地点の2ケ所を調査しました。その結果、F_1区においては、縄文時代後期の竪穴住居跡のほか、建物跡、土壙等多数の遺構の検出と、多量の遺物の出土がありました。竪穴住居跡は、台地縁辺に沿って確認され、その分布は広がるものと考えられます。また、列石近傍で検出された建物群、土壙群の分布も広範囲に及んでおり、環状列石の性格、構造はもとより、これらを内包した縄文時代後期の集落を考える上で貴重な資料と言えます。

本書は、これらの調査結果をまとめたものであります。今後の大湯環状列石の保存と活用、学術研究の一助になれば幸いに存じます。

尚、環状列石周辺は、広範囲にわたり遺構、遺物が埋蔵されていることが分布調査によって確認されておりますことから、指定地拡大のために、昭和52年8月から地権者との交渉をすすめて参りましたが、昨年7月までに漸く同意を得、10月に国の文化財保護審議会に諮問していただいた結果、今年3月8日、文部省告示第16号をもって認可されました。

周辺一帯は畑として利用されておりますが、最近、特に大型機械による深耕農作業のため、遺跡の破壊が懸念されております。

今後、この貴重な遺跡と縄文文化を後世に伝えていくために、国・県のご指導、ご援助を仰ぎながら指定地の公有化に努めて参りたいと存じます。

終りに、この調査に際しご指導、ご協力をいただいた関係各位に心から感謝申し上げるとともに、今後の調査につきましてもご協力賜りますようお願い申し上げます。

平成2年3月

鹿角市教育委員会

教育長　杉　山　新　吉

例　　言

1．本報告書は、平成元年度に国庫補助金を得て実施した大湯環状列石周辺遺跡第6次発掘調査の報告書である。本調査概要については機会あるごとに発表してきたが、本報告書を正式なものとする。

2．本報告書の執筆は、調査員が分担し、文責は各々の文末に明記した。

3．資料の鑑定並びに同定等は下記のとおり依頼した。

石器類石質鑑定	秋田県立十和田高等学校	鎌　田　健　一
花粉分析	鹿角市立尾去沢中学校	成　田　典　彦
炭化材同定	鹿角市立尾去沢中学校	成　田　典　彦

4．土層、土器などの色調の記載には「新版　標準土色帖」（日本色彩研究所）を使用した。

5．遺物の実測・採拓・トレース等の整理作業は、調査員、調査補助員が行なった。

6．本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版は任意の縮尺とした。

7．本報告書の文中において、用語の主たるものは統一するように努めたが、数度にわたり使用しているものは簡略している場合もある。

8．図版・表等で下記のような記号やスクリーン・トーンを使用した。

ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＸ(O)…石囲炉　ＳＢ…建物跡　Pit…柱穴状ピット

ＳＸ(Ｓ)…配石遺構　ＳＸ(Ｆ)…焼土遺構　ＳＫ(Ｔ)…Ｔピット

ＳＫ(Ｆ)…フラスコ状土壙　ＳＫ…土壙

…遺構確認面以下の土層　…焼土　…柱痕、石器の使用面

9．発掘調査・報告書作成にあたっては、下記の方々から御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

河原純之、岡村道雄（文化庁記念物課）、佐原　眞、牛川喜幸（奈良国立文化財研究所）藤本英夫（北海道文化財研究所）、村越　潔（弘前大学）、小林達雄（国学院大学）林　謙作（北海道大学）、阿部義平（国立歴史民俗博物館）、中野益男（帯広畜産大学）鈴木保彦（日本大学）、山本暉久（神奈川県立埋蔵文化財センター）、戸田哲也（玉川大学玉川文化財研究所）、北林八洲晴、三浦圭介、成田滋彦、坂本洋一（青森県埋蔵文化財調査センター）、鈴木克彦（青森県教育庁文化課）、種市幸生（北海道教育委員会）、葛西　励、高橋　潤（青森山田高等学校）、冨樫泰時、高橋忠彦、小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）、安村二郎（鹿角市史編さん室）、板橋範芳（大館市教育委員会）

本　文　目　次

序
例　言
本文目次
図版・ＰＬ・表目次
第Ⅰ章　遺跡の環境
1　遺跡の位置と立地……1
2　遺跡の層序……1
第Ⅱ章　調査の概要
1　調査要項……4
2　調査の方法……6
3　調査の経過……6
第Ⅲ章　E_4区の検出遺構と出土遺物
1　Ｔピット……8
2　遺構外出土遺物
(1)　土　器……8
(2)　石　器……8
(3)　石製品……9
第Ⅳ章　F_1区の検出遺構と出土遺物
（縄文時代）
1　竪穴住居跡……10
2　石囲炉……25
3　建物跡と柱穴状ピット……26
4　配石遺構
(1)　立石遺構……36
(2)　集石遺構……36
(3)　配石遺構……38
5　焼土遺構……40
6　土　壙
(1)　Ｔピット……46
(2)　フラスコ状土壙……47
(3)　土　壙……54
7　遺構外出土遺物
(1)　土　器……72
(2)　石　器……90
(3)　土製品・石製品……98
第Ⅴ章　F_1区の検出遺構と出土遺物
（歴史時代）
1　竪穴住居跡……117
2　土　壙……112
3　遺構外出土遺物……115
第Ⅵ章　自然科学的調査
1　大湯環状列石周辺の古環境……116
2　F_1区ⅢdⅤ層中の礫層について…117
3　大湯軽石層中の石質岩片について…117
第Ⅶ章　調査のまとめ……120

図版・ＰＬ・表目次

図　版　目　次

第１図　E_4区基本層序…… 2
第２図　F_1区基本層序 …… 3
第３図　調査区と周辺の地形…… 5
第４図　遺構配置図(E_4区)…… 8
第５図　Ｔピット実測図…… 9
第６図　遺構外出土土器拓影図…… 9
第７図　遺構外出土石器実測図…… 9
第８図　遺構外出土石製品実測図…… 9
第９図　遺構配置図(F_1区)……11
第10図　第403号竪穴住居跡実測図 ……12
第11図　第403号竪穴住居炉跡、付属施設実測図…12
第12図　第405号竪穴住居跡実測図 ……13
第13図　第405号竪穴住居炉跡実測図 ……13
第14図　第406、407号竪穴住居跡実測図……15
第15図　第408号竪穴住居跡実測図 ……18
第16図　第408号竪穴住居炉跡実測図 ……18
第17図　第410号竪穴住居跡実測図 ……18
第18図　竪穴住居跡、建物跡出土土器実測図…19
第19図　第403、405、408、410号竪穴住居跡出土土器拓影図…20
第20図　第406、407号竪穴住居跡出土土器拓影図…21
第21図　竪穴住居跡出土石器実測図(1)……22
第22図　竪穴住居跡出土石器実測図(2)……23
第23図　竪穴住居跡出土土製品(1)、石製品実測図…24
第24図　竪穴住居跡出土土製品(2)……24
第25図　第401号石囲炉実測図 ……25
第26図　第402号石囲炉実測図 ……25
第27図　第403号石囲炉実測図 ……26
第28図　南部建物跡柱穴状ピット配置図……27
第29図　第401号建物跡実測図 ……28
第30図　第402号建物跡実測図 ……29
第31図　中央部、東部建物跡柱穴状ピット配置図…30
第32図　第403号建物跡実測図 ……31
第33図　第404号建物跡実測図 ……31
第34図　建物跡出土土器拓影図……34
第35図　建物跡出土石器、石製品実測図……35
第36図　柱穴状ピット出土土器拓影図……35
第37図　柱穴状ピット出土石器、石製品実測図…36
第38図　立石遺構実測図……36
第39図　集石遺構実測図……37
第40図　集石遺構出土遺物実測図……37
第41図　配石遺構実測図……39
第42図　配石遺構出土土器拓影図……39
第43図　焼土遺構実測図(1)……42
第44図　焼土遺構実測図(2)……43
第45図　焼土遺構出土土器実測図……44
第46図　焼土遺構出土土器拓影図……45
第47図　焼土遺構出土土製品実測図……45
第48図　Ｔピット実測図……46
第49図　Ｔピット出土土器拓影図……46
第50図　フラスコ状土壙土器実測図……48
第51図　フラスコ状土壙出土土器実測図(1)……51
第52図　フラスコ状土壙出土土器実測図(2)……51
第53図　フラスコ状土壙出土土器拓影図……52
第54図　フラスコ状土壙出土石器実測図……53
第55図　フラスコ状土壙出土土製品実測図(1)…53
第56図　フラスコ状土壙出土土製品(2)、石製品実測図…54
第57図　土壙実測図(1)……59
第58図　土壙実測図(2)……63
第59図　土壙実測図(3)……64
第60図　土壙出土土器実測図(1)……66
第61図　土壙出土土器実測図(2)……67
第62図　土壙出土土器拓影図(1)……68
第63図　土壙出土土器拓影図(2)……69
第64図　土壙出土石器実測図……70
第65図　土壙出土土製品、石製品実測図……71
第66図　遺構外出土土器実測図(1)……79
第67図　遺構外出土土器実測図(2)……80
第68図　遺構外出土土器実測図(3)……81
第69図　遺構外出土土器実測図(4)……82
第70図　遺構外出土土器実測図(5)……83
第71図　遺構外出土土器実測図(6)……83
第72図　遺構外出土土器拓影図(1)……84
第73図　遺構外出土土器拓影図(2)……85
第74図　遺構外出土土器拓影図(3)……86
第75図　遺構外出土土器拓影図(4)……87
第76図　遺構外出土土器拓影図(5)……88
第77図　遺構外出土土器拓影図(6)……89
第78図　遺構外出土石器実測図(1)……94
第79図　遺構外出土石器実測図(2)……95

第80図　遺構外出土石器実測図(3)…… 96
第81図　遺構外出土石器実測図(4)…… 97
第82図　遺構外出土土製品実測図(1)……102
第83図　遺構外出土土製品実測図(2)……103
第84図　遺構外出土石製品実測図(1)……104
第85図　遺構外出土石製品実測図(2)……105
第86図　遺構外出土石製品実測図(3)……106
第87図　第401号竪穴住居跡・カマド実測図……108
第88図　第402号竪穴住居跡・カマド実測図……109
第89図　第404号竪穴住居跡・第402、421、427号土壙実測図…111
第90図　第409号竪穴住居跡実測図 ……112
第91図　第401、402、405号竪穴住居跡出土遺物実測図…113
第92図　第402、404、409号竪穴住居跡出土土器拓影図…114
第93図　第402、403号竪穴住居跡出土石器実測図…114
第94図　第402、404号竪穴住居跡出土土製品、石製品実測図…115
第95図　採取層序と採取番号……117
第96図　検出された花粉化石の個体数……117
第97図　噴出源からの距離と（軽石／石質岩片）の関係…119

ＰＬ目次

ＰＬ１　大湯環状列石全景・第403号竪穴住居跡……124
ＰＬ２　第403号・405号竪穴住居跡……125
ＰＬ３　第406号・407号・408号・410号竪穴住居跡……126
ＰＬ４　石囲炉・建物跡……127
ＰＬ５　建物跡・配石遺構・焼土遺構……128
ＰＬ６　焼土遺構・Ｔピット・フラスコ状土壙……129
ＰＬ７　土壙(1)……130
ＰＬ８　土壙(2)・ＹＶ-105グリッド遺物出土状況……131
ＰＬ９　竪穴住居跡（歴史時代）……132
ＰＬ10　竪穴住居跡・土壙（歴史時代）・E_4区……133
ＰＬ11　E_4区各グリッド・基本層序……134
ＰＬ12　F_1区調査前・調査終了全景……135
ＰＬ13　F_1区北側調査終了全景……136
ＰＬ14　遺構内出土土器(1)……137
ＰＬ15　遺構内出土土器(2)……138
ＰＬ16　遺構内(3)・外出土土器(1)……139
ＰＬ17　遺構外出土土器(2)……140
ＰＬ18　遺構外出土土器(3)……141
ＰＬ19　遺構外出土土器(4)……142
ＰＬ20　遺構外出土土器(5)……143
ＰＬ21　遺構外出土土器(6)……144
ＰＬ22　遺構内・外出土石器(1)……145
ＰＬ23　遺構外出土石器(2)……146
ＰＬ24　遺構外出土石器(3)……147
ＰＬ25　遺構内・外出土土製品……148
ＰＬ26　遺構内・外出土石製品、歴史時代竪穴住居跡出土土器…149

表目次

第１表　建物跡一覧表…… 32
第２表　柱穴状ピット一覧表…… 33

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と立地

大湯環状列石及びその周辺遺跡は、秋田県鹿角市十和田大湯字野中堂、字万座、字一本木後ロに所在する。遺跡ののる台地は、大湯川と豊真木沢川によって作られた南西方向に延びる長さ5.6km、幅0.5～1km、標高144～183mの舌状台地で、通称「風張台地」と呼ばれている。遺跡は、この台地のほぼ中央、一本木、寺坂両集落の中間に位置し、ＪＲ花輪線十和田南駅の北東約3kmの地点である。

本年度の調査区の一つであるE_4区は、万座環状列石の北東250mの地点で、第4次調査Ｅ区（E_1区に改名）の西50mの距離に位置する。標高182～183mで、わずかに西方向に傾斜している。F_1区は、万座環状列石の北北西150mの台地縁辺部で、同区南西側の沢の中段には湧水を有する。標高179mで、現地表面ではほぼ平坦である。なお両区とも、現在畑地として利用されている。

2．遺跡の層序

従来どおり、基本的にはⅠ～Ⅴ層に分層、各層の細分は第4次調査D_1区の細分基準と同一のものとした。

第Ⅰ、Ⅰ′層は大湯浮石層までの堆積層で、Ⅰ層は耕作土である。

第Ⅱ層の大湯浮石層は、E_4区ではほぼ全域で観察されるのに対し、F_1区では耕作により攪乱され、発掘区縁（畑境）において残存している程度である。同層は粒子の粗細、色調、浮石の含有量から3層（Ⅱa～Ⅱc層）に細分されたが、Ⅱa層はにぶい黄褐色を呈するシルト質の火山灰層、Ⅱb層は粒径1～10mmの黄褐色浮石層である。またⅡc層は黒色土中に浮石粒を混入している層である。本層前後において、平安時代の竪穴住居跡が確認されている。

第Ⅲ層は、大湯浮石層下から地山直上の暗褐色土層までの黒色あるいは黒褐色を呈する土層である。本層は色調、粗密度、混入物の含有量等から4層（Ⅲa～Ⅲd）に細分される。Ⅲa層は黒色土でほとんど混入物を含まず、他層に比べて非常に堅くしまっている。Ⅲb層は黒色土、Ⅲc層は黒褐色土であるが暗褐色に近い。Ⅲc層はF_1区の北西端にのみ観察されている。Ⅲd層には下位火山灰を混入、若干粘性を有する。

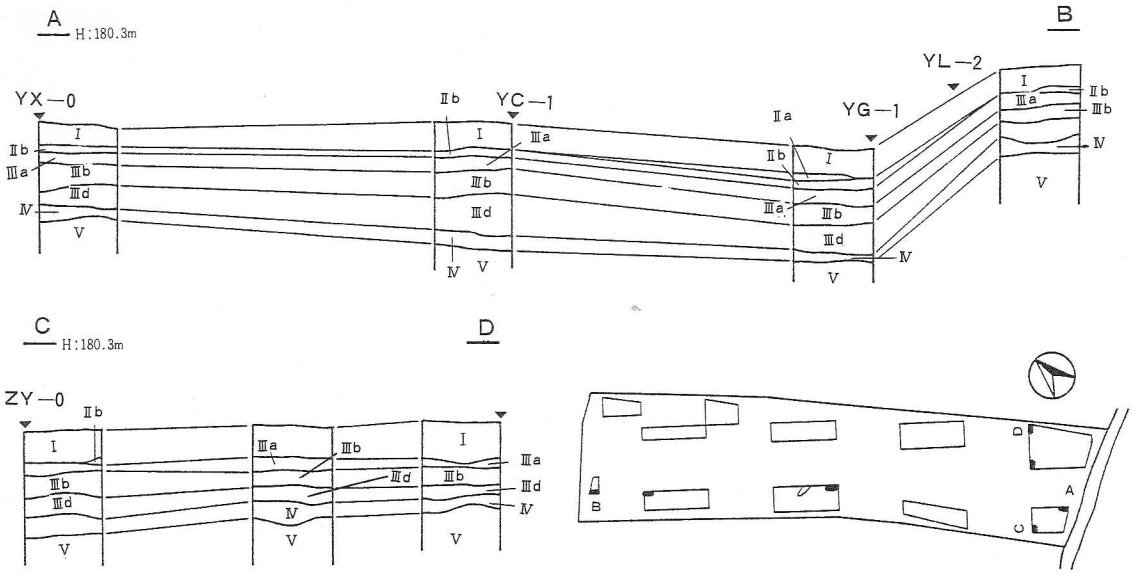
Ⅲ層は縄文時代の遺物包含層で、Ⅲb～Ⅲd層からの出土が多い。概ね、晩期の遺物はⅢa～Ⅲb層、後期中～後葉はⅢb～Ⅲc層、後期初頭～前葉はⅢb～Ⅲd層上位、早～前期の遺物はⅢd層上位出土している。なお、配石遺構、石囲炉はⅢa～Ⅲb層で石頭を現わし、Ⅲd層上位でその全容が確認されている。また焼土遺構はⅢb～Ⅲd層上面で、縄文時代の竪穴住居跡、建物跡、柱穴状ピット、土

壙はⅢd層上面～Ⅳ層上面で確認されている。

第Ⅳ層は地山（下位火山灰）直上の層で、暗褐色を呈する。若干粘性があり、しまりのある層である。

第Ⅴ層は申ケ野火山灰と考えられる黄褐色を呈する火山灰層である。本報告書では、本層をⅤ層以外に下位火山灰、地山と表現している。 F_1区の現地表面はほとんど平坦であるのに対し地山面は起伏に富み、数条の小沢が南西あるいは北西方向に走っている。なお、フラスコ状土壙、柱穴状ピット等掘り込みの深い遺構は、本層下の第Ⅵ層の灰白色火山灰層（鳥越火山灰層）をも掘り込んでいる。

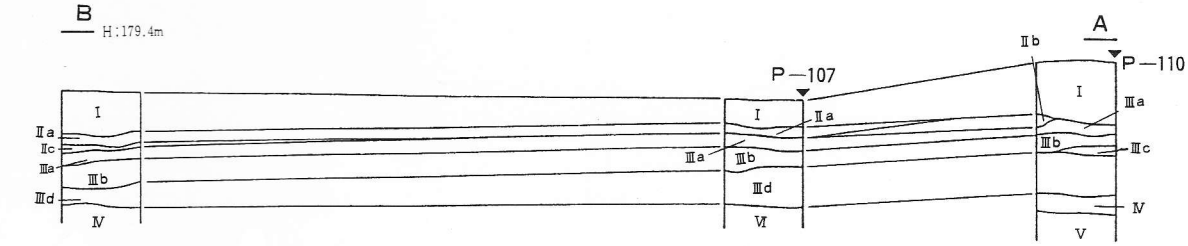
F_1区西側の小沢部分のⅢd層下位～Ⅴ層上位及び北部のⅤ層中位からは礫層が確認されている。前者の礫は5～15cm大の亜角礫が多く、後者は10～40cmの亜円～円礫がほとんどである。遺構保存の立場からⅣ層以下の調査は充分に行なわれていないが、礫の形状、大きさ及び層序関係から、両者は時代を異にする礫層と考えられる。なお、前者は第1次調査A_1区北側及び、第3次調査C_1区の礫群との関連が考えられる。　（秋元　信夫）

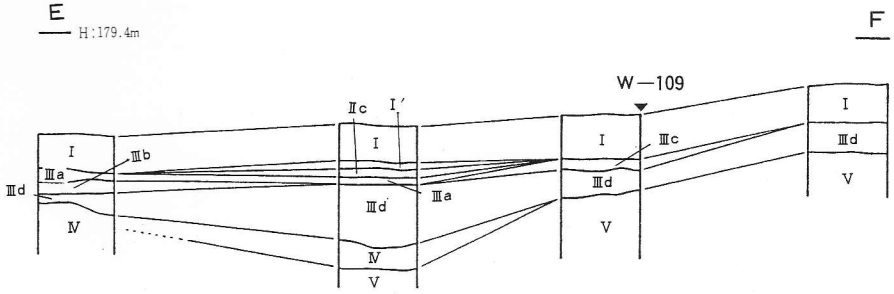


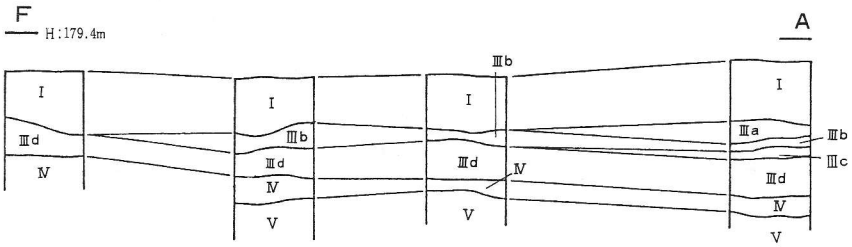
E_4区基本層序
Ⅰ 層 黒 色 土（10YR2/1）耕作土
Ⅱb層 黄褐色土（10YR5/8）大湯浮石層
Ⅲa層 黒 色 土（10YR1.7/1）堅くしまる
Ⅲb層 黒 色 土（7.5YR2/1）軟かい
Ⅲd層 黒 色 土（10YR2/1）
Ⅳ 層 暗褐色土（10YR3/3）地山粒を多量に含む
Ⅴ 層 黄褐色土（10YR5/8）地山

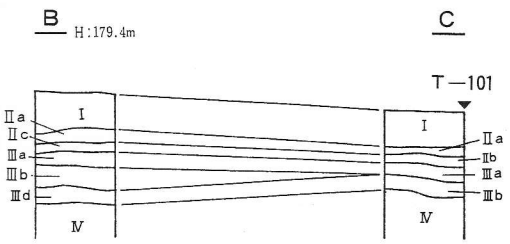
※土層柱状図はS:1/50
柱状図間はS:1/500

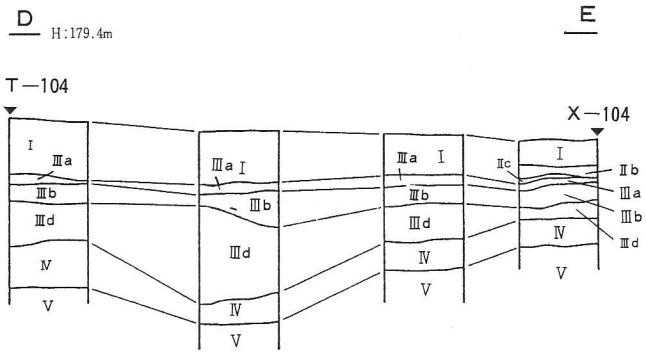
第1図　E_4区基本層序





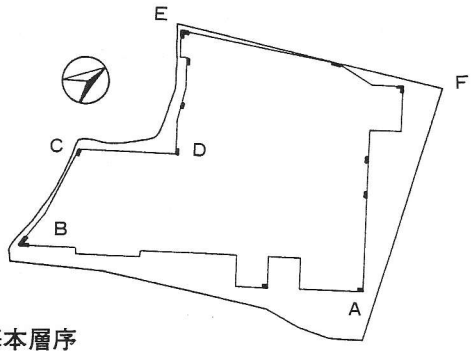






F₁区基本層序

Ⅰ 層 黒　色　土(10RR2/1) 耕作土、浮石粒を含む
Ⅰ′層 黒　色　土(10YR2/1)
Ⅱa層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) シルト質火山灰、堅くしまる
Ⅱb層 黄 褐 色　土(10YR5/8) 浮石粒(φ0.1～1.0cm大)
Ⅱc層 黒　色　土(10YR2/1) 浮石粒を含む
} 大湯浮石層
Ⅲa層 黒　色　土(10YR1.7/1) シルト質、堅くしまる
Ⅲb層 黒　色　土(7.5YR2/1) シルト質、軟かく、地山粒を若干含む
Ⅲc層 黒 褐 色　土(7.5YR3/1)
Ⅲd層 黒　色　土(10YR2/1) 地山粒を少量含む
Ⅳ 層 暗 褐 色　土(10YR3/3) 地山粒、大型の礫を多量に含む
Ⅴ 層 黄 褐 色　土(10YR5/8) 地山、大型の礫を多量に含む



※土層柱状図は S:1/50
柱状図間は S:1/500

第2図　F₁区基本層序

第II章　調査の概要

1．調査要項

1．遺 跡 名　　大湯環状列石周辺遺跡

2．調査目的　　万座環状列石の北北西150m の台地縁辺部（F_1区）及び北東 250 m の地点（E_4区）の遺構、遺物の有無を確認し、史跡整備計画立案の基礎資料とする。

3．調査地、発掘面積　　E_4区　鹿角市十和田大湯字万座 6　　301㎡

　　F_1区　鹿角市十和田大湯字万座12　　1,347㎡

4．調査期間

　発掘調査　　平成元年 6 月 5 日～平成元年11月 2 日

　整理・報告書作成　平成元年11月 4 日～平成 2 年 3 月31日

5．調査主体者　　鹿角市教育委員会

6．調査担当者　　社会教育課　（主任　秋元信夫）

7．調査参加者

　調査指導員　　熊谷太郎（秋田県教育庁文化課　学芸主事）

　調　査　員　　鎌田健一（秋田県立十和田高等学校　教諭）

　　成田典彦（鹿角市立尾去沢中学校　教諭）

　　三ケ田俊明（小坂町立小坂小学校　教諭）

　　佐藤　樹（鹿角市教育委員会社会教育課）

　　藤井安正（鹿角市教育委員会社会教育課）

　調査補助員　　馬渕正弘、成田聖児、上野利夫、刈谷　操、伊藤裕幸

　　木村昭子、佐藤玲子

　作　業　員　　阿部トク、安保ヨネ、木村イヨ、木村千鶴江、木村ヒロ

　　木村ひろみ、苗代沢ノブ、松宮カチ、宮沢カヨ、宮沢キヨ

　　宮沢トミエ、柳沢勝江、柳沢栄子、柳沢ヤス

8．社会教育課

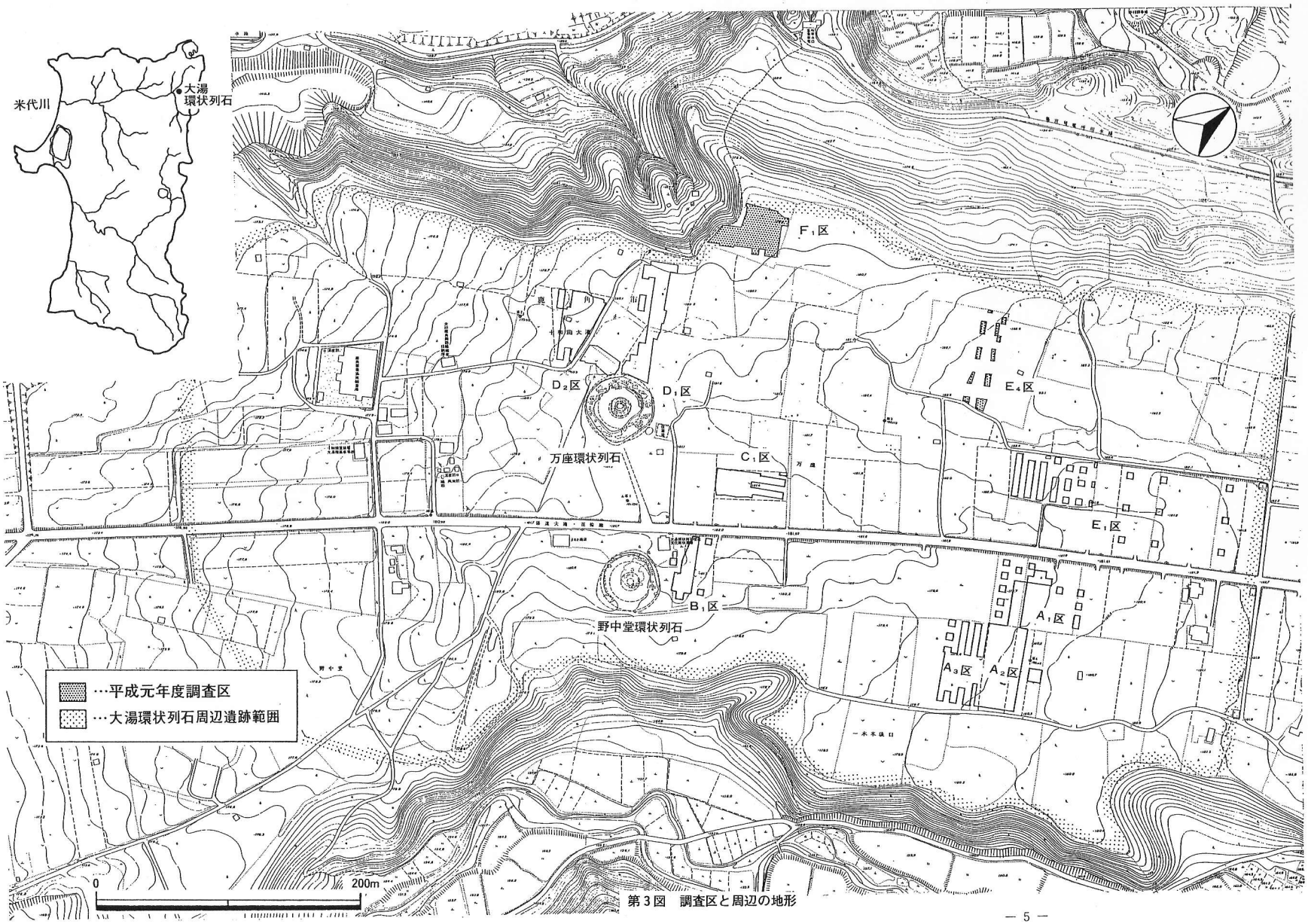
　課　　長　　川又節三

　課長補佐　　柳沢悦郎

　主　　任　　秋元信夫（調査担当）

　臨時職員　　藤井安正（調　　査）

　臨時職員　　古川孝政（庶　　務）



第3図　調査区と周辺の地形

9．協力機関・協力者

文化庁記念物課、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター

工藤勝栄（土地所有者）、工藤昌康（土地所有者）、木村弥右エ門、

柳沢直蔵、工藤久吉、木村直弥

2．調査の方法

第4、5次調査において、環状列石の周囲には建物跡やフラスコ状土壙が分布することが判明したが、調査区設定の制約もあり、縄文時代の竪穴住居跡の検出には至らなかった。このため、今回の調査の主目的を竪穴住居跡の検出とし、最も分布の可能性の高い、万座環状列石の北北西150ｍの台地縁辺部を一つの調査区（F_1区）とした。また、周辺遺跡北端で確認されている遺構群の南西方向への広がり及びその分布密度の確認のため、万座環状列石の北東250mの地点にも調査区（E_4区）を設定した。

グリッドは第1次調査以来のＮ－49°－Ｗを基準線とする5ｍ単位のグリッドとし、D_1区から延長した。杭番号はアルファベット（北西～南東方向）と算用数字（北東～南西方向）で付し、西隅の杭を以てグリッドを呼称した。

表土からの除去作業は全て手掘りに依る分層発掘とし、できるだけ上層での遺構確認に努めた。遺構の番号はE_4区については4次調査E_1区の遺構番号に続けて、F_1区については401番から種類別、発見順に付した。ただし柱穴状ピットについては個数が多くなると予想されたため、1番から用いた。なお、整理段階で配石遺構、土壙を形態別に細分したため、調査時と本報告書の遺構番号には多少の異同がある。

遺構精査は、四分割法を原則とした。遺構等の実測については簡易遣り方測量を用い、石囲炉、焼土遺構、遺物の微細図は1/10、その他は1/20の縮尺で図化した。

写真撮影には2台のカメラを使用し、調査各段階の状況を白黒、リバーサルフィルムに収めた。

3．調査の経過

大湯環状列石周辺遺跡の第6次調査は平成元年6月5日から開始し、1,648m²の調査を終了したのは11月2日であった。以下、調査日誌に基づき、調査経過の概要を述べる。

6月5日、作業員への作業説明の後、E_4区のグリッド設定及び粗掘を行なう。E_4区の調査は遺構、遺物の分布密度を確認するため、中央部のＹＧ、ＹＦ－1グリッドから開始した。両グリッドからの遺物の出土が少なかったため、E_4区の調査は、地形を考慮した2条の変則トレンチ法で行なうこととした。6月23日には、2条11ヵ所のトレンチの調査を全て終了した。な

お、E_4区からの遺構、遺物の検出は少なく、わずかに1基のTピットが検出され、50数点の縄文時代後期の遺物が出土したにすぎなかった。

F_1区の調査は6月22日から開始、土置場の確保のため東部から着手し、北部、西部、中央部の順で進めた。7月末には、東部から北部にかけての調査を終了、縄文時代後期の建物跡2棟、石囲炉、立石遺構、集石遺構、配石遺構各1基、焼土遺構4基、土壙9基が検出されている。8月末には西部から中央部への粗掘に移行、平安時代の竪穴住居跡2軒、石囲炉1基他が、9月末には北端部から縄文時代後期の竪穴住居跡1軒が検出された。

10月12日には、南部のⅢd層以外の調査を終了、14日に現地説明会を開催、180名の参加者があった。なお、この時点で検出された遺構数は縄文時代の竪穴住居跡1軒、石囲炉3基、立石遺構1基、配石遺構1基、集石遺構3基、焼土遺構16基、Tピット1基、フラスコ状土壙1基、土壙21基、平安時代の竪穴住居跡3軒であった。

同月16日からは、南部のⅢd層の調査と東部拡張部分の調査が行なわれ、新たに縄文時代の竪穴住居跡5軒、建物跡2棟、平安時代の竪穴住居跡1軒他多数の遺構が検出された。31日からは基本層序図の作成とともに、南部の建物跡及び柱穴状ピット群の追調査を行なった。

11月2日、F_1区の全景、近景写真を撮影し、5ヵ月に及ぶ調査を全て終了した。

（秋元　信夫）

第Ⅲ章　E₄区の検出遺構と出土遺物

E₄区から検出された遺構は、Ｔピット１基のみである。また、遺構外より出土した遺物は、縄文土器破片約50点、石鏃、掻器、球状石製品各１点である。

１．Ｔピット（第５図）

第302号Ｔピット

ＹＦ、ＹＧ－１グリッドに位置し、Ⅲd層上面で地山粒を若干混入する黒褐色土の落ち込みが確認された。平面形は長軸2.50ｍ以上、短軸0.94ｍの長楕円形を呈し、長軸方向はＥ－84°－Ｅである。なお、遺構東側は未発掘である。堆積土は14ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。横断面はＹ字状、縦断面は幾分入り込むフラスコ状を呈し、壁高は125.8cmを測る。底面はⅥ層から成り、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかったが、確認面より構築時期は縄文時代と考えられる。

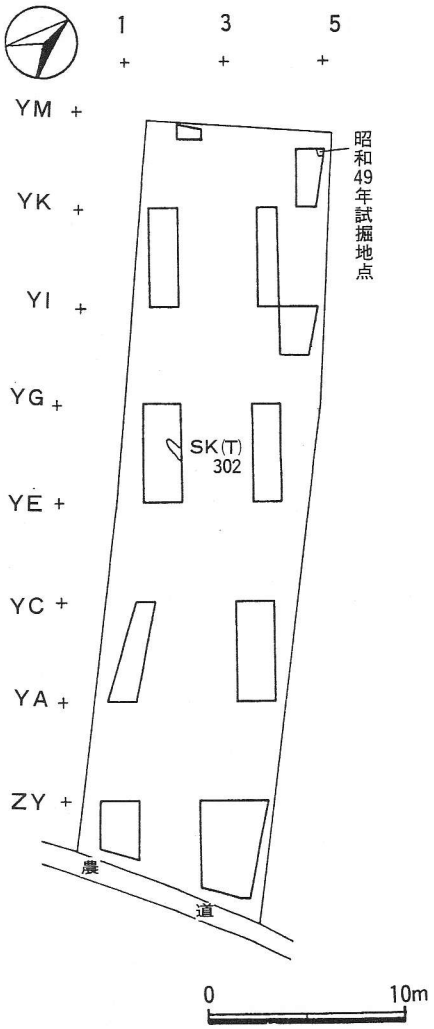
２．遺構外出土遺物

(1)　土器（第６図）

ＹＢ－０、ＹＢ－１、ＹＦ－１、ＹＪ－１、ＹＫ－１グリッドより約50点の土器片が出土したが、細片及び小片が多い。ＹＦ－１、ＹＪ－１グリッドからの出土がほとんどであり、同一個体と考えられるものが多かった。文様は磨消縄文による曲線文、沈線による曲線文等が施文されており、地文はＬＲ縄文が多用されている。時期は縄文後期前葉と考えられる。

(2)　石器（第７図）

石鏃、掻器各１点が出土した。１はＹＪ－１グリッドより出土した平基有茎鏃で、完形品である。大きさは長さ3.3cm、幅1.2cm、重さ1.0gを計る。２はＹＢ－０グリッドから出土した掻器で、両側縁に刃部をもつ。調整は片面のみである。大きさは長さ8.4cm、幅4.2cmを計る。石材は１、２とも硬質頁岩である。

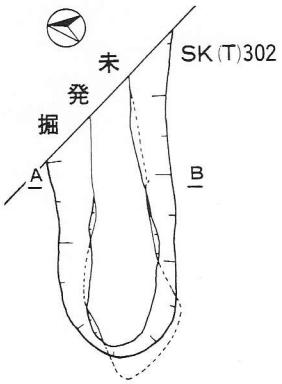


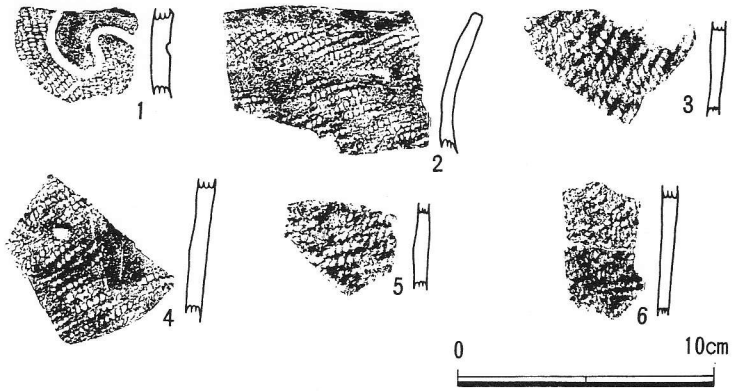
第４図　遺構配置図（E₄区）

(3) 石製品（第８図）

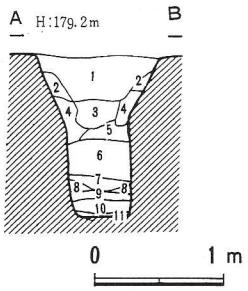
ＹＪ－１グリッドより、球状石製品１点が出土した。研磨により球状に整形されているが、部分的に平坦面が残っている。大きさは径4.4cm、現存高3.9cmを計る。石材は泥質凝灰岩である。

（佐藤　　樹）



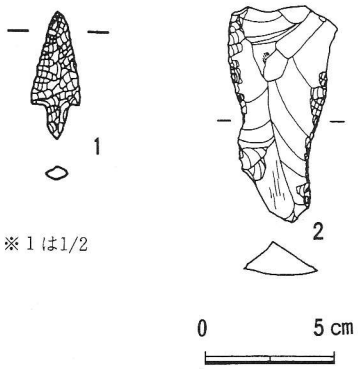


第６図　遺構外出土土器拓影図

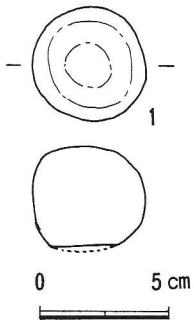


1層　黒褐色土(10YR3/2)
2層　黒褐色土(10YR3/3)
3層　黒褐色土(10YR3/2)
4層　にぶい黄褐色土(10YR4/3)
5層　黒褐色土(10YR3/2)
6層　黄褐色土(10YR5/6)
7層　黒色土(10YR3/1)
8層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
9層　黒色土(10YR1.7/1)
10層　黄褐色土(10YR5/6)
11層　黒色土(10YR1.7/1)

第５図　Ｔピット実測図



第７図　遺構外出土石器実測図



第８図　遺構外出土石製品実測図

第Ⅳ章　F_1区の検出遺構と出土遺物（縄文時代）

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡６軒、石囲炉３基、建物跡４棟、柱穴状ピット76個、立石遺構１基、集石遺構３基、配石遺構４基、焼土遺構23基、Ｔピット１基、フラスコ状土壙４基、土壙42基が検出された。また、遺構内・外より復元可能土器87個体、縄文土器片ダンボール箱49箱、石器712点、土製品373点、石製品117点の出土があった。

１．竪穴住居跡

第403号竪穴住居跡（第10図、11図、18図、19図、21図）

〈遺構の位置と確認〉　F_1区西端のＸ－104グリッドに位置する。Ⅳ層上面でプランを確認したが、基本層序を含むセクション図から、その構築面はⅢd 層上面であることが判明している。本住居跡北西側半分は桐林のため調査できなかった。

〈平面形・規模〉　（3.0）×（2.8）ｍの楕円形を呈し、床面積は（5.12）㎡程度と考えられる。

〈堆積土〉　４層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ｖ層（地山）を若干掘り込み、床面としている。小さい凹凸があり、しまりは弱い。壁はⅢd～Ｖ層から成り、緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は北東壁で20cm、南西壁で23cmを測る。

〈柱穴〉　住居内より４個のピットが検出されたが、その規模、配置からピット１以外、主柱穴とは考えられない。本住居の周囲に分布するピットが主柱穴となる可能性がある。

第403号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

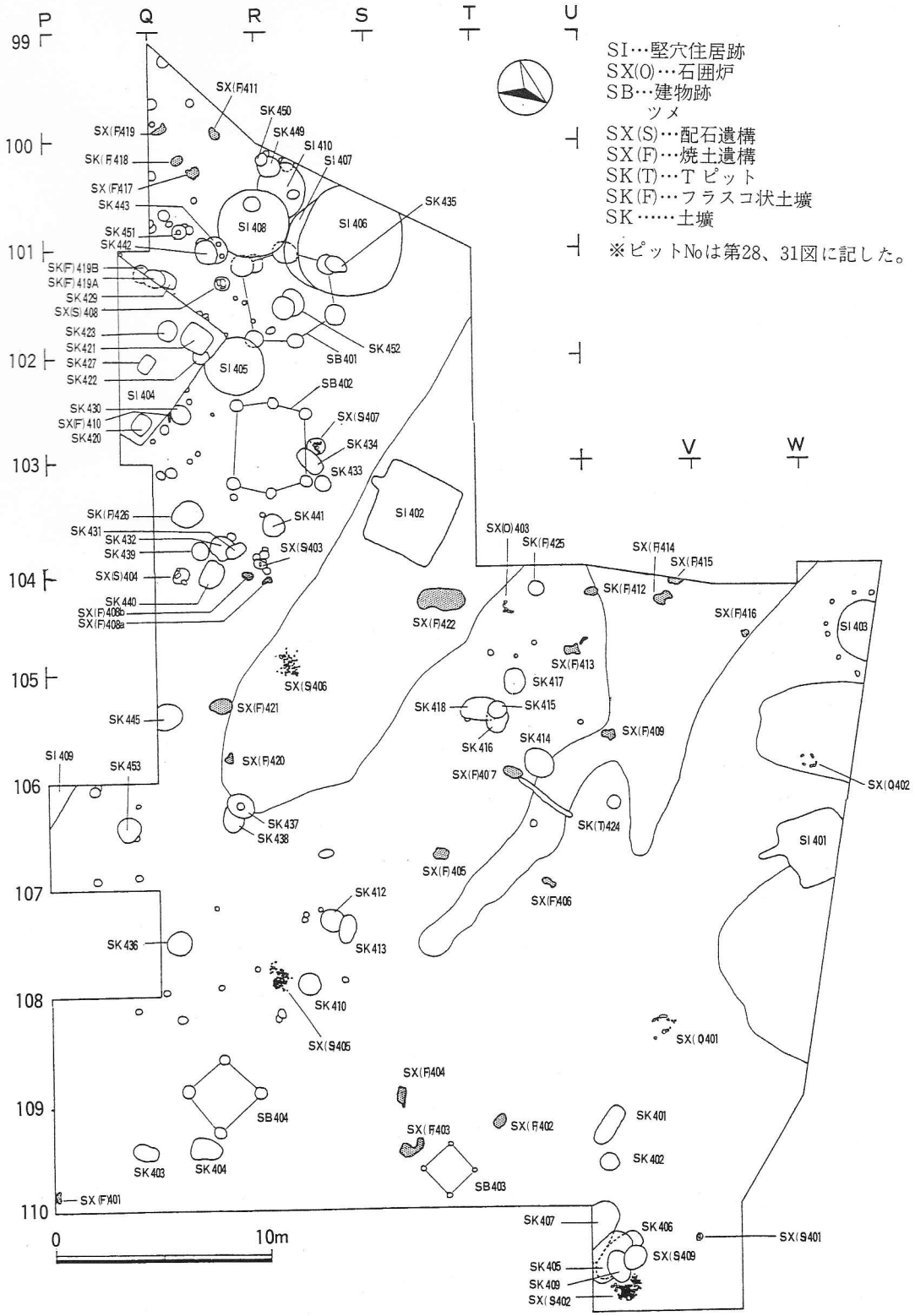
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	32×30	14×12	16×14	13×12	28×27	19×18	22×20	22×20	21×20	24×17	33×23
深　さ	14.8	15.2	11.0	14.1	12.4	12.1	10.0	10.4	13.2	12.5	14.1

〈炉〉　中央よりやや東寄りに位置する。10～48cm大の細長い石を、50×45cmの方形に配した石囲炉である。炉底部より薄い焼土層が確認されている。

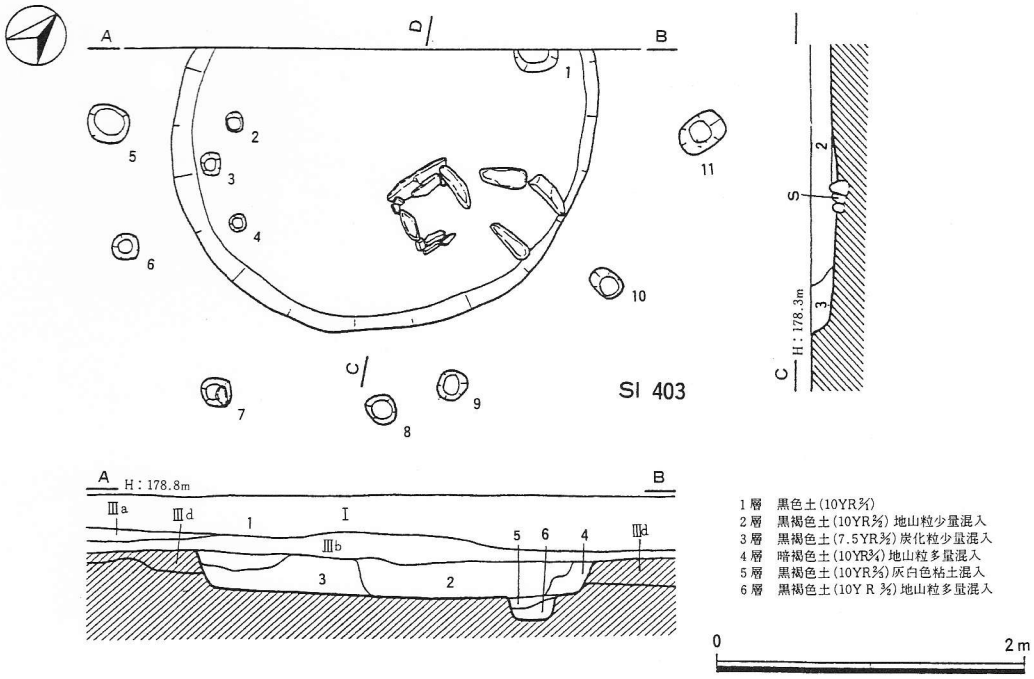
〈付属施設〉　本住居東壁に接して29、33cm大の細長い石が、30cm間隔で平行に配置されていた。すぐ西側の29cm大の石もこの施設に関連する石で、本来「コ」字状に配置されていたものと考えられる。同施設内の覆土下位に炭化粒を微量混入しているが、焼土は確認されていない。出入口あるいは祭壇的施設と考えられる。

〈出土遺物〉（第18図１、19図１、２、21図１）

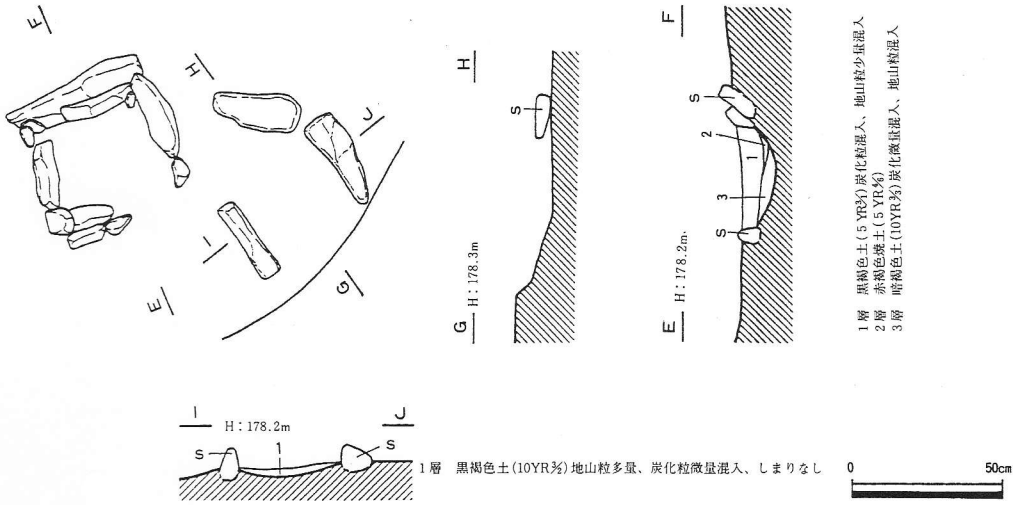
本住居跡の出土遺物は少なく、西壁際床直より１個の完形土器、Pit １より１点の土器片、覆土中より土器片、掻器各１点を出土したのみである。



第９図　遺構配置図（F_1区）



第10図　第403号竪穴住居跡実測図



第11図　第403号竪穴住居炉跡、付属施設実測図

第18図１は西壁際床直に横転していた小形深鉢形土器で、口径3.7cm、底径3.1cm、器高8.0cmを計る。無文の土器で、焼成は良好、色調は黒褐色を呈する。

遺構構築面及び出土遺物より、本住居の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第405号竪穴住居跡（第12図、13図、18図、19図、21図、24図、72図）

〈遺構の位置と確認〉　F₁区南部のS、R－101、102グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確

認である。第404号竪穴住居跡、401号建物跡、446、447、448号土壙と重複し、本住居は446、447、448号土壙より新しく、404号住居跡より古い。また、401号建物跡より新しいと考えられる。

〈平面形・規模〉　2.7×2.7mの円形を呈し、床面積は（5.5）㎡を測る。

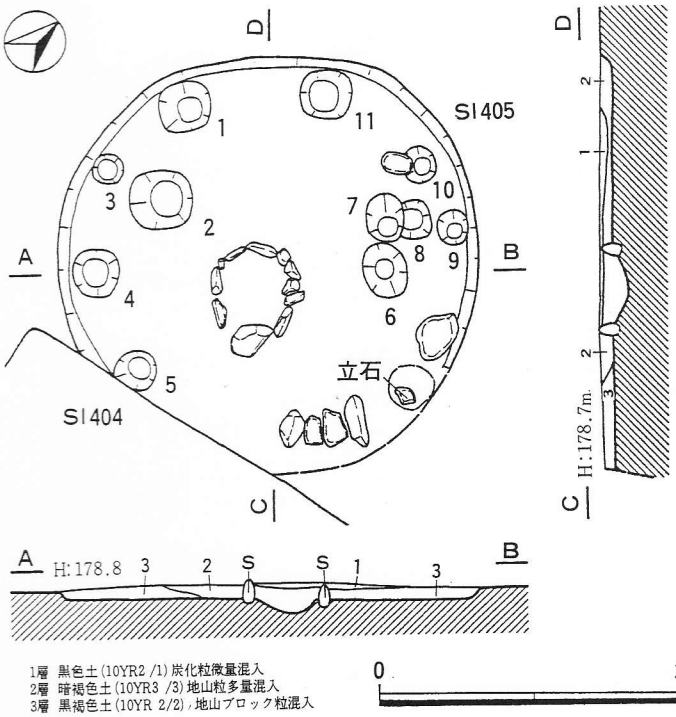
〈堆積土〉　3層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　南西壁側がⅣ層を若干掘り込み床面としているが、他はⅢd層下位を床面としている。炉周辺はややしまりがあるが、他は弱い。壁はⅢd～Ⅳあるいは Ⅲd層から成り、緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁8.0cm、西壁7.8cm、北壁6.7cmを測る。

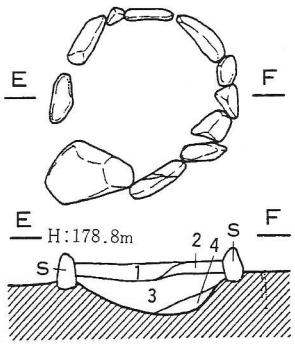
〈柱穴〉　大小11個のピットが検出されたが、このうちピット1、2、5、6、11が主柱穴と考えられる。東壁際の立石の周囲にも掘り込みが確認されており、このピットを含めた6本柱の柱配置となるものと考えられる。

第405号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	35×33	40×39	20×20	32×28	28×28	36×28	32×24	25×22	23×19	25×22	34×33
深　さ	31.9	24.3	28.5	25.3	26.1	27.2	23.3	21.7	25.5	29.0	28.3



第12図　第405号竪穴住居跡実測図



第13図　第405号竪穴住居炉跡実測図

〈炉〉　中央より若干南寄りに位置する。7～21cm大の石を55×60cmの円形に配した石囲炉でかなり使用されたらしく、炉底面より最大厚13cmの焼土が確認されている。

〈付属施設〉　南東壁際に4個の石が壁に直交するように配置されている。両側の石は24、34cm大の石で、横立て状に立てられ、内側の扁平な石はその中に置かれている。403号と同様の機能を有する施設と考えられる。

〈出土遺物〉（第18図2、3、19図3～14、21図2～4、24図1、2、72図8）

炉内より土器片6点、ピット10より土器片1点、床直より復元可能土器1個体、土器片2点、凹石1点、覆土中より復元可能土器1個体、土器片9点、掻器3点、板状土製品2点の出土があった。

第18図2は床直上出土の土器で、口径（14.0）cmの浅鉢形土器である。折り返し口縁下に文様帯をもち、横位沈線により区画された上、下に同様の曲線文が沈線により施文されている。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

第18図3は覆土出土の土器で、底径9.6cmの壺形土器と考えられる。胴部に広く、沈線による曲線文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。

早期の土器も出土しているが、遺構構築面及び新旧関係より、本住居の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第406号竪穴住居跡（第14図、20図、21図、22図、23図、24図、72図）

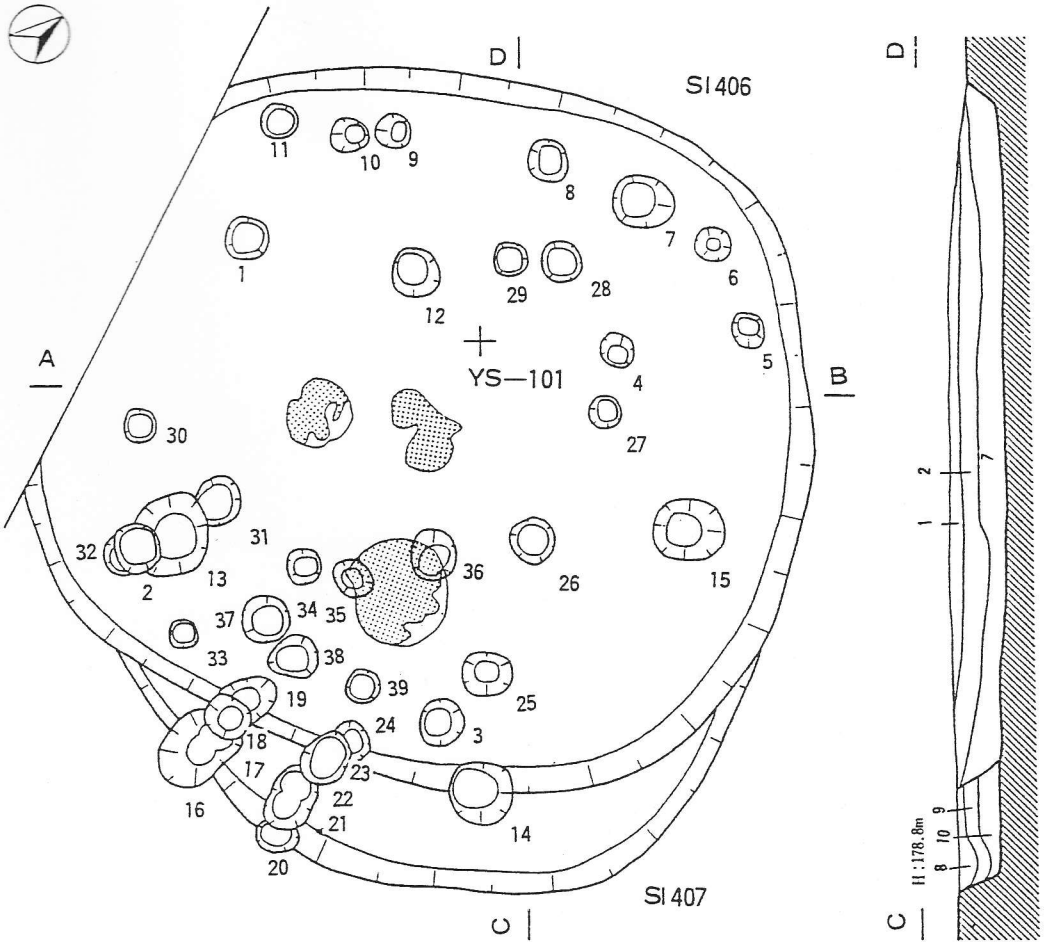
〈遺構の位置と確認〉　F_1区南部のT、S－100、101グリッドに位置する。Ⅲd層上面での確認である。第407号竪穴住居跡、401号建物跡、435号土壙と重複し、本住居はいづれよりも新しい。

〈平面形・規模〉　西壁際は未発掘であるが、(5.2)×4.8mの不整円形で、床面積は（18.06）m^2程度と考えられる。

〈堆積土〉　3層に区分でき、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　V層（地山）を掘り込み、床面としている。薄いレンズ状を呈し、しまりが弱い。壁はⅢd～V層から成り、立ち上がりはやや緩らかである。壁高は東壁28cm、南壁30cm、北壁22cmを測る。2層下で焼土が面的に確認され、本住居の床面とも考えられたが、住居のプランが不明瞭であること、柱穴が確認できないこと等から考えを改めた。

〈柱穴〉　第407号竪穴住居跡とほとんどの部分が重複するため、ピットの区分は困難である。両住居で、計39個のピットが検出されたが、このうちピット1～11は本住居に伴うものであり、ピット1～4を主柱穴とする4本柱の柱配置と考えられる。



SI406

1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黄褐色土(10YR5/6) シラス多量混入
3層 暗赤褐色焼土(6YR3/3) しまり有
4層 明赤褐色焼土(5YR5/8) しまり有り
5層 暗赤褐色焼土(5YR3/2)
6層 黒褐色土(7.5YR3/2) シラス多量、焼土粒若干混入
7層 黒褐色土(7.5YR2/2) 地山粒少量、炭化粒若干混入

SI407

8層 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒若干混入
9層 黄褐色土(10YR5/6) シラス多量混入
10層 黒褐色土(7.5YR2/2) 地山粒多量混入

0 2m

第14図　第406、407号竪穴住居跡実測図

第406、407号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
規　模	30×28	33×31	31×29	23×21	22×21	23×23	43×36	29×26	24×21	26×24	24×24	34×32	57×50
深　さ	30.9	34.7	36.3	29.1	15.7	15.2	17.0	22.6	14.2	16.1	22.0	42.5	52.5
Pit No.	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
規　模	42×40	48×42	44×40	40×32	32×26	38×32	30×25	30×30	30×28	34×33	28×26	33×31	32×30
深　さ	52.6	46.8	43.3	21.9	14.8	16.4	49.8	23.5	23.5	37.2	14.4	33.4	25.2
Pit No.	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39
規　模	22×22	28×28	23×22	24×22	33×30	29×28	20×19	24×22	25×25	35×30	32×31	34×31	23×22
深　さ	13.4	25.4	11.0	22.5	18.3	22.1	20.8	15.8	13.6	30.5	18.8	14.9	19.9

〈炉〉　確認されなかった。

〈出土遺物〉（第20図１～23、21図５～22、22図１～９、23図１、２、４、５、24図３、４、72図39）

本住居覆土中からの出土遺物は多く、土器片24点、石匙、磨製石斧、石錘各１点、石篦、敲石、磨石各２点、凹石４点、掻器14点、土製装飾品、鐸形土製品、石冠、軽石製石製品各１点、板状土製品２点の出土があった。

早期の土器も出土しているが、遺構構築面及び新旧関係より、本住居の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第407号竪穴住居跡（第14図、18図、20図、21図、22図、23図、24図、72図）

〈遺構の位置と確認〉　F_1区南部のT、S－100、101グリッドに位置する。第406号竪穴住居跡同様、Ⅲd層上面での確認である。406号竪穴住居跡、401号建物跡、435号土壙と重複し、401号建物跡、435号土壙より新しく、406号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉　本住居のほとんどを406号住居構築により消失しているが、柱配置から（4.7）×（4.7）mの円形で、床面積は（19.57）m²程度と考えられる。

〈堆積土〉　残存部分は３層に区分できる。人為堆積と考えられる。

〈柱穴〉　ピット12～15を主柱穴とする４本柱の柱配置と考えられる。

〈炉〉　確認できなかった。

〈付属施設〉　南壁際から、壁に直交する２列の柱穴群（ピット16～19、ピット20～24）が確認された。主柱穴の軸線とほぼ同一であること、壁外に若干張り出すこと等から出入口と考えられる。なお、柱穴群間は約50cmを測る。

〈出土遺物〉（第18図４、20図24～31、21図23～29、22図10～14、23図３、24図５～７、72図40）

本住居 Pit 14から板状土製品１点、覆土中から復元可能土器１個体、土器片14点、石鏃、凹石、石皿各１点、掻器６点、磨石４点、球状石製品１点、板状土製品２点の出土があった。

第18図４は南東壁際覆土出土の鉢形土器で、口径13.7cm、底径5.8cm、器高12.5cmを計る。器面全体にＬ縄文が施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい赤褐色を呈する。

早期の土器も出土しているが、遺構構築面及び新旧関係より、本住居の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第408号竪穴住居跡（第15図、16図、19図）

〈遺構の位置と確認〉　F_1区南部のＳ、Ｒ－100、101グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、北東壁が確認された。第410号竪穴住居跡、401号建物跡、柱穴状ピット25、28、443号土壙と重複し、本住居は410号住居跡、401号建物跡、柱穴状ピット25、28より新しい。また、443号土壙より古いと考えられる。

〈平面形・規模〉　3.3×3.1m の円形で、床面積は（8.21）m²程度と考えられる。

〈堆積土〉　２層に区分され、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅲd層を若干掘り込み、床、壁としている。床はほぼ平坦で、炉周囲から南壁際の付属施設にかけて若干しまりがあるが、他は弱い。壁は緩かに立ち上がり、壁高は北東壁で11cmを測る。

〈柱穴〉　本住居内より８個のピットが検出されたが、このうち、ピット１、３、４、５あるいは８を主柱穴とする４本柱の柱配置となるものと考えられる。

第408号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	29×27	21×20	29×25	29×28	32×23	27×24	38×27	28×28
深　さ	31.9	14.2	22.8	19.2	13.6	13.0	18.2	18.2

〈炉〉　住居ほぼ中央に位置する。西側の炉石は残存していないが、７～14cm大の石を40×40cmの円形に配した石囲炉と考えられる。炉内に最大層厚3.5cmの焼土層が確認されている。

〈付属施設〉　南東壁際から８～28cm大の石８個が検出された。このうち３個の石は、いずれも扁平な石で、壁に直交して接するように並べて置かれている。403、405号住居跡の付属施設と同様の機能を有するものと考えられる。

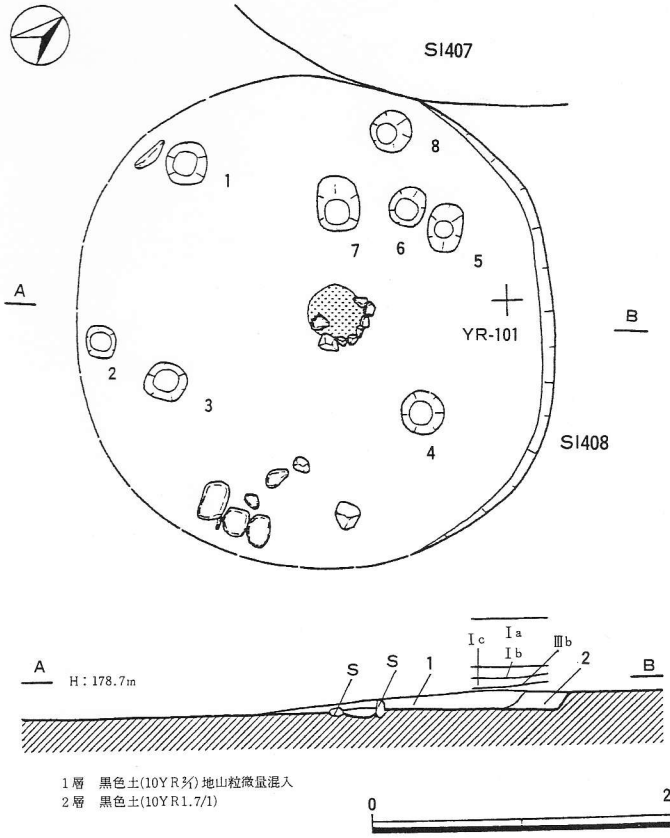
〈出土遺物〉（第19図15～17）

本住居からの出土遺物は少なく、覆土中より４点の土器片が出土したのみであった。

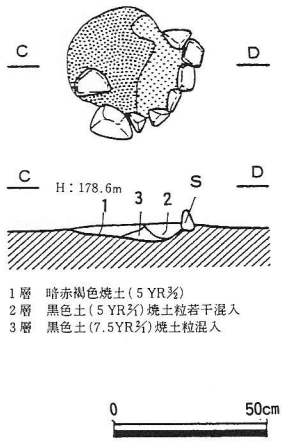
これらの出土遺物、遺構構築面及び新旧関係から、本住居の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第410号竪穴住居跡（第17図、18図、19図、21図、24図）

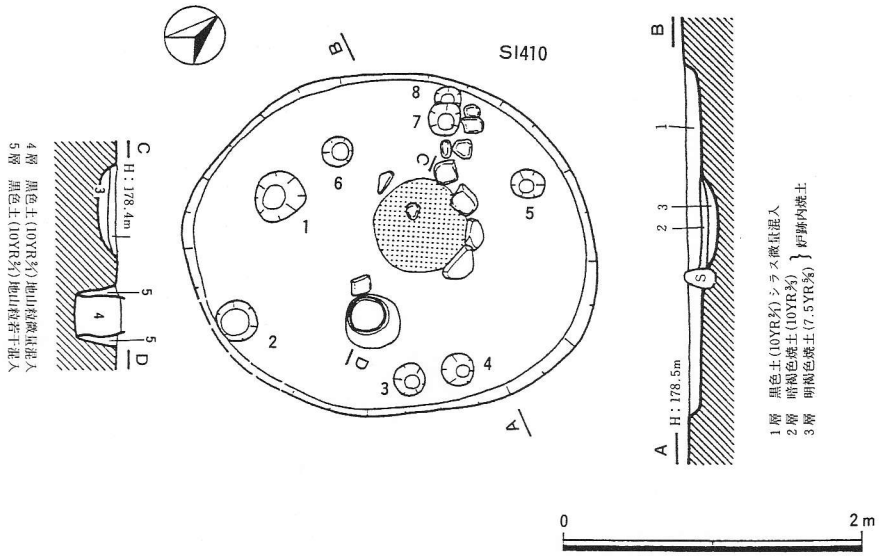
〈遺構の位置と確認〉　F_1区南部のＳ－100グリッドに位置する。Ⅲd層上位での確認である。第408号竪穴住居跡、柱穴状ピット21、24、449号土壙と重複し、本住居は408号住居跡、449号



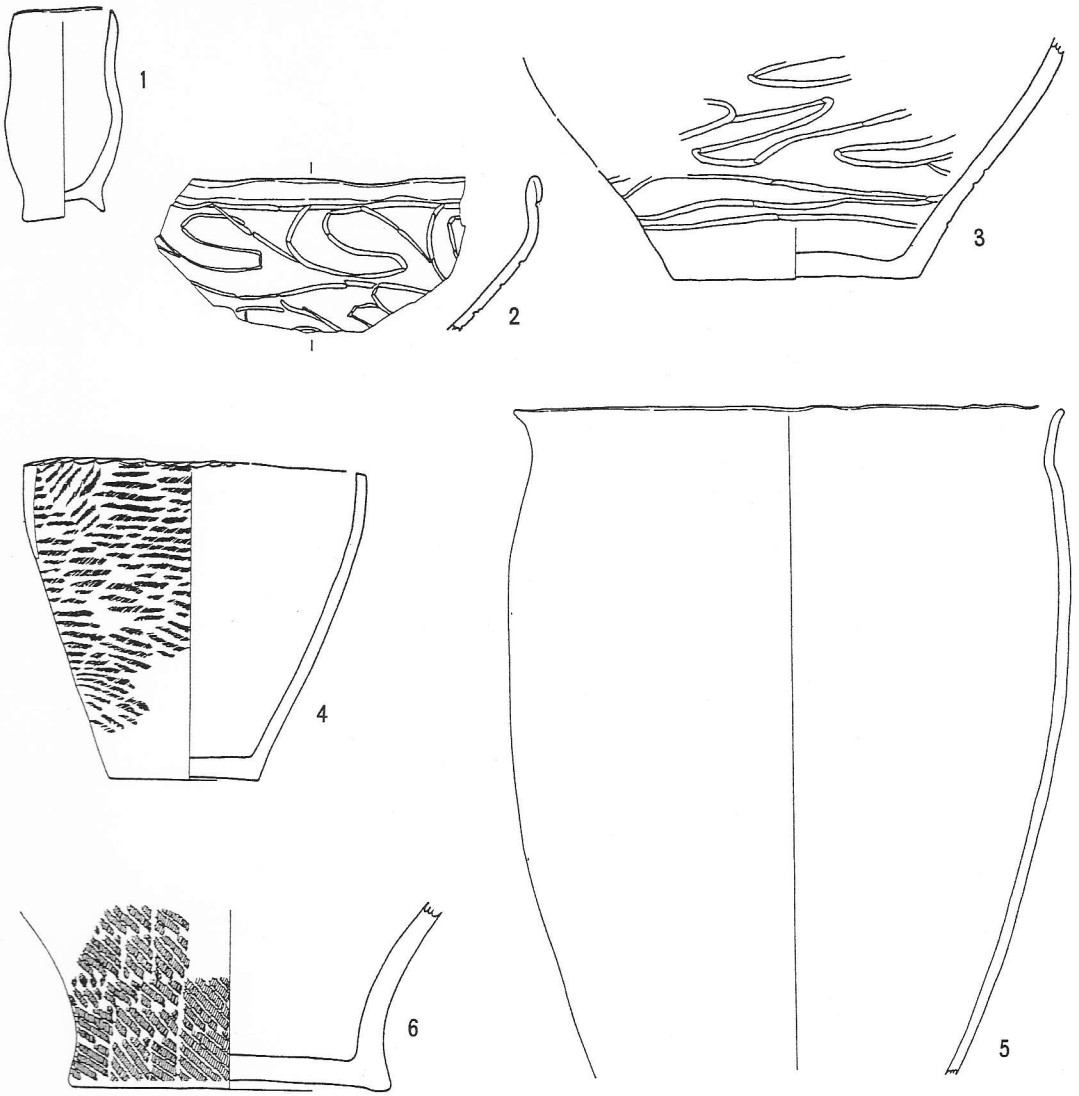
第15図　第408号竪穴住居跡実測図



第16図
第408号竪穴住居炉跡実測図



第17図　第410号竪穴住居跡実測図



SI 403…1　SI 405…2．3．　SI 407…4　SI 410…5　SB 401・Pit 4…6

0　10cm

第18図　竪穴住居跡、建物跡出土土器実測図　(No.5は縮尺 1/4)

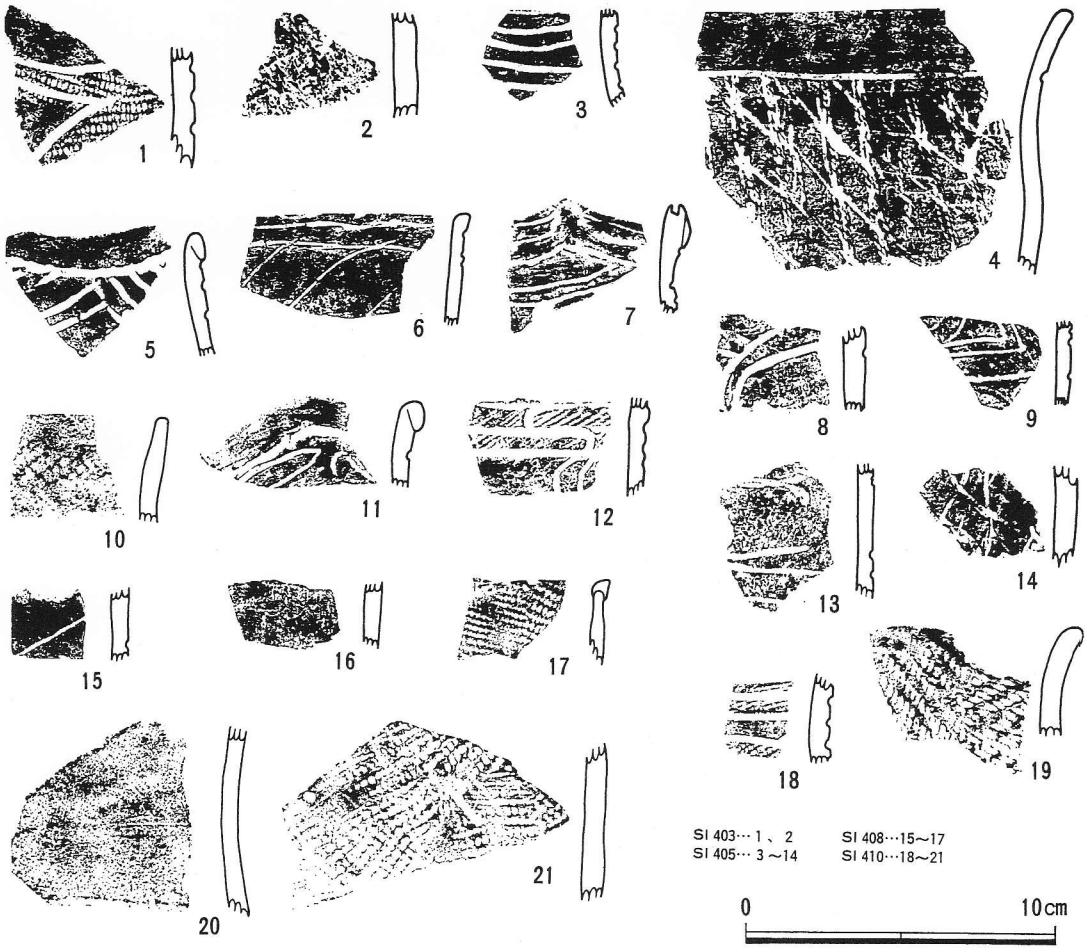
土壙より古い。なお、柱穴状ピット21、24との新旧関係は確認できなかった。

〈平面形・規模〉　2.7×2.3m の楕円形を呈し、床面積は4.40m²を測る。

〈堆積土〉　黒色土の単一層で、人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅲd層を若干掘り込み、床、壁としている。床面はほぼ平坦であるが、しまりは弱い。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は東壁 8 cm、西壁 9 cm、北壁10cmを測る。

〈柱穴〉　本住居に伴うピットとして 8 個が確認されたが、柱配置は明確にできなかった。深さに問題は残るが、ピット 1 、3 、5 、7 あるいはピット 6 、2 、4 、5 の 4 本柱と考えられる。



第19図　第403、405、408、410号竪穴住居跡出土土器拓影図

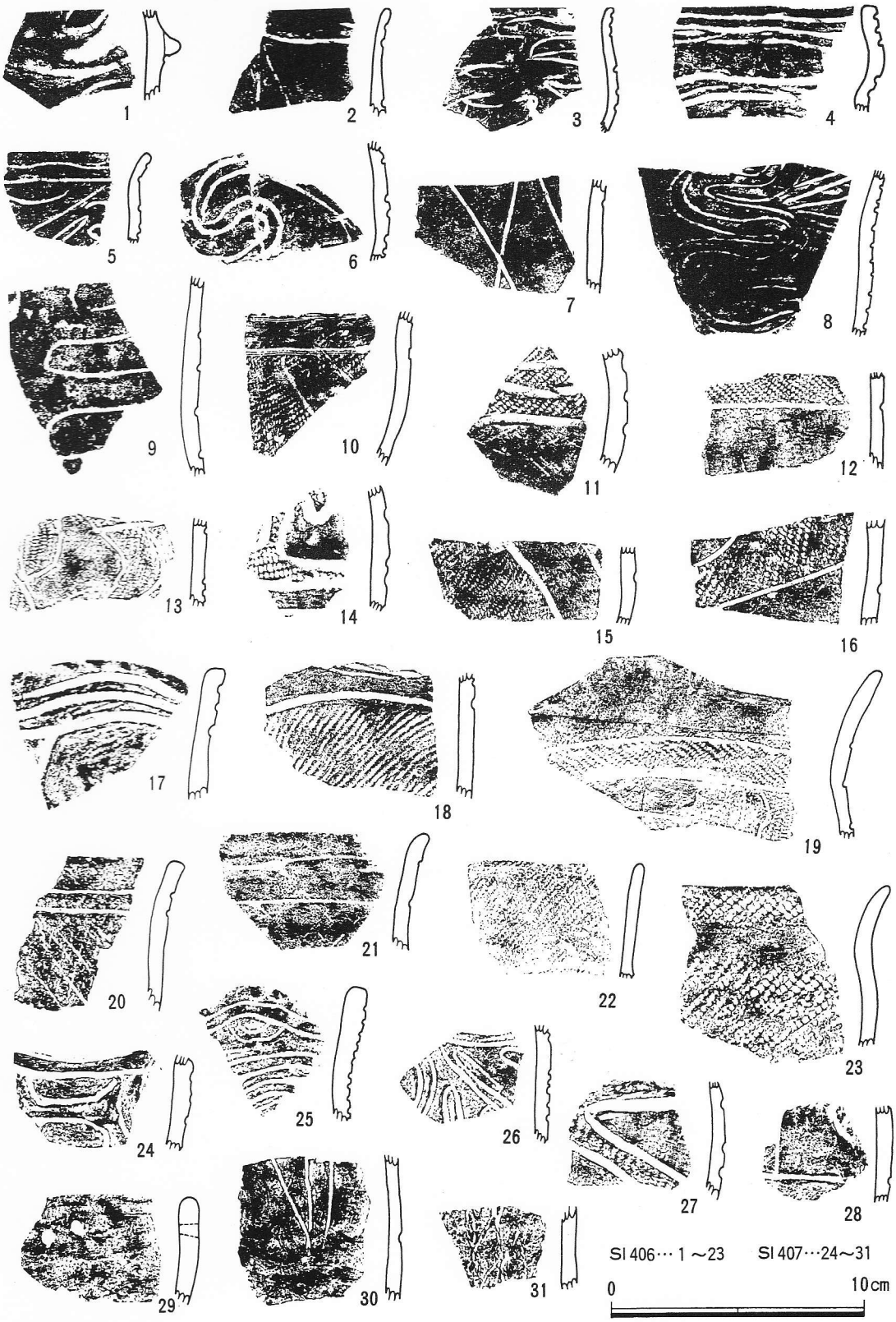
第410号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	34×33	27×26	22×20	22×21	24×19	21×20	22×20	20×18
深　さ	30.7	39.7	18.9	15.9	23.4	21.9	27.0	18.1

〈炉〉　住居中央から若干北寄りに位置する。南西側の石が残存していないが、12～26cmの石を70×70cmの円形に配した石囲炉と考えられる。かなり使用されたらしく、炉内の焼土層は最大厚11cmを測る。

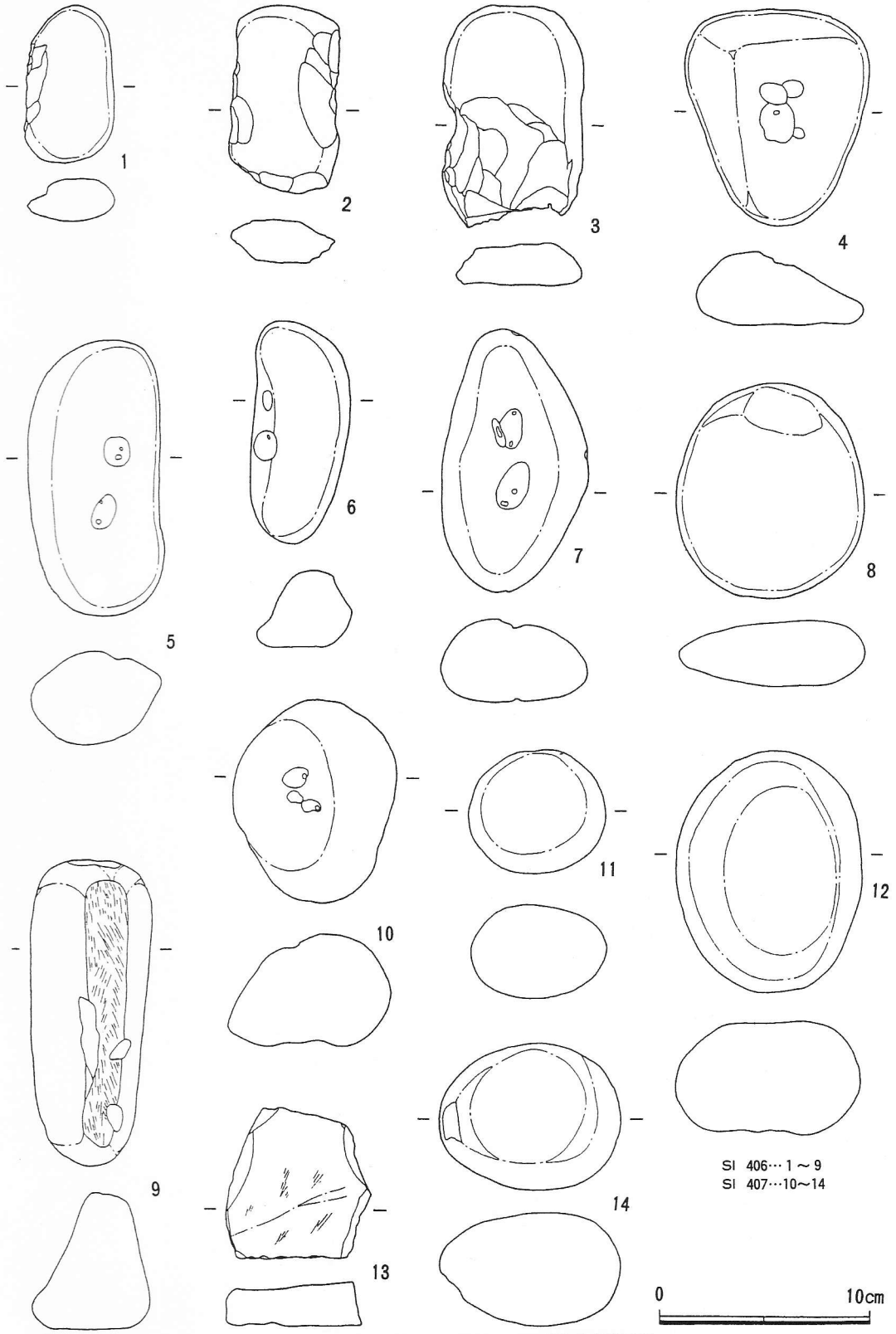
〈付属施設〉　住居中央から若干南東寄りの床面で、埋設土器が確認された。口径28.5cmの無文の深鉢形土器で、焼成は良好、色調は橙色を呈する。同土器を埋設するピットは38×36cmの円形で、深さは28cmを測る。

炉から北西壁にかけ、10cm規模の石が１列に並んで確認されたが、403、405、408号住居跡で

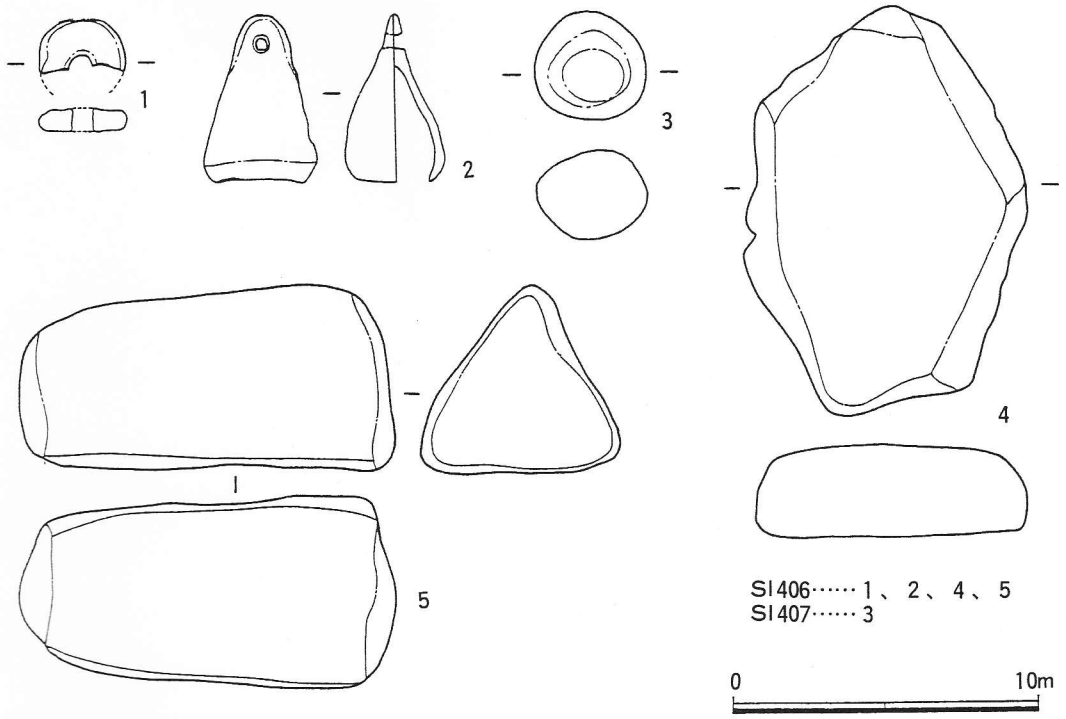


第20図　第406、407号竪穴住居跡出土土器拓影図

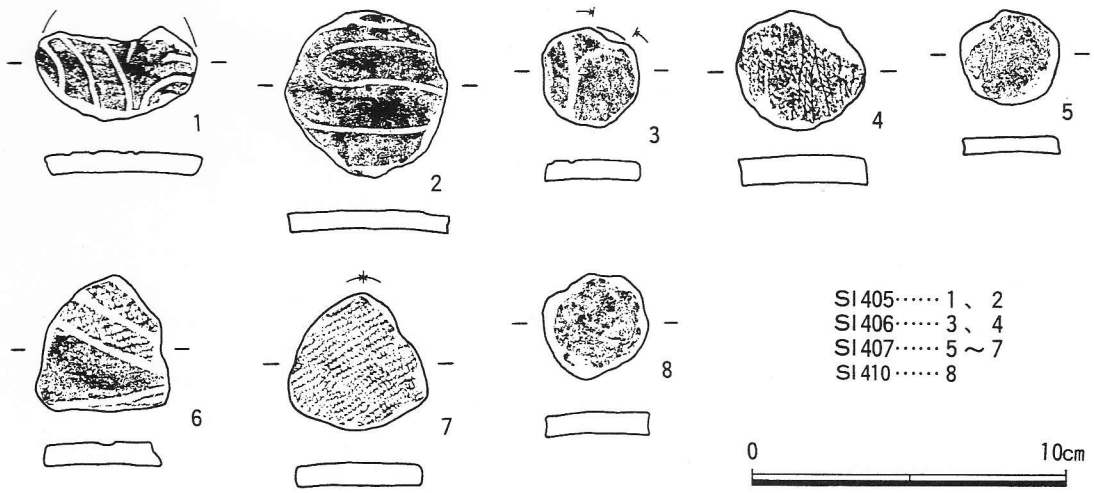
第21図　竪穴住居跡出土石器実測図(1)



第22図　竪穴住居跡出土石器実測図(2)



第23図　竪穴住居跡出土土製品(1)、石製品実測図



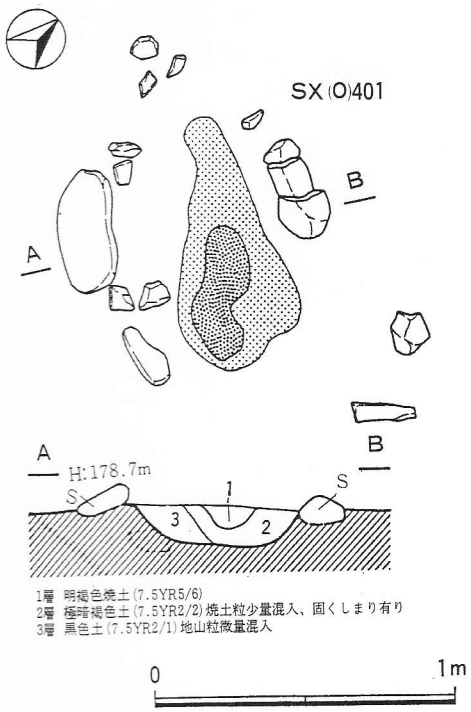
第24図　竪穴住居跡出土土製品実測図(2)

確認された付属施設と同一のものか、炉石の移動したものかは確認できなかった。

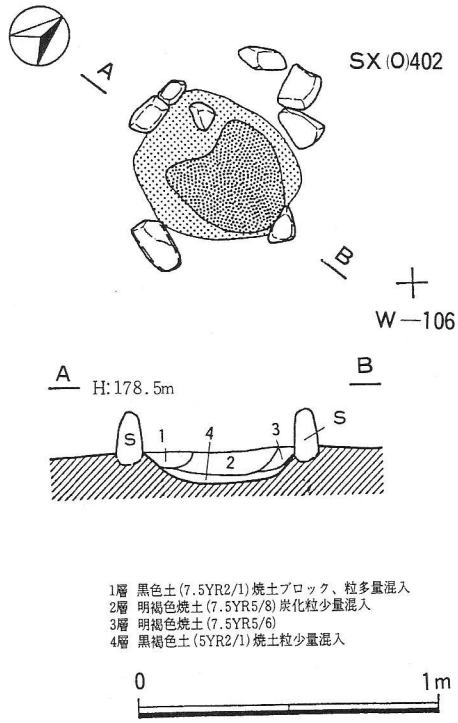
〈出土遺物〉（第18図５、19図18～21、21図30、31、24図８）

本住居からは、上記埋設土器の他、土器片５点、掻器２点、板状土製品１点の出土があった。

これらの出土遺物及び遺構の重複関係より、本住居の時期は後期前葉と考えられる。



第25図　第401号石囲炉実測図



第26図　第402号石囲炉実測図

2．石囲炉

第401号石囲炉（第25図）

F₁区北部のV—108グリッドに位置する。Ⅲb層中位で石頭を現わし、Ⅲd層上面で全容が確認された。表土が浅く、耕作による破壊を受けているが、残存する炉石、焼土範囲から、70×60cmの楕円形に石を配した石囲炉と考えられる。長軸方向の炉石は大きく、35～42cmを測る。炉内中央部分が良く焼けており、45×17cm範囲で最大厚8cmの焼土が確認された。

周囲の出土遺物及び遺構構築面から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

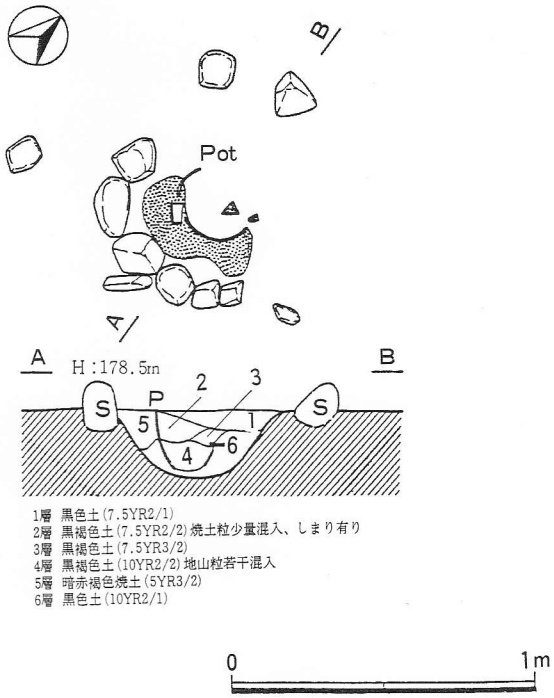
第402号石囲炉（第26図）

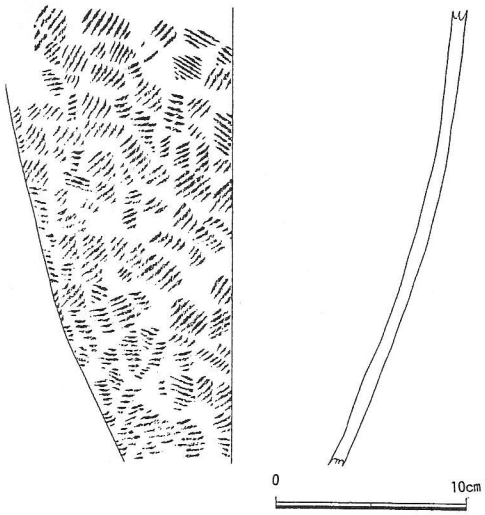
F₁区西部のX—105グリッドに位置する。Ⅲb層下位で石頭を現わし、Ⅲd層上面で全容が確認された。耕作により半壊しているが、9～19cm大の石を60×55cmの楕円形に配した石囲炉と考えられる。炉内50×48cmの範囲で、最大層厚9cmの焼土が確認されている。

周囲の出土遺物及び遺構構築面から、本遺構の時期は縄文時代後期と考えられる。

第403号石囲炉（第27図）

F₁区中央部のU—104グリッドに位置する。Ⅲb層下位で石頭を表わし、Ⅲd層上面で全容





第403号石囲炉埋設土器

第27図　第403号石囲炉実測図

が確認された。半壊しているが、9～20cm大の石を80～60cmの楕円形に配し、その中に土器を埋設した土器埋設石囲炉と考えられる。土器は底部を欠いた深鉢形土器で、正立に埋設されている。器面全体にR縄文を施文、焼成はやや良好で、色調は橙色を呈する。埋設土器部分から炉南側にかけ良く焼けており、焼土最大厚は13cmを測る。

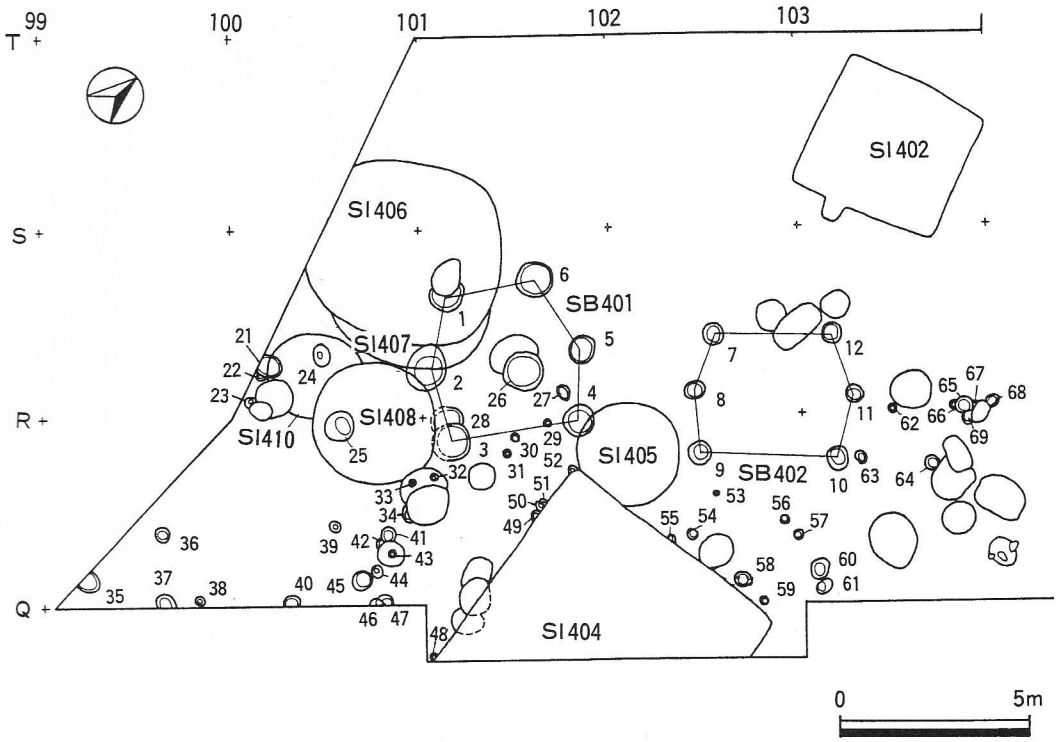
埋設土器及び遺構構築面から、本遺構の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

3．建物跡と柱穴状ピット

F1区からは96個の柱穴状ピットが検出された。これらのピットはⅢd層上面において確認されている。いずれも円形あるいは楕円形の平面プランで、大型のものは径50～114cm、深さ73～129cm、小型のもので径18～46cm、深さ14～60cmを測る。大型のピットからは柱痕が確認されており、その規則的な配列から、これらのピットの大部分は掘立柱建物跡の柱穴と考えられる。F1区では8棟以上の建物跡の存在が予想されるが、ここでは柱配列を明確にし得た4棟の建物跡について記述する。

第401号建物跡（第18図6、29図、34図1～10、35図1、3、4、8、10、11）

F1区南部のS、R－101、102グリッド、Ⅲd層上面において確認された。第405、406、407、



第28図　南部建物跡柱穴状ピット配置図

408 号竪穴住居跡、 435 、 452 号土壙、柱穴状ピット26～30と重複し、本遺構は新旧不明の柱穴状ピット26、27、29、30以外、全ての遺構より古い。

ピット 1 ～ 6 の 6 本柱の建物跡で、長辺3.9m、短辺3.0m、張り出し部軸長4.3m を測り、N—35°—E の長軸方位をもつ。柱穴はいずれも大規模で、掘り方径76～114cm、深さ105～130cmを測る。またピット 2 以外の 5 個の柱穴から、径33～40cmの柱痕が確認されている。

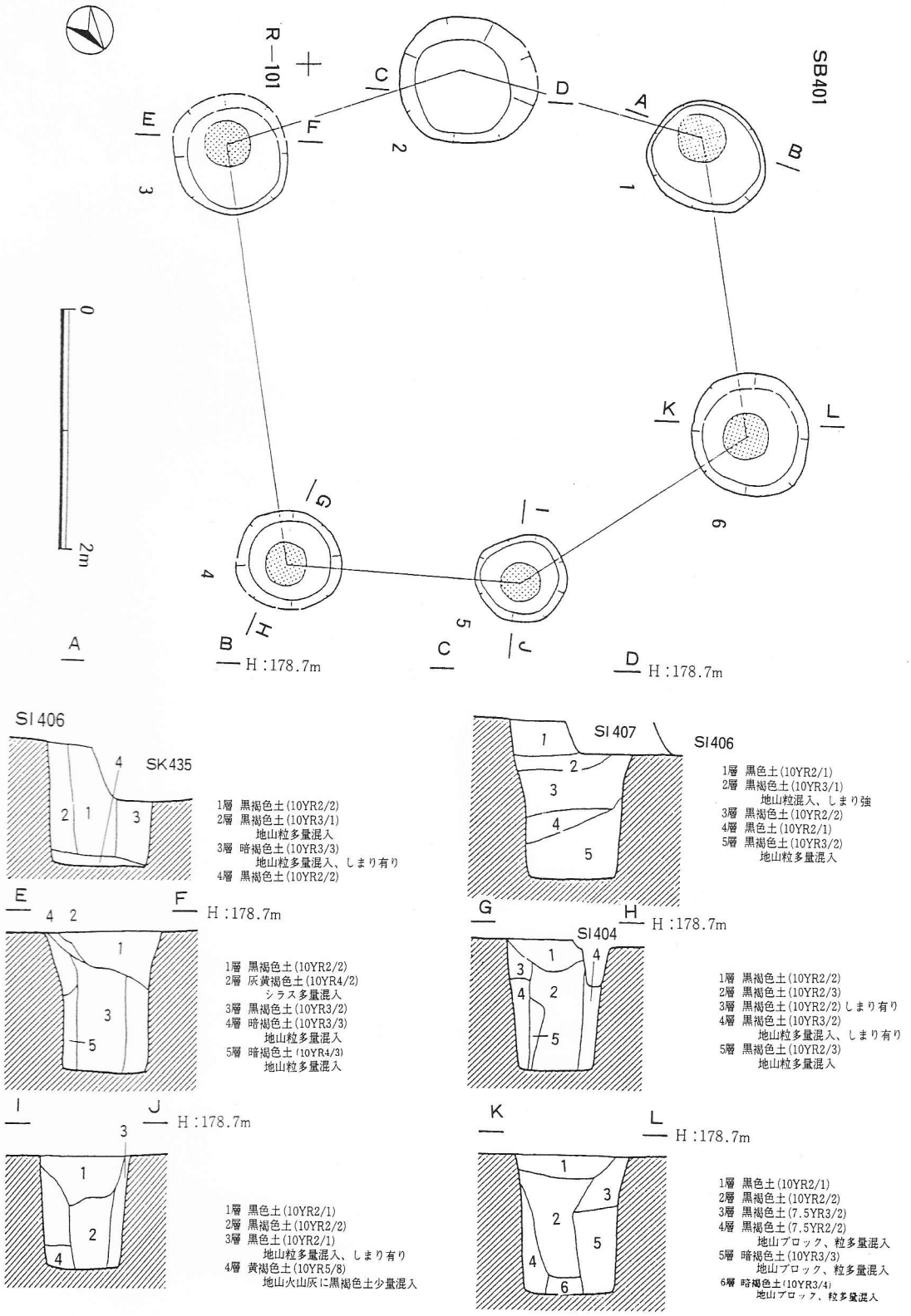
本建物跡柱穴からの出土遺物は比較的多く、ピット 1 より円盤状石製品 1 点、ピット 2 より掻器 2 点、石錘 1 点、ピット 3 より土器片 5 点、石鏃 1 点、ピット 4 より底径12.2cmの深鉢底部と土器片 4 点、ピット 6 から土器片 1 点、石製品 1 点の出土があった。

これらの出土遺物から、本建物跡の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

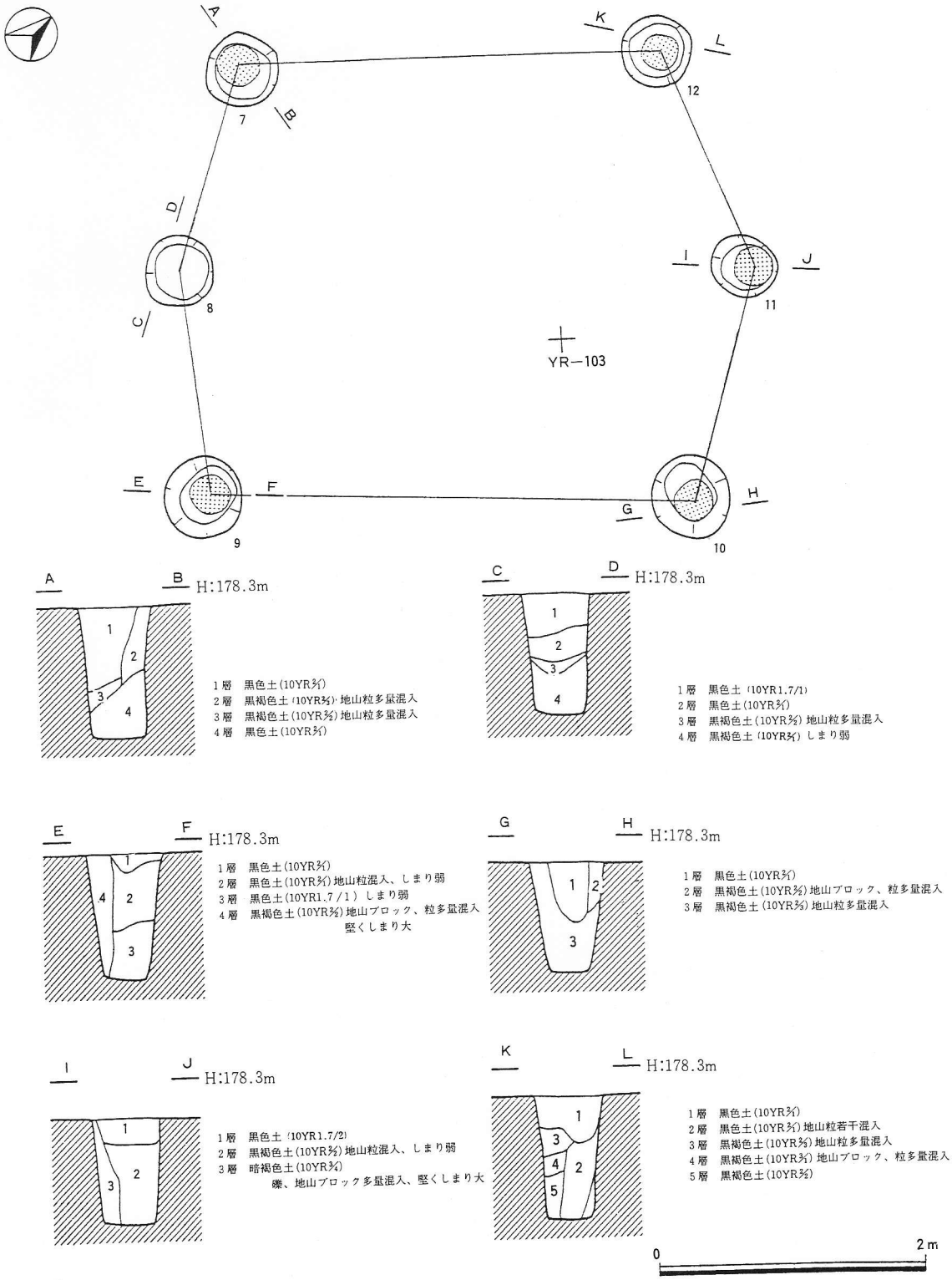
第402号建物跡（第30図、34図11～26、35図 2 、 5 ～ 7 ）

F_1区南部のS、R—102、103グリッド、Ⅲd層上面で確認された。第 434 号土壙と重複するが新旧は確認できなかった。

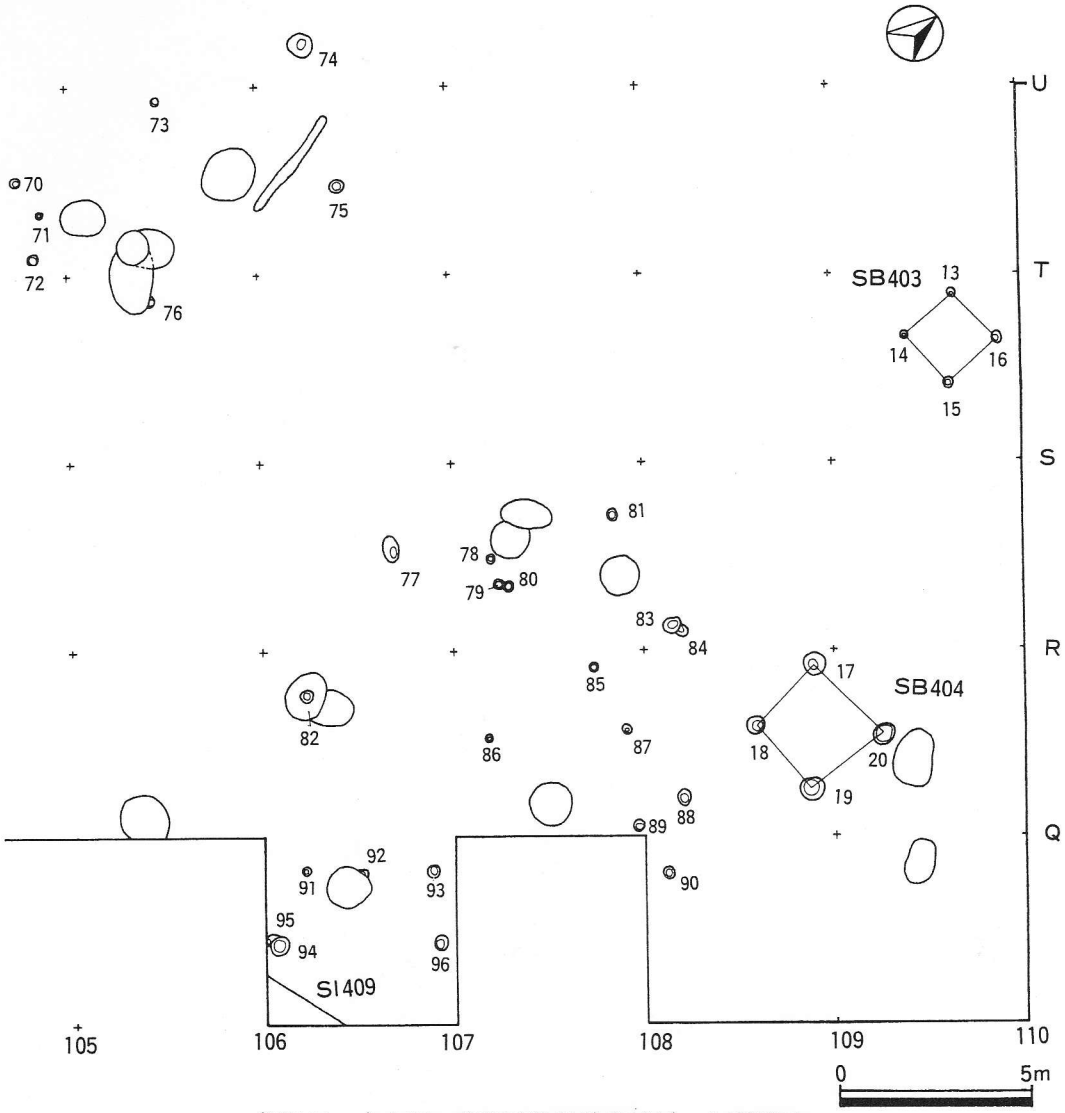
ピット 7 ～12の 6 本柱の建物跡で、長辺3.4m、短辺3.3m、張り出し部軸長4.3m を測り、N—44°—E の長軸方位をもつ。柱穴は比較的規模が大きく、掘り方径50～64cm、深さ81～100cmを測る。柱痕はピット 8 以外の柱穴で確認され、その径は28～32cmを測る。



第29図　第401号建物跡実測図



第30図　第402号建物跡実測図



第31図　中央部、東部建物跡柱穴状ピット配置図

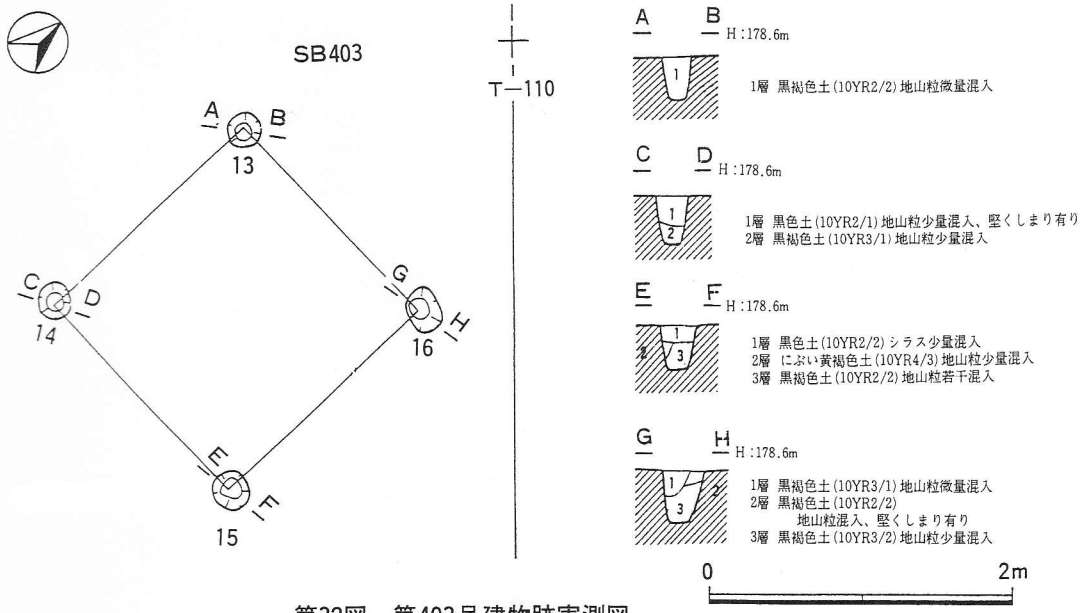
本建物跡柱穴からの遺物もやや多く、ピット７より土器片６点、ピット８より土器片４点、掻器２点、ピット10より土器片４点、凹石１点、ピット11より土器片２点、掻器１点、ピット12から土器片４点の出土があった。

これらの出土遺物から、本建物跡の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

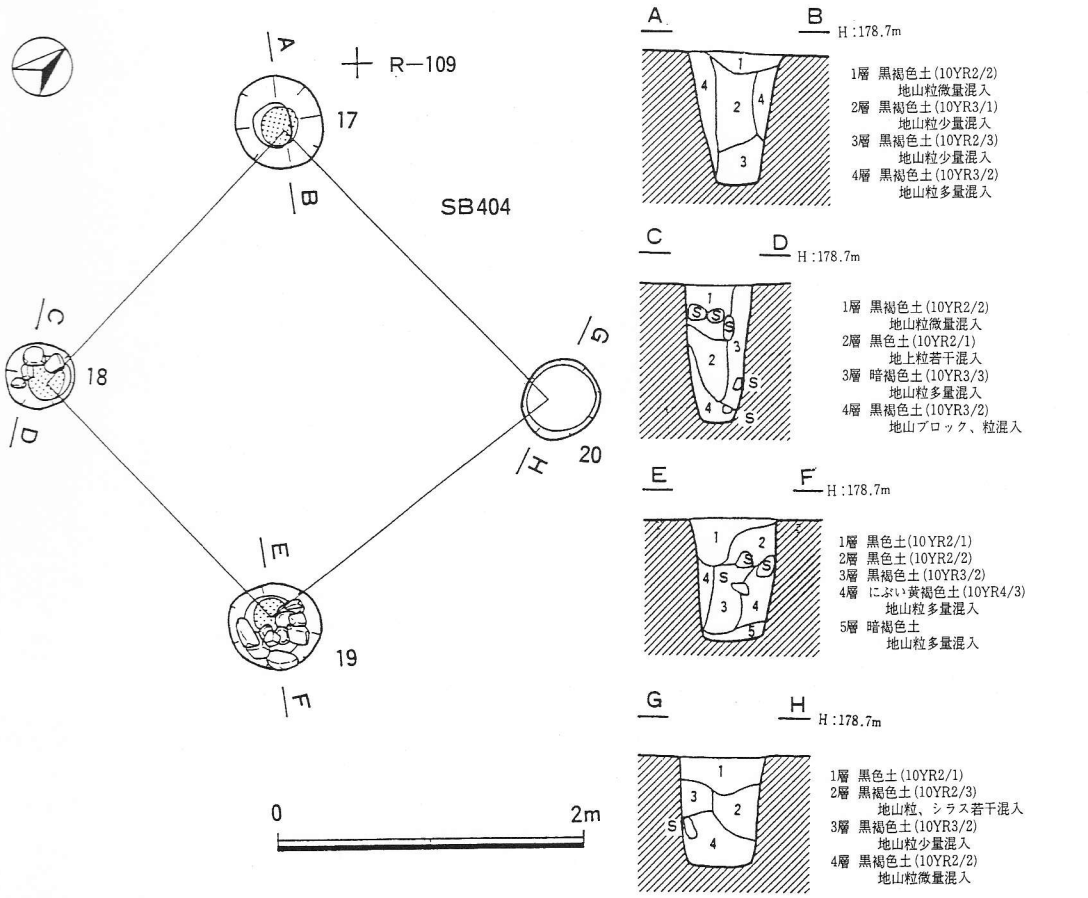
第403号建物跡（第32図、34図27、28）

F_1 区西部のＴ―109グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認された。

ピット13～16の４本柱の建物跡で、長・短辺とも1.7m を測り、長軸方向はＮ－２°－Ｅの長軸方位をもつ。柱穴の規模も小さく、掘り方径22～30cm、深さ31～36cmを測る。



第32図　第403号建物跡実測図



第33図　第404号建物跡実測図

第1表　建物跡一覧表

※張り出し部をもつプランのうち、張り出し部軸長が長辺より長いものは張り出し部軸方向を長軸方向とした。
※新旧関係は、旧→新で表わす。記号のないものは新旧不明。

建物跡No.	形態	柱穴数	柱穴 番号	柱穴 規模、深さ(cm)	柱穴 柱痕(cm)	長辺長(m)	短辺長(m)	張り出し部軸長(m)	長軸方向	重複関係
SB401	Ⅱ類	6	Pit 1	98×92×128.7	40×38	3.9(Pit 1－Pit 3)	2.5(Pit 1－Pit 6)	4.3(Pit 2－Pit 5)	N－35°－E	SB401→SI405 SB401→SK435→SI406 SB401→SI407 SB401→SI408 Pit28→SB401 SK452. Pit26.27.29.30
			Pit 2	114×104×128.8						
			Pit 3	100×96×114.2	39×38					
			Pit 4	90×84×116.0	37×34	3.9(Pit 4－Pit 6)	3.5(Pit 3－Pit 4)			
			Pit 5	76×74×104.9	33×32					
			Pit 6	102×96×115.0	38×37					
SB402	Ⅱ類	6	Pit 7	56×54×99.7	32×32	3.2(Pit 7－Pit12)	3.2(Pit 7－Pit 9)	4.3(Pit 8－Pit11)	N－44°－E	SK434
			Pit 8	52×50×90.9						
			Pit 9	62×58×96.0	30×30					
			Pit10	64×60×84.0	32×30	3.6(Pit 9－Pit10)	3.4(Pit10－Pit12)			
			Pit11	50×48×81.0	28×28					
			Pit12	54×54×94.0	28×28					
SB403	Ⅰ類	4	Pit13	22×22×31.1		1.7(Pit13－Pit14)	1.7(Pit13－Pit16)		N－2°－E	
			Pit14	26×22×32.8						
			Pit15	28×24×36.2		1.7(Pit15－Pit16)	1.7(Pit14－Pit15)			
			Pit16	30×22×36.2						
SB404	Ⅰ類	4	Pit17	64×58×90.2	26×24	2.5(Pit17－Pit20)	2.3(Pit17－Pit18)		N－89°－E	
			Pit18	46×44×92.0	24×23					
			Pit19	62×58×82.0	24×22	2.2(Pit18－Pit19)	2.3(Pit19－Pit20)			
			Pit20	54×52×73.0						

本建物跡柱穴からの出土遺物は少なく、ピット15から土器片3点が出土したのみである。これらの遺物及び遺構確認面から、本建物跡の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

第404号建物跡（第33図、34図29～37、35図9）

F_1区西部のR－108、109グリッドに位置する。Ⅲd層上面において確認された。北東側に404号土壙が近隣する。

ピット17～20の4本柱の建物跡で、長辺2.35m、短辺2.30mを測り、N－89°－Eの長軸方位をもつ。柱穴の規模はやや大きく、掘り方径46～64cm、深さ73～92cmを測る。ピット17～19からは径24～26cmの柱痕が確認され、ピット18、19には根固め状に8～22cm規模の石が埋設されていた。

本建物跡ピット17より2点、ピット18より1点、ピット19より5点、ピット20より1点の土器片の出土があった。これらの遺物から、本建物跡の時期は縄文時代後期前葉と考えられる。

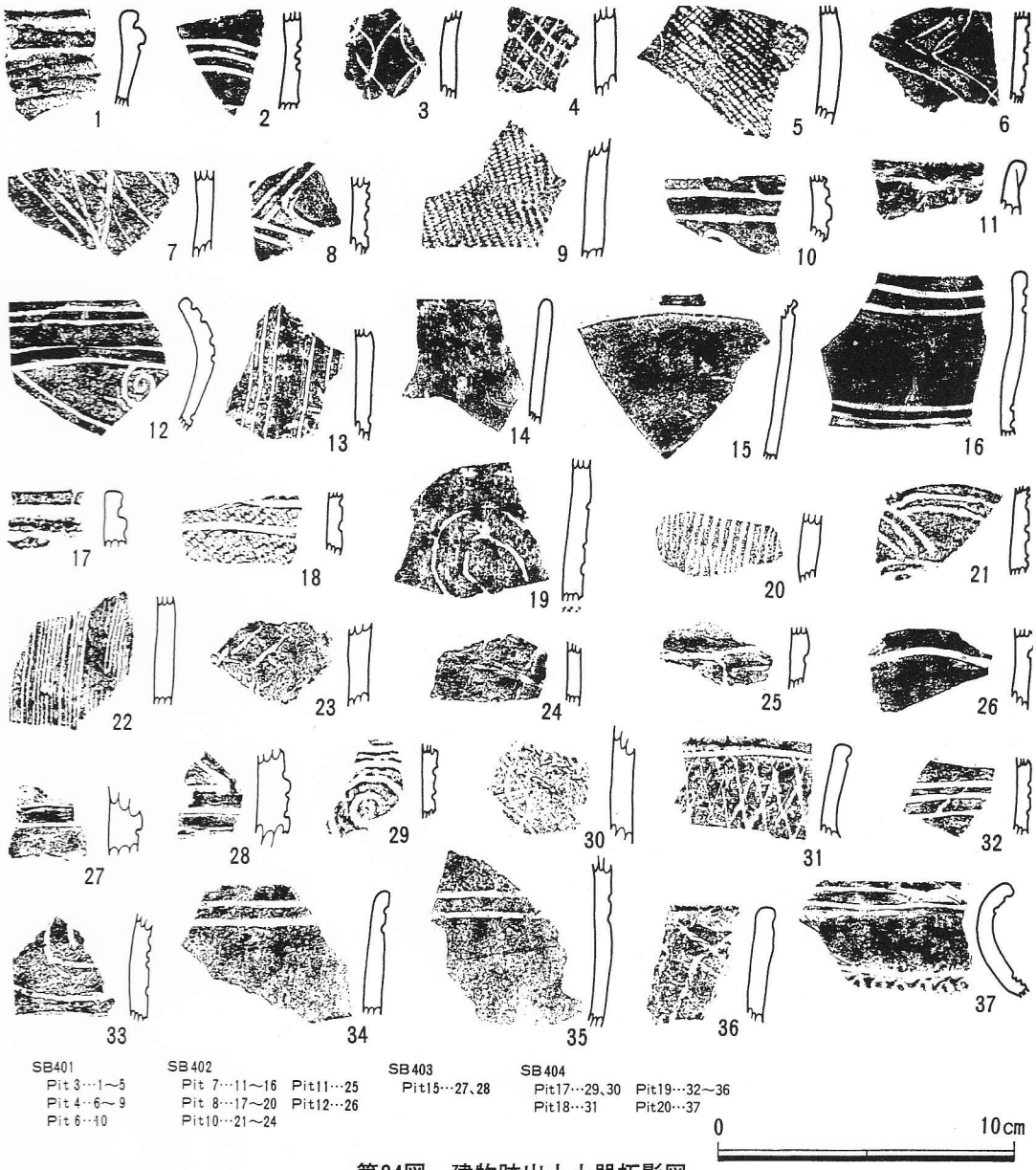
その他の建物跡と柱穴状ピット（第28図、31図、36図、37図）

柱穴状ピットはF_1区南部、中央部及び東部に偏在する。南部の分布密度が最も高く、規模の大きいものが多い。401、402号建物跡を構成するピット以外に、ピット21、24～26、28のようにかなり規模の大きいピットが検出されており、これらは6本柱の建物跡の柱穴となる可能性

第2表　柱穴状ピット一覧表

※ 新旧関係は、旧→新で表わす。記号のないものは新旧不明
※ Pit 1 ～20は、建物跡一覧表参照

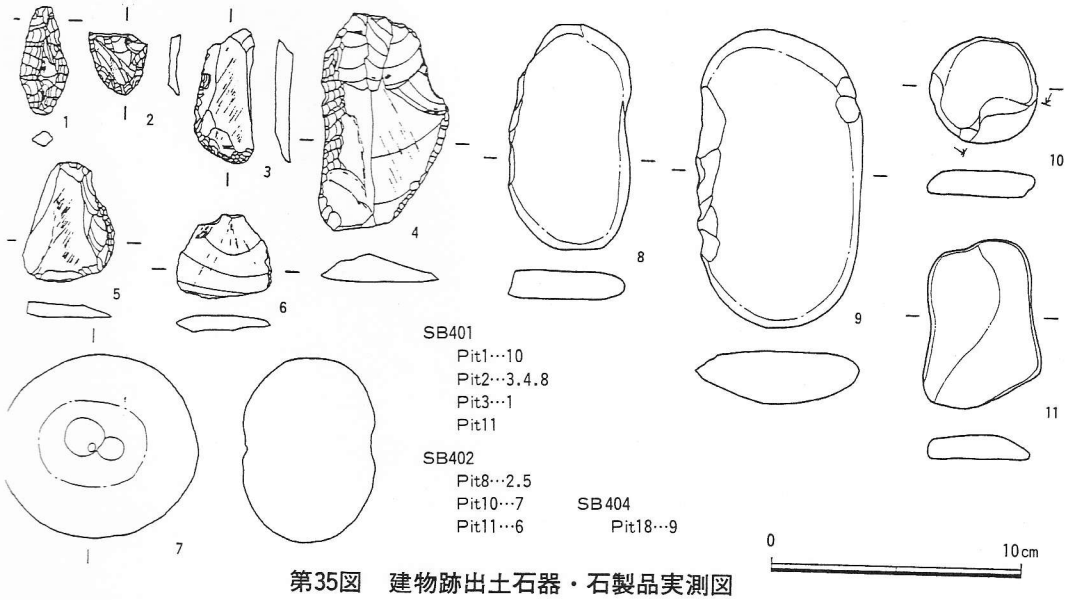
ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係	ピットNo.	グリッド	長径×短径×深さ(cm)	重複関係
21	S－100	63×61×81.5	SI410. Pit22	59	R・Q－102	24×22×34.1	
22	S－100	32×28×57.6	SI410. Pit21	60	R－103	52×51×52.4	
23	S－100	38×30×50.4	Pit23→SK449→SK450	61	R－103	40×39×63.0	
24	S－100	55×46×(83.3)	SI410	62	S・R－103	24×22×39.6	
25	S・R－100	75×72×(87.3)	Pit24→SI408	63	R－103	35×34×44.7	
26	S－101	104×103×98.5	SB401：SK452→Pit26	64	R－103	40×35×48.7	SK432
27	S－101	42×34	SB401	65	S・R－103	46×39×33.9	Pit69：Pit66→Pit65.Pit67→Pit65
28	S・R－101	86×85×81.6	Pit28→SB401→SI408	66	S－103	29×27×39.3	Pit66→Pit65
29	R－101	20×20×15.8	SB401	67	S－103	20×19×41.4	Pit67→Pit65. Pit67→SX(S)403
30	R－101	22×22×16.1		68	S－103・104	38×32×40.3	Pit68→SX(S)403
31	R－101	20×15×23.6		69	R－103	35×34×40.9	Pit65：Pit69→SX(S)403
32	R－101	22×22×(39.4)	Pit32→SK443	70	U－104	26×25×24.3	
33	R－100	19×15×(35.1)	Pit33→SK443	71	U－104	18×18×10.4	
34	R－100	57×50×21.7	SK443：Pit34→SK442	72	U－104	29×27×26.1	
35	R－99	59×(50)×63.6		73	U－105	23×20×20.1	
36	R－99	39×39×46.0		74	V－106	64×56×26.4	
37	R－99	51×(39)×51.0		75	U－106	36×31×35.6	
38	R－99	27×24×47.1		76	T－105	29×27×29.7	Pit76→SK418
39	R－100	30×29×49.7		77	S－106	67×42×49.9	
40	R－100	40×32×51.1		78	S－107	24×22×34.1	
41	R－100	38×38×43.7	Pit42：Pit41→SK451	79	S－107	27×27×40.6	
42	R－100	35×32×35.7	Pit41：Pit42→SK451	80	S－107	30×30×51.2	
43	R－100	20×20×(42.7)	Pit43→SK451	81	S－107	30×26×38.9	
44	R－100	34×33×54.5		82	R－106	30×29×19.4	Pit82→SK437
45	R－100	53×53×44.6		83	S－108	46×41×52.0	Pit84→Pit83
46	R－100	42×(35)×60.5	Pit47→Pit46	84	S－108	36×32×36.8	Pit84→Pit83
47	R－100	44×31×32.0	Pit47→Pit46	85	R－107	25×25×44.0	
48	Q－101	18×18×68.0	Pit48→SI404	86	R－107	21×20×27.8	
49	R－101	28×28×55.6	Pit50→Pit49→SI404	87	R－107	26×24×24.5	
50	R－101	20×17×39.2	Pit51：Pit50→Pit49→SI404	88	R－108	42×40×32.9	
51	R－101	18×17×31.1	Pit50：Pit51→SI404	89	R－107	33×30×36.5	
52	R－101	20×18×41.4	Pit52→SI404	90	Q－108	30×28×55.3	
53	R－102	16×14×14.1		91	Q－106	24×23×25.3	
54	R－102	30×29×41.6		92	Q－106	26×25×23.2	Pit92→SK453
55	R－102	18×18×29.2	Pit55→SI404	93	Q－106	31×30×31.1	
56	R－102	28×25×36.0		94	Q－106	52×50×59.7	Pit95
57	R－102	25×24×42.6		95	Q－106	42×29×57.1	Pit94
58	R－102	44×43×51.4		96	Q－106	39×35×34.8	



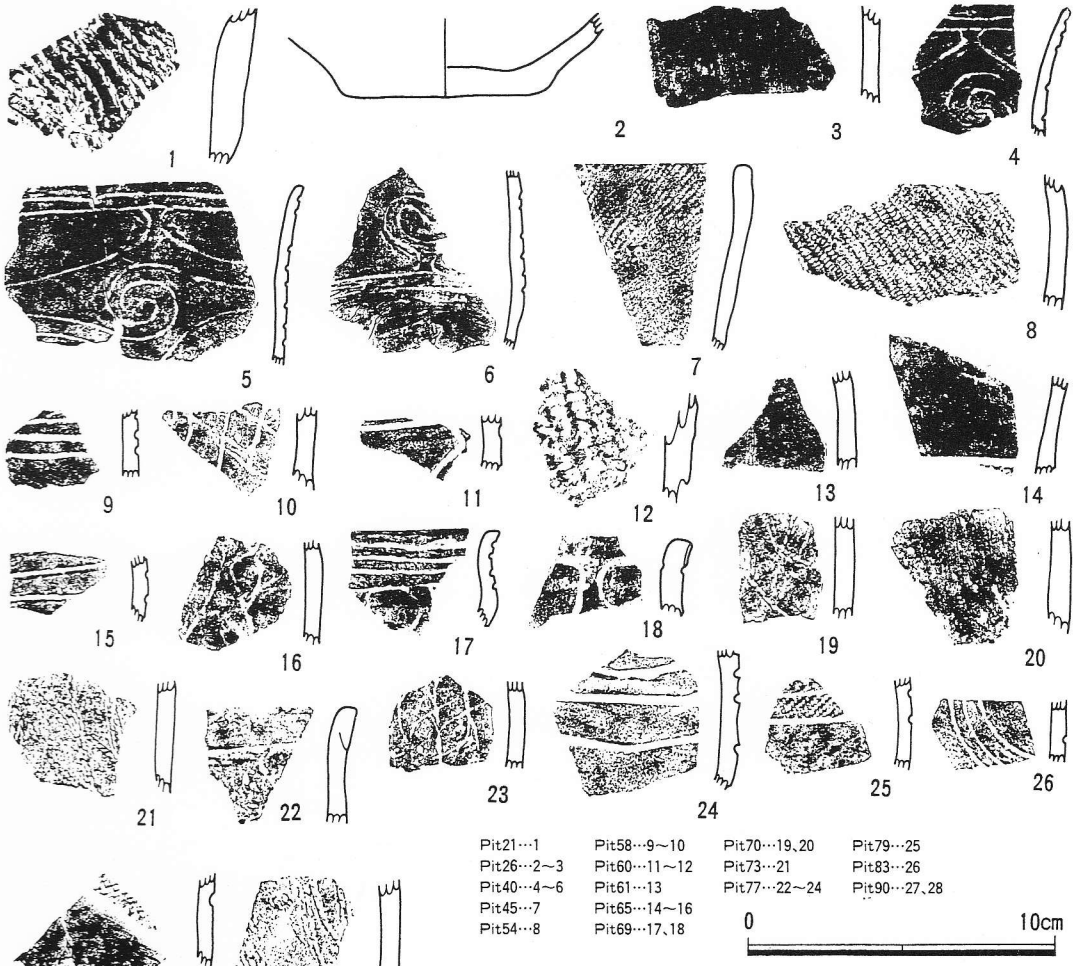
第34図　建物跡出土土器拓影図

がある。また、小規模のものは、上層の遺構保存のためⅢd層まで調査の及んでいないグリッドや未発掘区域さらには、他遺構構築による消失を考慮すると、数棟の４本柱の建物跡の柱穴となるものと考えられる。

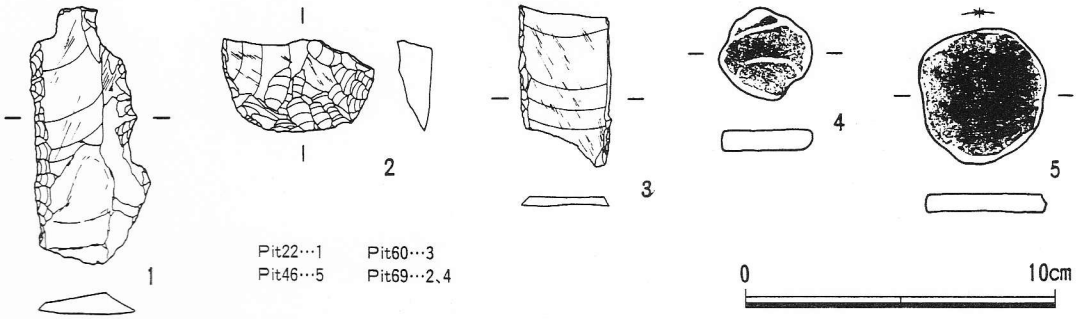
東部に分布するピットは小規模なものが多く、６本柱の建物跡は存在せず、403、404号建物跡のように４本柱の建物跡を構成するものと考えられる。１個の柱穴が確認できていないが、ピット88～90も４本柱の建物跡の柱穴の可能性がある。　（秋元信夫）



第35図　建物跡出土石器・石製品実測図



第36図　柱穴状ピット出土土器拓影図



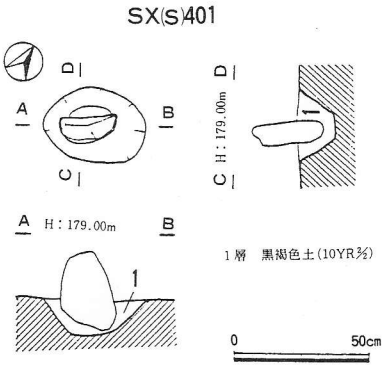
第37図　柱穴状ピット出土石器、石製品実測図

4．配石遺構

(1)　立石遺構

第401号立石遺構（第38図）

発掘区北東部のV、W－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で全容が確認された。30×20×８cmのやや扁平な石を、垂直に立てている。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積と考えられる。ピットの平面形は28×38cmの楕円形を呈し、深さ14.0cmを測る。底面はⅣ層下位から成り、壁はやや緩く外傾して立ち上がる。遺物は出土しなかった。



第38図　立石遺構実測図

(2)　集石遺構

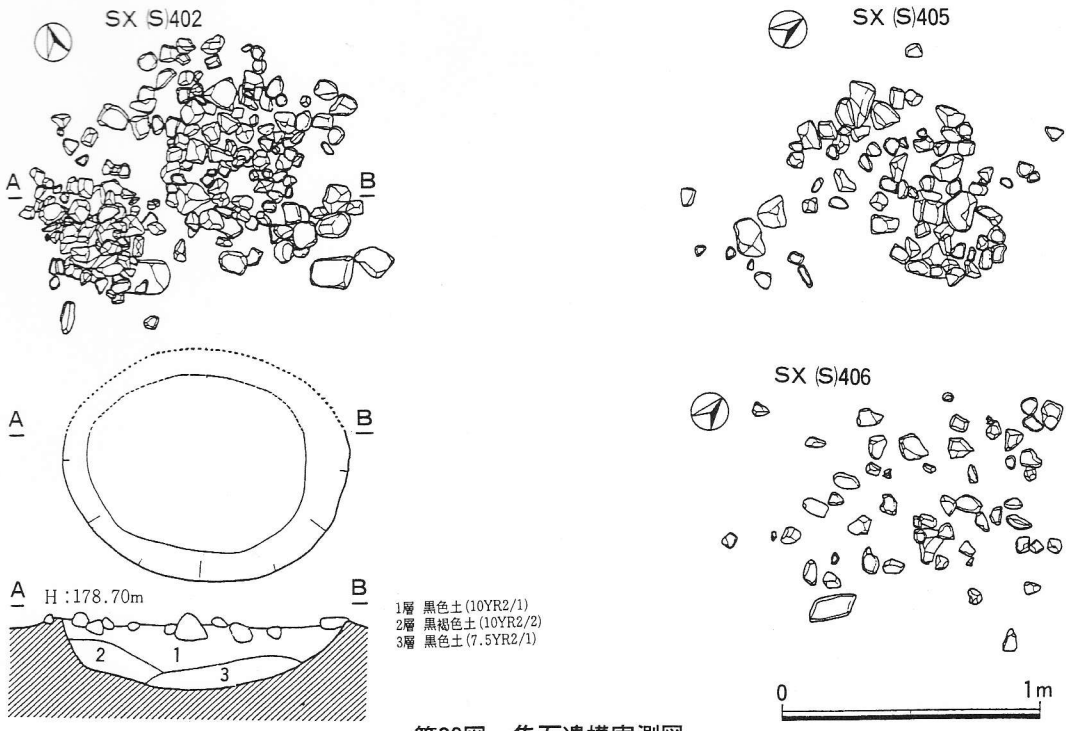
第402号集石遺構（第39図、40図２、５、６）

発掘区北東部のV－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で全容が確認された。遺構南側は第409号土壙により破壊されている。集石は４～17cm大の自然石約160個を使用し、円形に配したものと考えられる。規模は東西方向1.38m を測る。遺構南側の集石下を調査した結果、下部には土壙を伴い、平面形は東西方向1.12ｍの楕円形を呈すると考えられる。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は内湾気味に緩やかに立ち上がり、壁高は25.2cmを測る。底面はV層より成り、鍋底状を呈し、堅くしまっている。

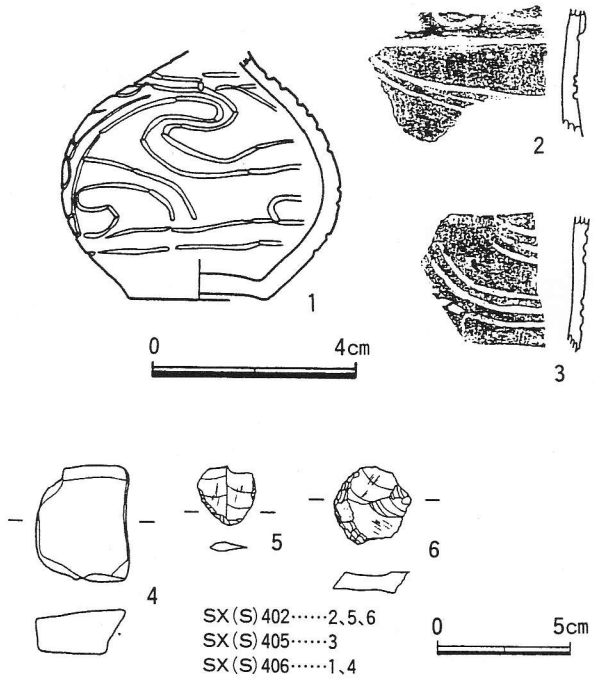
堆積土より土器片11点、掻器２点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第405号集石遺構（第39図、40図３）

発掘区東部のＳ－107グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で、４～18cm大の自然石約75個が確認された。集石は遺構北側が密になっており、規模約70×93cmの楕円形を呈する。また集石を構成する石のほとんどが火熱を受けていた。なお、集石下は未調査である。３は集石が密になる北側のほぼ中央、集石間より出土した土器片である。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。



第39図　集石遺構実測図



第40図　集石遺構出土遺物実測図

第406号集石遺構(第39図、40図１、４)

発掘区中央のＳ―104グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で、３～18cm大の自然石約55個が確認された。集石は楕円形を呈し、規模は128×98cmを測る。なお、集石下は未調査である。

集石間より、小型壺形土器１点、円盤状石製品１点が出土した。１は集石北側より出土した小型壺形土器で、頸部、底部付近の横位平行沈線により文様帯を区画し、区画内には平行沈線により入組文、斜行文、孤状文が施文されている。大きさは最大胴径5.4cm、底径2.7cm、現存器高4.9cmを計る。色調はにぶい橙色を呈する。

構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

(3) 配石遺構

第403配石遺構（第41図、42図１～３）

発掘区南部のＲ、Ｓ－103グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で全容が確認された。柱穴状ピット67～69と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。配石は、土壙ほぼ中央に23×21×８cmのやや扁平な石を垂直に立てている。石はそのほとんどを堆積土中に埋没していた。下部土壙の平面形は、41×63cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－21°－Ｗである。堆積土は黒色土の単一層で、人為堆積を呈する。壁は北、西壁がほぼ垂直に立ち上がり、壁高は36.0cmを測る。底面はＶ層より成り、堅くしまっている。

堆積土より、土器片３点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第404号配石遺構（第41図）

発掘区南部のＲ－103、104グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で全容が確認された。３個の石が確認され、配石は土壙縁辺の軸上に１対の扁平及び球状の石を置き、その内部に扁平な石を配している。扁平な石の大きさは29×22cm、32×22cm、球状のものは13×13cmを測る。下部土壙の平面形は、70×79cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。壁は外傾気味に立ち上がり、壁高23.0cmを測る。底面はＶ層より成り、平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

第407号配石遺構（第41図、42図４～11）

発掘区南部のＳ－102グリッドに位置し、Ⅲd 層上位で全容が確認された。第434号土壙と重複し、本遺構が古い。配石は６～23cm大の自然石11個を使用し、土壙中央にやや大きめの石を２個並べ置き、その回りに小さめの石を配したものと考えられる。下部土壙は、径84cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は16.8cmを測る。底面はⅣ層下位から成り、ほぼ平坦である。

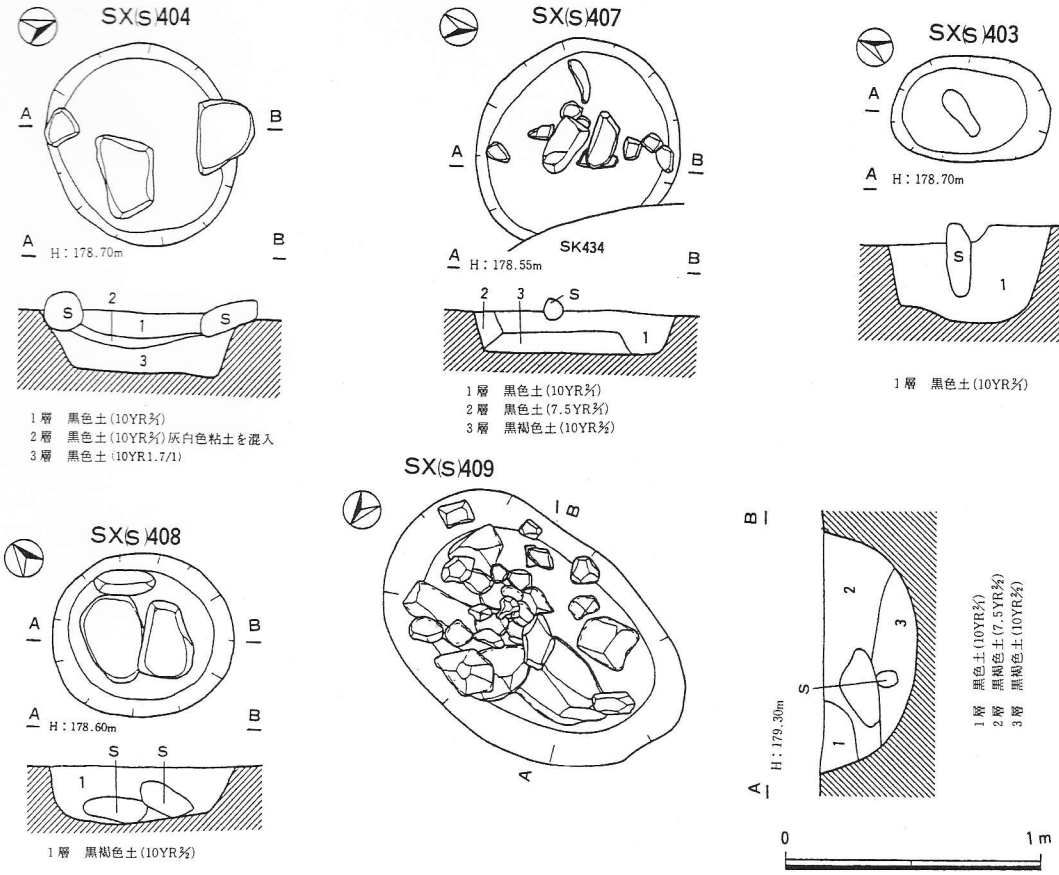
堆積土中より、土器片48点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第408号配石遺構（第41図）

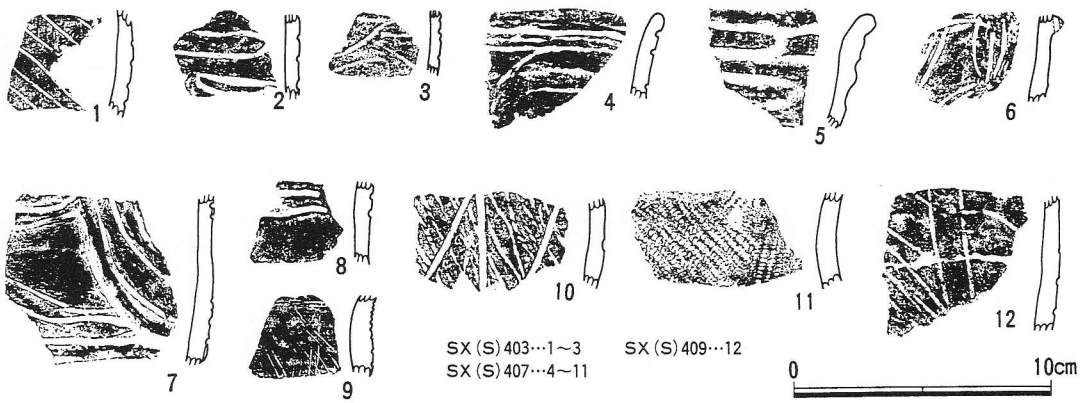
発掘区南部のＲ－101グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で炭化粒を含む黒褐色の落ち込みが確認された。配石は24～35cm大の扁平な自然石を、土壙底面に２個置き、壁際に１個立て置くものである。土壙は径70cmの円形を呈する。堆積土は単一層で、人為堆積と考えられる。北壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は22.4cmを測る。底面はＶ層から成り、堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

第409号配石遺構（第41図、42図12）

発掘区北東部のＶ－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で地山粒を含む黒褐色の落ち込みが確



第41図　配石遺構実測図



第42図　配石遺構出土土器拓影図

認された。第405、406、409号土壙と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。配石は6～48cm大の自然石32個が確認され、その全てが堆積土中に埋没していた。遺構北側より出土した長さ48cmの柱状の石は、立石であった可能性があり、土壙上面に配されていた石が何等かの事由により埋没したものと考えられる。土壙は85×129cmの楕円形を呈し、長軸方向はN－85°－Eであ

る。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は36.4cmを測る。土壙北西寄り底面に、径約30cm、厚さ約6cmの粘土が確認された。底面はV層より成り、鍋底状を呈する。

堆積土中より、土器片約15点が出土した。12は南西寄り底面から出土したものである。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

5．焼土遺構

第401号焼土遺構（第43図）

発掘区東端のQ—109グリッドに位置する。Ⅲb層上位において、26×55cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は北東側に偏在し、規模12×16cm、焼土厚3cmを測る。遺物は出土しなかった。

第402号焼土遺構（第43図）

発掘区北東部のU—109グリッドに位置する。Ⅲb層下面において、50×72cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土はほぼ中央に位置し、規模19×34cm、焼土厚9cmを測る。遺物は出土しなかった。

第403号焼土遺構（第43図）

発掘区北東部のT—109グリッドに位置する。Ⅲd層上面において、69×125cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。遺構南側及び中央部は耕作により攪乱されている。焼土は北西側、南東側の2ヵ所に検出され、規模はそれぞれ、11×30cm、厚さ7cm、15×46cm、厚さ11cmを測る。遺物は出土しなかった。

第404号焼土遺構（第43図、46図1、2）

発掘区北東部のT—108、109グリッドに位置する。Ⅲd層上面において、東西方向80cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。遺構の南北両側は耕作による攪乱を受けている。焼土は北側に位置し、厚さ5cmを測る。焼土及び黒褐色土中より土器片2点が出土した。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第405号焼土遺構（第43図）

発掘区中央部のT—106グリッドに位置し、Ⅲb層下面で確認された。焼土及び焼土粒を含む範囲は、規模58×64cmを測る。遺構はほぼ全域が焼土範囲で、その規模は58×62cm、厚さ11cmを測る。遺物は出土しなかった。

第406号焼土遺構（第43図、46図3～6）

発掘区中央部のU—106、107グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認された。30×69cmの焼土及び焼土粒を含む暗褐色土範囲内北側に、2ヵ所の焼土が検出され、その規模はそれぞれ7×9

cm、14×15cm、厚さは共に5cmを測る。焼土及び暗褐色土中より土器片5点が出土した。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第407号焼土遺構（第43図）

発掘区中央部のU—105グリッドに位置する。Ⅲb 層下位において、55×99cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は東側に偏在し、規模24×29cm、厚さ4cmを測る。遺物は出土しなかった。

第408a 号焼土遺構（第43図）

発掘区南部のS—104グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲の規模は、32×49cmを測る。東側及び西側縁辺の焼土化が著しく、焼土厚は2cmを測る。遺物は出土しなかった。

第408b 号焼土遺構（第43図、45図1、46図7～9、47図1）

発掘区南部のR—104グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。平面形は32×55cmの不整楕円形を呈し、9cm程掘り込まれている。焼土厚は約2cmを測る。45図1は底面出土の深鉢形土器で、胴部に原体Rの網目状撚糸文が施文されている。推定口径25.1cm、底径10.7cm、器高29.1cmを測る。色調は明褐色を呈する。堆積土より土器片10数点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第409号焼土遺構（第43図、46図10、11、47図2）

発掘区中央部のV—105グリッドに位置する。Ⅲb 層上位で54×65cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は32×49cm、厚さ10cmを測り、南側の方が焼土化が著しい。焼土中より、土器片2点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。構築時期は縄文後期と考えられる。

第410号焼土遺構（第43図）

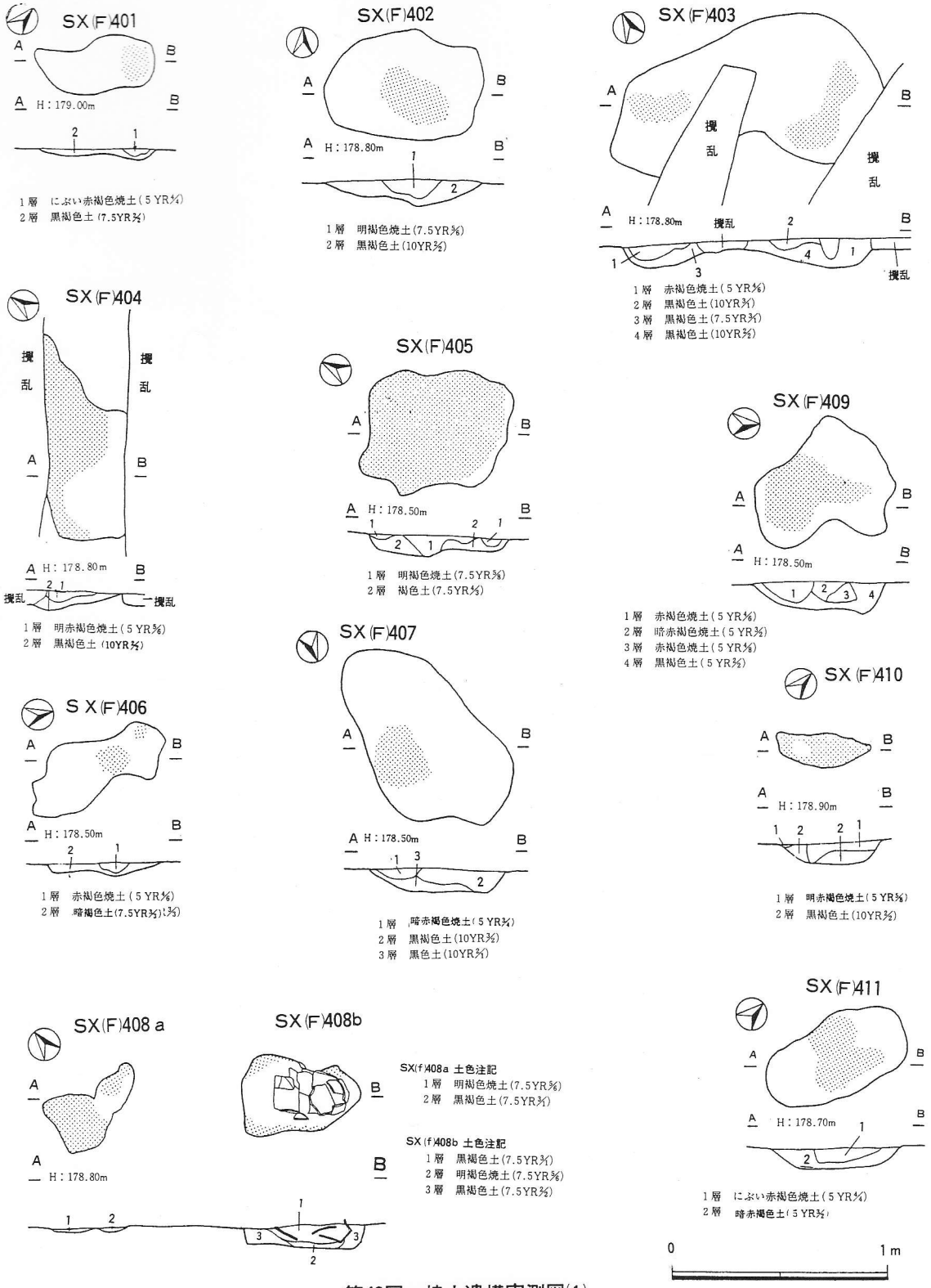
発掘区南部のR—102グリッドに位置し、Ⅲb 層上位で確認された。24×43cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲内南側に焼土が位置し、厚さ9cmを測る。焼土及び黒褐色土中より、土点が出土した。構築時期は縄文後期と考えられる。

第411号焼土遺構（第43図、46図12、13）

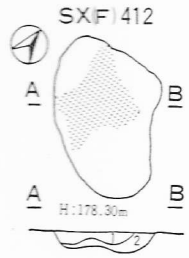
発掘区南端のR—99グリッドに位置し、Ⅲb 層上位で確認された。36×69cmの焼土及び焼土粒を含む暗赤褐色土範囲内中央に焼土が位置し、規模29×34cm、厚さ6cmを測る。焼土及び暗赤褐色土中より、土器片2点が出土した。構築時期は縄文後期と考えられる。

第412号焼土遺構（第44図）

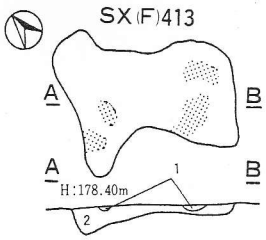
発掘区西部のU、V—104グリッドに位置し、Ⅲd 層上位で確認された。43×64cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲内北西側に焼土が位置し、規模25×27cm、厚さ5cmを測る。遺物は



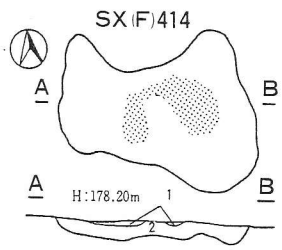
第43図　焼土遺構実測図(1)



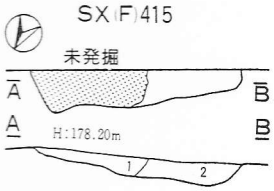
1層 赤褐色焼土(5YR4/6)
2層 黒褐色土(5YR2/1)



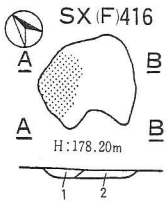
1層 暗赤褐色焼土(5YR3/3)
赤褐色焼土小ブロックを多量混入
2層 黒褐色土(7.5YR2/2)



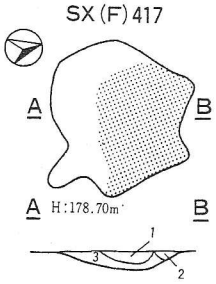
1層 赤褐色焼土(5YR4/6)
2層 黒褐色土(5YR2/1)



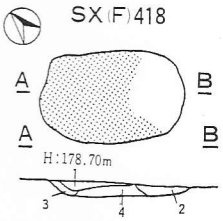
1層 にぶい赤褐色焼土(5YR4/4)
2層 黒褐色土(5YR2/2)



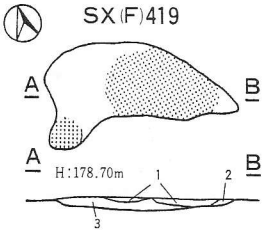
1層 にぶい赤褐色焼土(5YR4/4)
2層 黒褐色土(5YR2/2)



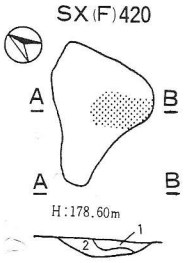
1層 橙色焼土(5YR6/8)
2層 明赤褐色焼土(5YR5/6)
3層 褐色土(10YR4/4)



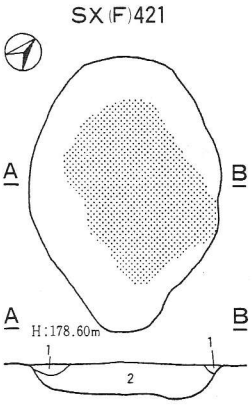
1層 暗赤褐色焼土(5YR4/4)
2層 暗褐色土(10YR3/3)
3層 明赤褐色焼土(5YR5/8)
4層 黒褐色土(10YR3/1)



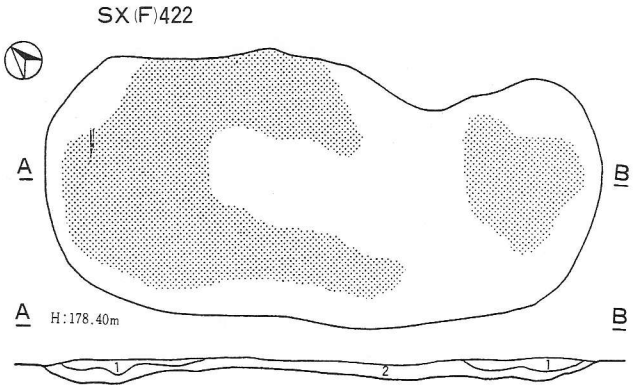
1層 橙色焼土(5YR6/8)
2層 黒色土(7.5YR1.7/1)
炭化物層
3層 黒褐色土(10YR3/2)



1層 赤褐色焼土(5YR4/6)
2層 黒褐色土(10YR2/2)



1層 黒褐色土(10YR3/2)
2層 にぶい赤褐色土(5YR4/4)



1層 暗赤褐色焼土(5YR3/2)
2層 黒色土(2.5YR2/1)

0 1m

第44図　焼土遺構実測図(2)

出土しなかった。

第413号焼土遺構（第44図）

発掘区中央部のU－104グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、55×65cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は4ヵ所に散在しており、厚さは2～3cmを測る。遺物は出土しなかった。

第414号焼土遺構（第44図）

発掘区西部のV－104グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、62×78cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土はほぼ中央に位置し、規模24×39cm、厚さ3cmを測る。遺物は出土しなかった。

第415号焼土遺構（第44図）

発掘区西部のV－104グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、南北方向82cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は南側に位置し、南北方向45cm、厚さ7cmを測る。なお、遺構西側は未発掘である。遺物は出土しなかった。

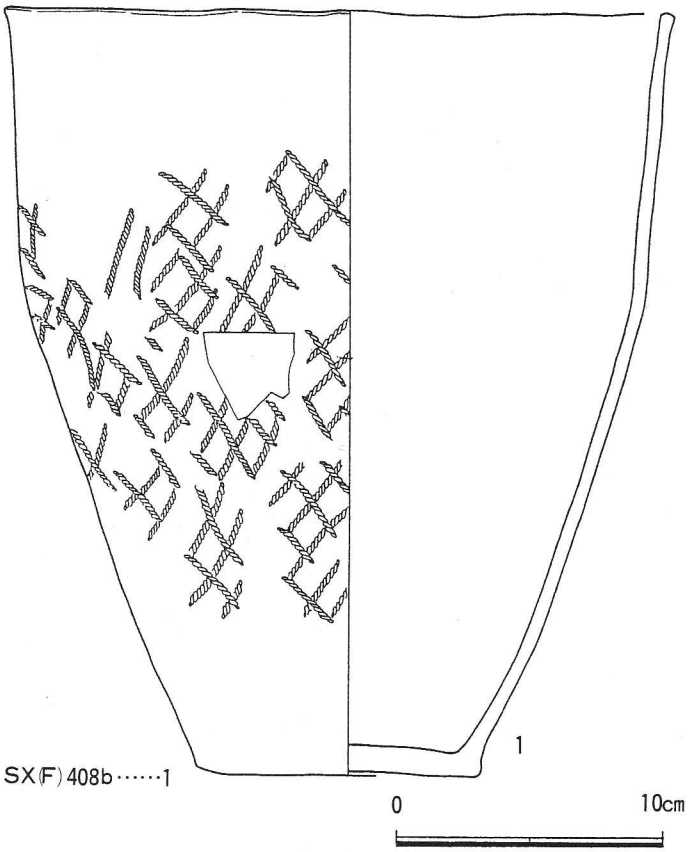
第416号焼土遺構（第44図）

発掘区西部のW－104グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、39×39cmの焼土及び焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は西側に偏在し、規模15×23cm、厚さ4cmを測る。遺物は出土しなかった。

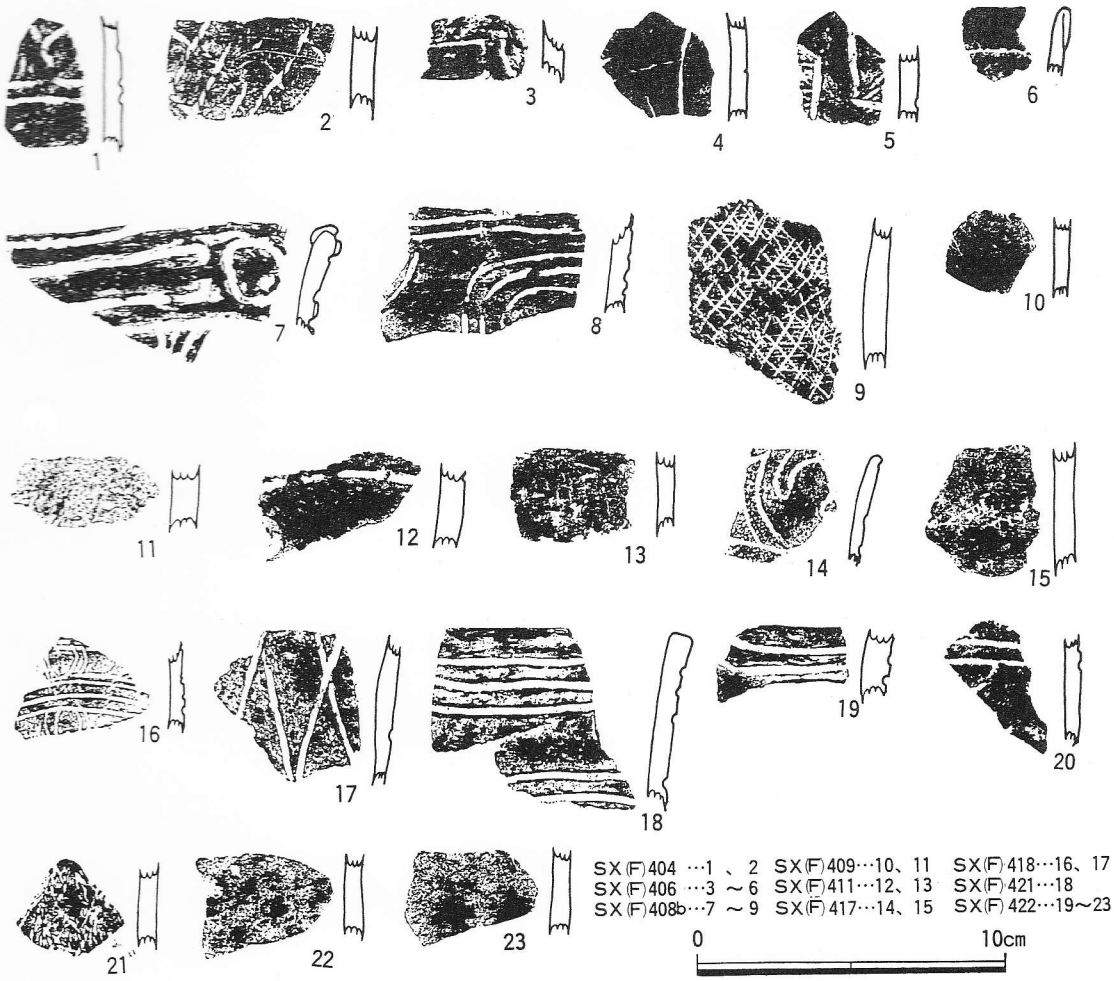
第417号焼土遺構

（第44図、46図14、15）

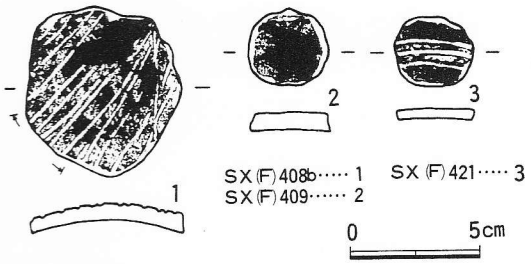
発掘区南端のR－100グリッドに位置する。Ⅲb層上位で、56×62cmの焼土及び焼土粒を含む褐色土範囲が確認された。焼土は北側に位置し、規模36×52cm、厚さ5cmを測る。焼土南側は焼土化が著しい。焼土及び黒褐色土中より、土器片7点が出土した。構築時期は縄文後期と



第45図　焼土遺構出土土器実測図



第46図　焼土遺構出土土器拓影図



第47図　焼土遺構出土土製品実測図

考えられる。

第418号焼土遺構（第44図、46図16、17）

発掘区南端のR—100グリッドに位置する。Ⅲb層上位で、36×56cmの焼土及び焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は西側に位置し、規模36×36cm、厚さ6cmを測る。焼土及び黒褐色土中より、土器片4点が出土した。構築時期は縄文後期と考えられる。

第419号焼土遺構（第44図）

発掘区南端のR—99グリッドに位置する。Ⅲb層上位で、43×77cmの焼土及び焼土粒、炭化粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は東側及び南西端に位置し、それぞれ規模27×45cm、12×13cm、厚さは共に3cmを測る。東側に位置する焼土は、縁辺が著しく焼土化している。ま

た、遺構東端に、厚さ3cmの炭化物層が認められた。遺物は出土しなかった。

第420号焼土遺構（第44図）

発掘区東部のR－105グリッドに位置する。Ⅲd層上位で、42×52cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は南側に偏在し、規模14×25cm、厚さ4cmを測る。遺物は出土しなかった。

第421号焼土遺構（第44図、46図18、47図3）

発掘区東部のR－105グリッドに位置する。Ⅲd層上位で、75×108cmの焼土及び焼土粒を含む黒褐色土範囲が確認された。焼土は中央に位置し、規模46×64cm、厚さ12cmを測る。焼土及び黒褐色土中より、土器片1点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

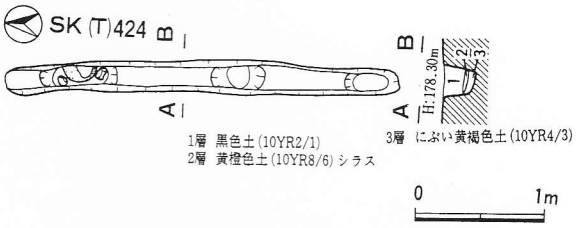
第422号焼土遺構（第44図、46図19～23）

発掘区中央部のT－104グリッドに位置する。Ⅲd層上面で、104×221cmの焼土及び焼土粒を含む黒色土範囲が確認された。焼土は西側と東側に2ヵ所検出され、それぞれ規模90×134cm、47×57cm、厚さ6cm、5cmを測る。焼土及び黒色土中より、土器片5点が出土した。構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

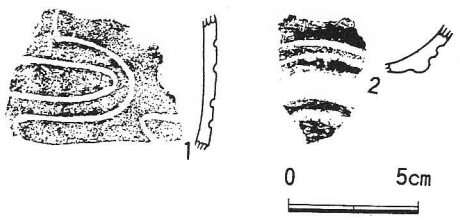
6．土　　壙

(1)　Tピット（第48図、49図）

発掘区中央部のU－106グリッドに位置する。遺構を確認できたのはⅣ層上面であったが、遺構堆積土と基本層序Ⅲd層が同じ黒色土で判別がつきにくく、構築面はもっと上層になる可能性が残る。平面形は長軸3.04m、短軸0.27mの長楕円形を呈し、長軸方向はN－12°－Wである。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。横断面はU字状を呈し、壁高は23.6cmを測る。底面には深さ5.4～25.1cmのピット状に凹んだ箇所が3ヵ所あり、北端の凹みの部分には、地山中に自然石が入っていた。本遺構は何等かの事由で、掘り下げる事を途中で断念したかのように見受けられる。堆積土中より、土器片9点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。



第48図　Tピット実測図



第49図　Tピット出土土器拓影図

(2) フラスコ状土壙

第419A号フラスコ状土壙（第50図、51図２、５、６、52図11、13、16、53図１～８、54図５、６、13、14、17、18、20、25～27、55図１、２、56図６、７、24）

発掘区南部のＱ、Ｒ－101グリッドに位置し、第404号竪穴住居跡の床面及び西壁面で確認された。第404号竪穴住居跡、419Ｂ号フラスコ状土壙、429号土壙と重複し、本遺構は404号竪穴住居跡より古く、他の遺構より新しい。推定口径78×98cm、底径132×166cm、深さ76.3cmを測る。堆積土は６ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。底面はＶ層より成り、やや軟弱である。

土壙内より復元土器６点（51図２、５、６、52図11、13、16）、土器片約450点、掻器７点、磨製石斧１点、石錘１点、敲石１点、土製装飾品２点、土器片利用の板状土製品２点、その他の石製品１点が出土した。なお、掻器６点（54図５、６、14、17、18、20）は中央底面より、土製装飾品（55図１、２）は、１が南壁際上位より、２は上～中位より出土した。６は南壁際上位より出土した深鉢形土器である。口縁部は胴部より朝顔状に大きく外傾し、６個の大波状で頂部には交互に突起をもつ。頸部の横位沈線文により区画されたやや狭い文様帯内には、磨消縄文による入組状曲線文が施文されている。文様帯の上下には、口唇部及び胴中央まで縄文が施文されており、地文はＲＬ縄文である。口径18.5cm、推定底径5.3cm、推定器高14.4cmを測り、色調はにぶい黄橙色を呈する。２は南寄り中位より出土した壺形土器である。頸部に巡る沈線文下には、平行沈線による山形状文が施文され、沈線間が磨消されている。地文はＬＲ縄文を施文している。色調は浅黄橙色を呈する。16は中央中位より出土した深鉢形土器で、頸部の原体Ｌの圧痕文下にはＬ縄文が施文され、一部にはＲＬ縄文も認められる。口径は37.0cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。５は東寄り下位より出土した無文の把手付浅鉢形土器で、色調は浅黄橙色を呈する。11は中央下位より出土した深鉢形土器である。６個の頂部をもつ波状口縁で、３～４条の平行沈線により文様帯を区画する。やや幅狭の頸部文様帯は、頂部下の相対する孤状文により縦位に区画され、孤状文間には横位沈線文が多条施文されている。幅広の胴部文様帯には３条の平行沈線により入組状曲線文が施文され、花弁状文、孤状文が連結文として付加されている。沈線間にはＲＬＲ縄文が充填されている。口径33.5cmを計り、色調は褐色を呈する。13は堆積土より出土した６個の頂部をもつ波状口縁の深鉢形土器で、頸部に施文された原体Ｌの圧痕文下には、Ｌ縄文が施文されている。推定口径22.3cm、底径8.5cm、器高31.0cmを計り、色調は淡黄色を呈する。

出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前～中葉と考えられる。

第419Ｂ号フラスコ状土壙（第50図）

発掘区南部のＱ、Ｒ－101グリッドに位置し、第419Ａ号フラスコ状土壙とともに、404号竪穴住居跡の床面及び西壁面において確認された。新旧関係は、いずれよりも本遺構が古い。規模

は推定底径118×144cm、深さ87.3cmを測る。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。底面はⅤ層から成り、やや軟弱である。

堆積土より、数点の土器片を出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

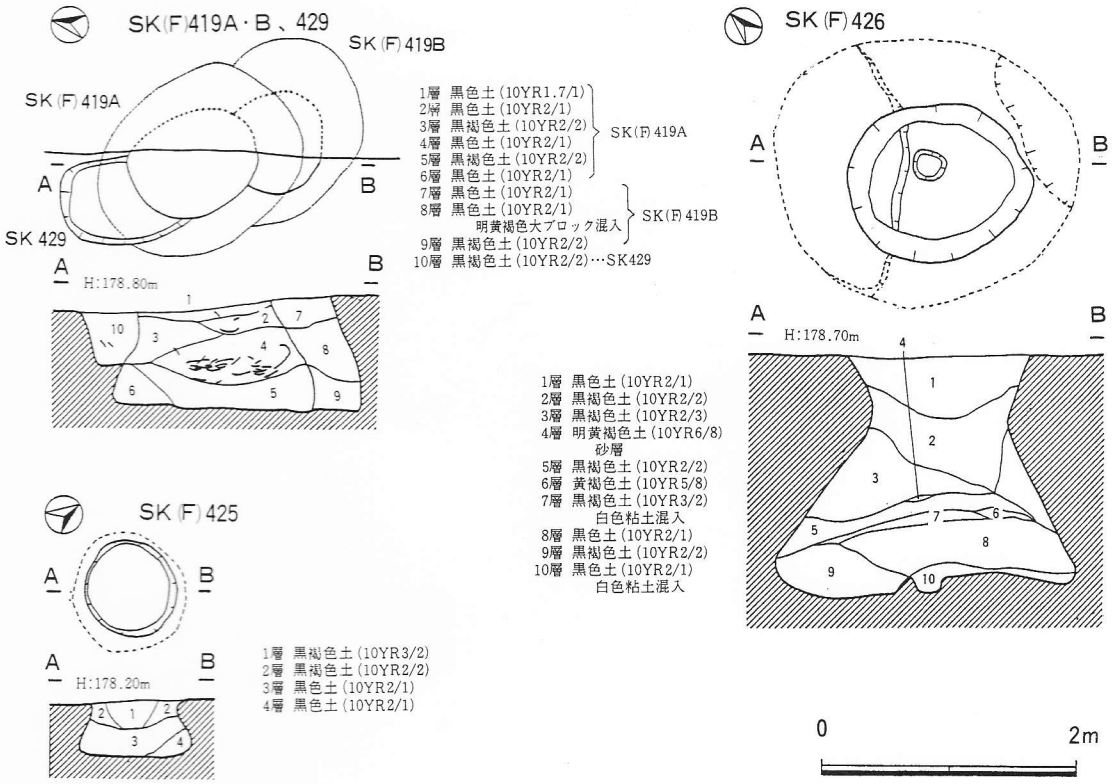
第425号フラスコ状土壙（第50図、53図９、10）

発掘区西部のＵ－104グリッドに位置し、Ⅳ層上面で確認された。規模は口径72×78cm、頸部径63×70cm、底径87×94cm、深さ43.1cmを測る。堆積土は５ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は北、西壁は内湾気味に立ち上がる。底面はⅤ層より成り、北西から南東側に緩い傾斜を示し、ほぼ平坦である。

堆積土より、土器片数点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第426号フラスコ状土壙（第50図、51図１、３、４、７～10、52図12、14、15、53図11～35、54図１～４、７～12、15、16、19、21～24、28～30、55図３～５、56図８～23、25～33）

発掘区南部のＲ－103グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認された。規模は口径122×146cm、

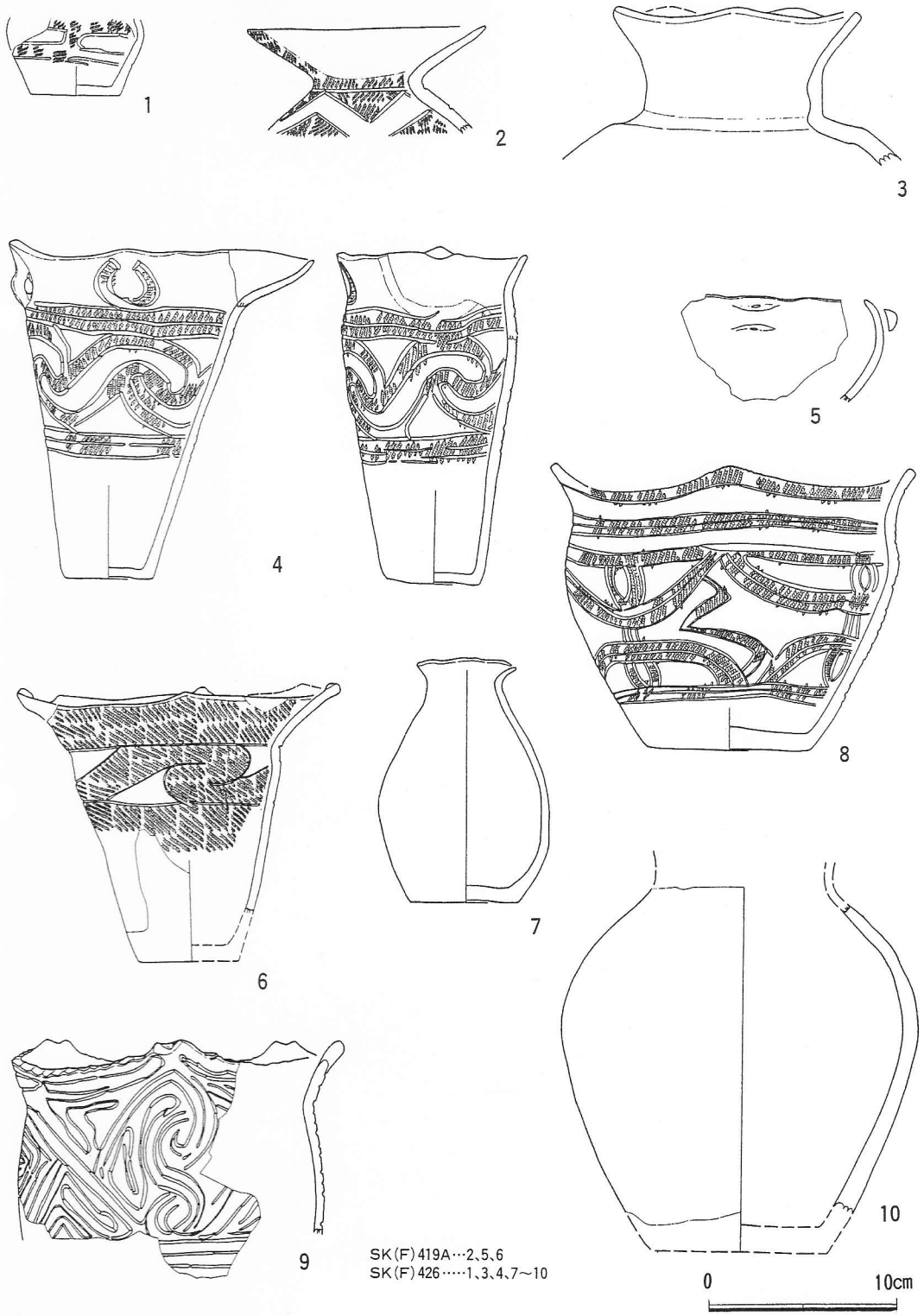


第50図　フラスコ状土壙実測図

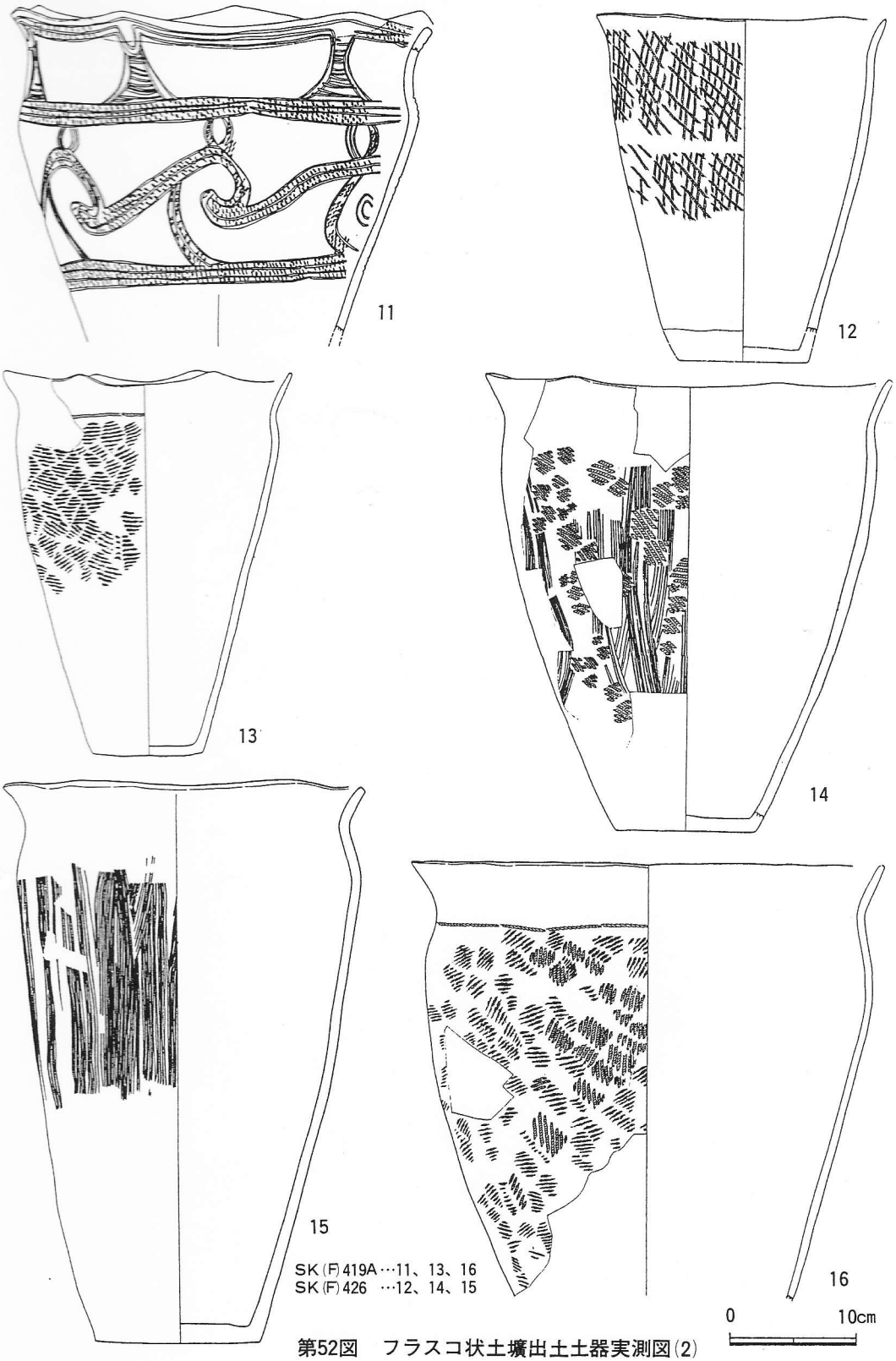
頸部径93×115cm、底径205×236cmを測る。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。底面北西側は２段構造となり、確認面から底面上段までは176.2cm、上下段の差は19.8cmを測る。東側は壁に向い緩やかに傾斜している。また、底面中央には規模24×26cm、深さ11.7cmのピットが検出された。

土壙内より、復元土器10点、土器片約1500点、石鏃１点、石匙３点、掻器13点、磨石３点、土製装飾品１点、鐸形土製品２点、土器片利用の板状土製品14点、円盤状石製品２点、球状石製品１点、軽石製石製品５点、その他の石製品３点が出土した。４、７、10は北壁際中位より一緒に出土した。４は３個の頂部をもつ片口土器で、注口部を欠いている。３条の横位平行沈線により文様帯を区画し、区画内には入組状曲線文が施文されている。また、注口部と相対する頂部下には把手が、他の頂部下には花弁状文が付加されている。沈線間にはＬＲ縄文が充塡されている。大きさは底径4.9cm、器高18.2cmを計り、色調はにぶい橙色を呈する。７、10は無文の壺形土器で、大きさは７が口径5.3cm、底径6.0cm、最大胴径9.3cm、器高13.2cm、10が最大胴径19.0cmを計る。色調は７が浅黄橙色、10が橙色を呈する。３は西寄り中位より出土した無文の壺形土器で、５個の頂部を有する波状口縁を呈する。口径は13.6cmを計り、色調は浅黄色を呈する。12、15は北寄り中位から出土した。12は胴上半部に原体Ｒの網目状撚糸文を施文した深鉢形土器で、口径22.7cmを計る。15は胴上半部に縦位の条痕文を施文した深鉢形土器で、口径28.2cm、底径12.8cm、器高43.8cmを計る。色調は12が灰白色、15が浅黄色を呈する。８は北東壁際下位より出土した鉢形土器で、５個の頂部を有する波状口縁を呈すると考えられ、頂部には刻目が施されている。１～３条の横位平行沈線により、文様帯を区画しており、頸部文様帯は３条の平行沈線によりさらに上下に２分されている。胴部文様帯は頂部間に相対する孤状文が施文されており、花弁状文、線文により、区画文、孤状文が連結されている。さらに頂部下には稲妻状文が施文されている。沈線間にはＬＲ縄文が充塡されている。大きさは推定口径18.8cm、底径8.7cm、器高15.5cmを計り、色調はにぶい黄橙色を呈する。１、９、14は堆積土より出土したもので、１は小型鉢形土器である。横位沈線文により区画された胴上半部には楕円形文が施文され、ＲＬ縄文が充塡されている。大きさは推定口径6.8cm、底径4.7cm、器高4.2cmを計り、色調は橙色を呈する。９は３個の頂部を有する波状口縁と考えられる深鉢形土器で、口唇部には刻目が施されている。３条の横位平行沈線により区画された文様帯には、沈線により直線文、曲線文が施文される。推定口径は17.8cmを計り、色調は灰褐色を呈する。14は４個の頂部を有する波状口縁の深鉢形土器で、胴部には条痕文、ＬＲ縄文が施文されている。大きさは推定口径32.1cmを計り、色調は黒褐色を呈する。

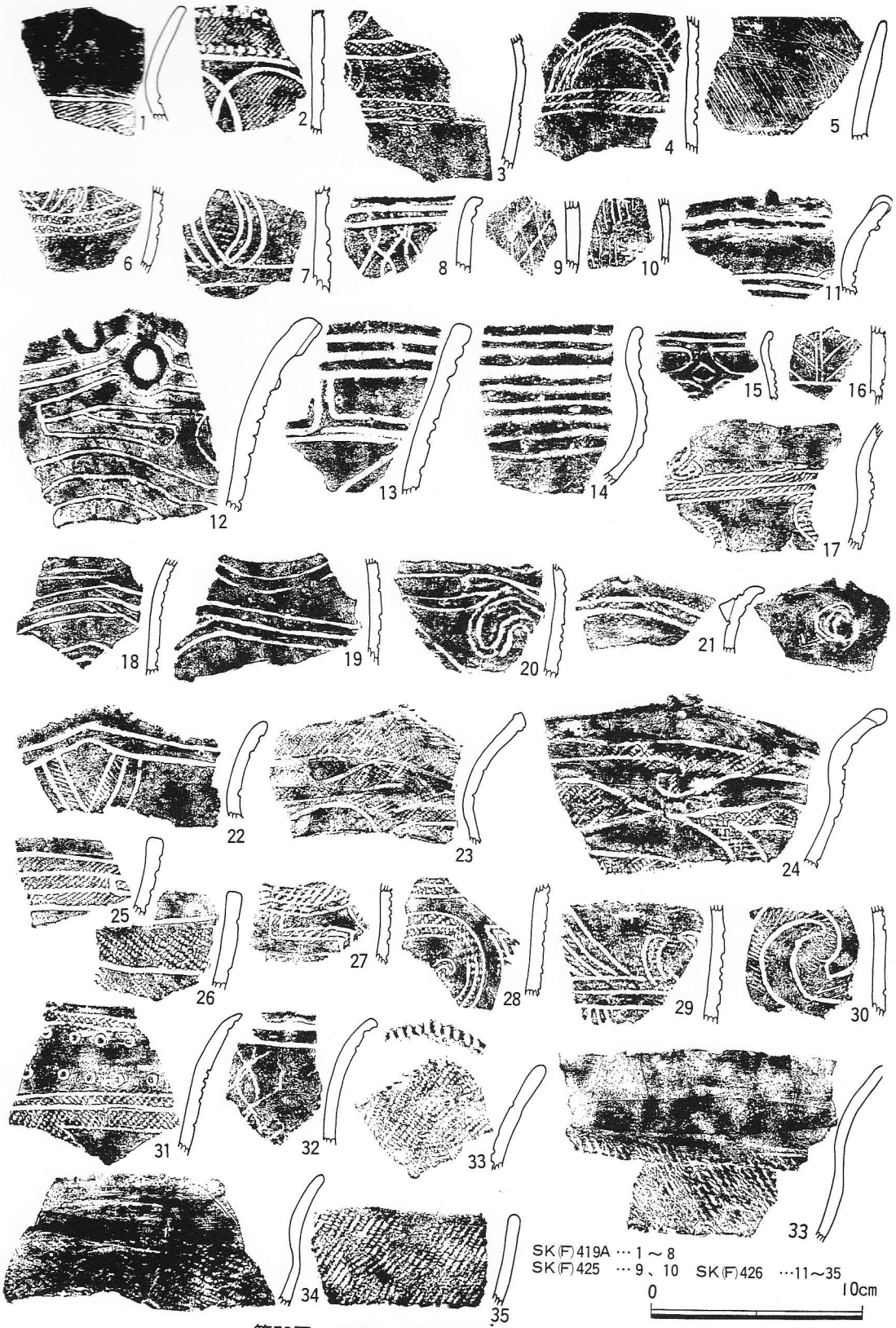
出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。



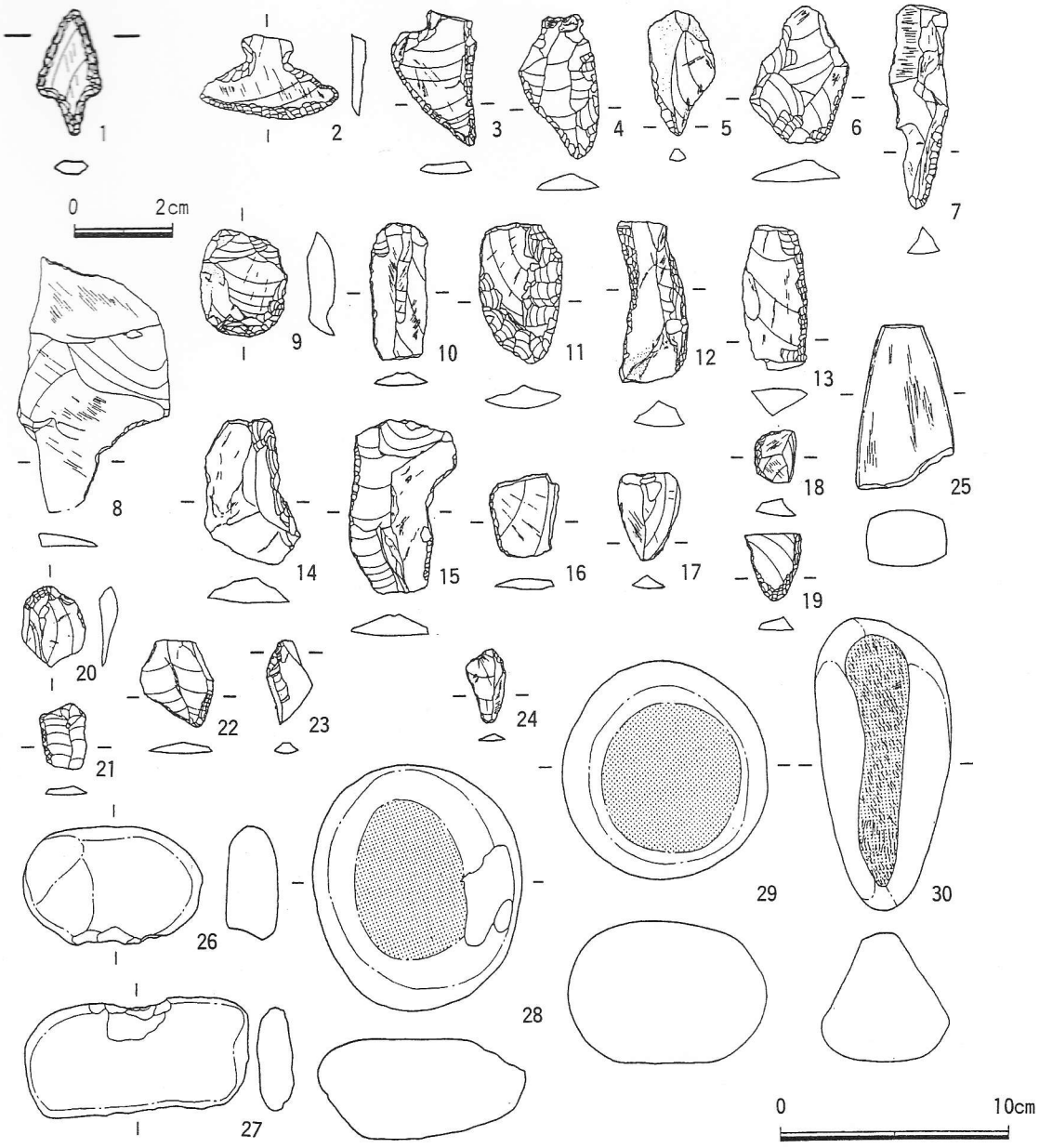
第51図　フラスコ状土壙出土土器実測図(1)



第52図　フラスコ状土壙出土土器実測図(2)



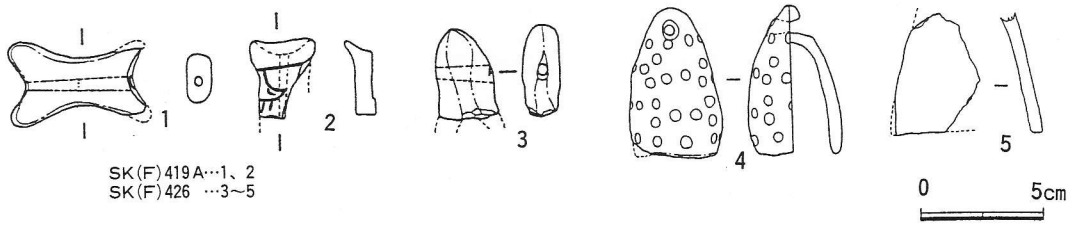
第53図　フラスコ状土壙出土土器拓影図



SK(F)419A…5, 6, 13,14,17,18, 20,25～27

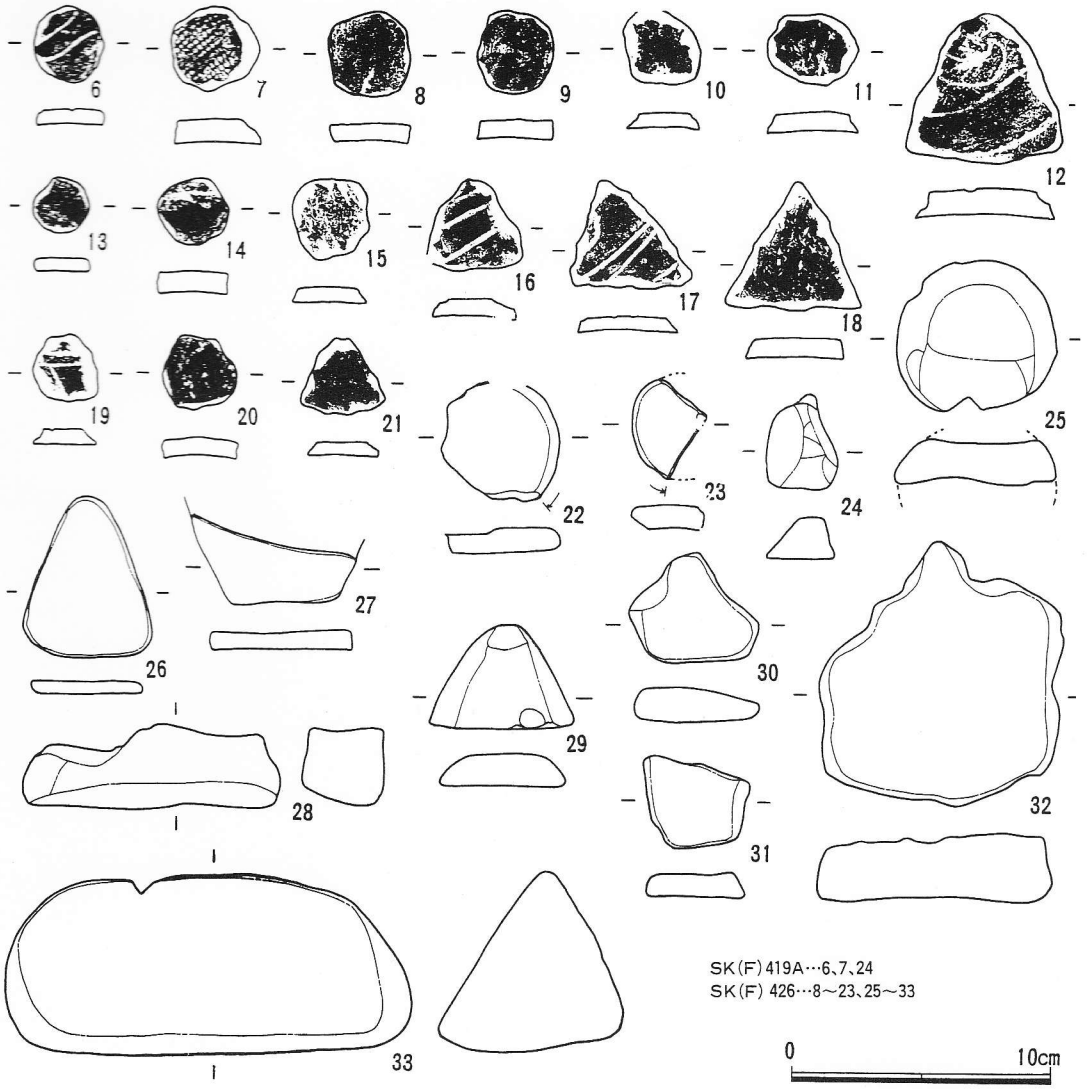
SK(F)426…1～4, 7～12,15, 16,19,21～24,28～30

第54図　フラスコ状土壙出土石器実測図



SK(F)419A…1、2
SK(F)426 …3～5

第55図　フラスコ状土壙出土土製品実測図(1)



第56図　フラスコ状土壙出土土製品(2)、石製品

(3)　土　壙

第401号土壙（第57図、60図２、62図１～４、64図１、３、18、23、65図３、27）

発掘区北東部のＶ―109グリッドに位置する。Ⅲd 層上面において黒色土の落ち込みらしきものが認められたものの、判然としなかったためⅢd 層下面においてプラン確認をした。平面形は0.82×2.02m の楕円形を呈し、長軸方向はＮ―75°―Ｅである。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は46.1cmを測る。下位から底面にかけて、８～28cm大の自然石が11個確認された。底面は西から東側へ若干傾斜しており、凹凸がありやや軟弱である。

土壙内より復元土器１点、土器片約60点、石鏃、石錐各１点、掻器２点、土器片利用の板状土製品１点、その他の石製品１点を出土した。なお、石鏃は中央底直、石製品は北壁際中位よりの出土である。２は小型深鉢形土器で、頸部に巡らせた原体Ｌの圧痕文下には、同じ原体の縄文が施文されている。口径8.2cm、底径5.4cm、器高9.8cmを計る。色調は橙色を呈し、焼成は良好である。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第402号土壙（第57図、62図５～７）

発掘区北東部のＶ－109グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。平面形は80×89cmの円形を呈する。堆積土は９ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は東、南壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は47.9cmを測る。底面はⅥ層より成り、平坦で軟弱である。

堆積土中より土器片約10点が出土し、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第403号土壙（第57図、60図５、61図７、62図８～12、64図６、８、65図４）

発掘区東部のＱ－109グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。平面形は80×121cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－34°－Ｗである。堆積土は黒褐色土の単一層で、人為堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は26.0cmを測る。４～16cm大の自然石25個が、土壙上～中位にかけて確認された。底面はＶ層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より復元土器２点、土器片約140点、掻器２点、土器片利用の板状土製品１点が出土した。５、７はいずれも中央から北壁にかけて底直より出土した深鉢形土器である。５は６個の頂部をもつ波状口縁で、２～３条の横位平行沈線により文様帯を区画し、頸部文様帯は無文、胴部文様帯には入組状曲線文が施文されている。沈線間及び胴下半部にはＬＲ縄文が施文されている。７は頸部に巡らした原体ＬＲの圧痕文下に、同じ原体の縄文が施文されている。色調は５が暗褐色、７がにぶい黄褐色を呈し、焼成はいずれも良好である。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第404号土壙（第57図、62図13～19、64図10）

発掘区東部Ｒ－109グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。平面形は108×141cm、深さ29.7cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－30°－Ｗである。堆積土は５ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。土壙内より、６～27cm大の自然石が63個確認された。底面はＶ層より成り、ほぼ平坦である。また、底面北西壁際に46×62×8.9cmの楕円形を呈する掘り込みが検出された。

土壙内より土器片約60点、掻器１点が出土した。13～19は下位より出土した土器片である。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第405号土壙（第57図、61図６、62図20～22、24、64図27、65図１、５～８）

発掘区北東部のＶ－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で黒褐色土の落ち込みが確認された。第406、407、409号土壙、409号配石遺構と重複し、本遺構は409号土壙、409号配石より古く、他の遺構より新しい。推定規模268×150cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－81°－Ｅである。堆積土は２ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。西壁は垂直に立ち上がり、壁高は48.7cmである。土壙内より８～33cm大の自然石52個が確認された。底面はＶ、Ⅵ層より成り、東から西側へ傾斜している。

土壙内より復元土器１個、土器片約20点、磨石１点、耳飾１点、土器片利用の板状土製品４点が出土した。６は西壁際底直より出土した深鉢形土器で、胴部下半まで原体Ｌの撚糸文が施文されている。口径は27.8cmを計り、色調は橙色、焼成はやや良好である。62図20、24は中位、22は底直より、65図１は北壁際上位、６、７は上位より出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第406号土壙（第57図、62図25）

発掘区北東部のＶ－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第405、407、409号土壙、409号配石遺構と重複し、本遺構は407号土壙とは不明であるが、他の遺構より古い。平面形は楕円形を呈し、推定規模120×277cmを測る。長軸方向はＮ－89°－Ｅである。堆積土は２ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は41.9cmを測る。土壙内より10～29cm大の自然石９個が確認された。底面はⅥ層から成り、やや軟弱である。

土壙内より土器片約10点出土した。25は底直から出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第407号土壙（第57図、60図１、62図23、26、27、29、30、32、64図４、５、７、11～14、19、20、65図２、９、10）

発掘区北東部のＶ－109、110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第405、406号土壙と重複し、本遺構は405号土壙より古い。平面形は楕円形を呈し、長軸方向はＮ－69°－Ｅである。堆積土は５ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は49.5cmを測る。土壙内より７～42cm大の自然石55個が確認された。底面はⅥ層から成り、やや軟弱である。

土壙内より復元土器１点、土器片約70点、掻器９点、土製装飾品１点、土器片利用の板状土製品２点が出土した。１は北壁際中位より出土したミニチュア土器で、沈線により縦位の弧状連結文を半単位ずらして向い合わせ、弧状文、斜行文を施文している。底径は2.0cmを計り、色調はにぶい橙色、焼成は良好である。62図27は上位、29は中位、65図２は南西壁際上位、10は上位、９は中位から出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第409号土壙（第57図、62図28、31、33～35、64図２、65図11～13）

発掘区北東部のＶ－110グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第405、406号土壙、402、409号配石遺構と重複しており、本遺構は409号配石より古く他の遺構より新しい。平面形は110×160cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－26°－Ｅである。堆積土は黒褐色の単一層で、人為堆積を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は33.2cmを測る。土壙内より７～39cm大の自然石57個が確認された。底面はＶ層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片約10点、石鏃１点、土器片利用の板状土製品３点が出土した。33～35は上位、28、31は下位、64図２は底直、65図11は下位、13は底直から出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第410号土壙（第57図）

発掘区東部のＳ－107グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。平面形は径104cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は28.4cmを測る。底面はＶ層より成り、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第412号土壙（第57図、62図38、39、42）

発掘区東部のＳ－107グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。第413号土壙と重複し、本遺構が古い。平面形は径105cmの円形を呈する。堆積土は２ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は24.9cmを測る。底面はＶ層より成り、鍋底状を呈する。

土壙内より土器片約40点が出土し、38、39、42は上位から出土したものである。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第413号土壙（第57図、62図36、37、40、41、43、65図14、15）

発掘区東部のＳ－107グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。第412号土壙と重複し、本遺構が新しい。平面形は70×128cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－34°－Ｗである。堆積土は黒色の単一層で、人為堆積と考えられる。北、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は45.4cmを測る。底面はＶ層より成り、凹凸がありやや軟弱である。

土壙内より土器片約60点、土器片利用の板状土製品２点が出土した。37は上位、40は中位からの出土である。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第414号土壙（第57図、63図44）

発掘区中央部のＵ－105グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。平面形は129×152cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－２°－Ｗである。堆積

土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は35.3cmを測る。底面より7～18cm大の自然石4個が確認された。底面はV層より成り、堅くしまっている。

底面より土器片2点、中位より掻器1点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第415号土壙（第57図）

発掘区中央部のU－105グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面において確認した。第416、418号土壙と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。平面形は径84cmの円形を呈する。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。北東壁は内湾気味に、他壁は外傾して立ち上がり、東壁際を最深部とする壁高は37.3cmを測る。底面はV層より成り、凹凸がありやや軟弱である。

土壙内より土器片約10点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第416号土壙（第57図）

発掘区中央部のU－105グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面で確認した。第415、418号土壙と重複し、本遺構は415号土壙より古い。平面形は短径100cmの楕円形と考えられ、長軸方向はN－40°－Eである。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は17.6cmを測る。底面はV層上面から成り、平坦で堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

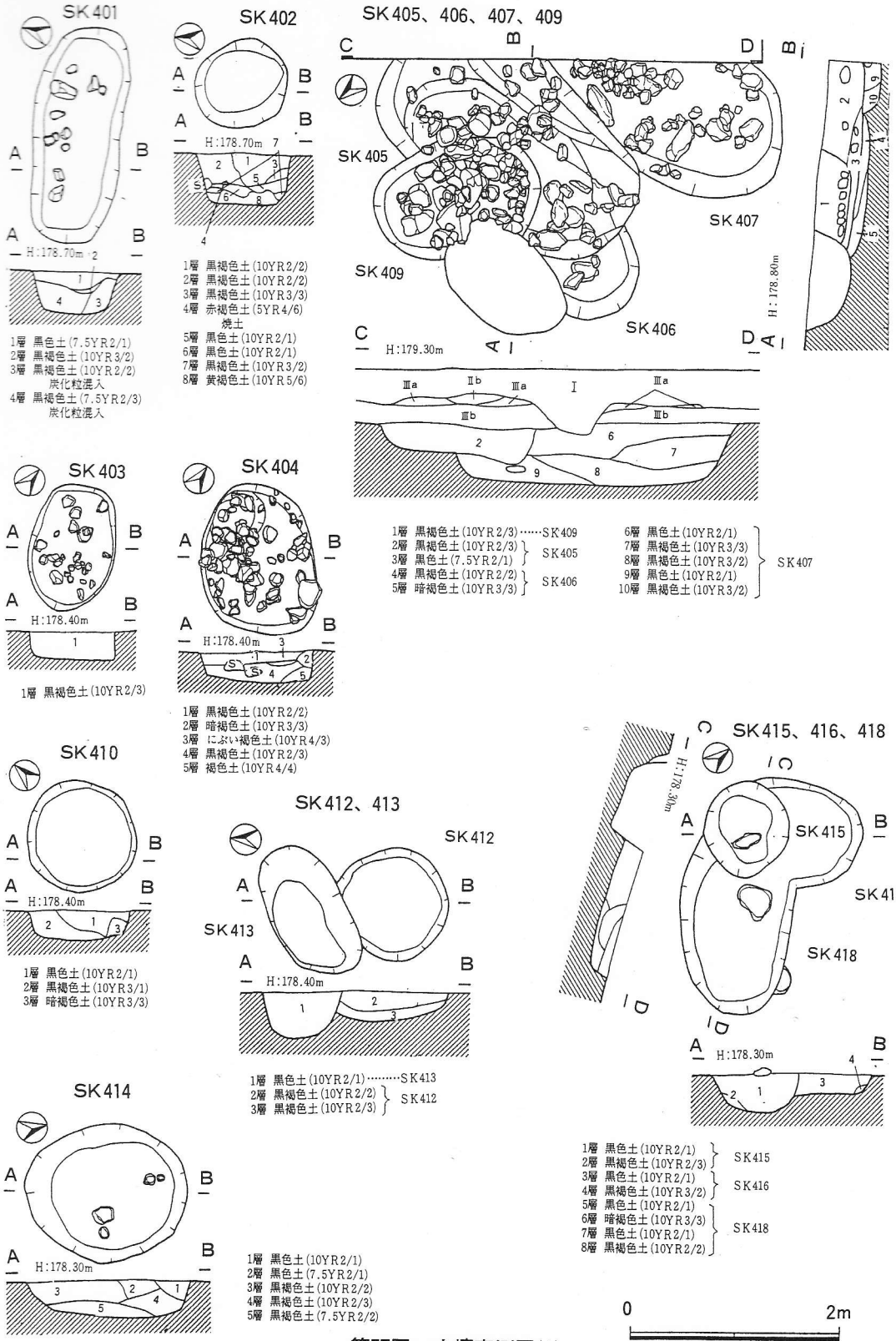
第417号土壙（第58図）

発掘区中央部のU－104、105グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面で確認した。平面形は94×124cmの楕円形を呈し、長軸方向はN－49°－Eである。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は27.9cmを測る。底面はV層から成り、やや凹凸がある。遺物は出土しなかった。

第418号土壙（第57図、63図45～48、64図17、29、65図16、17、20）

発掘区中央部のU、T－105グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、Ⅲd 層下面で確認した。第415、416号土壙、柱穴状ピット76と重複し、415号土壙より古く、ピット76より新しいと考えられる。平面形は短径108cmを測る楕円形を呈し、長軸方向はN－45°－Wである。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は21.9cmを測る。底面はV層上面から成り、北西から南東側へ若干傾斜している。

土壙内から土器片約60点、掻器、磨石各1点、土器片利用の板状土製品3点が出土した。45、47、48は上～中位、46は下位、64図29は中位、17は下位、65図16、17、20は上～中位より出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。


SK401
H:178.70m
1層 黒色土(7.5YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR3/2)
3層 黒褐色土(10YR2/2)
炭化粒混入
4層 黒褐色土(7.5YR2/3)
炭化粒混入
SK402
H:178.70m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒褐色土(10YR3/3)
4層 赤褐色土(5YR4/6)
焼土
5層 黒色土(10YR2/1)
6層 黒色土(10YR2/1)
7層 黒褐色土(10YR3/2)
8層 黄褐色土(10YR5/6)
SK405、406、407、409
SK405
SK406
SK407
SK409
H:179.30m
H:178.80m
1層 黒褐色土(10YR2/3)……SK409
2層 黒褐色土(10YR2/3)
3層 黒色土(7.5YR2/1)
SK405
4層 黒褐色土(10YR2/2)
5層 暗褐色土(10YR3/3)
SK406
6層 黒色土(10YR2/1)
7層 黒褐色土(10YR3/3)
8層 黒褐色土(10YR3/2)
9層 黒色土(10YR2/1)
10層 黒褐色土(10YR3/2)
SK407
SK403
H:178.40m
1層 黒褐色土(10YR2/3)
SK404
H:178.40m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 暗褐色土(10YR3/3)
3層 にぶい褐色土(10YR4/3)
4層 黒褐色土(10YR2/3)
5層 褐色土(10YR4/4)
SK410
H:178.40m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR3/1)
3層 暗褐色土(10YR3/3)
SK412、413
SK412
SK413
H:178.40m
1層 黒色土(10YR2/1)……SK413
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒褐色土(10YR2/3)
SK412
SK414
H:178.30m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒色土(7.5YR2/1)
3層 黒褐色土(10YR2/2)
4層 黒褐色土(10YR2/3)
5層 黒褐色土(7.5YR2/2)
SK415、416、418
H:178.30m
SK415
SK416
SK418
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR2/3)
SK415
3層 黒色土(10YR2/1)
4層 黒褐色土(10YR3/2)
SK416
5層 黒色土(10YR2/1)
6層 暗褐色土(10YR3/3)
7層 黒色土(10YR2/1)
8層 黒褐色土(10YR2/2)
SK418
0
2m

第57図　土壙実測図(1)

第422号土壙（第58図）

発掘区南部のR－101、102グリッドに位置する。第404号竪穴住居跡床面において、421号土壙と重複して確認された。新旧関係は本遺構が古い。平面形は短径76cmの楕円形を呈し、長軸方向はN－8°－Wである。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、住居跡床面からの壁高は26.1cmを測る。底面はV層より成り、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第423号土壙（第58図）

発掘区南部のR－101グリッドに位置し、第404号竪穴住居跡床面において確認された。平面形は89×94cmの円形を呈する。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、住居跡床面からの壁高は26.0cmを測る。底面はV層から成り、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

第429号土壙（第50図、63図49～51、64図21、26、65図21）

発掘区南部のR－101グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。遺構南側は第419A号フラスコ状土壙により破壊されている。平面形は短軸67cmを測る隅丸方形と考えられ、長軸方向はN－18°－Wである。堆積土は黒褐色の単一層で、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は42.4cmを測る。底面はV層から成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片約10点、磨製石斧、掻器各1点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第430号土壙（第58図、63図52～55、65図22、23、28）

発掘区南部のR－102グリッドに位置し、 Ⅲd 層上面で確認された。第404号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。平面形は短径78cm、推定長径94cmを測る楕円形を呈し、長軸方向はN－8°－Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は44.6cmを測る。底面はV層から成り、平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片4点、土器片利用の板状土製品2点、軽石製石製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第431号土壙（第58図、63図56、65図18）

発掘区南部のR－103グリッドに位置し、 Ⅲd 層上面において、第432号土壙とともに確認された。新旧関係は本遺構が新しい。平面形は64×100cmの隅丸方形を呈し、長軸方向はN－74°－Wである。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。西壁は若干入り込み、フラスコ状を呈し、壁高は73.7cmを測る。底面はV層より成り、西から東側へ若干傾斜している。

土壙内より土器片約50点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係

より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第432号土壙（第58図、63図57～60、65図31）

発掘区南部のR－103グリッドに位置し、Ⅲd 層上面において確認された。遺構北西側は第431号土壙により破壊されている。また、柱穴状ピット64と重複している。平面形は106×116cmの隅丸方形を呈し、長軸方向はN－2°－Wである。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は49.1cmを測る。底面はV層から成り、やや凹凸があり堅くしまっている。

土壙内より土器片約10点、球状石製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第433号土壙（第58図、60図4、63図61）

発掘区南部のS－103グリッドに位置し、Ⅲd 層上面において確認された。平面形は径72cmの円形を呈する。堆積土は2ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は29.2cmを測る。底面はV層より成り、平坦である。

土壙内より復元土器1点、土器片約20点が出土した。4は10個の頂部を有する波状口縁の深鉢形土器で、隆沈文による長方形文、円文で上下に区画された文様帯には、沈線による曲線文、弧状文が施文されている。推定口径は29.8cmを計り、色調は黒褐色、焼成は良好である。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第434号土壙（第58図、63図62～66、68、65図19）

発掘区南部のS－102、103グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第402号建物跡、第407号配石遺構と重複し、本遺構は407号配石遺構より新しい。平面形は80×136cmの方形を呈し、長軸方向はN－1°－Wである。堆積土は4ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。北、東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は28.8cmを測る。底面はV層上面から成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片約90点、土器片利用の板状土製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第435号土壙（第58図、63図72、64図25）

発掘区南部のS－101グリッドに位置し、第406号竪穴住居跡床面で確認された。第406、407号竪穴住居跡、401号建物跡と重複し、本遺構は401号建物跡より新しく、他の遺構より古い。平面形は71×102cmの楕円形を呈し、長軸方向はN－24°－Wである。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は外傾して立ち上がり、住居跡床面からの壁高は37.2cmを測る。底面はV層より成り、やや凹凸があり堅くしまっている。

土壙内より土器片1点、掻器1点を出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文

後期前葉と考えられる。

第436号土壙（第58図、63図69～71、64図９）

発掘区東部のＲ－107グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、 Ⅲd 層下面で確認した。平面形は径110cmの円形を呈する。堆積土は黒色の単一層で、人為堆積と考えられる。壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は23.8cmを測る。底面はＶ層より成り、平坦でやや軟弱である。

土壙内より土器片約20点、掻器１点を出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第437号土壙（第58図、63図67、73～75、64図16、22、65図24、26、29）

発掘区東部のＲ－106グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、 Ⅲd 層中位で確認した。第438号土壙、柱穴状ピット82と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。平面形は100×139cmの楕円形を呈し、長軸方向はＮ－28°－Ｗである。堆積土は２ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は20.3cmを測る。土壙内より５～16cm大の自然石29個が確認された。底面はⅣ層から成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片約140点、掻器２点、土器片利用の板状土製品１点、その他の石製品２点を出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第438号土壙（第58図、63図76、77）

発掘区東部のＲ－106グリッドに位置する。確認状況は第401号土壙と同様で、 Ⅲd 層中位で確認した。第437号土壙と重複し、本遺構が古い。平面形は短径97cmを測る楕円形を呈し、長軸方向はＮ－58°－Ｅである。堆積土は黒色の単一層で、人為堆積を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は17.0cmを測る。底面はⅣ層より成り、凹凸がありやや軟弱である。

土壙内より土器片約30点を出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

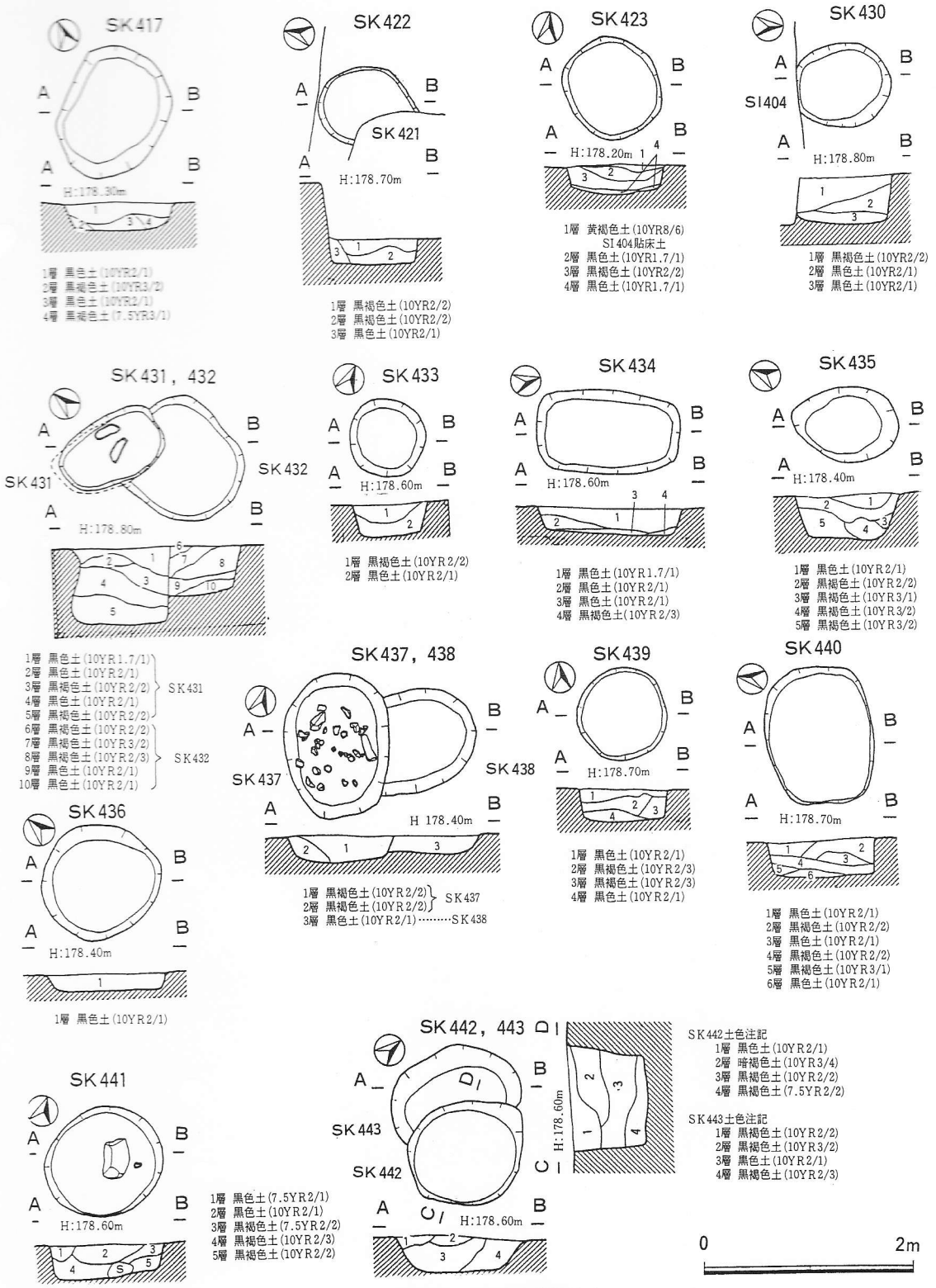
第439号土壙（第58図、63図78、79）

発掘区南部のＲ－103グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認した。平面形は径88cmの円形を呈する。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は33.2cmを測る。底面はＶ層から成り、ほぼ平坦である。

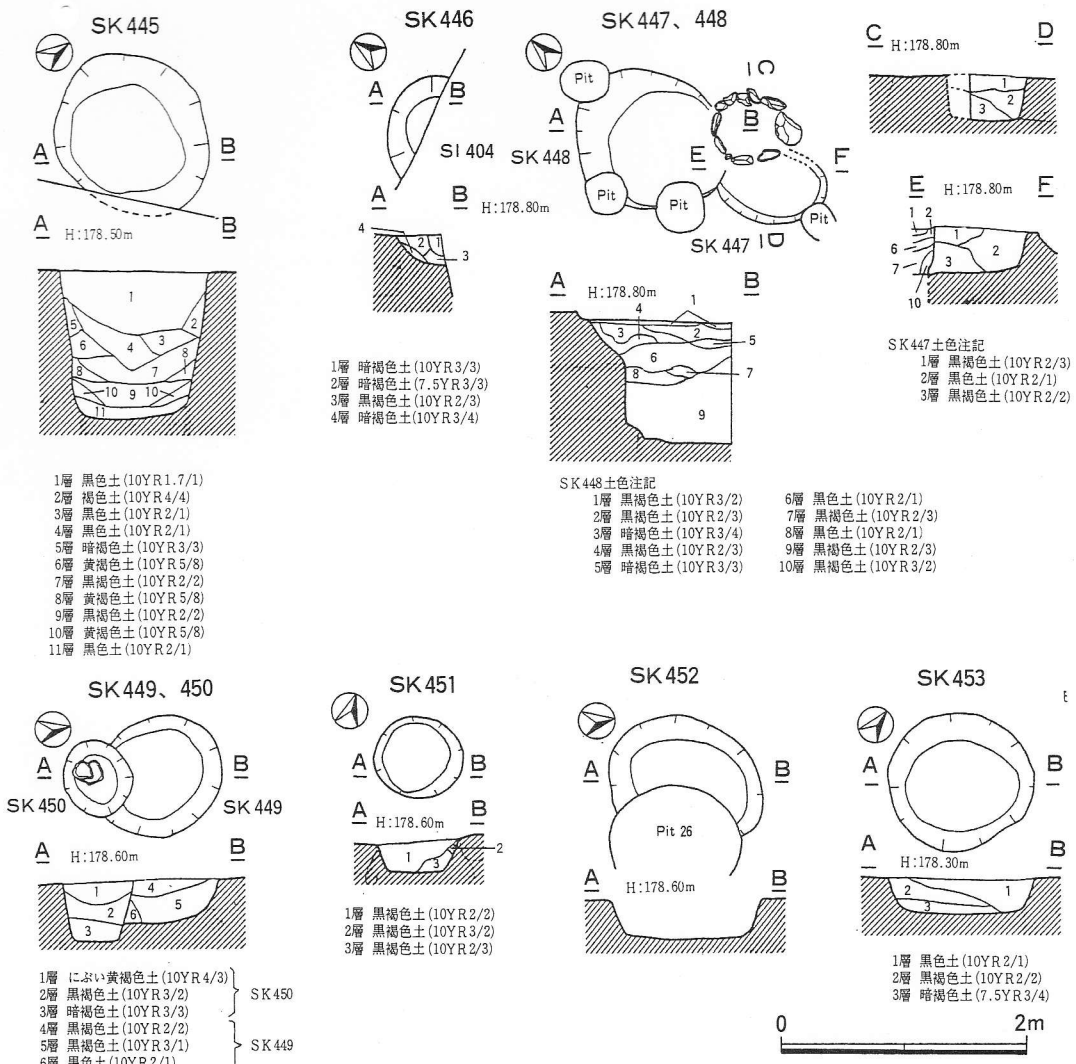
土壙内より土器片４点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第440号土壙（第58図、63図81、65図25）

発掘区南部のＲ－103、104グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。 平面形は101×131cmの隅丸方形を呈し、長軸方向はＮ－72°－Ｅである。堆積土は６ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35.5cmである。底面はＶ層より成り、ほぼ平


SK417
H:178.30m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR3/2)
3層 黒色土(10YR2/1)
4層 黒褐色土(7.5YR3/1)
SK422
SK421
H:178.70m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒色土(10YR2/1)
SK423
H:178.20m
1層 黄褐色土(10YR8/6)
SI404貼床土
2層 黒色土(10YR1.7/1)
3層 黒褐色土(10YR2/2)
4層 黒色土(10YR1.7/1)
SK430
SI404
H:178.80m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒色土(10YR2/1)
3層 黒色土(10YR2/1)
SK431, 432
SK431
SK432
H:178.80m
1層 黒色土(10YR1.7/1)
2層 黒色土(10YR2/1)
3層 黒褐色土(10YR2/2)
4層 黒色土(10YR2/1)
5層 黒褐色土(10YR2/2)
6層 黒褐色土(10YR2/2)
7層 黒褐色土(10YR3/2)
8層 黒褐色土(10YR2/3)
9層 黒色土(10YR2/1)
10層 黒色土(10YR2/1)
SK433
H:178.60m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒色土(10YR2/1)
SK434
H:178.60m
1層 黒色土(10YR1.7/1)
2層 黒色土(10YR2/1)
3層 黒色土(10YR2/1)
4層 黒褐色土(10YR2/3)
SK435
H:178.40m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒褐色土(10YR3/1)
4層 黒褐色土(10YR3/2)
5層 黒褐色土(10YR3/2)
SK436
H:178.40m
1層 黒色土(10YR2/1)
SK437, 438
SK437
SK438
H 178.40m
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒色土(10YR2/1)……SK438
SK439
H:178.70m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR2/3)
3層 黒褐色土(10YR2/3)
4層 黒色土(10YR2/1)
SK440
H:178.70m
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 黒褐色土(10YR2/2)
3層 黒色土(10YR2/1)
4層 黒褐色土(10YR2/2)
5層 黒褐色土(10YR3/1)
6層 黒色土(10YR2/1)
SK441
H:178.60m
1層 黒色土(7.5YR2/1)
2層 黒色土(10YR2/1)
3層 黒褐色土(7.5YR2/2)
4層 黒褐色土(10YR2/3)
5層 黒褐色土(10YR2/2)
SK442, 443
SK443
SK442
H:178.60m
SK442土色注記
1層 黒色土(10YR2/1)
2層 暗褐色土(10YR3/4)
3層 黒褐色土(10YR2/2)
4層 黒褐色土(7.5YR2/2)
SK443土色注記
1層 黒褐色土(10YR2/2)
2層 黒褐色土(10YR3/2)
3層 黒色土(10YR2/1)
4層 黒褐色土(10YR2/3)
0
2m

第58図　土壙実測図(2)



第59図　土壙実測図(3)

坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片8点、円盤状石製品1点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第441号土壙（第58図）

発掘区南部のS－103グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認された。平面形は100×113cmの円形を呈する。堆積土は5ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は32.4cmを測る。底面より23×36cm大の自然石が確認された。底面はⅤ層より成り、北東から南西側へ若干傾斜している。

土壙内より土器片６点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第442号土壙（第58図、63図82）

発掘区南部のＲ－100、101グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第443号土壙、柱穴状ピット34と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。平面形は99×107cmの円形を呈する。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は72.5cmを測る。底面はＶ層から成り、やや凹凸がある。

土壙内より土器片１点が出土した。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第443号土壙（第58図）

発掘区南部のＲ－100、101グリッドに位置し、Ⅲd 層上面で確認された。第408号竪穴住居跡、第442号土壙、柱穴状ピット32～34と重複し、本遺構はピット32、33より新しく442号土壙より古い。また408号住居跡より新しいと考えられる。平面形は長径127cmを測る楕円形と考えられ、長軸方向はＮ－17°－Ｅである。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。底面はＶ層より成り、やや鍋底状を呈し堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

第445号土壙（第59図）

発掘区東部のＲ－105グリッドに位置し、Ⅲd 層上位で確認された。平面形は径124cmの円形を呈する。なお、遺構南東部は未発掘である。堆積土は13ブロックに区分でき、自然堆積と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は121.4cmを測る。底面はＶ層から成り、堅くしまっている。遺物は出土しなかった。

第446号土壙（第59図）

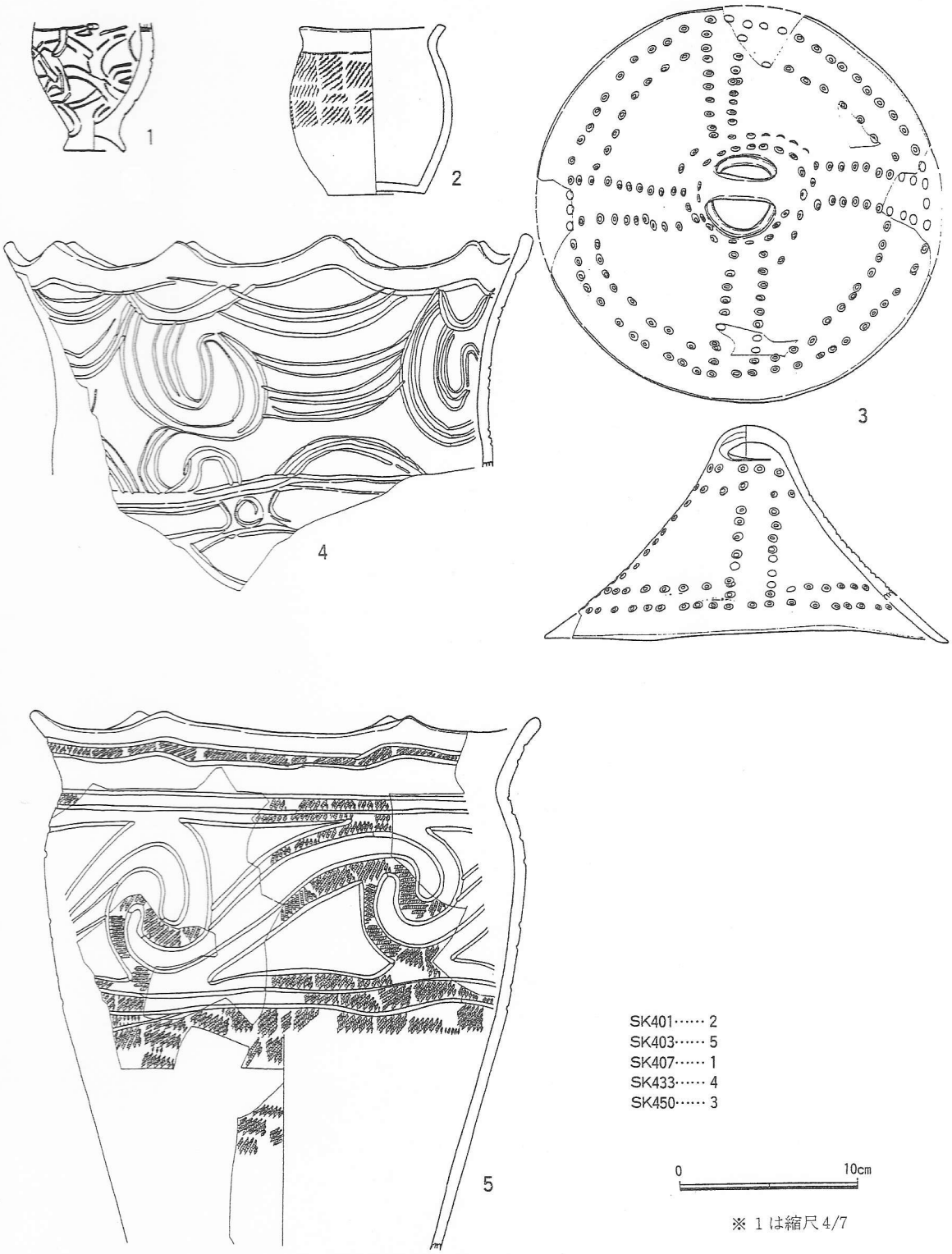
発掘区南部のＲ－101、102グリッドに位置し、第405号竪穴住居跡床面において確認された。遺構南側は404号竪穴住居跡により破壊されている。平面形は楕円形を呈すると考えられる。堆積土は４ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、住居跡床面からの壁高は28.0cmを測る。底面はＶ層から成り、やや軟弱である。遺物は出土しなかった。

第447号土壙（第59図）

発掘区南部のＲ－101、102グリッドに位置し、第405号竪穴住居跡床面で確認された。448号土壙とも重複しており、本遺構が新しい。なお、遺構北側は住居の炉跡保存のため、未発掘である。平面形は楕円形を呈すると考えられ、長軸方向はＮ－28°－Ｗである。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、住居跡床面からの壁高は36.0cmを測る。底面はＶ層から成り、ほぼ平坦である。遺物は出土しなかった。

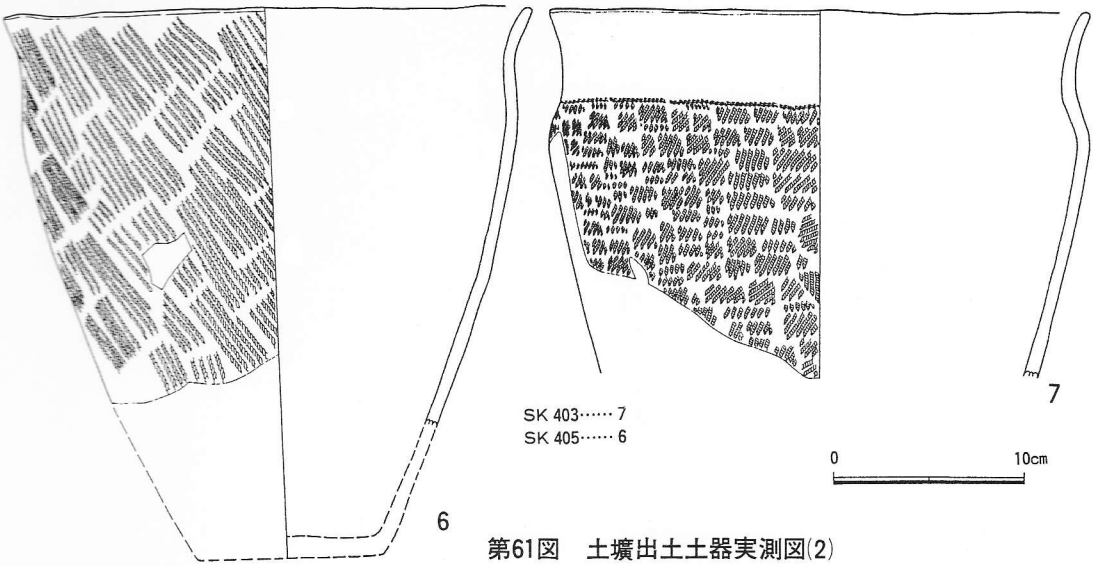
第448号土壙（第59図、63図80）

発掘区南部のＲ、Ｓ－101、102グリッドに位置し、第405号竪穴住居跡床面で確認された。447号土壙とも重複しており、本遺構が古い。なお、遺構南東側は住居の炉跡保存のため、未発掘



※ 1は縮尺4/7

第60図　土壙出土土器実測図(1)



第61図　土壙出土土器実測図(2)

である。平面形は108×129cmの楕円形を呈し、長軸方向はN－19°－Wである。堆積土は10ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。北壁は、下部は垂直に、上部は外傾して立ち上がり、壁高は97.6cmを測る。底面はV層より成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片１点が出土した。

第449号土壙（第59図、63図83、84）

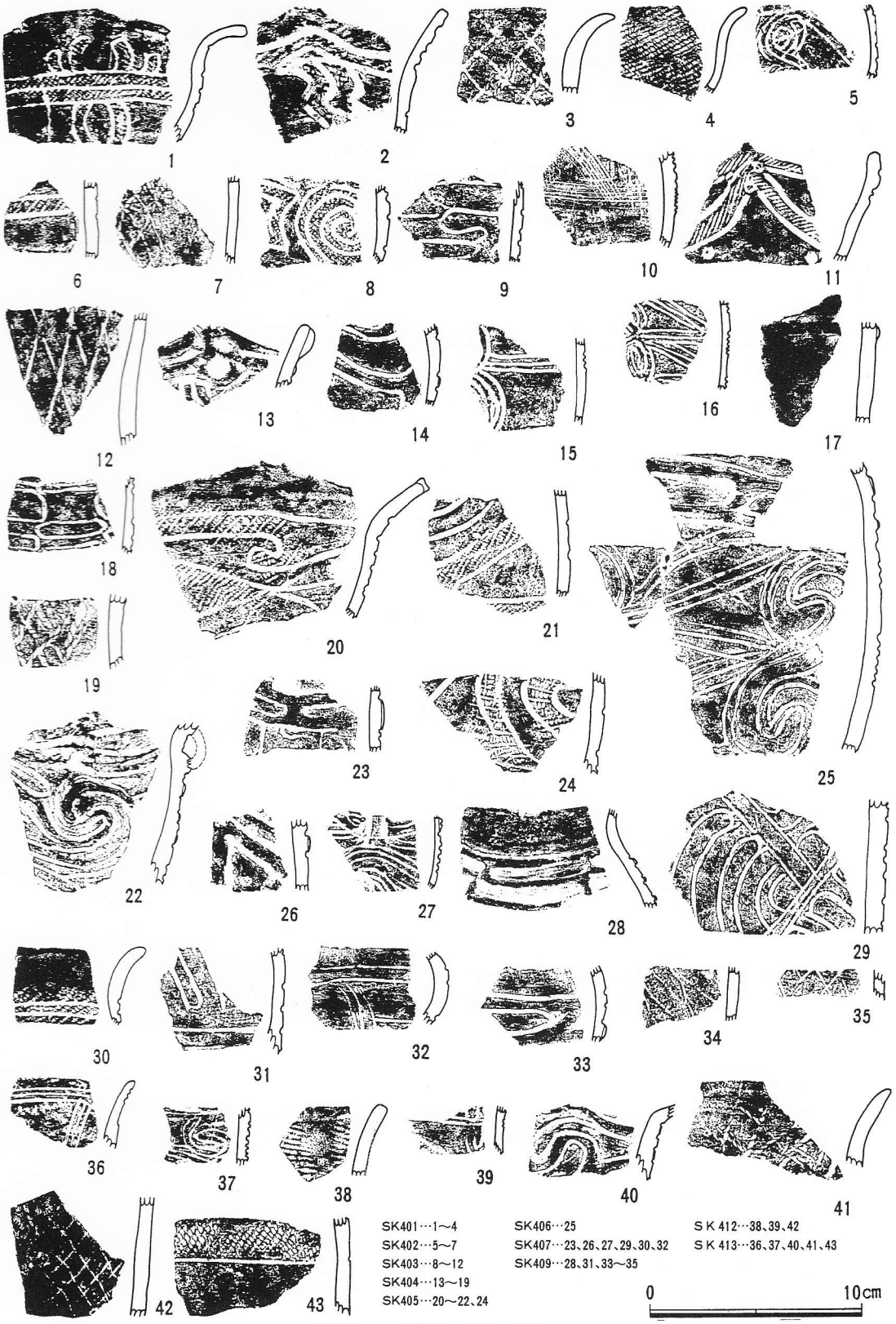
発掘区南部のS－100グリッドに位置し、Ⅲd 層上位で確認された。第410号竪穴住居跡、450号土壙、柱穴状ピット23と重複し、本遺構は450号土壙より古く、他の遺構より新しい。平面形は径102cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は内湾気味に立ち上がり、壁高は32.5cmを測る。底面はV層から成り、やや凹状を呈する。

土壙内より土器片約10点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

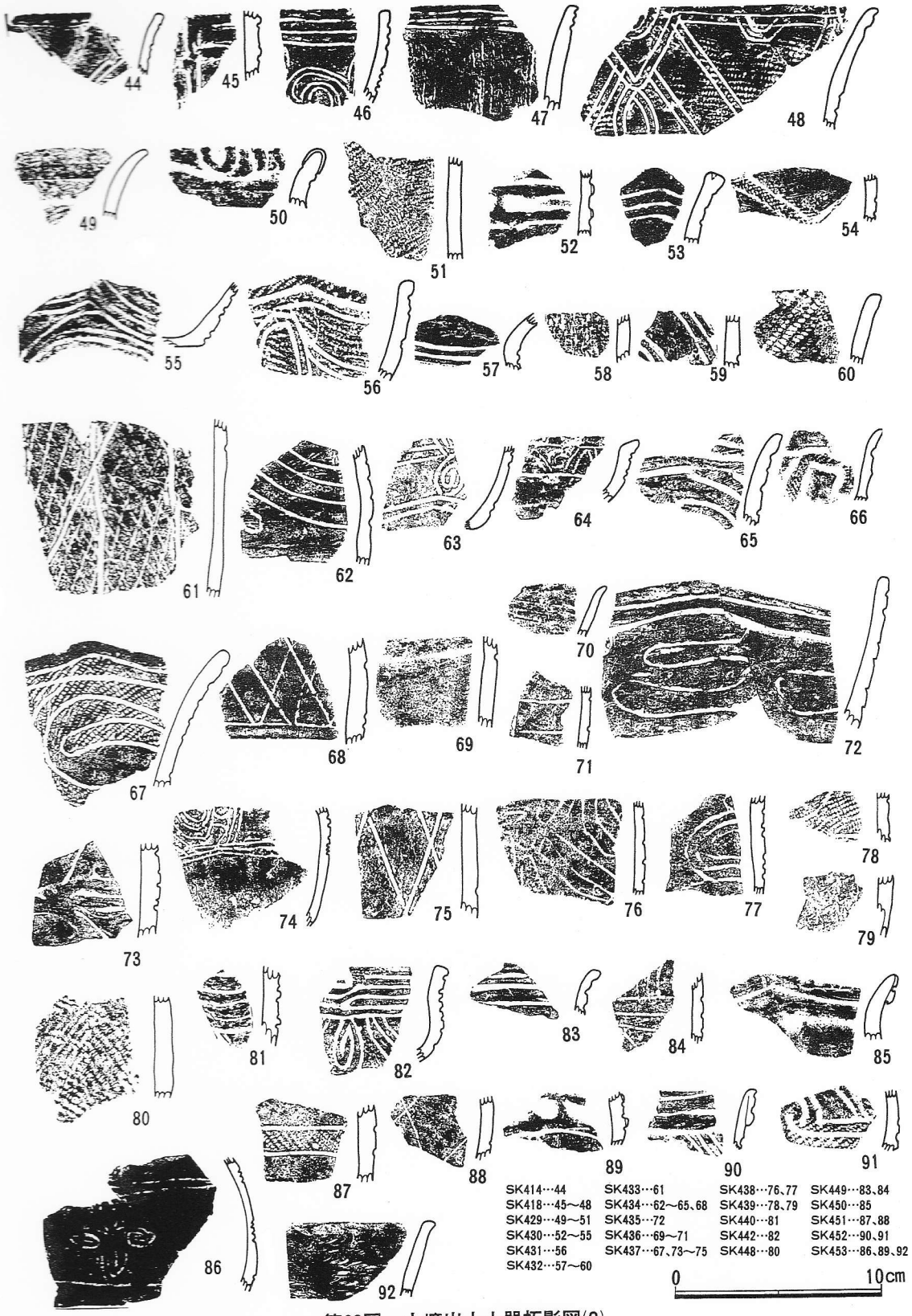
第450号土壙（第59図、60図３、63図85、65図30）

発掘区南部のS－100グリッドに位置し、Ⅲd 層上位で確認された。第449号土壙、柱穴状ピット23と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。平面形は55×63cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は外傾して立ち上がり、壁高は48.6cmを測る。中位南西壁寄りより18～21cm大の自然石２個が確認された。底面はV層から成り、ほぼ平坦でやや軟弱である。

土壙内より復元土器１個、土器片約40点、球状石製品１点が出土した。３は蓋形土器で橋状のつまみを有する。上下端に横位連続刺突文を巡らし、２条の縦位連続刺突文により４分割され、さらに区画内に横位連続刺突文を施文している。なお、蓋中央部は開口している。大きさは径22.7cm、器高12.4cmを計り、色調は明褐色、焼成は良好である。器内外面には、スス状炭



第62図　土壙出土土器拓影図(1)

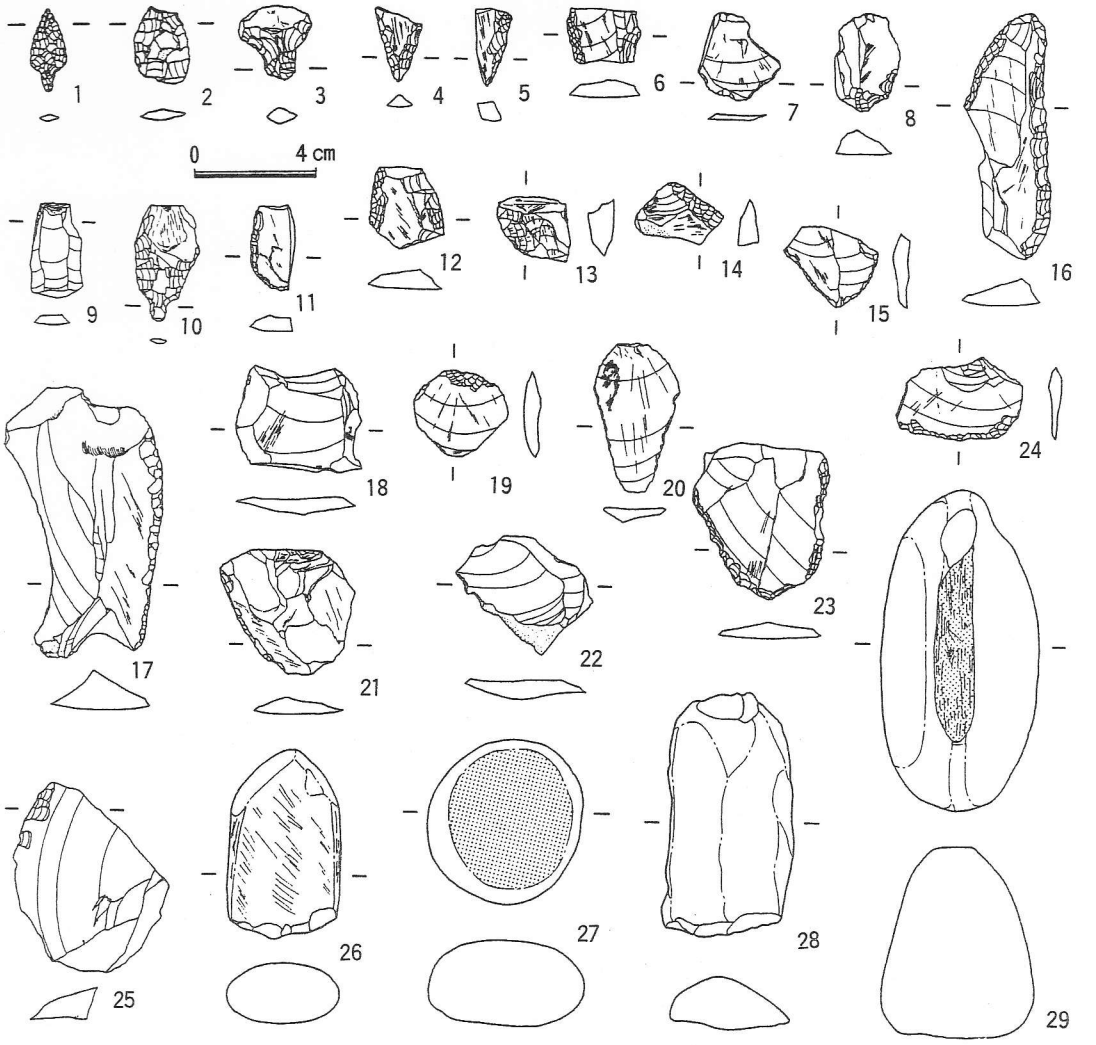


第63図　土壙出土土器拓影図(2)

化物が付着していた。また、土器片は中位からの出土がほとんどであった。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第451号土壙（第59図、63図87、88）

発掘区南部のR－100グリッドに位置し、IIId 層上位で確認された。柱穴状ピット41～43と重複し、本遺構はいずれよりも新しい。平面形は66×72cmの円形を呈する。堆積土は３ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁は外傾して立ち上がり、東壁は緩やかで、壁高は32.2cmを測る。底面はV層から成り、南から北側へ若干傾斜している。また、凹凸はなく堅くしまって



SK401…1，3，18，23
SK403…6，8
SK404…10
SK405…27
SK407…4，5，7，11～14，19，20
SK409…2
SK418…17，29
SK429…21，26
SK435…25
SK436…9
SK437…16，22
SK453…15，20，28

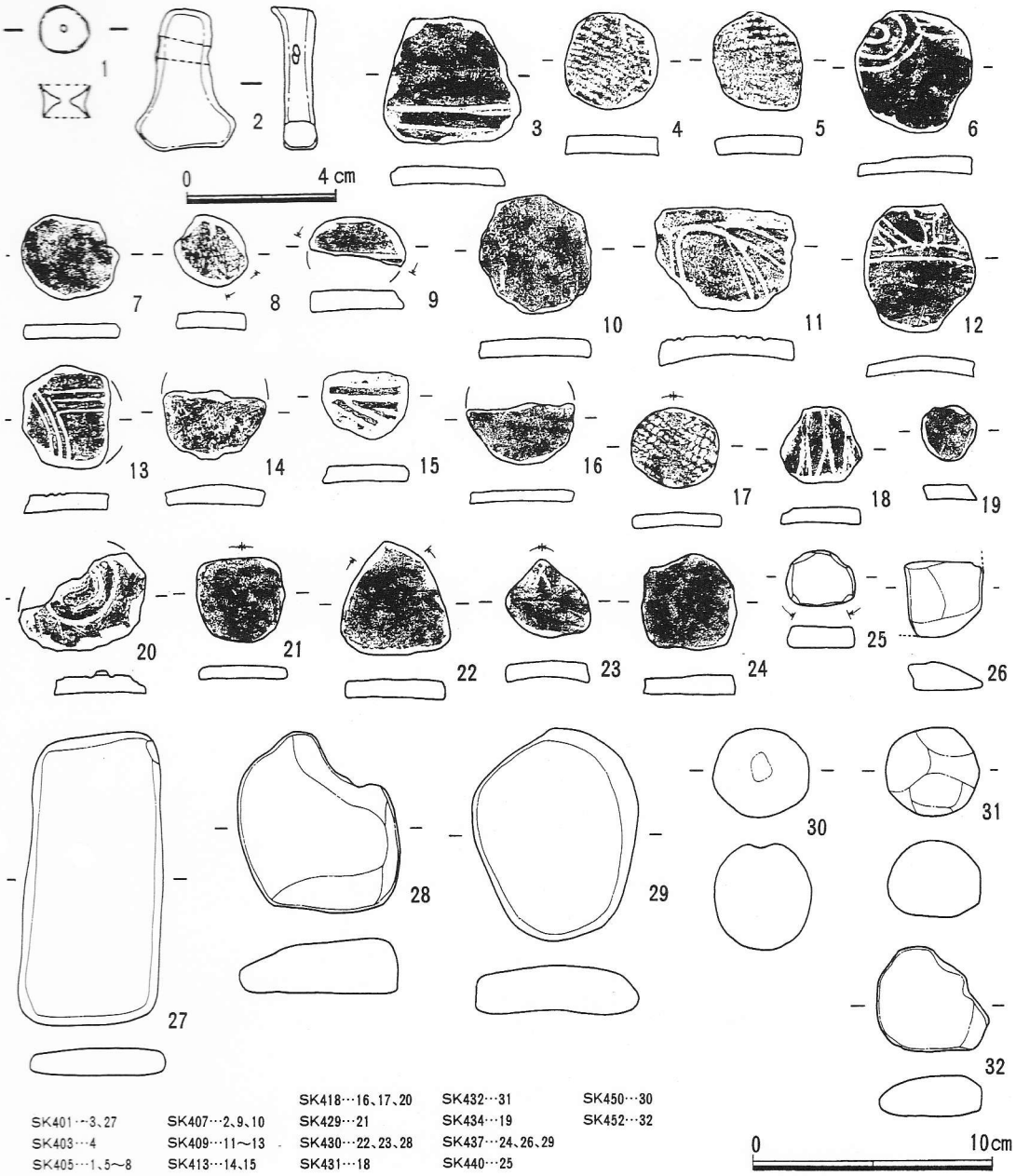
第64図　土壙出土石器実測図

いる。

土壙内より８点の土器片が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第452号土壙（第59図、63図90、91、65図32）

発掘区南部のＳ－101グリッドに位置し、 Ⅲd 層上面で確認された。第401号建物跡、柱穴状



SK401…3、27
SK403…4
SK405…1、5～8
SK407…2、9、10
SK409…11～13
SK413…14、15
SK418…16、17、20
SK429…21
SK430…22、23、28
SK431…18
SK432…31
SK434…19
SK437…24、26、29
SK440…25
SK450…30
SK452…32

第65図　土壙出土土製品、石製品実測図

ピット26と重複し、本遺構はピット26より古い。平面形は長径130.0cmを測る楕円形を呈すると考えられる。長軸方向はN－25°－Eである。壁は外傾して立ち上がり、壁高は30.5cmを測る。底面はV層から成り、やや凹凸があり堅くしまっている。

土壙内より土器片6点、その他の石製品1点が出土した。出土遺物及び新旧関係より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。

第453号土壙（第59図、63図86、89、92、64図15、20、28）

発掘区東部のQ－106グリッドに位置し、Ⅲd層上面で確認された。柱穴状ピット92と重複し、本遺構が新しいと考えられる。平面形は112×117cmの円形を呈する。堆積土は3ブロックに区分でき、人為堆積を呈する。壁はやや内湾気味に立ち上がり、壁高は32.2cmを測る。底面はV層上面から成り、ほぼ平坦で堅くしまっている。

土壙内より土器片約50点、掻器2点、敲石1点が出土した。92は上位より、86は下位より出土した。また、土器片の多くは、中位から下位にかけての出土であった。出土遺物より、構築時期は縄文後期前葉と考えられる。（佐藤　樹）

7．遺構外出土遺物

(1) 土　器（第66～77図）

F_1区遺構外からは、51個体の復元・図化土器とダンボール箱42箱の土器破片が出土した。これらの土器は、縄文時代早期・前期・後期・晩期に位置づけられるもので、その大半は後期初頭～前葉のものが占めている。出土土器の分布をみると、早期～前期土器は調査区西側の台地際に、F_1区出土土器の主体を占める後期土器は調査区南半、遺構密集地域からの出土が多い。土器と出土層序については、晩期のものは第Ⅲa～Ⅲd層、後期初頭～前葉のものは第Ⅲb～Ⅲd層上位、前期～早期のものは第Ⅲd層からと大概に把握することができた。

土器の分類に関しては、時期ごとに群別し、文様、施文技法等により分類した。

第Ⅰ群　早期の土器

1類　貝殻文、貝殻沈線文系の土器（第72図1～37）

a：貝殻腹縁文を数段にわたり器面に施文するもの（1～3）

1は貝殻腹縁文が底辺部まで及んでいる。器形は尖底深鉢を呈する。胎土には若干の植物繊維を含んでおり、やや脆い感じを受ける。色調はにぶい橙色、灰黄褐色を呈する。

b：沈線文と貝殻腹縁文を組み合せ、菱形文、幾何学的な文様等を施文する土器（4～32）

沈線の始・終点、または交点に刺突文が施文されるもの（7、10他）や、口唇部・口縁部内面に貝殻腹縁文が施文されるもの（6、27他）がある。このほかに文様が縦位に展開し、簡略

になるもの（26～29）や、刺突文（30）、沈線文（25）のみが施文されるものもある。内面には貝殻による条痕が認められるが、その後ナデが加えられ、その痕跡が明瞭でないものや、丁寧なヘラナデが施されるものもある。器形は波状、平、山形口縁の尖底深鉢を呈するが、丸底気味のもの（24）もみられる。頸部形状は、頸部がすぼまり段を有するもの、内湾気味となるもの、所謂キャリパー状を呈するものがある。胎土には若干の砂粒を含み、植物繊維の混入はみられない。焼成は良好で、堅緻である。色調はにぶい橙色、にぶい黄褐色、黒褐色を呈する。

c：貝殻の腹縁を上下に移動させた貝殻腹縁連続移動波状文が施文される土器（33～37）

34は波状文施文後に貝殻腹縁を連続移動させた曲線文が付加されている。内面調整は貝殻による条痕がみられるが、その後のナデにより明瞭ではない。胎土には若干の砂粒を含む以外は、植物繊維の混入はみられない。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、灰褐色を呈する。

2類　沈線文の土器（第72図38～40）

沈線文により文様の描かれる土器（38～40）を一括した。38は単刻線をはさみ、彫りの浅い平行沈線が斜位方向、等間隔に施文されている。内面には横位の条痕がみられる。39、40は同一個体で数条の平行沈線が施文されている。胎土には砂粒を含み、植物繊維の混入はみられない。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色を呈する。

3類　縄文の土器（第73図42～64）

a：表裏縄文、縄文一縄文土器といわれる土器（42～52）

器面には単節のＲＬ・ＬＲの荒い斜縄文が施文されている。内面には外面と同一原体が胴部下半に施文されている。内面調整は指頭による圧痕、ナデが認められる。器形は平口縁の尖底深鉢を呈し、口縁部がやや外反する。口唇部は平坦で、縄文が施文されている。胎土に若干の砂粒を含むものと、わずかに植物繊維を含むものがある。焼成は良好で、色調は橙色、にぶい黄橙色等を呈する。

b：縄の側面圧痕文が施文される土器（53～57、60～62）

54～56は、無文化された口縁部に縄の圧痕文が施文されている。口唇部はやや肥厚し、外反ぎみとなっており、上端に縄の圧痕文が施文されている。胎土はきめの細い粘土を用いており、所謂「粉ふき芋」のように粉をふいている状態である。56、57、60は胎土より同一系統と考えられ、0段多条のＬＲ・ＲＬ縄文が施文されている。器形は口縁部、底辺部破片から平口縁を呈する丸底に近い尖底深鉢と考えられる。61、62は同一個体で、施文方向を変えたＬＲ羽状縄文上に縄の圧痕文が施文されている。内面には貝殻による条痕がみられる。

c：交差する縄文がみられる土器（63、64）

同一箇所に縄文原体の方向を変えて、回転施文させたものである。胎土には植物繊維を含み、脆い感じを受ける。色調はにぶい褐色～黒褐色を呈する。

Ⅰ群土器は、早期中葉～後葉に位置づけられるものである。 1a 類は寺の沢式、 1b 類は物見台式、 1c 類は吹切沢式、2類はムシリⅠ式土器に比定されよう。 またⅢa 類は赤御堂式、早稲田4類土器、Ⅲb、Ⅲc 類は早稲田5類、表館(1)遺跡第Ⅹ群土器に相当するものと考えられる。

第Ⅱ群　前期の土器（第73図65～72、74図73～90）

1類　地文上に沈線文、押引き沈線文が施文される土器（65～85）

沈線文が施文される土器は、沈線文が口縁部に限定されるもの（65～70）と、ほぼ全域に及ぶもの（71～77）とがある。地文としてＬＲＬ縄文（65～70）、ＲＬ縄文（71～77）が施文されている。器形は口唇部が丸味をもつと同時に先細りとなり、かるく外反する平口縁の尖底深鉢を呈するものと考えられる。胎土には多量の植物繊維が含み、脆い感じを受ける。色調はにぶい橙色等を呈する。

押引き沈線文の土器（78）は、胴部上半に文様帯をもつようであり、地文として結束第1種の羽状縄文が施文されている。色調は暗赤褐色を呈する。

2類　連続刺突文が施文される土器（87、88）

刺突は棒状工具による。器形は平底の深鉢と考えられる。胎土はわずかに植物繊維を含むが、焼成は良好である。色調はにぶい褐色を呈する。

3類　縄文または特殊な縄文が施文される土器（86、89、91）

86はＲＬ縄文、89はループ文、90は縄端の圧痕が施文されている。胎土には植物繊維を含むが、堅緻である。色調は灰黄褐色、にぶい褐色、にぶい橙色を呈する。

Ⅱ群土器は、前期前葉に位置づけされるもので、1類は春日町式、早稲田6類、表館(1)遺跡第ＸＶ群土器、2類、3類は表館式に相当するものと考えられる。

第Ⅲ群　後期初頭～前葉の土器（第66～68図、75図91～122、76図123～140）

1類　隆沈文、隆線文の土器（第75図91～100）

隆沈文、隆線文により文様が施文される土器を一括した。隆沈文においては円文（94）、長方形文（95、97）、渦巻文（93）等が、隆線文においては弧線文（98）、長方形文（99）等が施文されている。隆線文の帯上には斜縄文が付加されている。これらの文様は、深鉢においては胴部下半、壺では胴部上半に及んでいる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、淡橙色等を呈する。

2類　地文上に沈線文が施文される土器（第75図101～104）

地文上に1～数条の沈線、平行沈線で直線文(103)、曲線文、弧線文(101、104)、入組文(102)

等が施文されるものを一括した。地文としてＬＲ縄文が多用されるが、単軸絡条体回転文、網目状撚糸文が施文されるものもある。本類は深鉢が主体となる。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、暗赤褐色を呈する。

３類　沈線文が施文される土器（第66図２～４、67図９、75図105～117）

本類には、無文研磨された器面に１～数条の沈線、平行沈線により文様が描きだされるものを一括したほか、隆線文等により文様帯が区画されたものも本類とした。

ａ：主文様が等間隔に施文される土器（第66図３、５、７、67図８、10、75図107～111）

「Ｓ」字文（３、５、７）、弧線文（６、８）等を主文様とするものを一括した。これら主文様は曲線文、弧線文により連結されている。文様帯は深鉢で胴部下半、浅鉢、壺では底辺付近まで及んでいる。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、橙色等を呈する。３は波状口縁を呈する深鉢で、文様帯は胴部最張部に施文された隆沈文により上下に区画されている。上部文様帯には「Ｓ」字文、下部には曲線文が配置され、これらは弧線文等により連結されている。色調は橙色を呈し、口径（28.5）cm、器高（40.0）cmを計る。７は口縁部を欠く壺で、文様帯は胴部最張部まで及んでいる。縦位連結「Ｓ」字文を主文様とし、弧線文により主文様を連結させている。色調はにぶい褐色を呈する。６は波状口縁を呈する深鉢で、３条の平行沈線により文様帯が区画されている。文様帯には弧線文を「ウロコ」状に数段にわたり施文している。色調はにぶい黄褐色を呈する。５は壺の胴部下半で、７に類似する文様が展開している。８は平口縁の深鉢で、文様帯は平行沈線により胴部下半に区画されている。文様帯には４条の平行沈線を垂下させ、これに弧線文を対峙させて主文様としており、空白部分に渦巻文・三角形文が付加されている。色調は橙色を呈し、口径（29.2）cmを計る。

ｂ：沈線文が無方向に展開する土器（第66図２、71図40、75図106）

２は波状口縁を呈する深鉢で、文様帯は胴部下半まで及んでいる。文様帯には垂下する曲線文が描かれているほか、頸部には隆沈文により長方形文が施文されている。色調はにぶい黄褐色を呈する。40はミニチュア土器で、器面には細い沈線により無方向な文様が施文されている。色調はにぶい橙色を呈し、口径3.4cm、器高2.9cmを計る。

ｃ：曲線文、幾何学文が横位に展開する土器（第66図４、67図10～12、75図111、116）

平行沈線により曲線文、幾何学文が横位に展開するものを一括した。本類には深鉢、壺のほか浅鉢、蓋がみられる。文様帯は深鉢で胴部上半、壺、浅鉢で底辺部付近まで及んでいる。４は壺の胴部下半で、隆沈文により文様帯が区画されている。文様帯内には２～３条の擦り消し沈線により幾何学文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈する。10は２つの頂部をもつ浅鉢で、頸部、底辺部に巡ぐらされた平行沈線文により文様帯が区画されている。主文様として曲線文が施文されているほか、弧線文、長方形文が付加されている。底面にも同心円の沈線

が２条巡ぐらされている。色調はにぶい橙色を呈し、口径12.1cm、器高9.3cmを計る。11、12は蓋の破片で、主文様として曲線文、長方形文が施文されている。色調はにぶい黄橙色、浅黄橙色を呈する。

ｄ：格子目状、斜行平行沈線文の土器（第67図９、75図112、114、115、117）

格子目状、斜行する平行沈線を施文する土器を一括した。本類は波状口縁を呈する深鉢が主体となる。文様帯は底辺付近まで及ぶものがある。９は波状口縁を呈する大型の深鉢で、文様帯は上下に２分されている。上部文様帯には隆沈文により入組文、幾何学文が、下部には格子目状沈線文が施文されている。色調はにぶい黄橙色を呈し、器高（42.7）cmを計る。114は波状口縁を呈する深鉢で、波頂部から垂下した沈線により縦割りされた区画内には斜行沈線が充填されている。

４類　磨消縄文を主体とする土器（第67図13、14、68図15、16、19、75図118～122、76図123～140）

ａ：主文様が等間隔に施文される土器（第67図13、68図15、75図118～120）

主文様として円文、弧線文が多用されている。本類には深鉢、片口土器、壺があり、深鉢が主体を占める。深鉢、片口土器は胴部上半に、壺は胴部下半に文様帯が区画されている。沈線間にはＬＲ縄文が多用、施文されるほか、磨消部に刺突を施こすものもある。焼成は良好なものが多く、色調は浅黄橙色、にぶい黄橙色等を呈する。13は波状口縁を呈する壺で、胴部に２段の文様帯が区画されている。文様帯には円文が等間隔に配置され、空白部に三角形文、波状文が付加されている。沈線間にはＬＲ縄文が充填されている。口径7.9cm、器高16.9cmを計る。15は波状口縁を呈する小型の深鉢で、胴部上半に文様帯が区画されている。文様帯には２条の弧線文を背中合せに施文しており、沈線間にはＬＲ縄文、磨消部に刺突文が充填・施文されている。焼成は良好で、色調は灰黄褐色を呈する。口径11.2cm、器高11.6cmを計る。

ｂ：幾何学文、曲線文が横位に展開する土器（第67図14、68図16、19、75図121～122、76図123～129、137～139）

帯状文により曲線文、幾何学文等が横位方向に展開する土器を一括した。主文様のほかに花弁状文、刺突文が付加されるものや、波状口縁の頂部に刻目を施文するものがある。沈線間には、Ｒ縄文、ＬＲ縄文が多用、施文されている。文様帯は深鉢、壺が胴部上半、蓋ではほぼ全面に区画されている。本類は深鉢が主体となる。焼成は良好で、色調は明黄褐色、橙色等を呈する。14は波状口縁を呈する深鉢で、頂部に刻目が施されている。文様帯は３条の平行沈線により胴部上半に区画されており、長方形文が施文されている。沈線内にはＲ縄文が充填されている。16は蓋で、器面に曲線文が施文されており、沈線内にはＲ縄文が充填されている。19は波状口縁を呈する大型の深鉢で、３～４条の平行沈線により頸部、胴部上半に文様帯が区画されている。頸部文様帯には花弁状文、胴部には階段状文が施文されている。沈線内にはＬＲ縄

文が施文されている。口径33.7cm、器高40.0cmを計る。121、123は曲線文が施文されたもので、入組文の萌芽が伺える。また137～139は本類の特徴をもつものであるが、沈線間に条痕文が充填されている。

c：入組状曲線文が展開する土器（第76図130～133）

曲線文を組み合せ、入組文を展開するものを一括した。主文様となる入組文のほか花弁状文、弧線文等が付加されるものや、口唇部に刻目が施されたものもある。2～3条の平行沈線により、深鉢、壺は胴部上半に文様帯が区画されるが、浅鉢では胴部全域に及ぶものもある。沈線間にはＬＲ縄文が多用、施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、淡黄褐色等を呈する。130は浅鉢で、磨消部分が反転している。

本群の土器は、東北地方北部の前十腰内式、十腰内Ｉ式、南部の宮戸Ｉ式、南境式に相当すると考えられる。

第Ⅳ群　後期中葉～後葉の土器

1類　幅の広い帯状文の土器（第76図140～143）

幅の広い帯状文により曲線文、幾何学文が施文されるものを一括した。第Ⅲ群4類、本群3類とは、沈線の太さ、口唇部の形状により区分される。頸部に段を有し「朝顔」状に開くもの、胴部から口縁部が大きく外反する深鉢が本類を占めている。口縁部は山形口縁を呈するものがみられ、装飾突起をもつもの（141）もある。沈線間には条の細かいＬＲ縄文が多用、施文されている。焼成は良好とはいえず、脆い感じを受ける。色調は赤褐色、にぶい黄褐色等を呈する。

2類　平行沈線が施文される土器（第68図17、76図144）

口縁部、胴部上半に間隔の狭い平行沈線を施文した土器を本類とした。深鉢、筒形土器がみられる。17は平口縁の筒形土器で、胴部上半に4条の平行沈線文が描かれており、地文としてＬＲ縄文が施文されている。色調はにぶい橙色を呈する。144は頸部に段を有し、口縁部が「朝顔」状に開く深鉢と考えられる。山形口縁を呈し、口唇部は肥厚となっている。沈線文は口縁部上端に巡らされ、沈線間には条のこまかいＬＲ縄文が充填・施文されている。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

3類　磨消縄文の土器（第76図145、146）

器面に曲線的な沈線で描きだされた幾何学的な磨消縄文が施文された土器を一括した。本群1類とは沈線の太さ、口唇部形状で区分される。文様帯は口縁部、胴部に区画され、主文様として、円形文、変形楕円形文（145、146）等が施文されている。沈線内には条の細かいＬＲ縄文が多用、施文されている。本類は口縁部が「朝顔」状に開き、口唇部が肥厚する深鉢が主体

を占めるものと考えられる。焼成は良好なものが多く、色調は淡黄橙色、にぶい黄橙等を呈する。

4類　磨消縄文に刺突が伴う土器（第68図18、76図147～149）

本群3類に類似した文様が施文され、沈線内の縄文部分に刺突が連ねられた土器を一括した。沈線内にはＬＲ縄文が多用、施文されている。刺突は竹管、半竹管状の工具が使用されている。本類は、口縁部が「朝顔」状に開き、口唇部が肥厚する深鉢が主体を占めるものと考えられ、波状口縁の頂部に立体的な装飾突起をもつもの（18）もある。焼成は良好とはいえず、脆い感じを受ける。色調は赤褐色を呈するものが多い。

5類　沈線文系の土器（第76図150）

150は口縁部上端に隆線文を巡らし、帯上に単刻線が施文されている。焼成は非常に良好で色調は黄灰色を呈する。

6類　羽状縄文を特徴とする土器（第76図151、152、77図153～155）

文様帯に曲線文を組み合せた、楕円形文、木の葉形状文が施文された土器を一括した。沈線内にはＬＲ、ＲＬ縄文の回転施文による羽状縄文が充填されている。151～155は同一個体で、胴部が内湾して立ち上がり、さらに口縁部が内湾しながら外反する深鉢と考えられるものである。口縁部は波状を呈し、頂部には装飾突起がみられる。口唇部は丸味をもち、肥厚している。焼成は良好とはいえず、器面の荒は著しい。色調は黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。

本群には、縄文後期中葉～後葉に位置づけられる土器を一括した。1～5類は東北地方北部の十腰内II式、III式、南部の宝ケ峰式、関東地方の加曽利B_1式、B_2式に、6類は十腰内IV式、V式、加曽利B_3式にそれぞれ相当するものと考えられる。

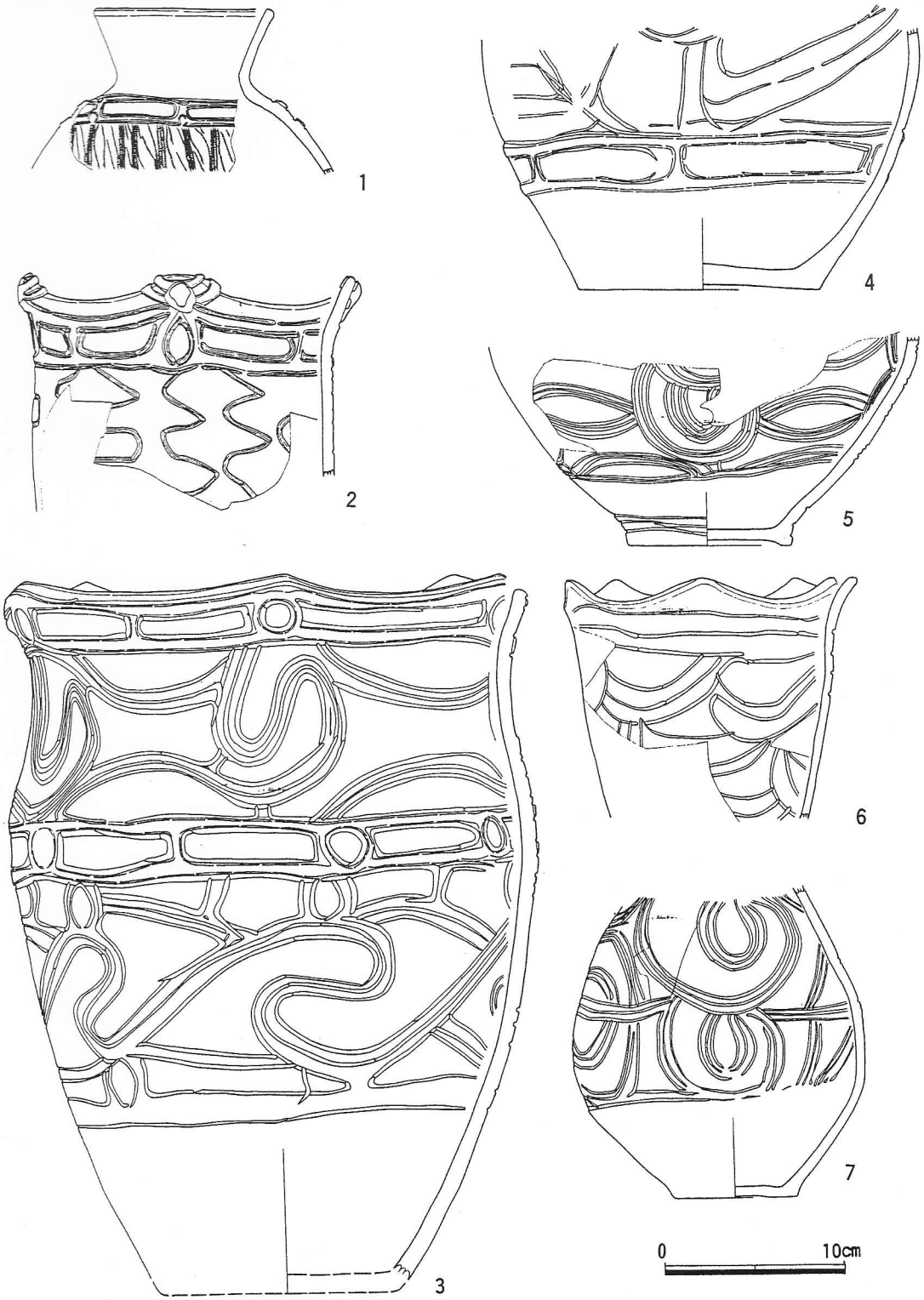
第Ｖ群　晩期の土器（第68図、77図）

1類　三叉文等が施文される土器（第77図156～160）

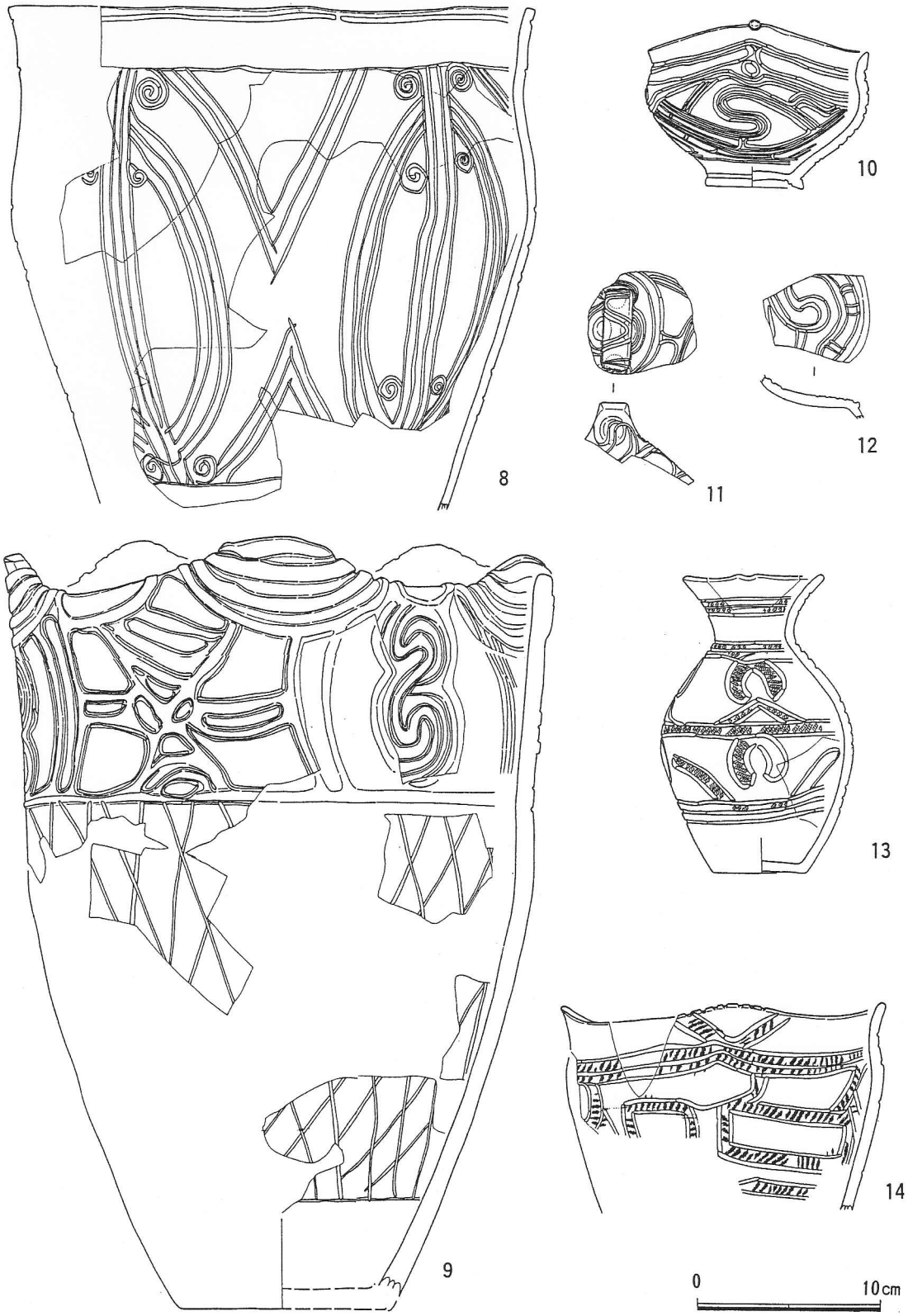
三叉文、x字文が施文される土器を一括した。156、157は注口土器破片で、浮き彫り的な手法によりx字文等が施文されている。色調は明灰褐色を呈する。158～160は胴部が内湾気味に立ち上がる鉢で、無文化された口縁部に三叉文が施文されている。色調は灰褐色、にぶい褐色等を呈する。

2類　羊歯状文の土器（第68図21、77図163）

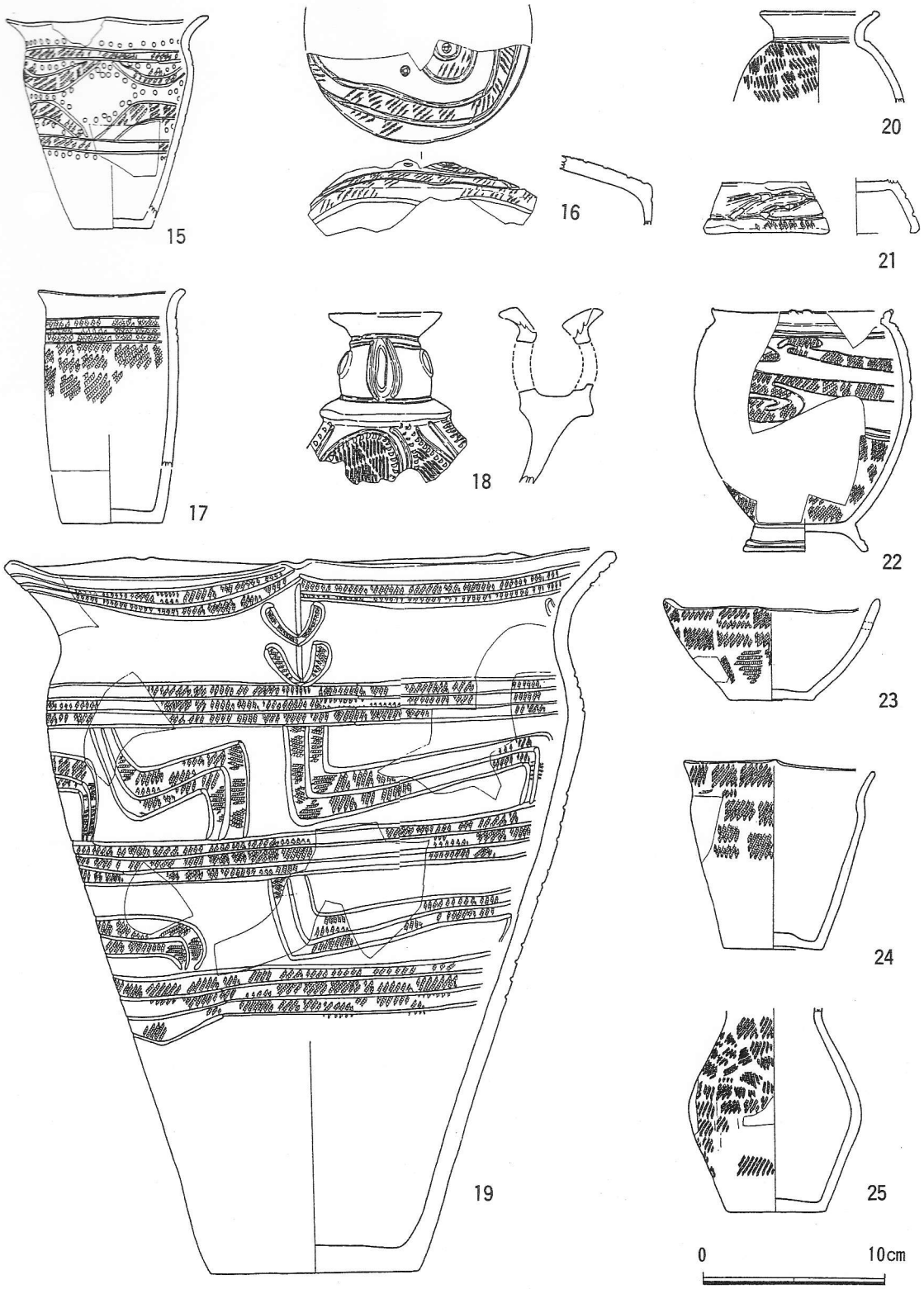
163は、内湾気味に立ち上がる鉢で、無文化された口縁部に羊歯状文が施文されるほか、口唇部に刻みが施されている。色調はにぶい褐色を呈する。21は台付土器の台部で透し彫的手法により羊歯状文が施文されている。色調は橙色を呈する。



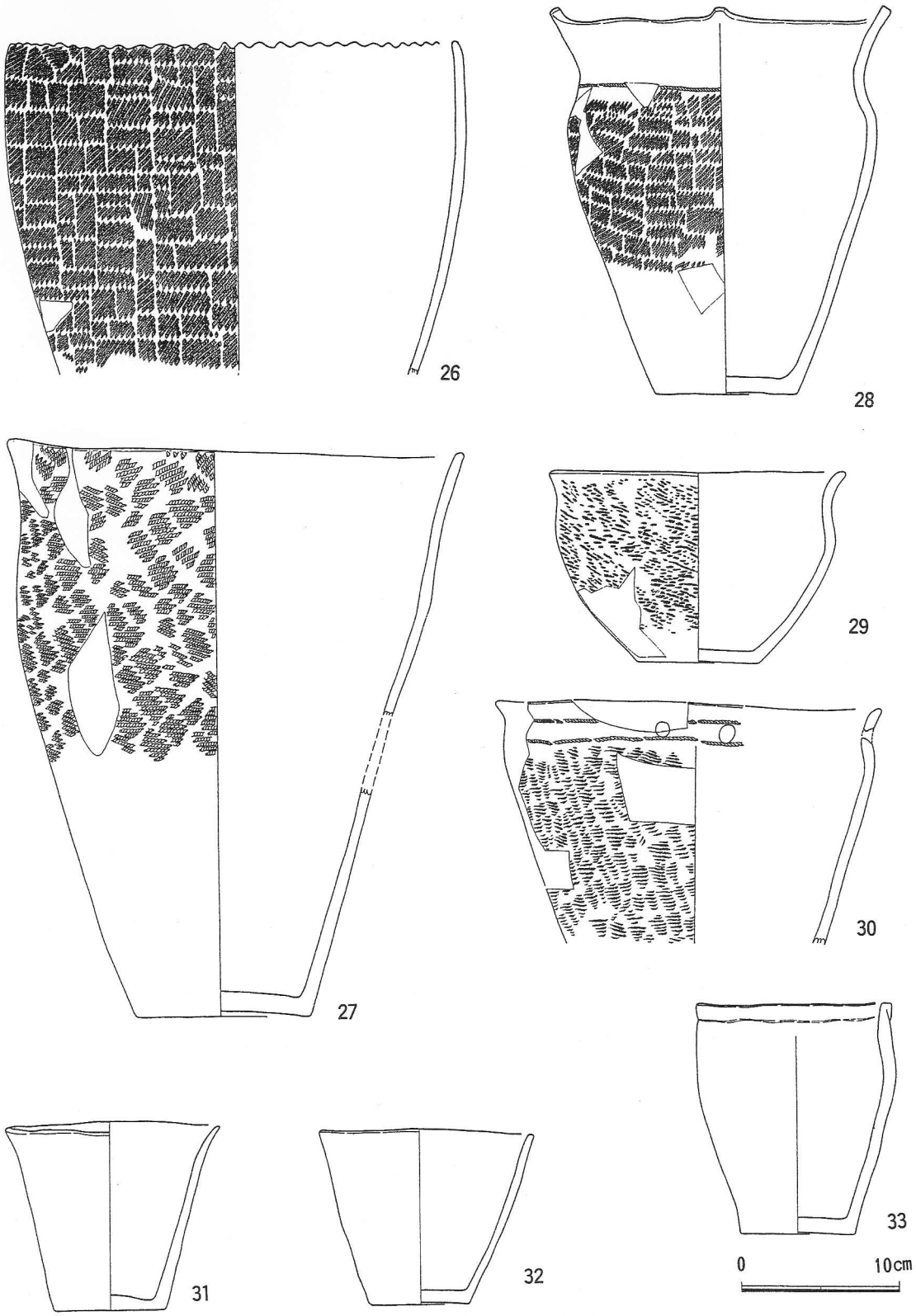
第66図　遺構出土土器実測図(1)



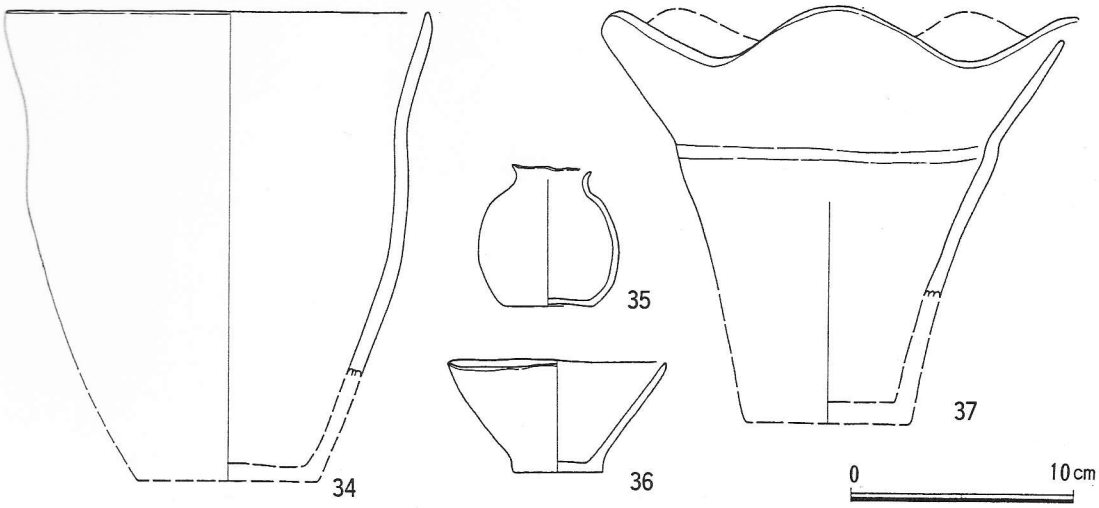
第67図　遺構外出土土器実測図(2)



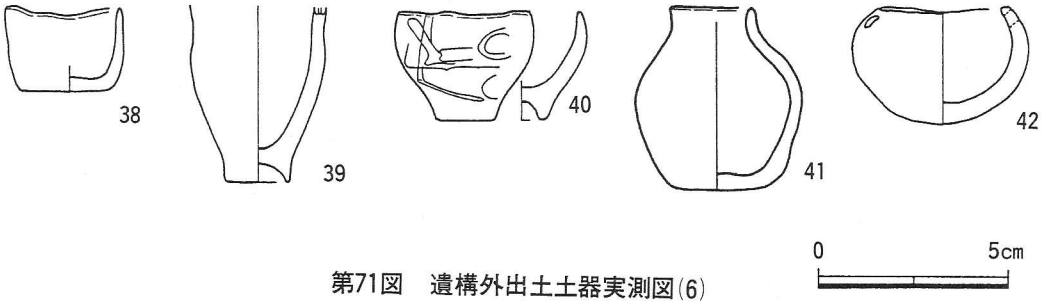
第68図　遺構外出土土器実測図(3)



第69図　遺構外出土土器実測図(4)



第70図　遺構外出土土器実測図(5)



第71図　遺構外出土土器実測図(6)

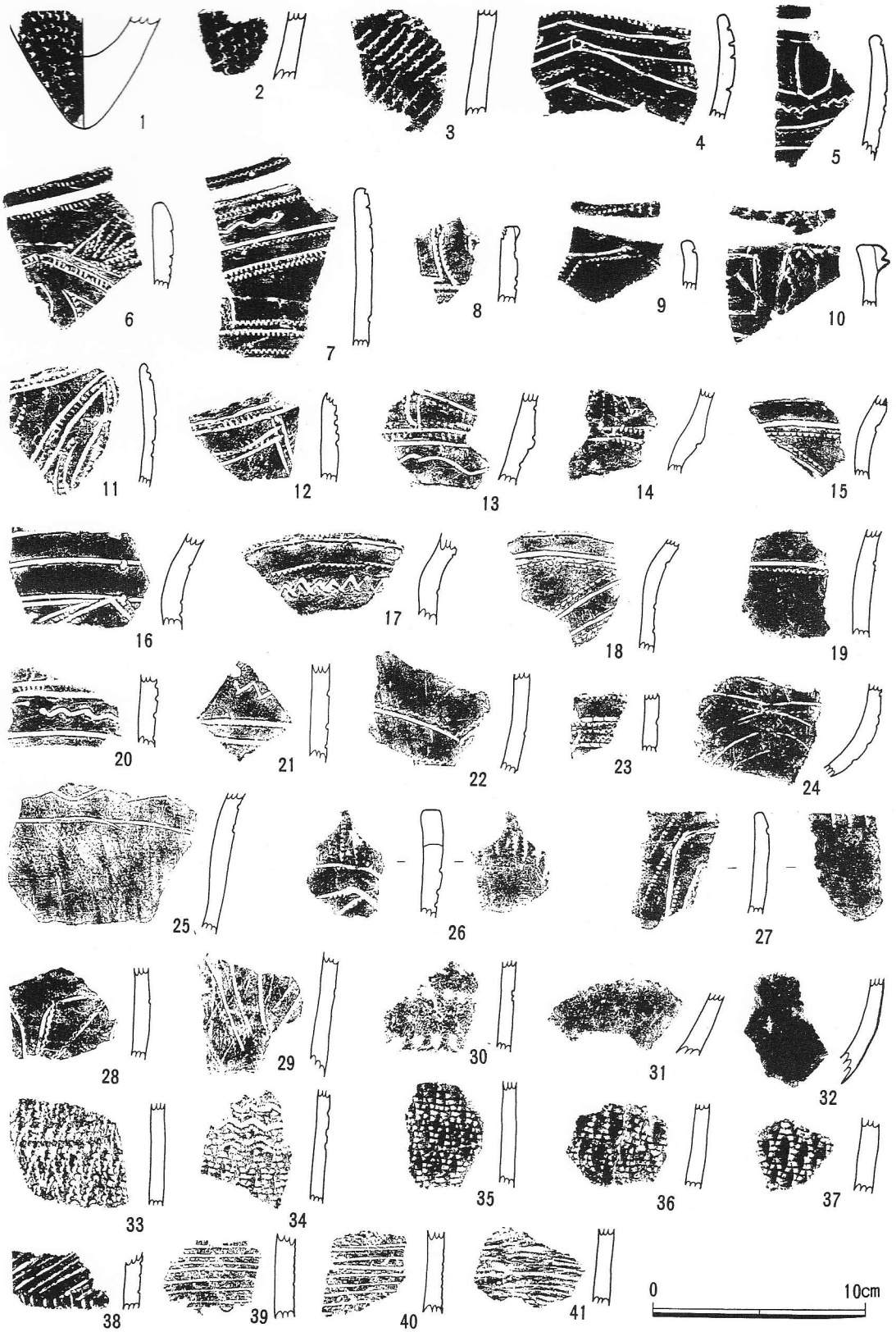
３類　雲形文が施文される土器（第68図22、77図161、162、164～168）

大腿骨状文、Ｋ字状文など所謂雲形文が施文されるものを一括した。雲形文内には条の細かいＲＬ、ＬＲ縄文が施文されている。本類は鉢、台付鉢が主体となるが皿状を呈するもの(165、167、168）もある。焼成は非常に良好で、色調はにぶい黄褐色、黒褐色を呈する。22は台付鉢で、胴部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は短かく外反する。胴部上半に文様帯をもち雲形文が描かれ、ＬＲ縄文が施文されている。164は鉢で、胴部には雲形文、頸部には退化した羊歯状文が施文されている。いずれも焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。なお161、162は本群第３類に入れるべきものと考えられるが、頸部に施文された羊歯状文が退化していることから本類とした。頸部に施文された平行沈線間には刻目が充填されている。

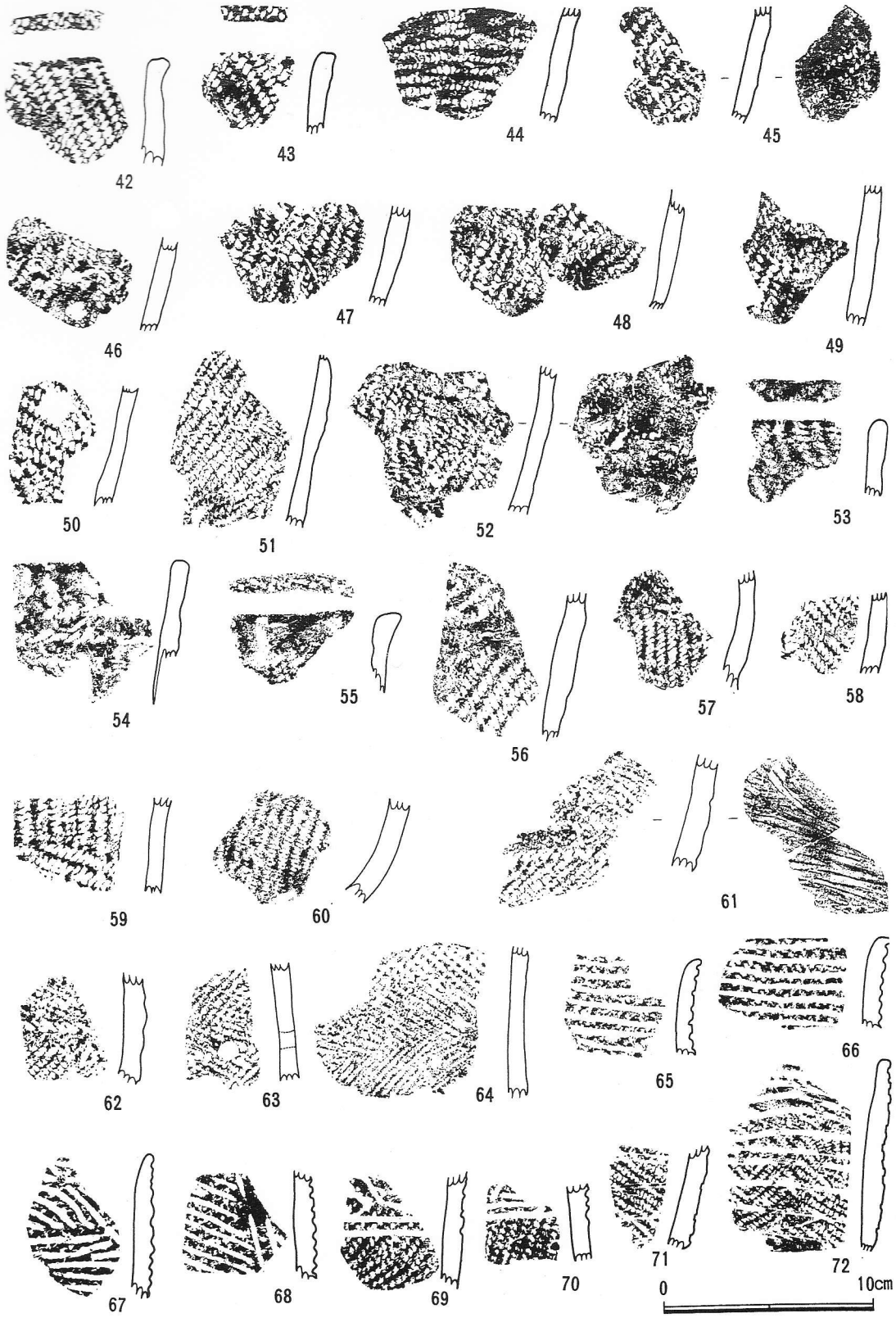
本群土器は、晩期初頭から前葉に位置づけられるもので、１類は大洞Ｂ式、２類は大洞ＢＣ式、３類は大洞C_1式にそれぞれ相当するものと考えられる。

第Ⅵ群　後期～晩期の土器（第69～71図、77図）

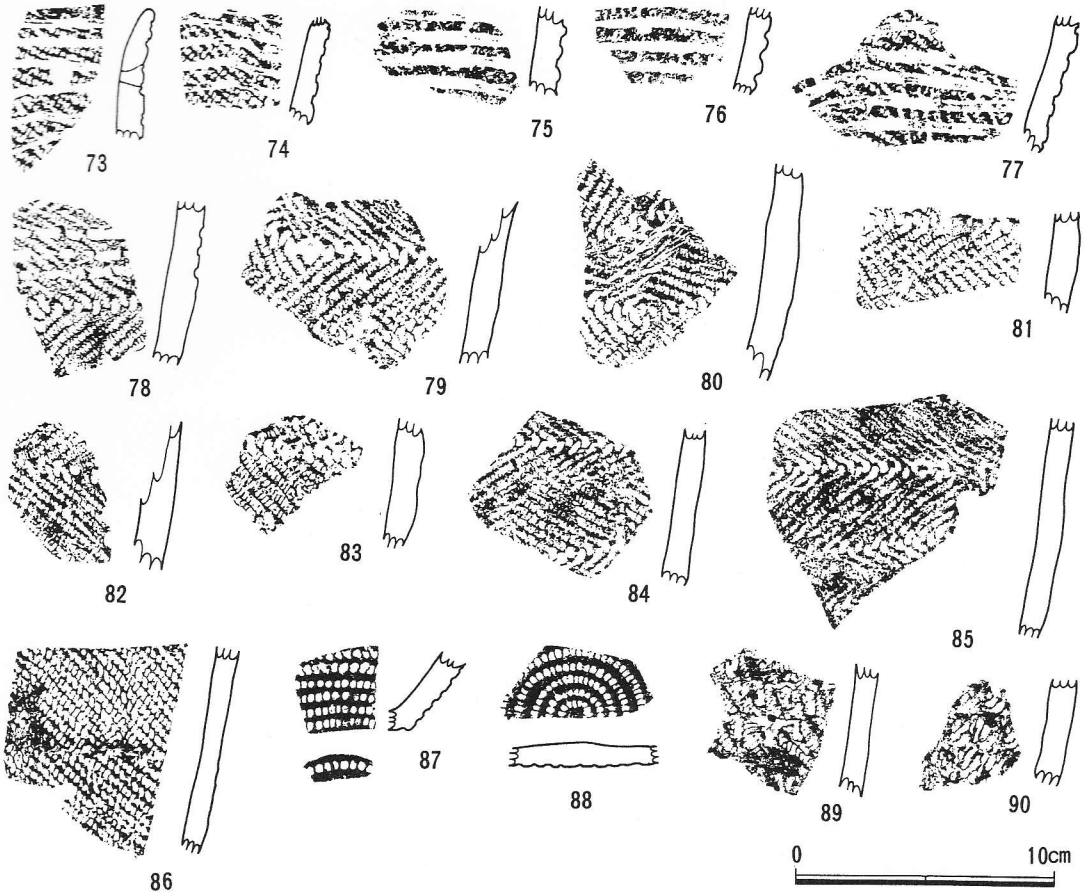
本群には、条痕文、撚糸文、縄文、無文土器を一括した。時期別の細分は難しいが、明確な



第72図　遺構外出土土器拓影図(1)



第73図　遺構外出土土器拓影図(2)



第74図　遺構外出土土器拓影図(3)

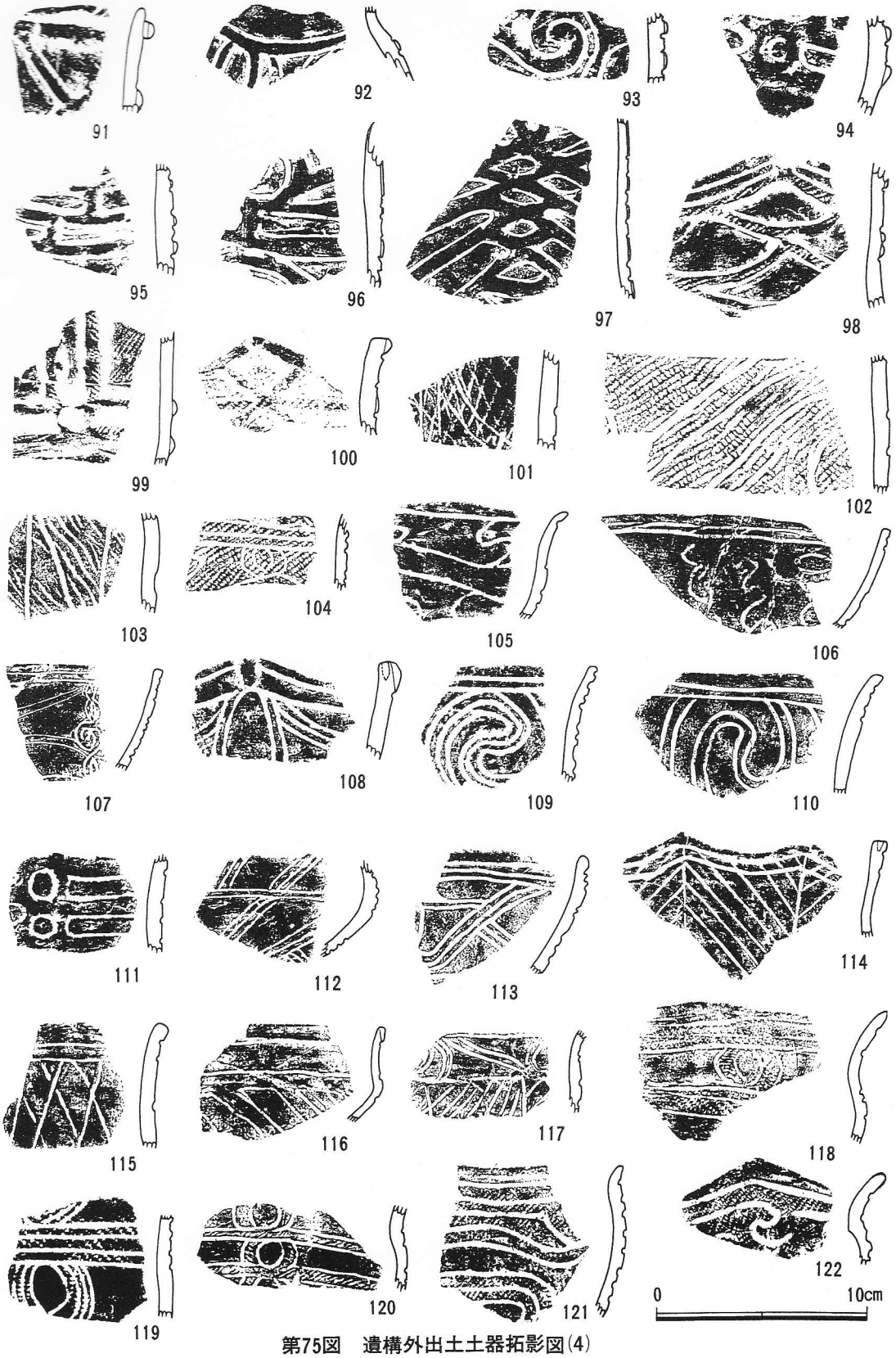
ものについては記した。数量的には非常に多く出土している。

1類　条痕文の土器（第77図169～172）

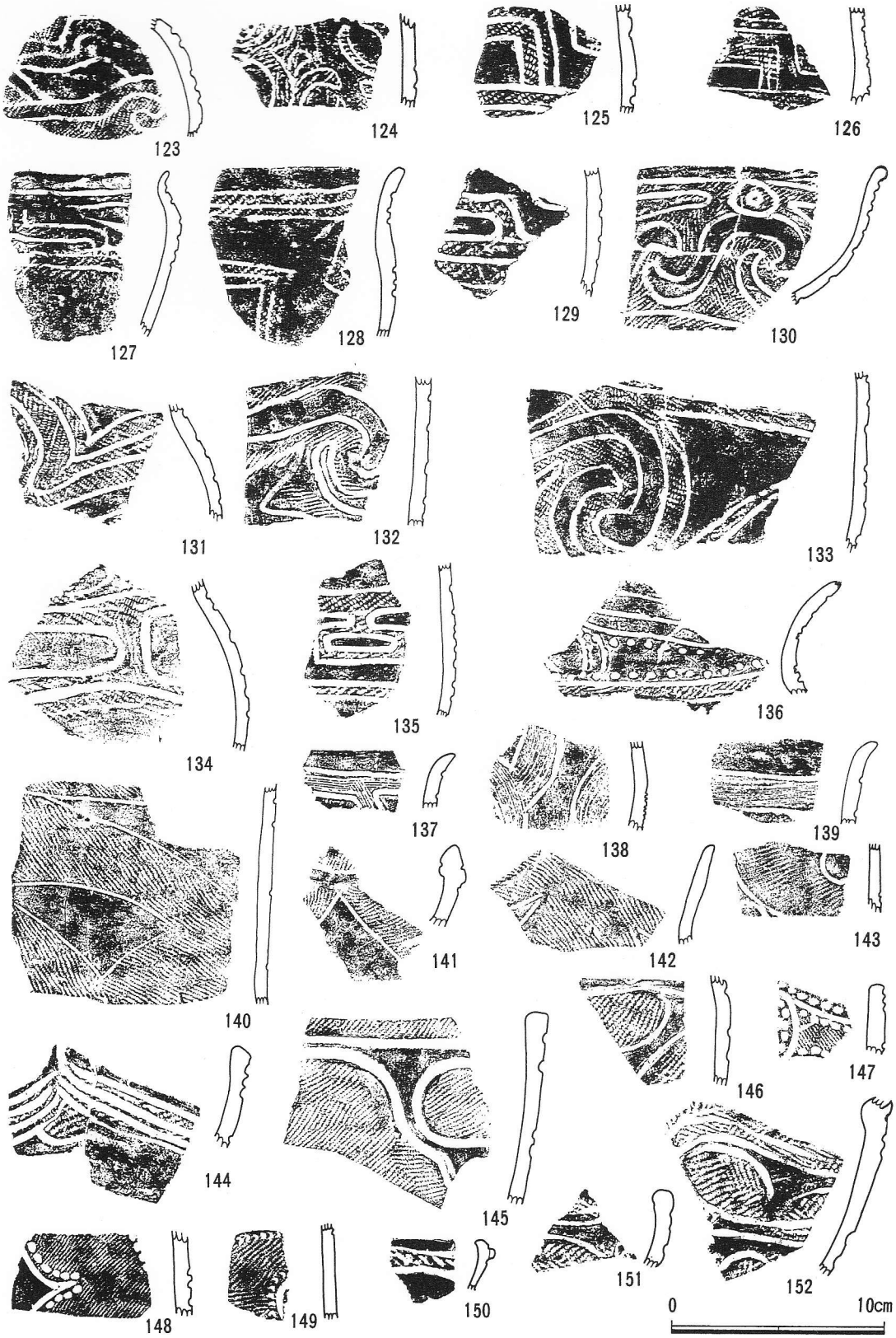
本類は、平口縁の深鉢が主体を占めている。条痕は器面に対し縦位、斜位、曲線的に施文されている。口縁部に無文帯を残すもの、上端より施文するものがある。焼成は良好なものが多い。色調は灰黄褐色、橙色を呈する。172は縦位、斜位の条痕を組み合せた文様が施文されている。

2類　撚糸文の土器（第66図1、77図175～180）

単軸絡条体回転文、網目状撚糸文が施文されるものを一括した。本類は平口縁を呈する深鉢が主体を占めているが、壺もみられる。L・R原体が使用されている。焼成は良好なものが多く、色調はにぶい橙色、灰黄褐色等を呈する。1は平口縁の壺で、胴部上端には隆沈文により長方形文が施文されている。177、179、180は頸部に境界文として沈線文、撚糸圧痕文が施文されている。



第75図　遺構外出土土器拓影図(4)



第76図　遺構外出土土器拓影図(5)

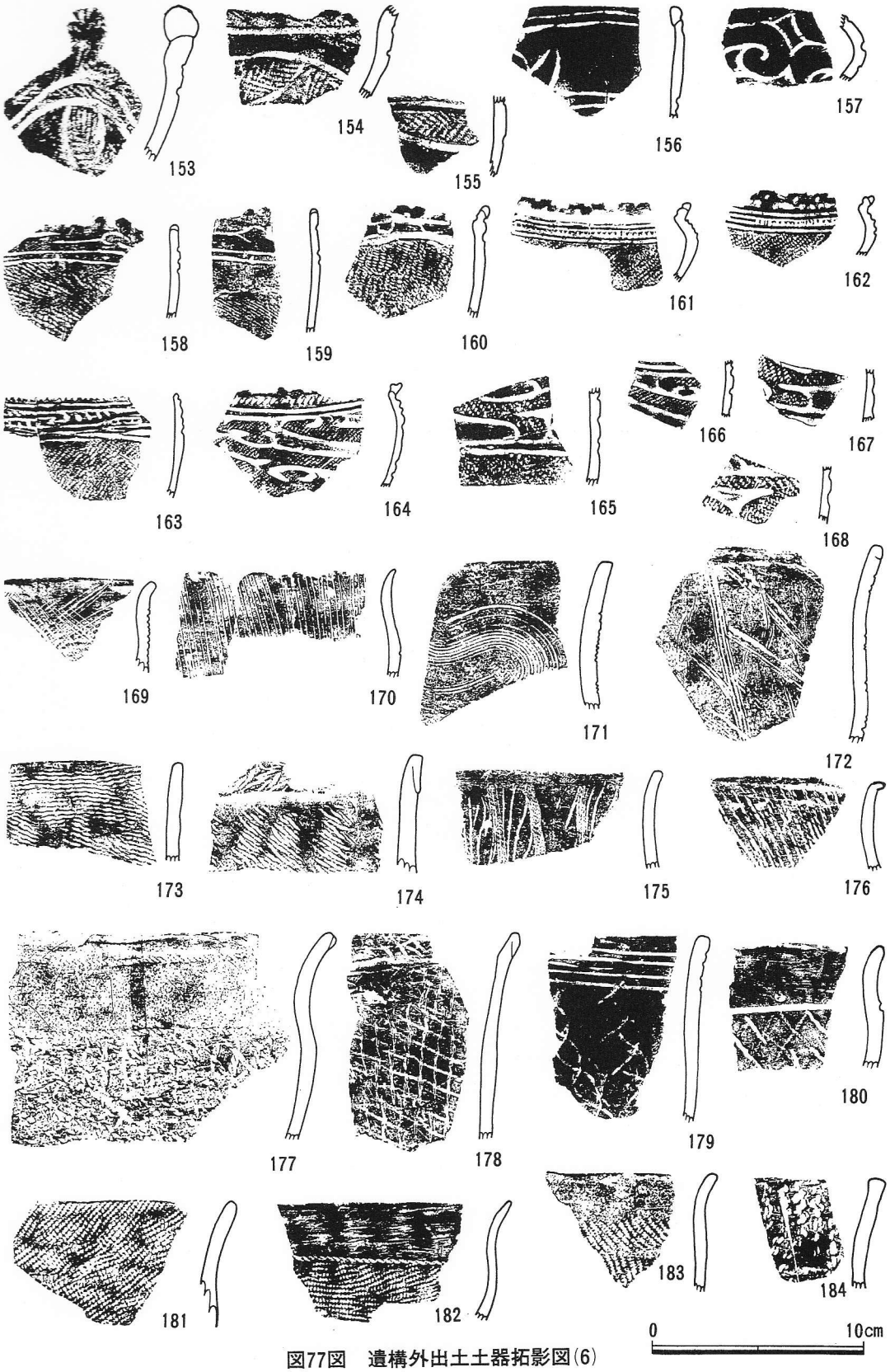


図77図　遺構外出土土器拓影図(6)

3類　縄文の土器（第68図20、23～25、69図26～30、77図173、174、181～183）

本類には、無節、単節、複節縄文の施文された土器を一括した。

a：無節の土器（第69図30、77図173、174）

平口縁を呈する深鉢、鉢がみられる。器形は口縁部が外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。L縄文が多用され、口縁部上端より施文されるものが多い。焼成は良好で、色調はにぶい黄褐色、灰黄褐色を呈する。30は無文化された口縁部に撚糸圧痕文が施文されている。

b：単節の土器（第68図20、23～25、69図26～29、77図181～183）

深鉢、鉢、浅鉢、壺がみられ、深鉢が主体となる。深鉢は平、波状、山形口縁を呈し、頸部がすぼまりその後外反するものや、内湾気味に立ち上がるものがみられる。LR縄文が多用されるほか特殊な縄文もみられる。縄文は口縁部上端から施文されるものが多いが、頸部に沈線文、撚糸圧痕文を施こし境界文とするものがある。焼成は良好なものが多い。色調は橙色、にぶい黄橙色等を呈する。29は0段ℓ＋1段L縄文を撚った特殊な縄文が施文されている。口径18.9cm、器高12.4cmを計る。なお20、26、28は第V群土器に伴うものと考えられる。

c：複節の土器（第77図184）

全体の出土量から比較すると極めて少ない。184は平口縁を呈する深鉢で、口縁部上端よりRLR縄文が施文されている。焼成は良好で、色調は褐灰色を呈する。

4類　無文の土器（第69図31～33、70図34～37、71図38、39、41、42）

深鉢、鉢、浅鉢、壺のほかミニチュア土器がみられる。深鉢は平口縁を呈するものが多いが波状口縁を呈して、「朝顔」状に開くもの（37）もみられる。焼成は良好で、色調は橙色、にぶい橙色等を呈する。なお、37は第IV群土器に伴うものと考えられる。　（藤井安正）

(2) 石　器

F_1区遺構外から出土した石器は、石鏃70点、石錐17点、石匙15点、箆状石器8点、掻器265点、磨製石斧15点、石錘15点、凹石49点、石皿14点、磨石79点、敲石17点、トランシェ様石器1点、半円状扁平打製石器3点の計568点が出土した。

石鏃（第78図1～26）

70点出土し、約5割が完形品である。茎部、基部形態から次のように分類した。

I類---無茎鏃のもの

a---基部に抉入のある凹基無茎鏃で、3点出土し、すべて欠損品である。基部のえぐりはやや深いものと浅いものとがある。（1、2）

b---基部が直線的な平基無茎鏃で、2点出土した。いずれも調整はそれほどていねいではなく、大きさは長さ2.9～4.1cm、幅1.0～2.4cm、重さ0.8～5.2gを計る。（3）

II類…有茎鏃のもの

a…基部に抉入のある凹基有茎鏃で、22点出土した。基部のえぐりは深いものと浅いものとがある。側縁部はやや丸味を帯びるもの、直線的なものがあり、なかには先端部側縁が有段となるものも認められる。大きさは長さ1.7～4.0cm、幅1.0～1.8cm、重さ0.7～2.9g を計る。(14～18)

b…基部が直線的な平基有茎鏃で、23点が出土した。側縁部は直線的なものが多く、大きさは長さ2.0～4.9cm、幅1.0～1.9cm、重さ0.6～2.0g を計る。(10、19～25)

c…基部が突出する凸基有茎鏃で、12点が出土した。大きさは長さ2.3～4.9cm、幅0.8～1.8cm、重さ0.9～4.2g を計る。(8、9、11、12)

III類…茎部の作り出しが不明瞭なもの

a…基部が尖る尖基鏃、所謂柳葉形を呈するもので、7点出土した。断面は扁平なものと菱形のものとがある。大きさは3.9～5.4cm、幅0.9～1.4cm、重さ1.2～5.1g を計る。(5～7)

b…基部が丸味を帯びる円基鏃で、1点が出土した。調整はやや粗く、大きさは長さ2.8cm、幅2.2cm、重さ1.5g を計る。(4)

石鏃に用いられる石材は硬質頁岩が53点と多く、珪質頁岩、黒色頁岩、チャートと続く。アスファルトの付着しているものが10点確認されたが、これらのほとんどは茎部及び茎部付近に付着していた。

石錐（第78図26～35）

17点が出土した。形態より3分類した。

I類…つまみ部を有するものである。

a…錐部が基部から先端まで同じ太さで長いもの。(30～35)

b…錐部が先細りとなり短いもの。(27、28)

II類…全体の形状が棒状になるもの。(26、29)

使用される石材は硬質頁岩が15点と多く、珪質頁岩、チャートと続く。

石匙（第78図36～41、79図42～50）

15点出土した。形態より3分類した。

I類…つまみ部が刃部に対し、平行に作りだされる所謂縦型石匙である。(38、42～48)

II類…つまみ部が刃部に対し、直交する所謂横型石匙である。(49、50)

III類…小型で、円形をなす刃部が作りだされるもの。(36、37、39～41)

使用される石材はすべて硬質頁岩である。アスファルトが付着しているものが2点(37、43)認められた。また、43の左側縁刃部には、油脂によると考えられる光沢が有る。

箆状石器（第79図51～58）

8点出土し、形態より2分類した。

Ⅰ類…基部が刃部に対し幅狭になるもので、二等辺三角形、または台形を呈する。(52～58)

Ⅱ類…基部、刃部の幅がほぼ等しく、長方形を呈する。(51)

使用される石材は硬質頁岩7点、珪質頁岩1点である。両面加工しているものが多いが、刃部まで両面加工が及ぶものは少なく、結果として片刃が多い。

掻器（第79図60～83）

265点出土し、出土石器の中で最も豊富な量を誇る。

Ⅰ類…刃部が1側縁に限定されるもの。(62～68、70)

Ⅱ類…刃部が2側縁に及ぶもの。(69、71～76)

Ⅲ類…刃部が3側縁に及ぶもの。(77～79)

Ⅳ類…刃部が側縁全体に及ぶもの。(80～83)

Ⅴ類…刃部両端に角状の突起をもつもの。(60、61)

掻器としたが、これまで不定形石器と呼ばれているものを一括した。使用される石材は硬質頁岩が219点と圧倒的に多く、珪質頁岩、黒色頁岩、チャートと続く。大きさ、形はさまざまであるが、Ⅳ、Ⅴ類としたものは小型で、Ⅳ類は円形、三カ月状を呈する。Ⅴ類は片面調整で突起間の刃部は多少湾曲している。大きさはⅠ～Ⅲ類が長さ1.9～11.3cm、Ⅳ類が長さ2.3～3.6cm、Ⅴ類が長さ1.8～4.3cm、角間の幅1.8～2.2cmを計る。

磨製石斧（第80図84～92）

15点出土し、すべて定角式磨製石斧である。完形品は4点で、欠損品のうち刃部を欠くものがやや多い。86は側面両側にそれぞれ2ヵ所の抉れ、その中間に若干の凹みがあり、表裏面には側面と同じ位置に若干の凹みが認められ、柄への装着を示している。大きさは84が最小で長さ3.9cm、幅1.6cm、重さ5gである。他の3点の大きさは長さ5.8～11.8cm、幅2.8～3.7cm、重さ26～150gを計る。石材は緑色凝灰岩6点、石英閃緑玢岩5点で、緑色変岩、硬質頁岩、凝灰岩と続く。

石錘（第80図93～104）

楕円形の石の両側縁に加工を加えたもので、15点出土した。長軸両端に加工しているものと短軸両端に加工しているものとに分ける事ができ、後者が圧倒的に多い。加工箇所による大きさの違いはなく長さ5.3～12.2cm、幅3.2～7.5cm、重さ32～352gを計る。使用される石材は石英閃緑玢岩が9点と多く、安山岩、石英安山岩、凝灰岩が続く。なお、101～104は判然としないが、石錘または加工途中のものと考えられる。

凹石（第80図105～110）

49点出土した。平面形は円形、楕円形を呈し、やや扁平なものが多い。片面のみに凹みをもつものは少なく、両面に1～3個の凹みをもつ。110は表裏面及び両側面に、それぞれ2個の凹みをもつ。火熱を受けているものが数例認められた。使用される石材は閃緑玢岩が34点と多く、緑色凝灰岩、流紋岩が各3点、凝灰岩質泥岩、石英安山岩、泥岩、変朽安山岩が各2点、凝灰岩が1点である。大きさは長さ4.9～17.5cm、幅3.9～9.6cm、重さ44～950g である。

石皿（第81図118～123）

14点出土した。使用面と側縁部が明瞭に区画されているものと、そうでないものの2形態に分ける事ができる。前者の側縁部の高まりは、非常に顕著なものから若干のものまであり、高まり直下には沈線状の整形痕が認められるものもある。また、中央部が磨り減って、非常に薄くなっているものがある。後者には、両面を使用しているものも認められる。石材は凝灰質泥岩5点、緑色凝灰岩4点、安山岩、石英安山岩、凝灰岩、石英閃緑玢岩、泥岩各1点である。

磨石（第81図111～117）

79点出土した。形状により2分類した。

Ⅰ類…円形、楕円形を呈するもの。(111～113、117)

Ⅱ類…三角柱状を呈するもの。(114～116)

Ⅰ類は平坦な表裏2面を使用するものが多いが、全面を使用し球状となるものもある。113は断面が長方形状を呈し、側面及び表裏面を使用している。裏面中央には1個の凹みをもつ。117も断面が長方形状を呈する。使用面は側面で、一部自然面を残している。また使用面には剝離痕が認められる。Ⅱ類は背稜部を使用面としており、1稜だけのもの、2稜を使用しているものがある。使用面には剝離痕が認められる。大きさはⅡ類がやや大きめのものが多いが、全体的には相当のばらつきがある。使使用される石材は石英閃緑玢岩45点、凝灰岩15点で、緑色凝灰岩、安山岩、石英安山岩、石英斑岩、凝灰質泥岩、粗粒玄武岩、花崗閃緑岩、硬質頁岩と続く。

敲　　石

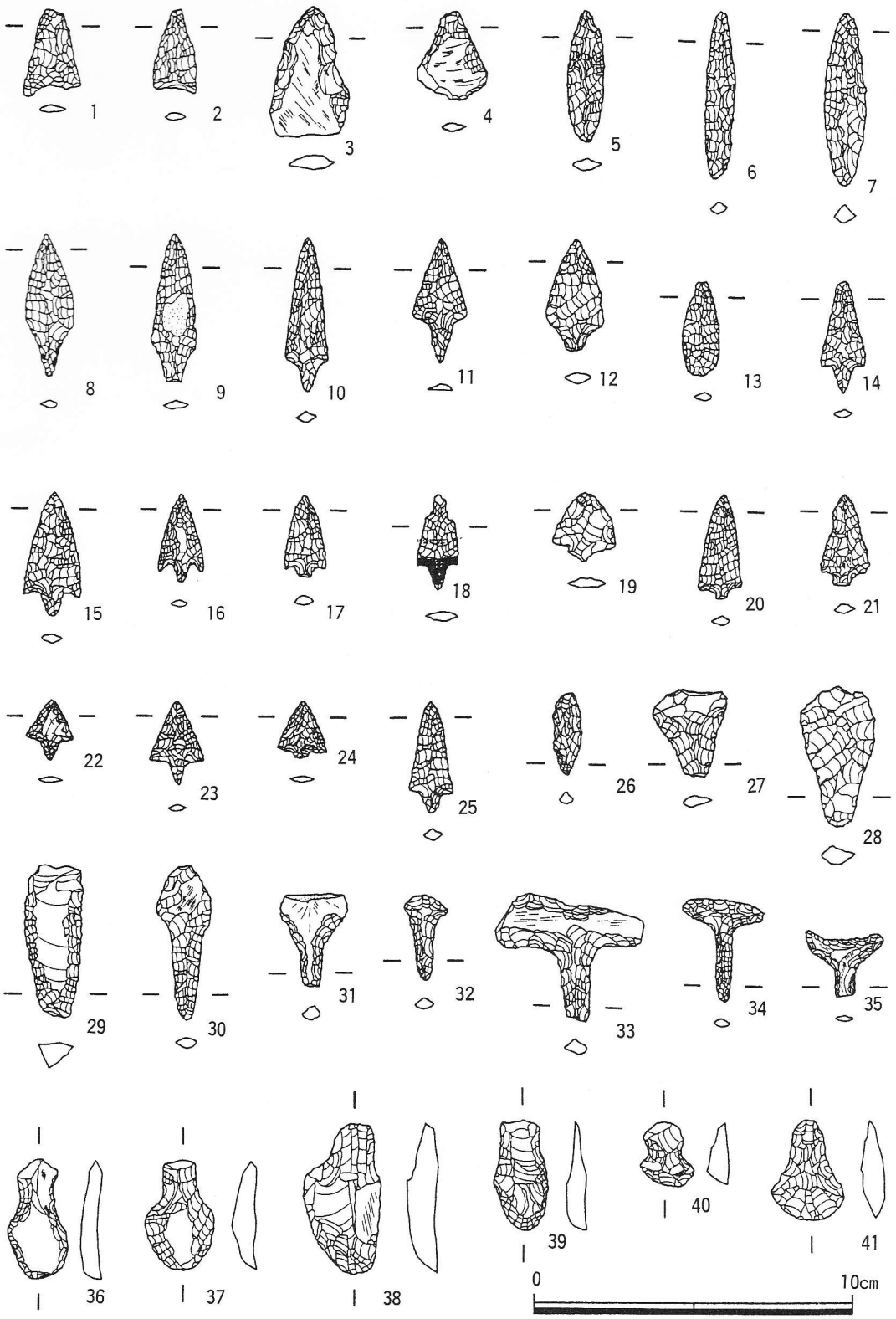
やや棒状を呈する石の両端を使用しているものが多く、側縁部に剝離痕が認められるものもある。また、凹石の両端に使用痕の認められるものも大分ある。17点出土し、使用される石材は石英閃緑色玢岩が15点と圧倒的に多い。

トランシェ様石器（第79図59）

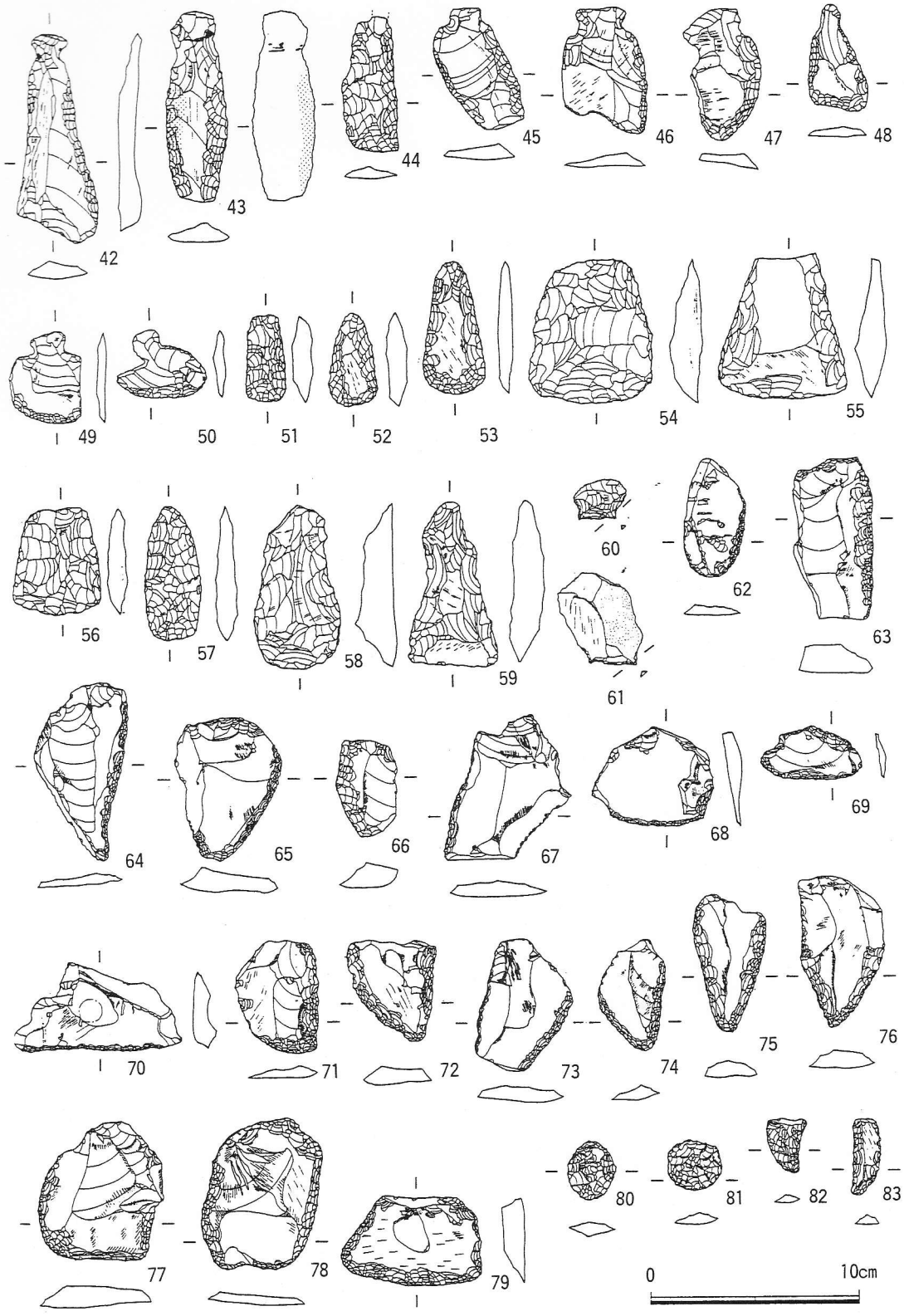
剝離面を刃部として使用しており、直刃斧とも呼ばれる。刃部は直線的で、大きさは長さ7.8cm、幅4.2cm、重さ42g を計る。石材は黒色頁岩である。1点のみの出土である。

半円状扁平打製石器（第81図124～126）

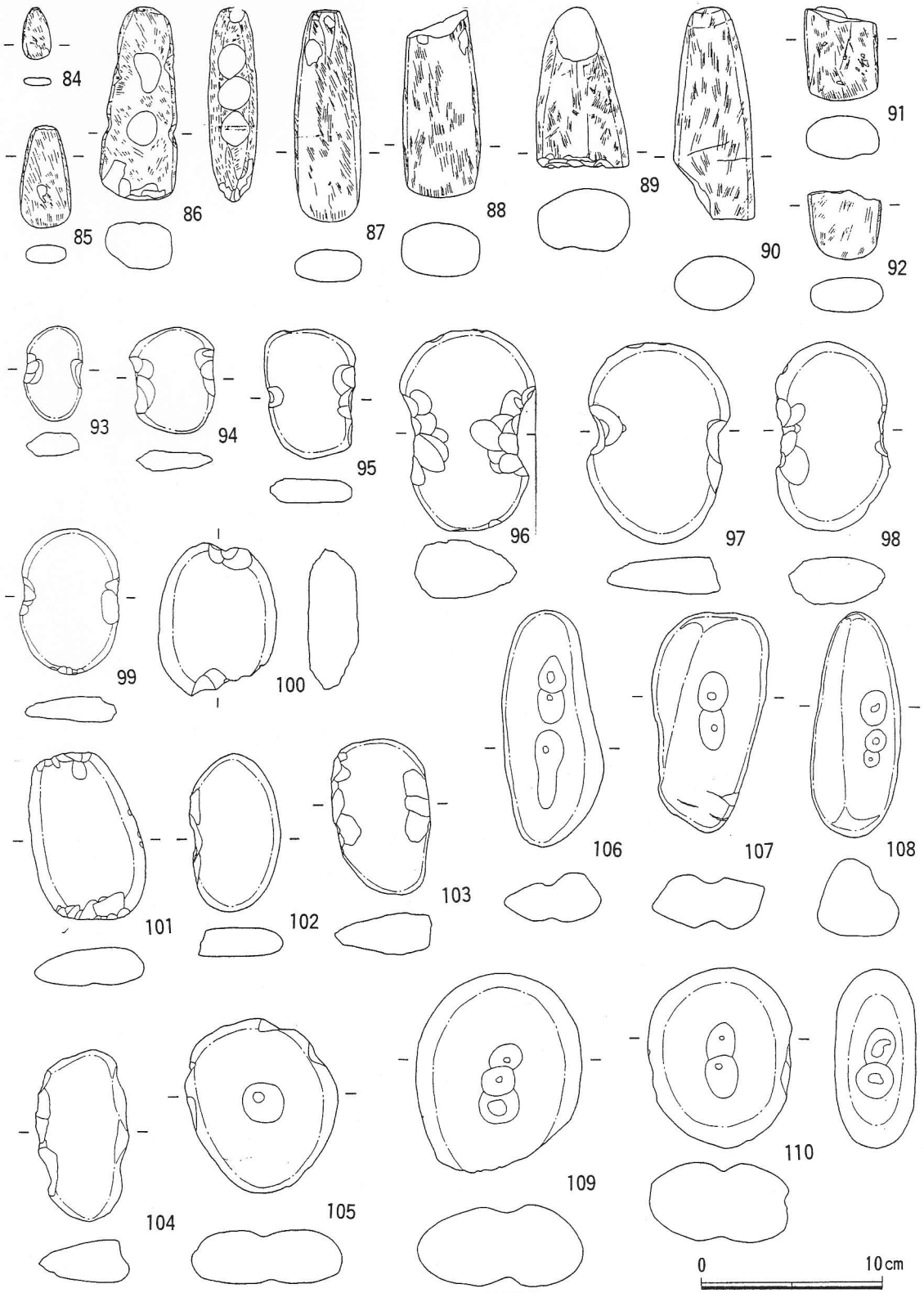
3点出土した。荒い打ち欠きだけのものと、打ち欠き後の摩擦痕が認められるものとがある。



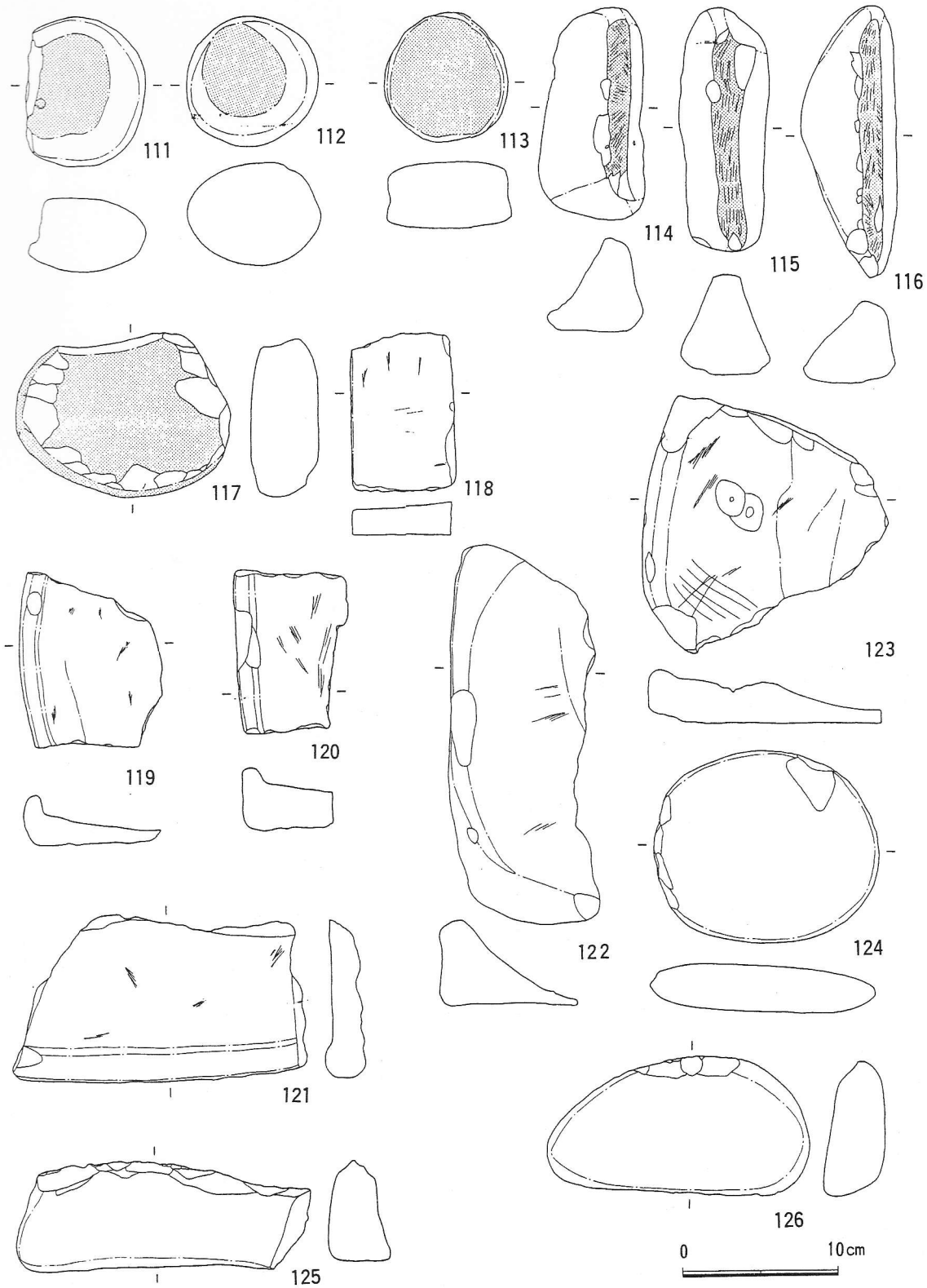
第78図　遺構外出土石器実測図(1)



第79図　遺構外出土石器実測図(2)



第80図　遺構外出土石器実測図(3)



第81図　遺構外出土石器実測図(4)

124は全周を打ち欠いた後、同じく全周を擦りにより整形している。使用される石材は緑色凝灰岩2点、石英閃緑玢岩1点である。大きさは長さ14.5〜18.9cm、幅7.0〜12.6cm、重さ695〜800gを計る。

(3) 土製品・石製品

F_1区遺構外から出土した土製品は耳飾り5点、装飾品1点、土偶4点、足形付土版1点、土器片利用の板状土製品287点、鐸形土製品7点の計305点である。石製品は有孔石製品5点、岩偶1点、線描石1点、線刻石1点、石刀9点、石冠4点、円盤状石製品28点、球状石製品6点、軽石製石製品16点、その他の石製品20点の計91点が出土した。

耳飾り（第82図1〜5）

5点出土し、全て耳栓である。凹部中央に貫通孔があるもの（1〜4）とないもの（5）とがある。1、2はほぼ同じ大きさで、中心部厚が0.1cmと薄い。5は片側側縁欠損部を研磨により整形している。また、2、6には赤色顔料が塗布されている。大きさは表面径1.2〜2.2cm、耳朶孔径0.7〜1.6cm、側縁部厚0.9〜1.5cm、中心部厚0.1〜1.1cmである。3、4の胎土は他の製品に比べ、砂粒をやや多く含んでいる。出土地点はR−106、S−107、W−106、W−107、出土地不明各1点である。

土製装飾品（第82図6）

逆V字形を呈し、横方向に貫通孔が穿たれている。無文で、全体的に丸味を帯びている。大きさは長さ3.8cm、幅2.2cm、厚さ1.7cm、重さ11.1gを計り、焼成は良好である。完形品で、R−99グリッドから出土した。

土偶（第82図14〜17）

14はS−105、U−105グリッドより出土したものが接合した中空土偶の左足である。沈線により足指を、刺突により爪をそれぞれ表現している。足裏面は平坦で、大きさは8.0×5.2cmを計る。膝及び膝後部が張り出しており、膝頭に短沈線が施されている。また、向脛に径1.0cmの貫通孔が穿たれており、足首より上部にはLR縄文が施文されている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。大きさは現存高14.2cm、膝前後の幅は8.2cmを計る。16、17は体部で、16は胴上半部及び脚部は欠失している。胴部には刺突が施されている。17は三角形状を呈し、小突起により乳房が表わされ、首部は若干盛り上がっている。15は円筒形を呈する脚部である。焼成はいずれも良好で、出土地点は15がT−107、16がQ−106グリッド、17は不明である。

足形付土版（第82図18）

S−104グリッドより出土した無文の土製品で、足形付土版の踵側部分と考えられる。踵側縁に径4mmの貫通孔が、土版に対し垂直方向に穿たれている。押捺面は輪郭を工具により整形し

たのち、指によるナデの整形が施されている。側面、裏面も指ナデによる整形がなされ、側面は他面に比べ平坦に整形している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。大きさは現存長6.3cm、現存幅6.2cm、厚さ1.1cmを計る。

土器片利用の板状土製品（第83図）

土器破片を使用し、打ち欠き、研磨により整形しているものである。胴部片を多用しているが、口縁部片、底部片の利用も認められる。形状は大きく円形、三角形、方形に分けることができるが、楕円形、扇形、台形、五角形、六角形、三角形の頂点を欠くものなどがあり、画一ではない。出土した287点の約８割を円形が占め、三角形がこれに次ぐ。研磨加工は全体に及ぶものからごく一部のみのものまであり、その度合は一様ではない。形状と加工方法の関係は、円形が打ち欠き加工だけのものが８割以上を占めるのに対し、それ以外の形状においては打ち欠き加工と研磨加工の割合はほぼ同数になる。ただし、打ち欠き加工だけのものは判別しにくいものが多く、選別基準が曖昧になる感は否めない。

文様は形状、加工方法による差異は認めがたく、当時使用されていた土器文様頻度がそのまま反映されるものと考えられる。使用されている土器片は後期前葉のものがほとんどであるが、早期、晩期のものも若干見受けられる。大きさは３～５cm大が多く、厚さは、側面のみに加工が行なわれるため、土器片自体の厚さとなる。

鐸形土製品（第82図７～13）

７点出土し、８と10は同一個体と考えられる。胴部破片の11を除き、他は全て開口部と平行に貫通孔が穿たれている。開口部は円形を呈するもの（９、12）と楕円形（13）とがある。13は頂部に尾鰭状の突起が作り出されており、開口部長軸と平行に貫通孔が穿たれている。文様は横位平行沈線文、同心円文が施文されている。大きさは器高7.3cm、最大胴径3.9×4.2cm、開口部径2.4×2.8cm、厚さ0.5cmを計る。９、13の内面には、スス状炭化物が付着していた。いずれも焼成は良好である。出土地点は７がＸ－105、８、10がＵ－106、９がＴ－105、11が不明、12がW－107、13がＳ－104グリッドである。

有孔石製品（第84図１～５）

１、３、５はそれぞれ１個の貫通孔が穿たれている。いずれも研磨により整形されており、１、３は扁平である。２、４は穿孔途中のもので、４は表裏面から加工を行っている。１、３、４は完形品で、大きさは１が4.9×6.5cm、厚さ0.9cm、重さ36.0g、３が4.1×4.3cm、厚さ1.0cm、重さ20.0g、４が3.2×4.3cm、厚さ1.2cm、重さ17.5g を計る。石質は３、４、５が泥岩、１、２が安山岩である。出土地点は１がＱ－108、２がＳ－105、３がＴ－108、４がW－108、５がＶ－107グリッドである。

岩偶（第84図６）

人体をモチーフしているものと考えられる。浅い抉りにより頭部を表わし、両腕は浮彫的に表現されている。敲打及び工具により整形され、研磨により仕上げられている。円筒形を呈し、頭部及び下端部は丸味を帯びる。大きさは長さ10.3cm、胴径3.4×3.8cm、重さ 167.5g を計る。石質は凝灰質泥岩で、出土地点はU－105グリッドである。

線描石（第84図７）

二等辺三角形状を呈する扁平な石製品で、平坦な裏面に黒色顔料により線を描いている。モチーフははっきりしないが、まるで鳥が羽を広げているかのように見受けられる。また、同じ黒色顔料が塗り広げられたように付着している。丹念な研磨により整形されており、頂点及び底辺は丸味を帯び、側面は平坦である。大きさは長さ7.7cm、幅6.9cm、厚さ1.2cm、重さ81.0gを計る。石質は凝灰質泥岩で、出土地点はS－104グリッドである。

線刻石（第84図８）

S－106グリッドより出土したもので、研磨により平坦面を作り出し、四面体に整形している。２面に幅約５mmの直線状の線刻がなされている。線刻は底面には直交するように、側面には平行に施される。大きさは6.4×6.9cm、厚さ3.8cm、重さ116.0g を計る。石質は砂質凝灰岩である。

石刀（第84図９～17）

９点出土した。いずれも丹念な研磨により整形されている。９は柄頭が台形を呈し、柄背部は平坦となっており、その両側縁にある陰刻は背刃部へと続く。16にも背刃部に陰刻が施されている。陰刻は９が幅、深さとも１mm、16が幅３mm、深さ１mmを計る。背刃部はほぼ平坦なものと丸味を帯びるものがあり、断面形は両側面が直線的になるものと丸味を帯びるものとがある。14は破損部を再研磨しており、大きさは長さ12.4cm、幅2.5cm、厚さ1.5cm、重さ70.0g を計る。石質は13が紅簾片岩で、他は全て粘板岩である。出土地点は９がＹＲ－105、10、11がＳ－104、12がＴ－105、13、17がＶ－107、14がＳ－105、15がＷ－104、16がＲ－109グリッドである。

石冠（第86図70～73）

４点出土し、全て完形品である。いずれも正面、側面が、頭部から基底部まで一体となっている。全面を丹念な研磨により整形しているが、73の両側面はやや雑な作りで、凹凸がある。側面は二等辺三角形を呈し、底面は長方形、楕円形を呈する。70はやや小形で、正面は半円状を呈し、側面はやや丸味を帯びている。71の両正面中央に、それぞれ２個の凹みをもつ。大きさは70が長さ9.9cm、幅3.6cm、高さ6.7cm、重さ300g、他が長さ12.0～13.7cm、幅4.8～6.3cm、高さ7.5～8.5cm、重さ540～860g を計る。石質は70が緑色凝灰岩、71が石英閃緑玢岩、72が火山礫凝灰岩、73が凝灰岩である。出土地点は70が不明、71がＴ－108、72がＵ－107、73がＵ－105グリッドである。

円盤状石製品（第84図18～30、85図31～45）

28点出土し、うち17点が完形品である。打ち欠き加工だけのものと、全面及び一部を研磨加工しているものとに分けることができる。打ち欠き加工だけのものは、扁平な加工に適したものを使用している。研磨加工のものは、その度合が様々である。側面は平坦なものと、やや丸味を帯びるものがあるが、表裏面はほぼ平坦である。大きさは径2.1～5.5cmで、4.5cm前後が多く、厚さは0.6～1.4cmで1.0cm前後が多い。重さは2～62gで、ばらつきがある。石質は泥質凝灰岩13点、凝灰質泥岩10点、凝灰岩3点、砂質凝灰岩2点である。

球状石製品（第85図46～50）

6点出土し、うち4点が完形品である。研磨により球状にするものと、平坦面を作り出し多面体とするものがある。1個の凹みをもつが、やや不明瞭なものもある。大きさは径3.2～6.7cm、高さ2.5～5.2cm、重さ12.5～130.0gを計る。石質は48が火山礫凝灰岩で、他は全て泥質凝灰岩である。

軽石製石製品（第86図74～85）

78、82は長軸方向縁辺に1個の貫通孔を有するもので、82は丹念な研磨により楕円形に整形され、断面はかまぼこ状を呈する。大きさは長さ15.1cm、幅8.3cm、厚さ3.3cm、重さ60.0gを計る。84、85は短軸縁辺に抉れをもつもので、重さはそれぞれ27.5g、45.0gを計る。これら4点は浮子と考えられる。

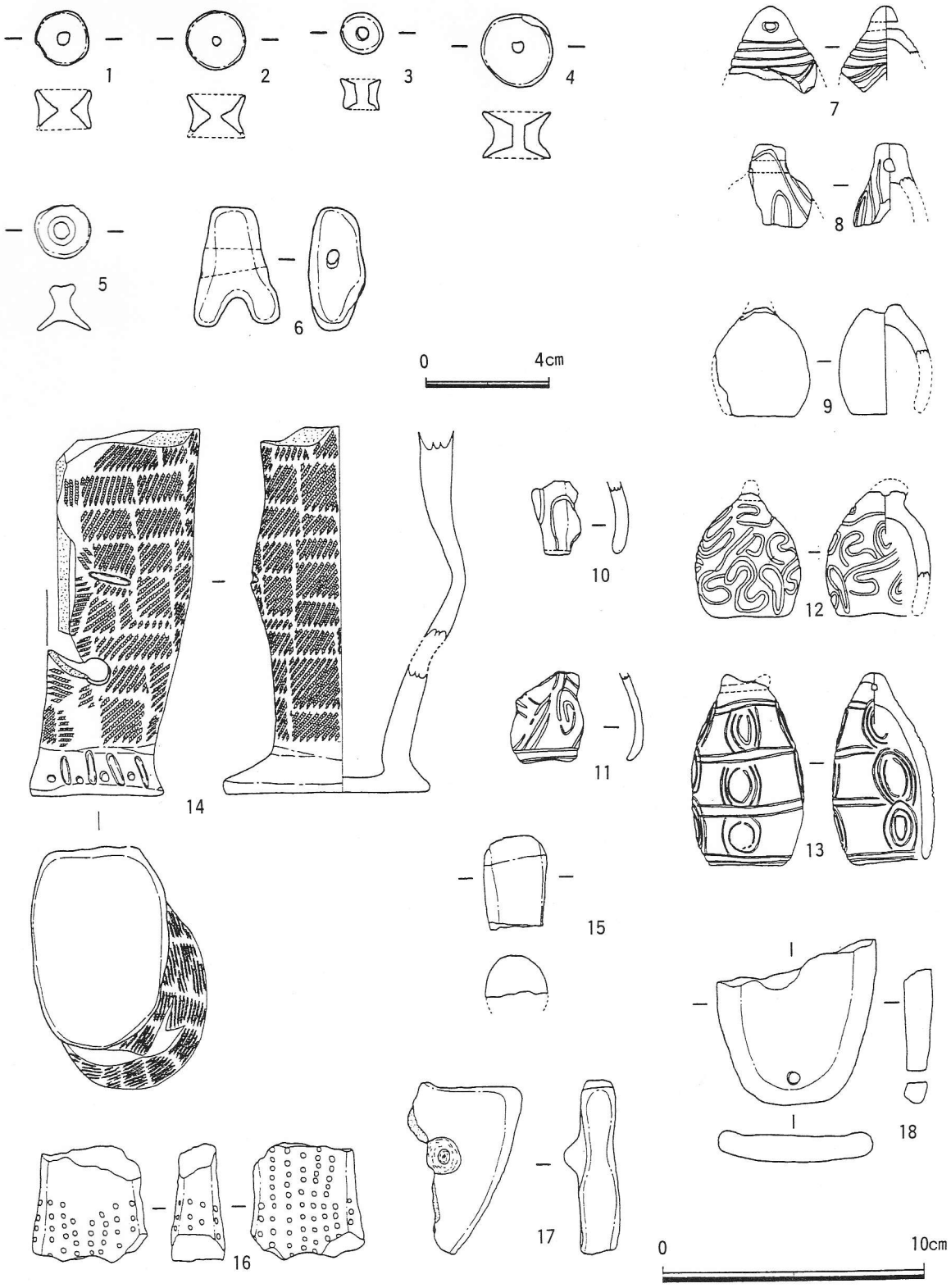
貫通孔、抉れのないものは12点出土した。形状、大きさにはばらつきがあるが、扁平なものが多い。79は丹念な研磨により楕円形に整形されており、底面、側面は平坦である。大きさは長さ15.5cm、幅10.5cm、厚さ3.8cm、重さ220.0gを計る。

その他の石製品（第85図51～69）

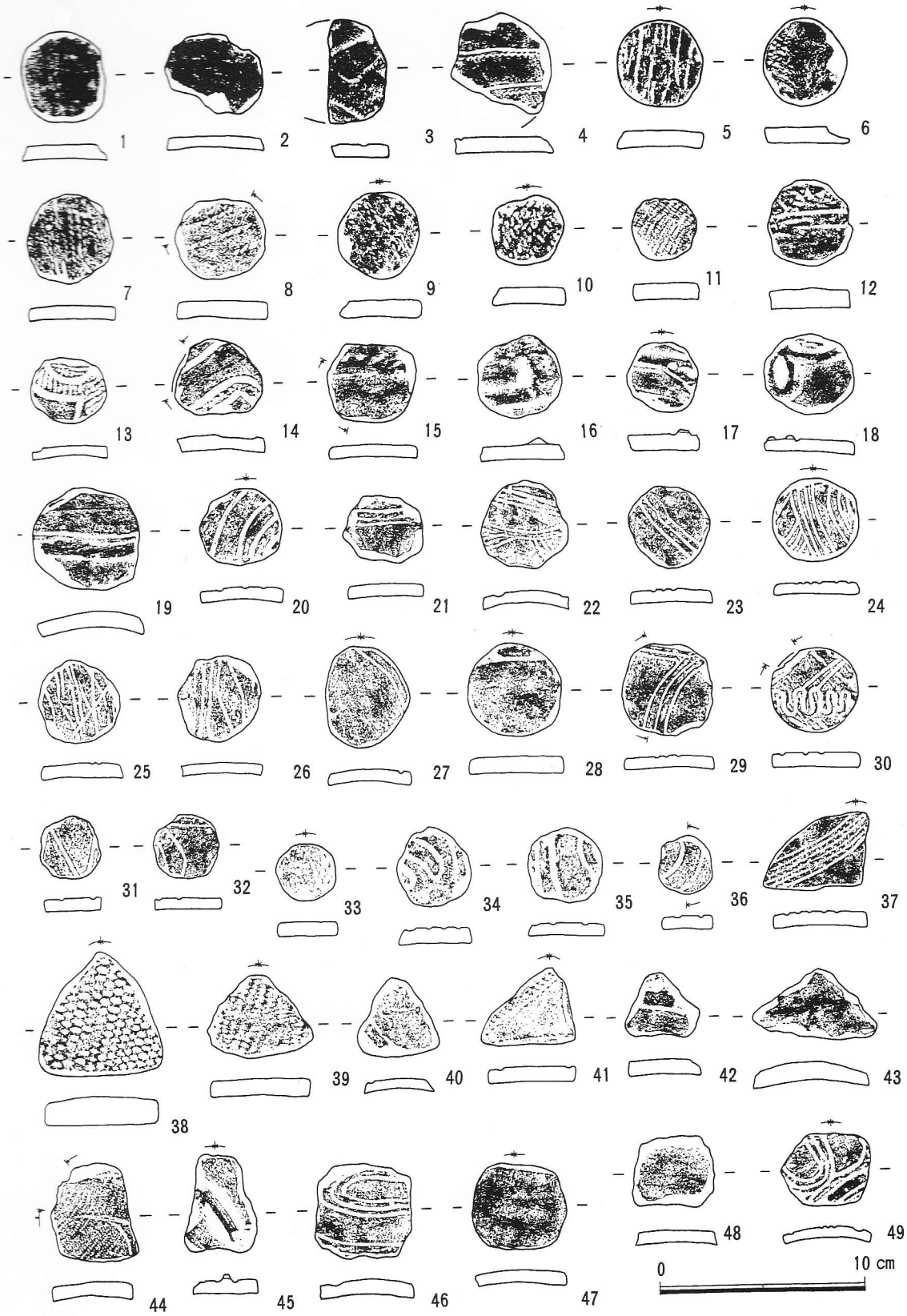
67、68は石碗を小形にしたような製品で、67は完形品である。68は口縁部を微隆起状に削り出している。67の大きさは口径4.0cm、器高2.0cmを計る。石質はいずれも凝灰岩である。

54、57～62、64、66、69は泥質凝灰岩を使用しているやや扁平な製品である。三角形、方形を呈するもの、不定形なものがあるが、いずれも全面を研磨整形している。同様の石材を用いた製品は、他に3点出土しており、計13点を数える。

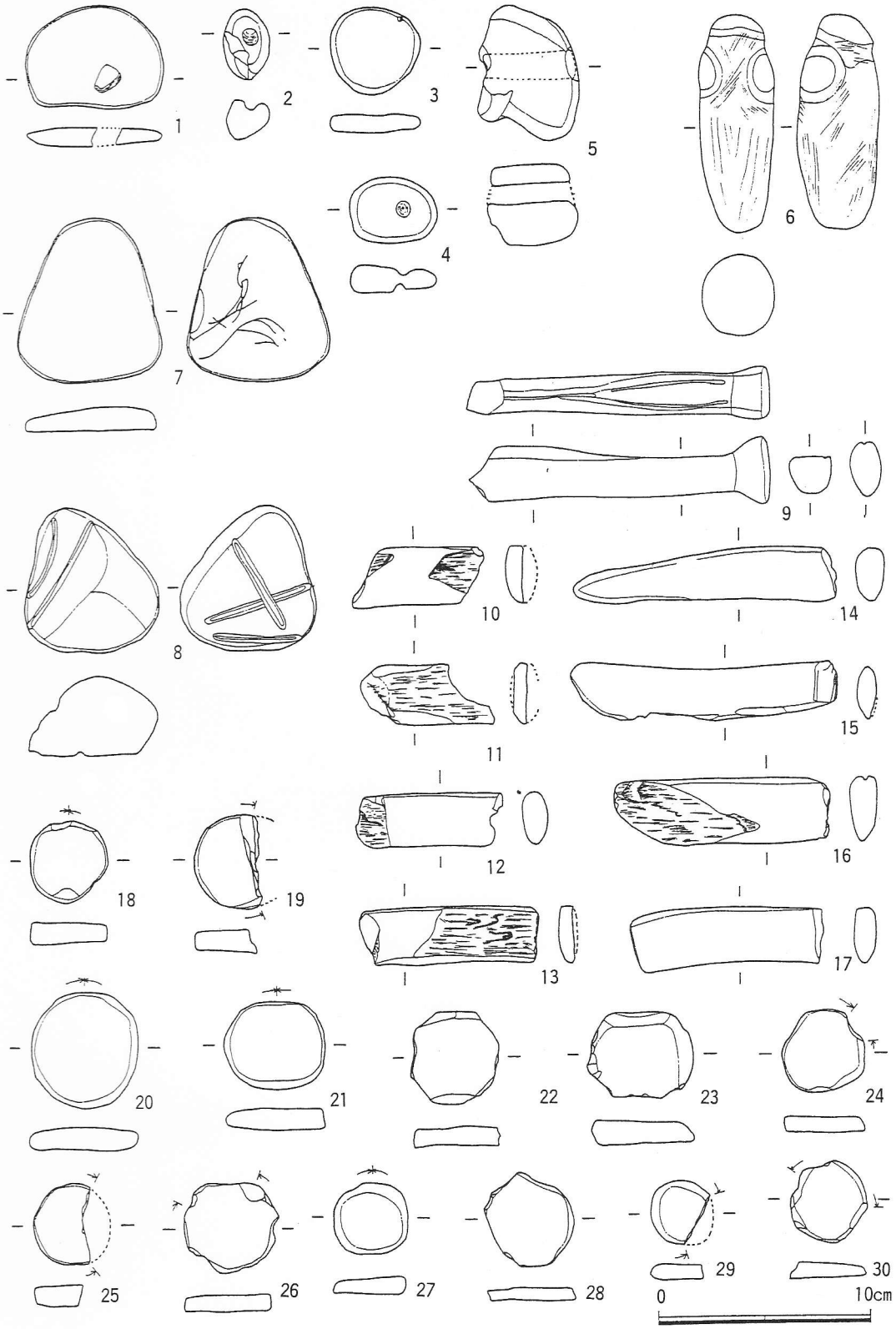
51～53、55、56は全面を丹念な研磨により整形している。51、53は裏面が平坦で、断面はかまぼこ状を呈する。63、65は扁平な石材を使用し、その一部を研磨整形しているものである。石質は51が頁岩、52がチャート、53、55が凝灰質泥岩、56が粘板岩である。　（佐藤　樹）



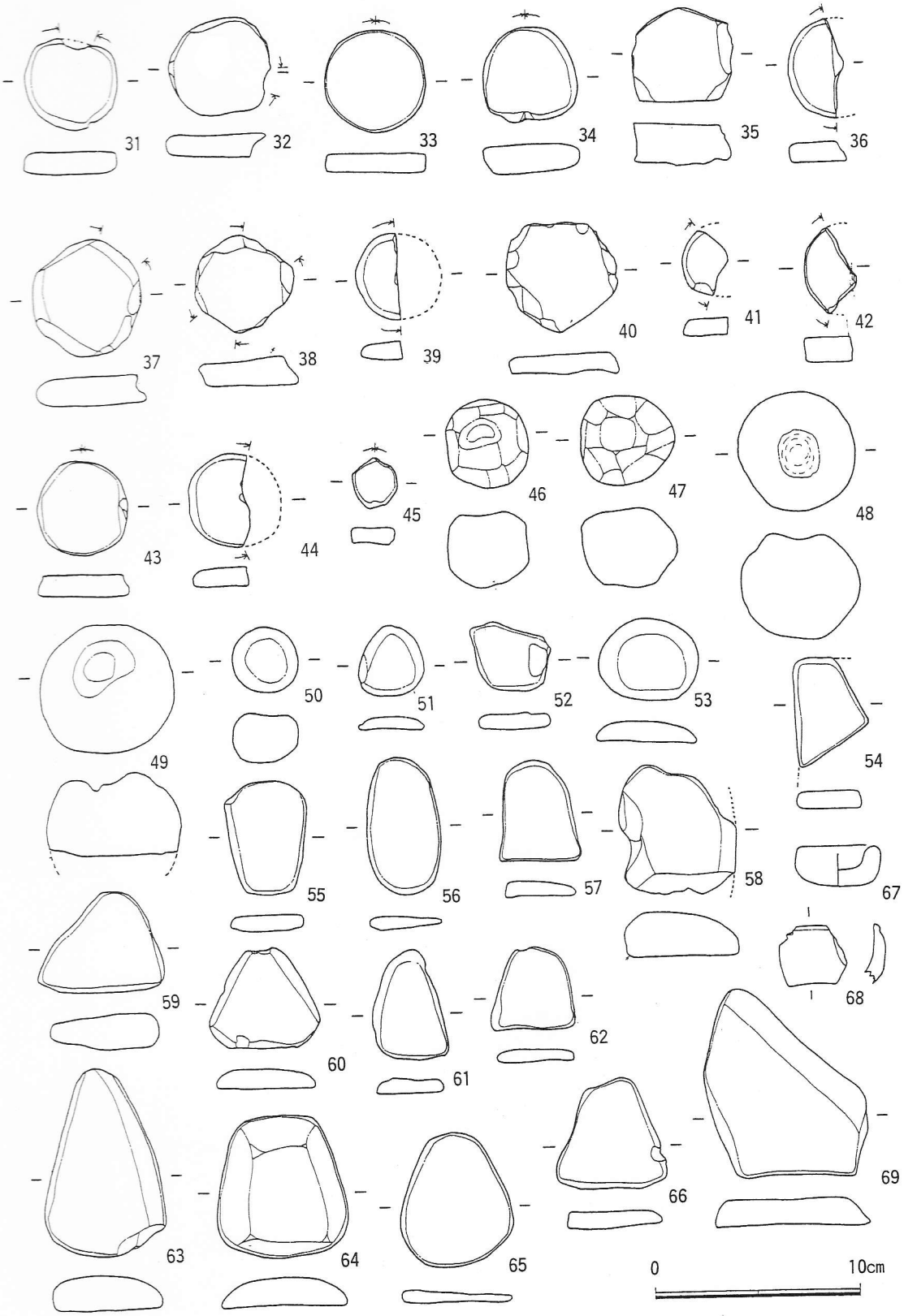
第82図　遺構外出土土製品実測図(1)



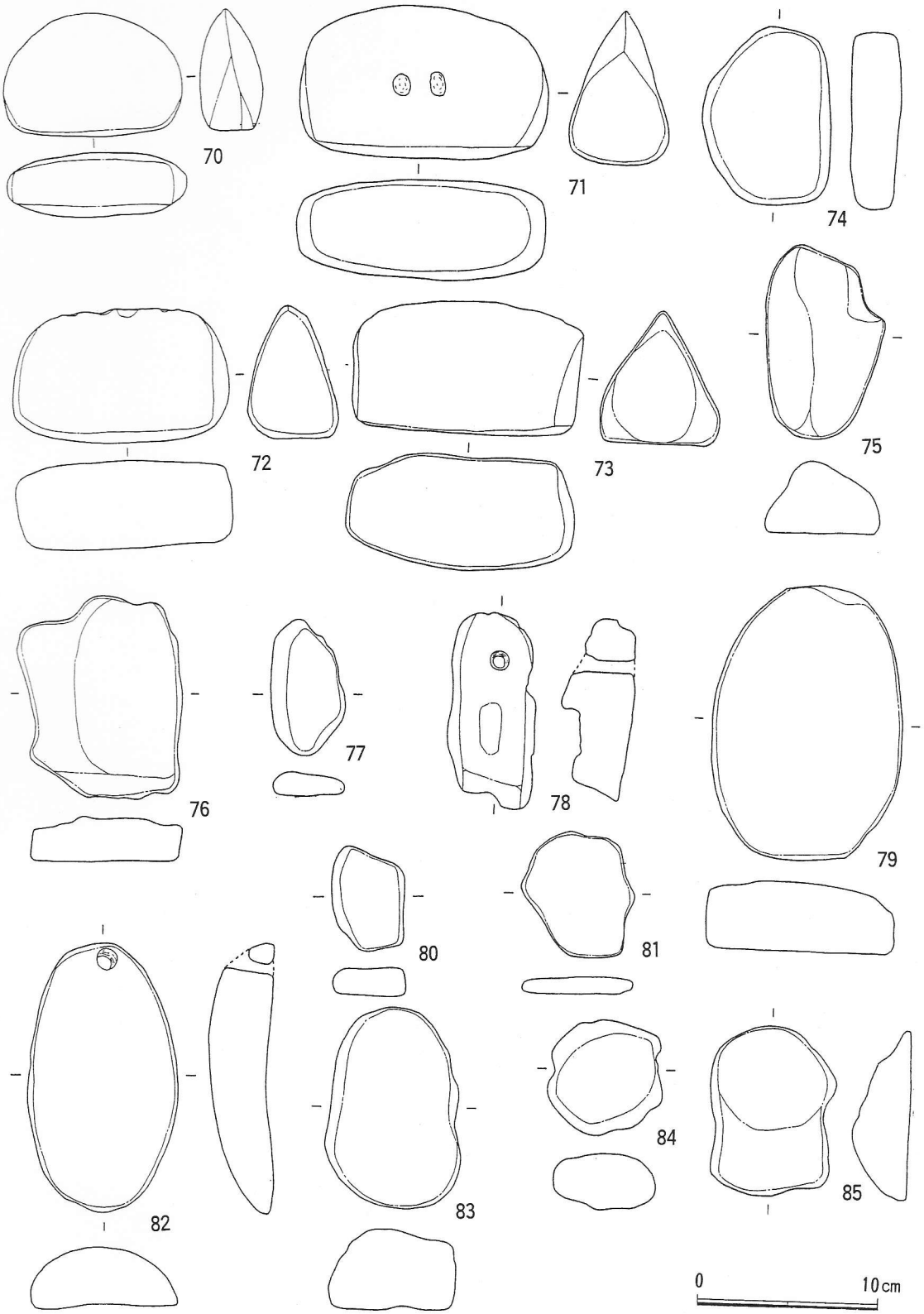
第83図　遺構外出土土製品実測図(2)



第84図　遺構外出土石製品実測図(1)



第85図　遺構外出土石製品実測図(2)



第86図　遺構外出土石製品実測図(3)

第Ⅴ章　F_1区の検出遺構と出土遺物（歴史時代）

F_1区において検出された歴史時代の遺構は、竪穴住居跡４軒、土壙３基である。これらの遺構は調査区の位置する台地縁辺部に沿って分布している。

１．竪穴住居跡

第401号竪穴住居跡（第87図、91図１、４）

調査区北側、W・X－106グリッドに位置する。Ⅲa層上面において浮石層を内包する黒色土の落ち込みを確認した。なお、住居跡北側は調査区外に延びることから未発掘である。

平面形は方形を呈する。規模は長軸337cm、短軸300cm、底面積約8.01m²を測る。主軸方向はN－70°－Wである。壁は西壁がわずかに外傾するほかは、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高41～48cmを測る。床面はカマド及びカマド前庭部を除き貼床が施されており、平坦で、堅く踏みしめられていた。床面直上には床材と考えられる板材と、これを覆うように多量の炭化植物（植物種：カヤ）が認められた。柱穴は確認できなかった。堆積土は自然堆積で、６層に分層された。

カマドは南壁中央よりやや西寄りに設置されている。カマド袖部・天井部は24～32cm大の扁平な石を芯材とし、これに粘土を貼り付けて構築している。煙道部は燃焼部からゆるやかに壁外へ延びており、半地下式の構造を呈する。前庭部は径80cmの略円形を呈し、焼土粒が充塡されていた。

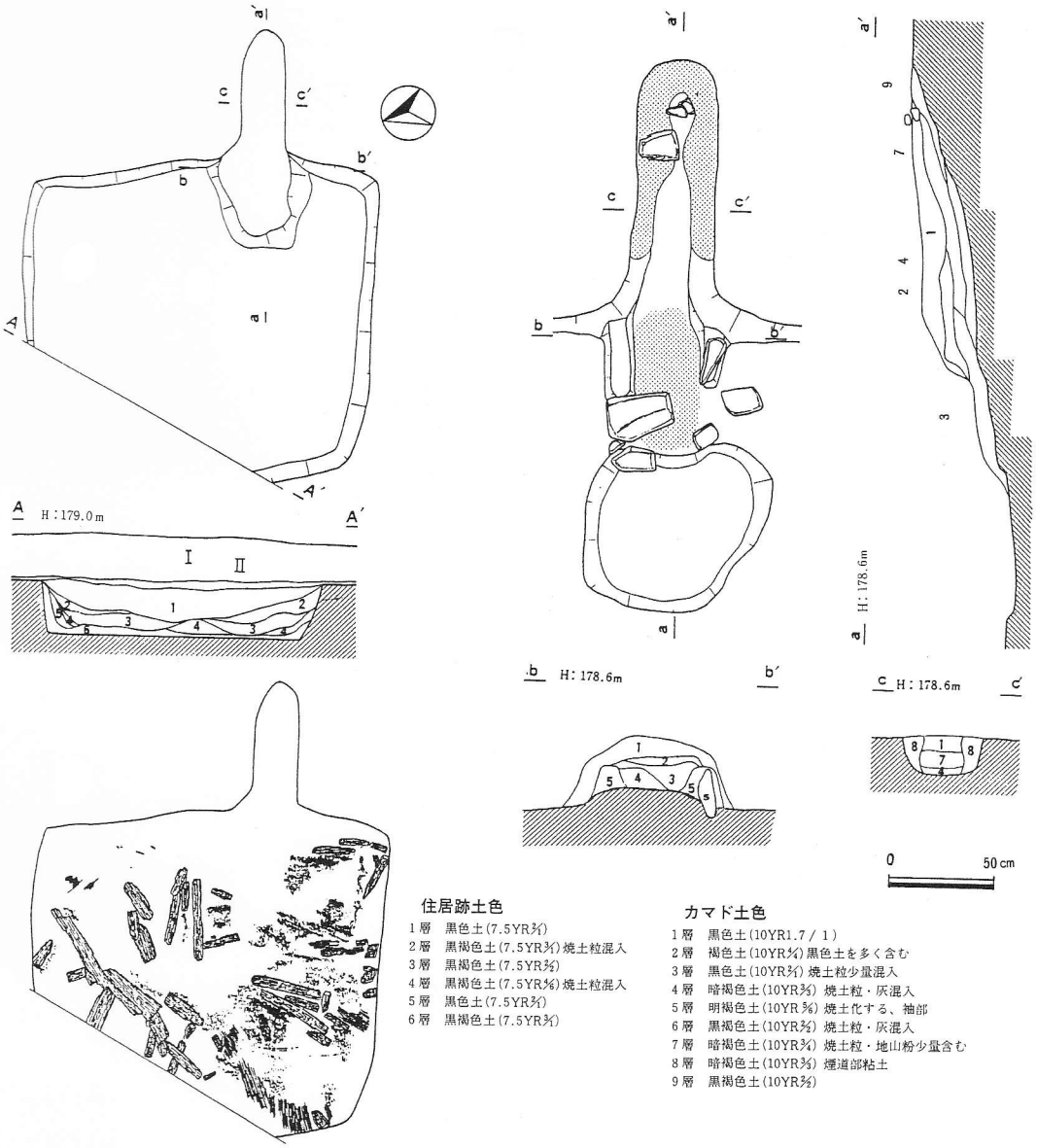
遺物は、住居跡より復元土器１点（第91図１）、土器片200余りが出土した。１はカマド北側より出土した口縁部が大きく外傾する長胴の甕形土師器である。胴部から底辺部にかけての外面には箆削り、内面には箆なでの調整が施されている。底面には木葉痕がみられる。口径17.5cm、底径9.3cm、器高31.8cm（推定）を測る。色調は橙色を呈する。４は粘土紐巻き上げにより成形された口縁部が外反する甕形土師器である。胴部外面には軽い箆削り、内面に横位の箆なでが施されている。

本住居跡の構築時期は、大湯浮石降下以前、平安時代前半と考えられる。

第402号竪穴住居跡（第88図、91図２、３、92図１～３、93図１、３、９、13、14、94図１～５）

調査区のほぼ中央部、T－103グリッドに位置する。IIIa 層上面において浮石粒を混入する黒褐色土の落ち込みと、これに付設されたカマド煙道部を確認した。

平面形は方形を呈する。規模は長軸400cm、短軸361cm、床面積12.9m²を測る。主軸方向はN－21°－Wである。壁はいずれも床面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高は51～57cmを測る。床面はカマド及びカマド前庭部を除き貼床が薄く施されており、平坦で、堅く踏みしめられていた。床面直上、特に住居跡北半には多量の炭化した木材（樹種：ヤナギ）と植物（植物種：カヤ）



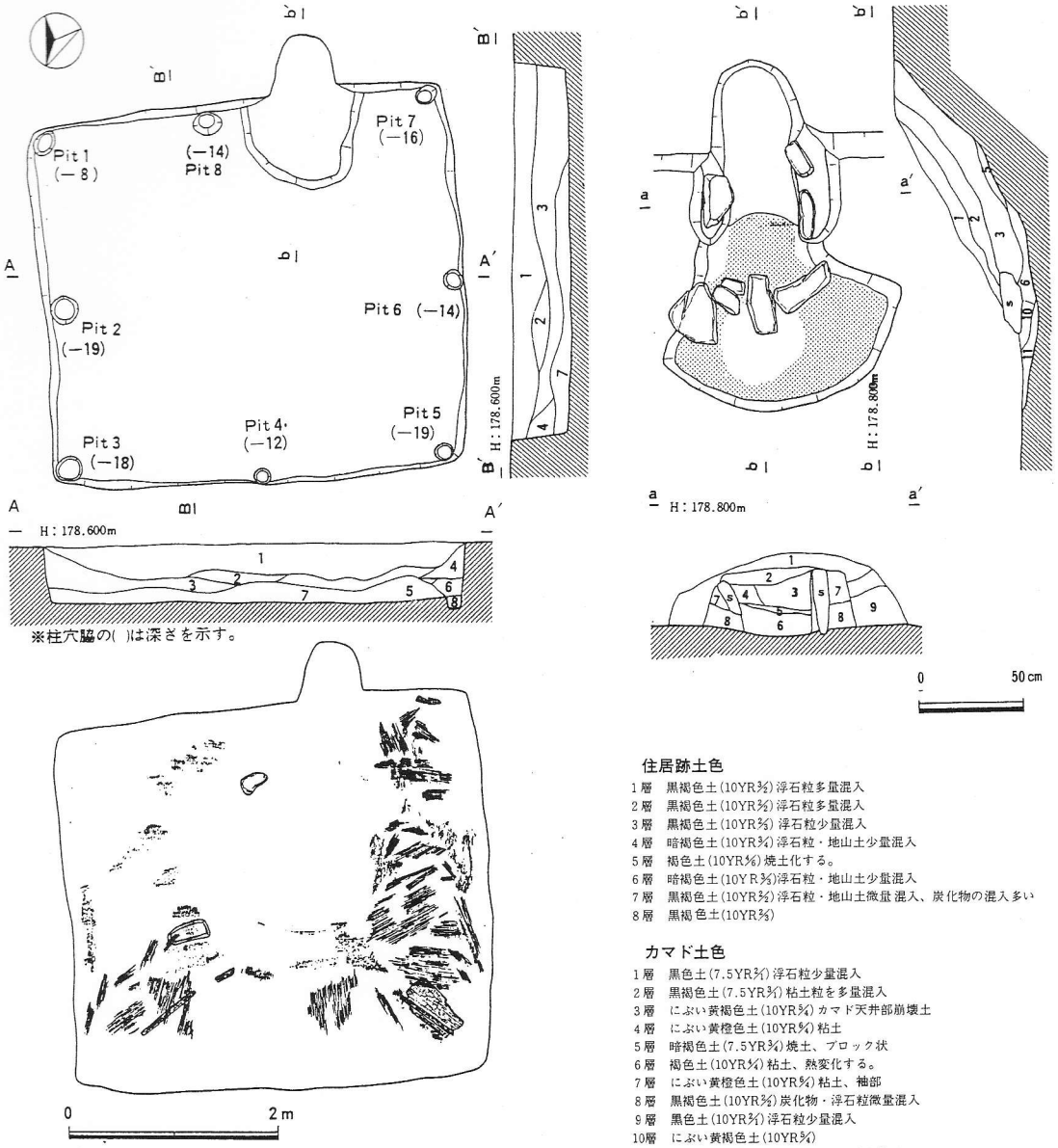
第87図　第401号竪穴住居跡、カマド実測図

が認められた。柱穴は住居跡各隅と各隅間を二分する位置に配置されており、径14～20cm、深さ13～20cmを測る。堆積土は自然堆積で7層に分層され、各層に浮石粒の混入が認められた。

カマドは南壁中央よりやや西寄りに設置されている。カマド袖部・天井部は、20～32cm大の扁平な石を芯材とし、これに粘土を貼り付けて構築されている。煙道は燃焼部から急角度で壁

外へ立ち上がる。前庭部は120×70cm、深さ７cmを測り、焼土粒・灰が充填されていた。

遺物は復元土器２点（第91図２、３）、土師器・縄文土器片442点（第92図１～３）、石器17点（第93図１、３、９、13、14）、板状土製品５点（第94図１～５）が出土しているが、該期のものである土師器の出土量は少ない。２は北東部床面より出土したもので、口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がる甕形土師器である。胴部上半から底辺部には篦削り、内面に篦なでの調整



住居跡土色

1層　黒褐色土(10YR3/2)浮石粒多量混入
2層　黒褐色土(10YR3/2)浮石粒多量混入
3層　黒褐色土(10YR3/2)浮石粒少量混入
4層　暗褐色土(10YR3/4)浮石粒・地山土少量混入
5層　褐色土(10YR5/6)焼土化する。
6層　暗褐色土(10YR3/4)浮石粒・地山土少量混入
7層　黒褐色土(10YR3/2)浮石粒・地山土微量混入、炭化物の混入多い
8層　黒褐色土(10YR3/2)

カマド土色

1層　黒色土(7.5YR3/1)浮石粒少量混入
2層　黒褐色土(7.5YR3/1)粘土粒を多量混入
3層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)カマド天井部崩壊土
4層　にぶい黄橙色土(10YR5/4)粘土
5層　暗褐色土(7.5YR3/4)焼土、ブロック状
6層　褐色土(10YR5/4)粘土、熱変化する。
7層　にぶい黄橙色土(10YR5/4)粘土、袖部
8層　黒褐色土(10YR3/2)炭化物・浮石粒微量混入
9層　黒色土(10YR3/1)浮石粒少量混入
10層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)
11層　黒色土(10YR1.7/1)焼土粒、炭化物混入

第88図　第402号竪穴住居跡・カマド実測図

が施されている。底径11.5cm、口径（20.1）cm、器高（28.7）cmを測る。色調は橙色を呈する。3はカマド内より出土した甕形土師器で、胴部下半を欠く。少し膨らみのある胴部から口縁部が内湾気味に立ち上がり、胴部外面に軽い箆削り、内面に箆なでの調整が施されている。口径24cmを測り、色調は橙色を呈するが、二次火熱により褐灰色を呈する部分もある。

本住居跡の構築時期は、出土遺物、時期決定の鍵ともいえる浮石の混入から、大湯浮石降下以後の平安時代後半と考えられる。

第404号竪穴住居跡　（第89図、91図6～8、92図4～10、91図9、10、93図2、10～12、15～17、94図6、7）
94図6、7）

調査区南側、Q・R－101、102グリッドに位置する。IIIa 層上面において浮石粒を混入する黒色土の落ち込みを確認した。本住居跡南半は未発掘である。

平面形は方形を呈するものと考えられる。規模は北壁長676cmを測る。壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり、壁高46～55cmを測る。床面は貼床が施されており、平坦で、堅く踏みしめられていた。床面直上に炭化した木材、植物が散存して認められた。柱穴は住居跡各隅と各隅間を二分する位置にあり、径33～35cm、深さ17～39cmを測る。堆積土は自然堆積で10層に分層され、各層に浮石粒の混入が認められた。なお、床面において第421号、422号、427号土壙が確認された。これら土壙には住居跡床面から土壙内へ連続する炭化物が認められることから、本住居跡に伴った付属施設と判断された。

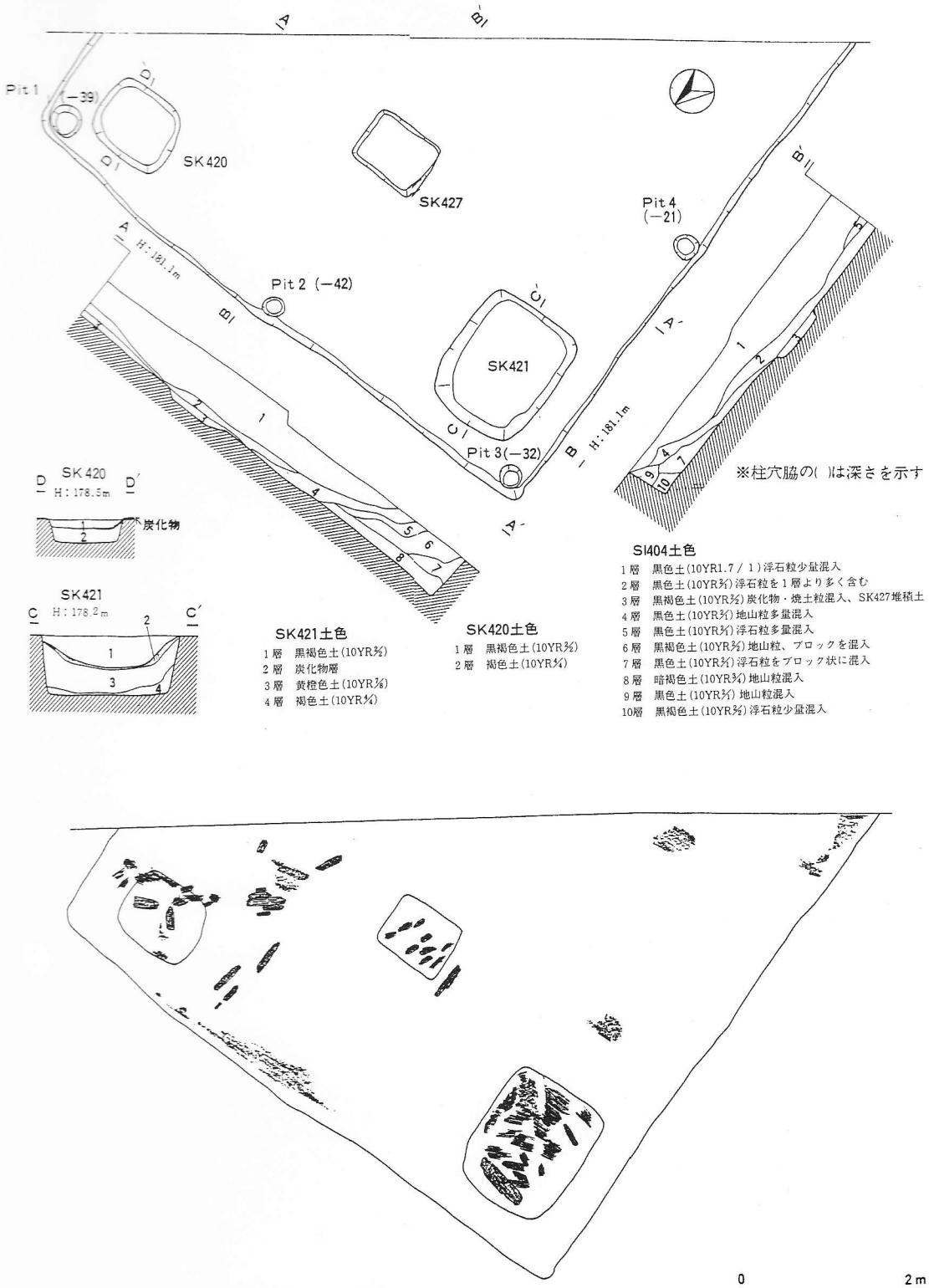
遺物は、土師器（第91図6～8）、縄文土器片（第92図4～10）412点、鉄製品2点（第91図9、10）、鉄滓1点、石器7点（第93図2、10～12、15～17）、板状土製品、石製品（第94図6、7）が出土したが、該期のものは極めて少ない。6、7は床面出土の甕形土師器片である。6は膨らみのほとんどない胴部から直線的に立ち上がるもので、胴部外面に箆削り、内面に箆なでの調整が施されている。外面に巻き上げ痕がみられる。色調は橙色を呈する。7は胴部中ほどの破片で、切断を目的とした沈線がみられる。8は回転糸切り技法によりロクロより切り離された坏形土師器で、浅黄橙色を呈する。この他に床面より2点の鉄製品、1点の鉄滓が出土した。9は釘、10は小刃と考えられる。

本住居跡の構築時期は、出土遺物、堆積土への浮石の混入状況から、大湯浮石降下以後の平安時代後半と考えられる。

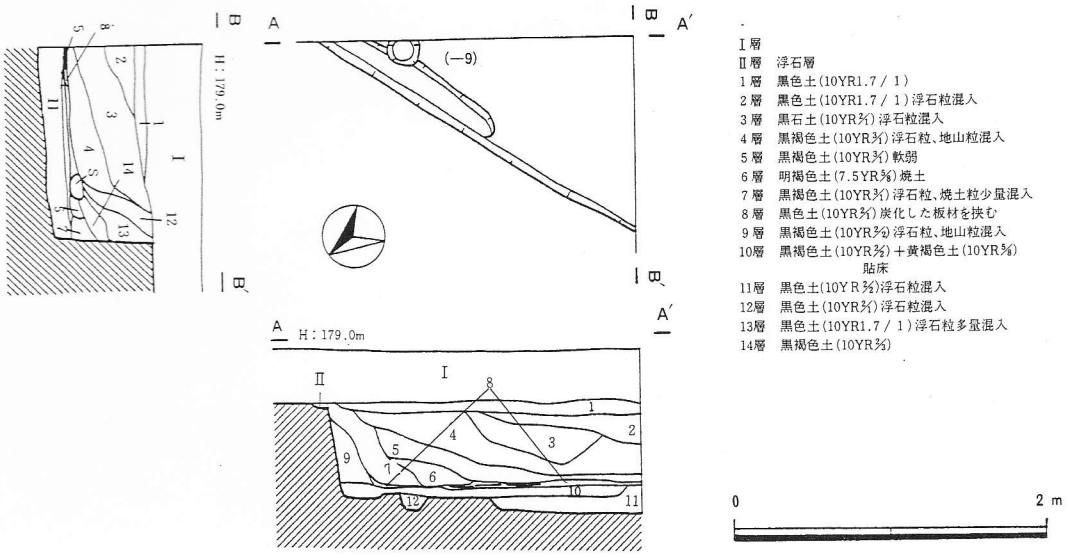
第409号竪穴住居跡（第90図、92図11～14）

調査区東部、Q－106グリッドに位置する。II層上面において黒色土の落ち込みを確認した。本住居跡は、北壁の一部を確認したのみで、平面形、規模は不明である。

壁は、床面より垂直に立ち上がり、壁高54cmを測る。床面は、貼床が施され、床材と考えられる板材が土層図で確認された。床面の壁寄りに、径20cm、深さ11cmの柱穴状ピットと幅14cm、



第89図　第404号竪穴住居跡、第420・421・427号土壙実測図



第90図　第409号竪穴住居跡実測図

深さ6cmの壁溝が確認された。

遺構内より出土した遺物は20点（第92図11～14）と少なく、その内該期遺物である土師器は2点である。いずれも甕形土師器の胴部破片で、外面に箆削り、内面に箆なでの調整が施されている。

本遺構の時期は、時代決定の鍵層である大湯浮石層を切って構築していることから、平安時代後半と考えられる。

2．土　　壙

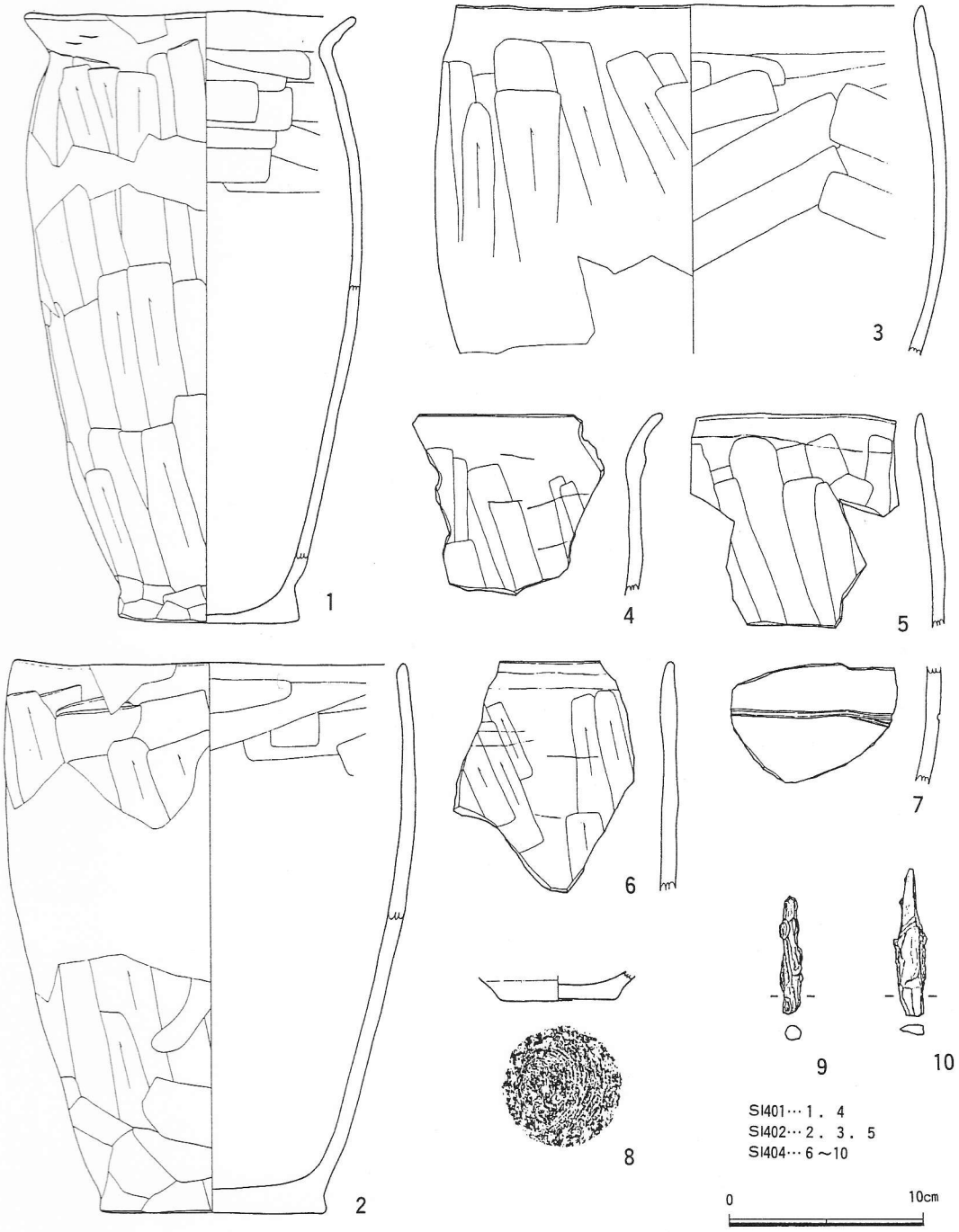
第420号土壙（第89図）

第404号竪穴住居跡、北側床面において確認した。平面形は長方形を呈し、長軸96cm、短軸83cm、深さ28cm、底面積0.47m²を測る。長軸方向はN－78°－Eである。底面は鍋底状を呈し、軟弱である。壁は底面より外傾して立ち上がる。南・北壁面の一部は火熱により焼土化していた。

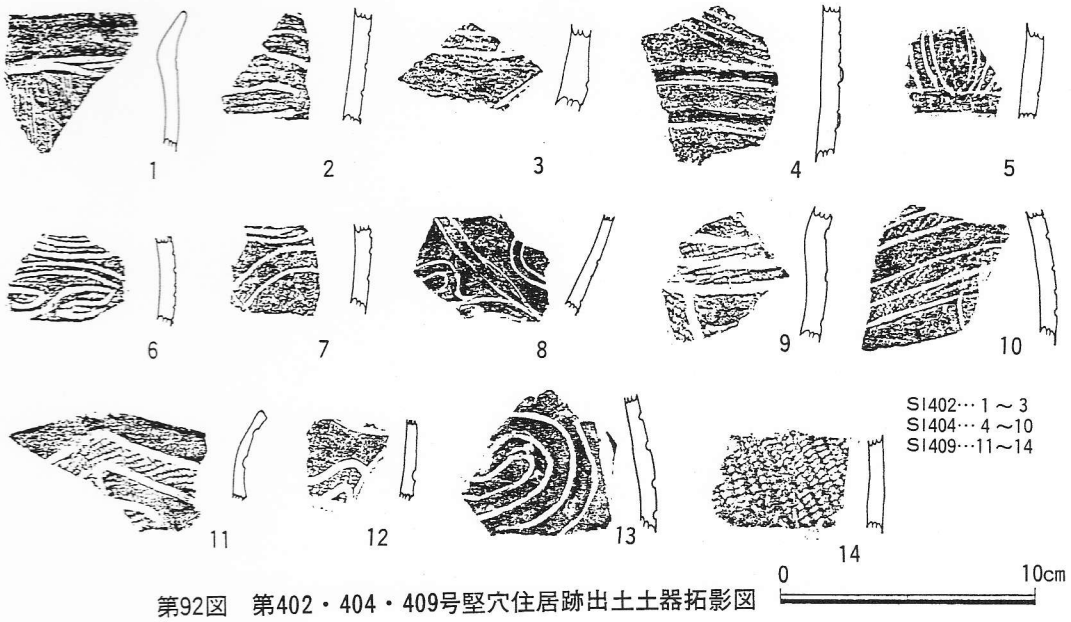
第421号土壙（第89図）

第404号竪穴住居跡、西側床面において確認した。平面形は長方形を呈し、長軸150cm、短軸120cm、深さ62cm、底面積1.16m²を測る。長軸方向はN－11°－Wである。底面は鍋底状を呈し、軟弱である。壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土は炭化物層を境とし自然・人為堆積とに区別され、4層に分層された。炭化物層は第404号住居跡床面において認められたものと一連のものである。遺物は出土しなかった。

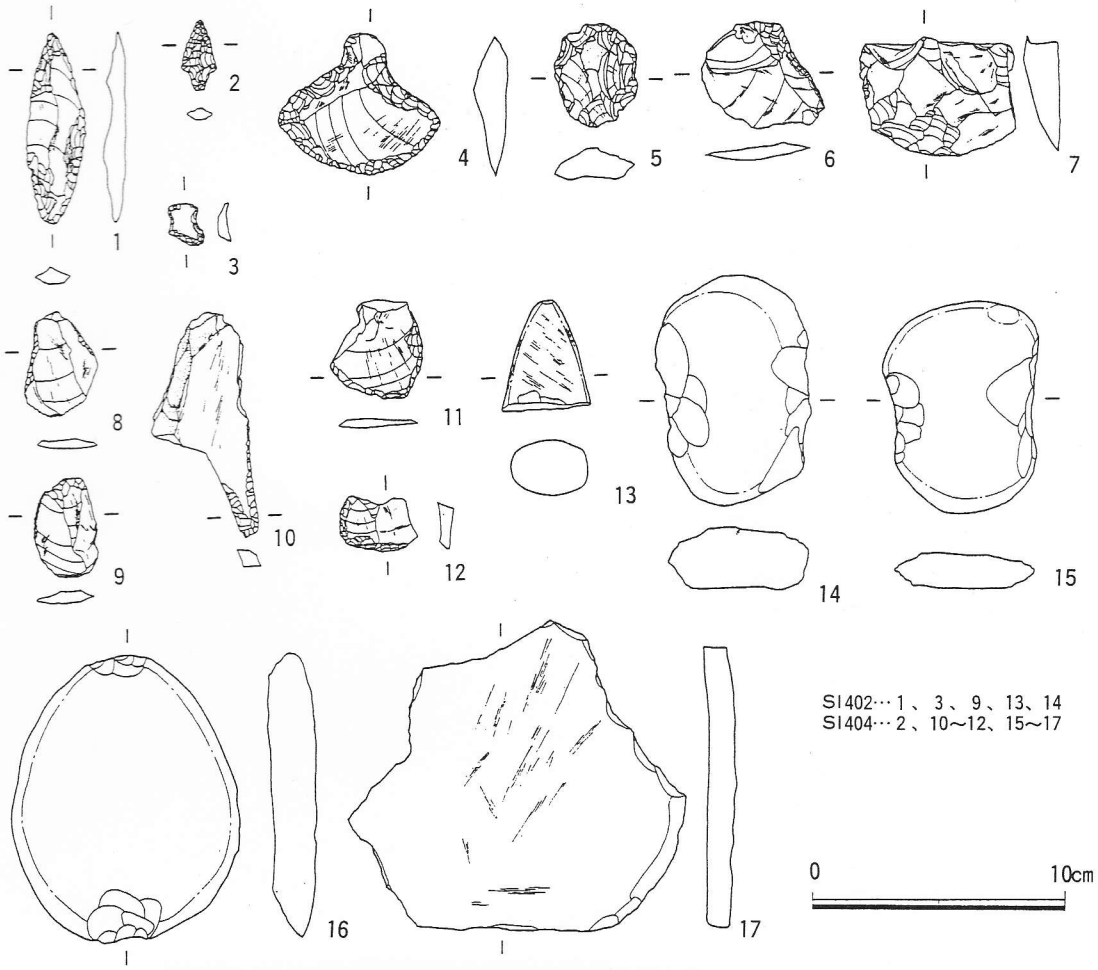
構築時期は、第404号住居跡と同様、平安時代後半と考えられる。



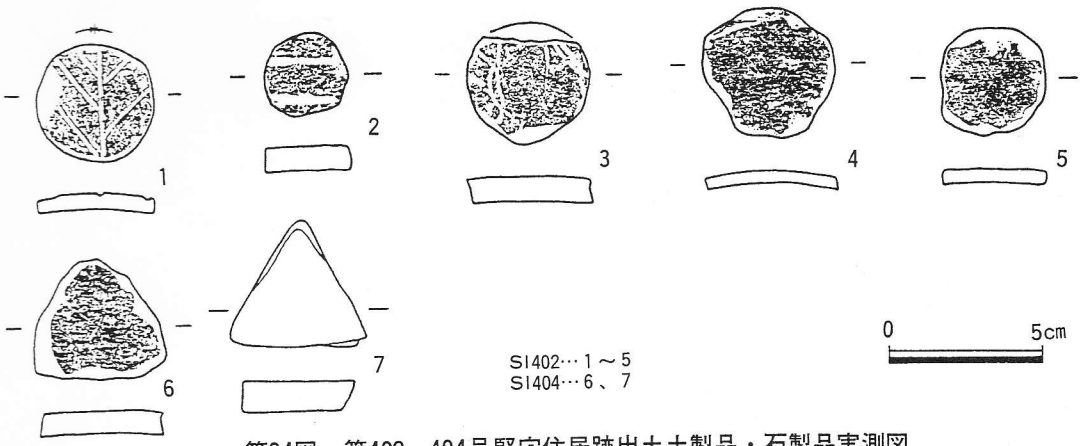
第91図　第401・402・404号竪穴住居跡出土遺物実測図



第92図　第402・404・409号竪穴住居跡出土土器拓影図



第93図　第402・403号竪穴住居跡出土石器実測図



第94図　第402、404号竪穴住居跡出土土製品・石製品実測図

堆積土は2層に分層され、層間には第404号住居跡床面より連続した炭化物が入り込んでいた。遺物は出土しなかった。

構築時期は、第404号住居跡と同様、平安時代後半と考えられる。

第427号土壙（第89図）

第404号竪穴住居跡、床面中央部において確認した。平面形は長方形を呈し、長軸80cm、短軸66cm、深さ11cm、底面積0.4m²を測る。長軸方向はN－79°－Eである。底面は浅い鍋底を呈し、軟弱である。壁は底面より外傾して立ち上がる。堆積土は単一層で、上面に炭化物が認められた。遺物は出土しなかった。

構築時期は、第404号住居跡と同様、平安時代後半と考えられる。

3．遺構外出土遺物

遺構より出土した土師器は、B4版サイズのナイロン袋で2袋余りである。これらは歴史時代の竪穴住居跡付近、基本層序Ⅰ～Ⅲa層上面から出土した。。

出土した土師器は、すべて甕形の破片であり、その他の器形のものは見あたらなかった。甕形土師器の口縁部形態は、張りの小さい胴部からわずかに内湾気味に立ち上がるもののほか、外反するものがみられる。器面調整は、胴部外面に、縦位の箆削りを施しているが、削り後箆なでを施こすものもある。内面は横位の箆なでを施こすものが多い。胎土には小石を含む。焼成は良好で、色調は橙色～にぶい橙色を呈する。　（藤井安正）

第VI章　自然科学的調査

1．大湯環状列石周辺の古環境

(1)　試料及び処理方法

ここであつかった土壌試料はF_1区のR－99グリッドから採取した腐植土である。試料採取地点の層序は下位よりⅢd（サンプル№1～3）、Ⅲb（サンプル№4～6）、Ⅲa（サンプル№7～8）の8点（第95図）を採取した。試料の処理は土壌 250gをビーカーにとり、HF処理→水洗い→アルカリ処理→水洗い→比重分離→水洗い→アセトリシス処理→水洗い→封入の順に行い、各試料のプレパラートを作成した。

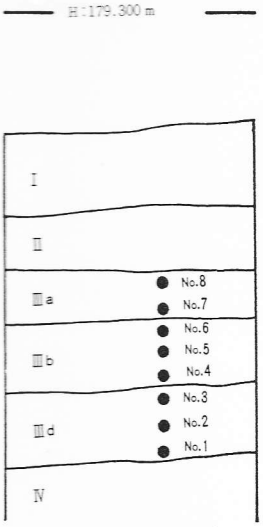
(2)　分析結果

プレパラートの検鏡にあたっては通常 400倍で行い、樹木花粉が 250個以上計数するまで花粉・胞子を同定したが、全般に出現数が少なくダイアグラムを作成することができなかった。出現したのは樹木花粉1科13属、草本花粉4科で、その他に未同定の花粉・胞子、腐植され形態が変化して同定不能の花粉があった。B区の分析量（大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書－2）より約2倍の量を処理したので出現個体数が多くなったが、今まで述べてきたように、花粉の乾燥・物理的な作用・バクテリア等の影響で本来の環境を復元することは容易でないと考えられる。

今回の分析結果の特徴は、B区の分析では出現しなかったトウヒ属・スギ属・クリ属の花粉が検出されたことである。トウヒ属は現在鹿角盆地では自然植生として存在せず、これからのデータを蓄積して考察する必要がある。遺跡から南方2km離れた蛇沢湿原の大湯浮石層直上の堆積物からもトウヒ属の花粉出現のデータを得ている。スギ属の花粉は本来縄文晩期以降に急激に増加してくる傾向にあることはいろいろな知見から言われてきたが、今回の分析（第96図）では個体数が少ないがすべての層準から出現している。遺跡周辺に生育していたのかについてはトウヒ属同様確定できないが、クリ属については今までの発掘で炭化した堅果がたくさん出土していることを反映している。15×13μの大きさで他の花粉より小型で、しぼんでいるものが多かった。

マツの花粉はすべて二葉マツ類のもので、アカマツと考えられる。アカマツは二次林の主要構成種でブナ・ミズナラ・コナラ・ケヤキ等の落葉広葉樹林が大勢を占めていたなかで、二次林も一応の広がりを見せていたものと考えられる。また、B区の花粉の構成より豊かになり、古植生復元に資料を提供できたと思う。これからは生活面を中心とした500g以上の大量の土壌を分析する段階にきている。次年度は生活面中心に水平に試料を採取し分析したいと考えている。

（成田典彦）



第95図　採取層序と採取番号

	トウヒ属	マツ(二葉)属	スギ属	ブナ属	コナラ亜属	クリ属	ヤナギ属	クマシデ属	ニレ・ケヤキ属	ハンノキ属	オニグルミ属	モチノキ属	シナノキ属	ツツジ科	イネ科	カヤツリグサ科	キク科	ユリ科
No. 8	2	12	7	15	8	1	4	・	8	4	10	3	1	・	14	2	7	1
No. 7	3	10	3	16	5	・	3	・	7	5	6	4	1	1	13	・	8	・
No. 6	1	9	1	28	12	2	3	・	4	3	4	・	・	2	12	1	11	2
No. 5	・	7	4	18	7	1	2	1	2	2	5	3	3	3	5	2	10	・
No. 4	・	5	3	26	13	1	3	・	3	1	7	1	2	5	10	・	9	2
No. 3	1	6	2	13	6	1	1	1	4	3	9	・	・	3	8	・	7	1
No. 2	1	8	3	18	9	・	・	・	5	2	6	2	・	2	6	1	5	・
No. 1	2	7	4	21	8	・	・	1	1	3	7	3	・	1	7	・	3	1

第96図　検出された花粉化石の固体数

2．F_1区Ⅲd～Ⅴ層中の礫層について

F_1区のⅢd ～Ⅴ層中には大小さまざまな礫が混在している。形は亜円～円礫のものが多い。礫種は拳大～人頭大の大礫から巨礫で比較的バラツキが少ない。平面的に隙間なく敷きつめられた印象で、周囲の堆積状況から自然堆積物と考えられる。

対岸の腰廻には関上面の特徴である厚さ20m に達する鳥越二次堆積層が発達している。鳥越軽石層中の礫としては軽石質の円～角礫のものが多い。二次堆積層は地形面に沿って火山灰の基質の中に各種の礫が混在している。上部ほど成層しているが、礫の並び方から水の作用によると考えられる。礫の大きさは15～20cm大が多いが中には120～170cmに達する巨礫も含まれる。

F_1区の礫の岩石は安山岩質のものが多いが、他に斑岩類、火山礫凝灰岩、泥岩など二次堆積層中の礫と似ていること、F_1区が段丘面の先端部に位置し、地形的に近くに流路があったと考えられること、などからこれらの礫は水の作用で運ばれてきた可能性が高いと考えられる。しかし、他の調査区にはこのような礫が認められないことや、Ⅲd ～Ⅴ層にわたって存在していることなど問題点も多い。今後、周辺地域の調査をすすめ、礫の供給源を明らかにしたい。

3．大湯軽石層中の石質岩片について（第97図）

大湯環状列石周辺遺跡に分布する大湯軽石層（いわゆる oyu-1）には数枚の層状構造が認められる。下部は黒色土との境界に径1cm大の比較的大きな軽石を含む層で黒色土との境目はシャープである。中間部は粒径1～3mmの軽石や石質岩片から成る。岩片は灰～黒灰色の不定角礫状でやや大きい軽石を混在する。上部は分級が認められ、上ほど細かい黒灰色岩片から成る。

このように軽石層といっても相当量の石質岩片を含んだ層であることがわかる。岩片の量比は噴出源からの距離とどのような関係にあるだろうか。同じ地点でも分級し、より軽石質の部分と岩片の多い部分とに区別されるが、噴出源の十和田湖周辺と鹿角市の南部とでは明らかに量比が異なる。

大湯軽石層中から偏りのないように数10g の試料（軽石）を採取し、篩振とう器にかけて粒径8～4mm（中礫）と4～2mm（細礫）のものを取り出し、それぞれについて軽石と石質岩片の個数を比較した。参考までに oyu-1の上の細粒火山灰である oyu-2についても同じように比較したが中礫の個数が少ないため全体の傾向を調べるに留めた。

その結果は次のとおりである。

（1）同じ地点からの試料では粒度の小さいほうが石質岩片の割合いが高い。45地点のうち43地点でこの傾向が認められた。

（2）第97図に示すように噴出源から遠くなるほど軽石の割合いが増加する。グラフは縦軸に対

数をとって表示してあり、指数的に増加することがわかる。

（3）oyu-1、oyu-2ともに同じ傾向が認められる。

（4）噴出源に近い十和田湖周辺では石質岩片の割合いがより高く、量比（軽石／岩片）は平均して1～2となる。約20km離れた小坂～大湯地域では量比は3、約30kmの花輪付近では量比は7以上で、ほとんど軽石から成る。

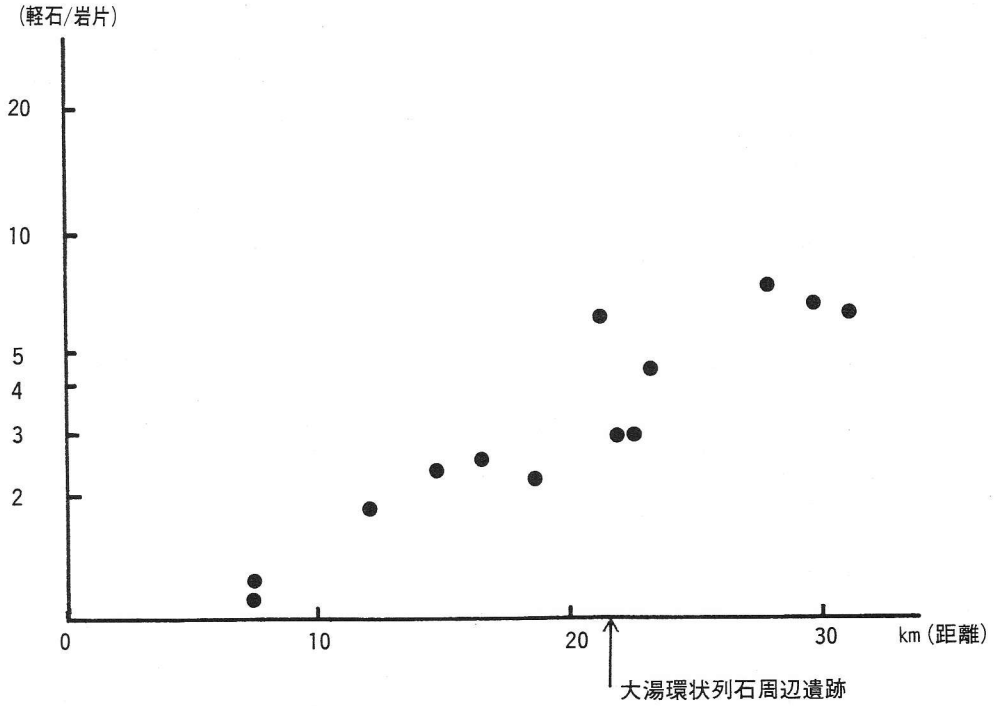
岩片は石英安山岩、安山岩などのもともと十和田火山を形成した岩石（類質岩片）と泥岩やチャートのように火山起源でない岩石（異質岩片）に区別されるが、圧倒的に類質岩片が多い。

一枚の軽石についてみれば、同じ地点に降下する物は空中で篩分けされて同じ大きさのものが集められ降下するのではなく、質量の似たものが降下することがわかる。同じ地点では軽石は比較的大きいものが、岩片は小さいものが降下するといえる。

(2)から、噴出源から遠くなれば粒径が小さくなるとともに、軽石と岩片の量比が変化し、ほとんど軽石だけになるということがわかる。すなわち重いものはすぐに降下するのである。

環状列石周辺の量比（軽石／岩片）は54／14≒3.86であった。

（鎌田健一）



第97図　噴出源からの距離と（軽石／石質岩片）の関係

第Ⅶ章　調査のまとめ

大湯環状列石及びその周辺遺跡は、米代川の一支流である大湯川の南東岸の台地上に位置する。昭和59年から継続されている周辺遺跡の発掘調査も本年度で６年目となった。第１～３次調査では、野中堂環状列石から北東300m の地点（Ａ区）の配石遺構群の調査に主力が注がれ、全ての配石下に土壙が伴うこと、甕棺、副葬品の出土、残存脂肪分析結果等から、これらの配石遺構が配石墓であることが判明し、さらに構造の類似する野中堂、万座の両環状列石もまた配石墓の集合体であろうと推察するに至った。他方、環状列石を総合的かつ多角的に考察する目的で、第２次調査からは列石周辺の調査にも着手し、４、５次調査によって、環状列石周囲には規則的な同心円（環）状に遺構、遺物が分布し、墓域の周囲に祭祀場域、居住域、遺物の廃棄域と続く環状集落の形態を呈するものと考えられた。しかし調査区設定の制約もあり、居住域と想定される地域から竪穴住居跡の検出はできず、列石周辺には居住域がなく、本遺跡は墓域と祭祀場域から成る特殊な遺跡とする考えも捨て切れずにいた。

このため、本年度の調査は、列石との位置関係の問題を一時離れ、竪穴住居跡の有無の確認を主目的とし、最も検出の可能性の高い、万座環状列石北北西150m の台地縁辺部を調査区の１つ（F_1区）とした。また、周辺遺跡北東端の遺構群の南西側への広がりを確認するため、万座環状列石北東250m の地点にも調査区（E_4区）を設定した。

調査の結果、F_1区からは縄文時代後期の竪穴住居跡６軒、石囲炉３基、建物跡４棟、柱穴状ピット76個、立石遺構１基、集石遺構３基、配石遺構４基、焼土遺構23基、Ｔピット１基、フラスコ状土壙４基、土壙42基、平安時代の竪穴住居跡４軒、土壙３基が検出された。また、遺構内・外から完形あるいは復元可能の縄文土器87個体、縄文土器片ダンボール箱49箱、石器712点、土製品373点、石製品117点、復元可能の土師器３個体、土師器片ダンボール箱1/2箱の出土があった。

竪穴住居跡６軒は、F_1区南西側の沢縁辺部に位置し、さらに北西及び南方向にその分布が延びるものと考えられる。竪穴住居跡に一括したが、第406、407号竪穴住居跡には炉跡が伴わず、規模も他の住居跡より大きいことから、性格の異なる遺構の可能性がある。他の竪穴住居跡は、径2.7～3.1m 規模の円形プランで、壁高が8.0～23.0cmと掘り込みが浅い。Ⅲd 層上面からの掘り込みで、深いものでⅤ層の地山を若干掘り込む程度で、Ⅳ層にも到しない住居跡もある。住居はほぼ中央に石囲炉を有し、403、405、408号住居跡の東～南壁際には石で構築された施設をもつ等、共通点が多い。

大湯環状列石周辺からは、昭和27年の文化財保護委員会による調査、昭和50年の鹿角市教育委員会による分布調査により、各１軒の住居跡が検出されているが、いずれも壁が確認されず、

平地式の住居跡の可能性があると報告されており、竪穴住居跡と確認されたのは今回の調査が初めてと言える。27年に万座環状列石の北東側隣接地から検出された住居跡は、その列石との位置関係から、D_1、D_2区の調査で検出された6本柱の建物跡となる可能性が高い。また分布調査で同列石北140m の地点から検出された住居跡は、壁が確認されなかったと報告されているが、炉跡の形態、柱穴の配置と遺物分布からの住居跡規模の推察等からF_1区の竪穴住居跡に類似する点が多く、黒色土層からの掘り込みで、地山面に達しない竪穴住居跡であった可能性が高い。

建物跡については、第5次調査の分類基準により、その柱配置を明確にし得たもののみとしたため、4棟に留まったが、重複遺構の保存のためⅢd 層まで調査の及んでいないグリッドもあり、発掘区域外に延びる柱穴や新しい遺構構築により消失した柱穴等を考慮すると、この数はさらに増えるものと考えられる。建物跡は4本柱の建物跡（Ⅰ類）と六角形の柱配置となる6本柱の建物跡（Ⅱ類）に大別できるが、後者はF_1区南部に偏在する傾向を示している。また、東部に位置する前者の4本柱の建物跡は、その長軸方位が磁北あるいはそれに直交する方位で、第5次調査D_1区の218号建物跡、第6次調査D_2区の229号建物跡に類似する。

土壙としたもののうち、長軸が2mを越える大型の楕円形プランのものは、F_1区北部に偏在し、長軸方位がいずれも東西方向である等、他の土壙と趣を異にする。

フラスコ状土壙は、竪穴住居跡と同様に、北西側の沢縁辺部寄りに分布する。南部に位置する419A、426号フラスコ状土壙の出土遺物は多く、それぞれ6、10個体の復元可能土器が出土している。

Tピットは発掘区中央部から1基が検出されたが、深さ24cmと非常に浅く、底面に凹凸がある。底面に礫層中の大きな石が露頭しており、途中で構築を断念したものと考えられる。

縄文土器の約9割は後期前葉に位置づけられるが、他に早期中葉～前期前葉、後期中～末葉、晩期初頭～前葉の土器の出土があった。後期前葉の土器は復元された土器も多く、深鉢、鉢、浅鉢、壺の他に片口土器、蓋、ミニチュア土器等、器種・器形の特異なものの出土もあった。419A、426号フラスコ状土壙の一括資料は後期土器編年上の貴重な資料と言える。早期の土器は、大湯環状列石周辺遺跡、一本杉遺跡、大地平遺跡、猿ケ平Ⅱ遺跡等で、前期初頭～前葉の土器は柏木森遺跡、上山田遺跡等で数点づつ出土しているが、今回の調査のように比較的まとまって出土したのは、鹿角地方で初めてである。これらの土器は寺ノ沢式から表館式に相当するもので、当地域における早～前期の土器の基礎資料となるものと考えられる。

E_4区からは縄文時代のTピット1基が検出され、縄文土器片50数点、石器2点、石製品1点の出土があった。4次のE_1区の調査結果からも、この周辺は遺構、遺物とも分布密度の低い地域と考えられる。

（秋元信夫）

参考・引用文献

阿部義平　「配石」　『縄文文化の研究　9』　雄山閣　1983年

石井　寛　「縄文集落と掘立柱建物跡」　『調査研究集録』第6冊
港北ニュータウン埋蔵文化財調査団　1989年

大里・秋元他　『鹿角市史』　鹿角市　1982年

工藤竹久　「縄文尖底系土器様式」　『縄文土器大観』第1巻　小学館　1989年

児玉・大場　「函館市春日町出土の遺物について」　『北方文化研究報告』第9輯　1954年

鈴木克彦　『日本の古代遺跡　29　青森』　保育社　1986年

鈴木道之助　『石器の基礎知識III』　柏書房　1981年

鈴木保彦　「集落の構成」　『季刊考古学』第7号　雄山閣　1984年

冨樫泰時　「貝殻沈線文系土器様式」　『縄文土器大観』第1巻　小学館　1989年

名久井文明　「北日本縄文式早期吹切沢式系統の後半期編年」『先史考古学研究』第1号　1988年

水野正好　「環状列石墓群の意味するもの」　『信濃』第20巻4号　1968年

村越　潔　『亀ケ岡式土器』　ニュー・サイエンス社　1983年

村田文夫　『縄文集落』　ニュー・サイエンス社　1985年

文化財保護委員会　『大湯町環状列石』　1953年

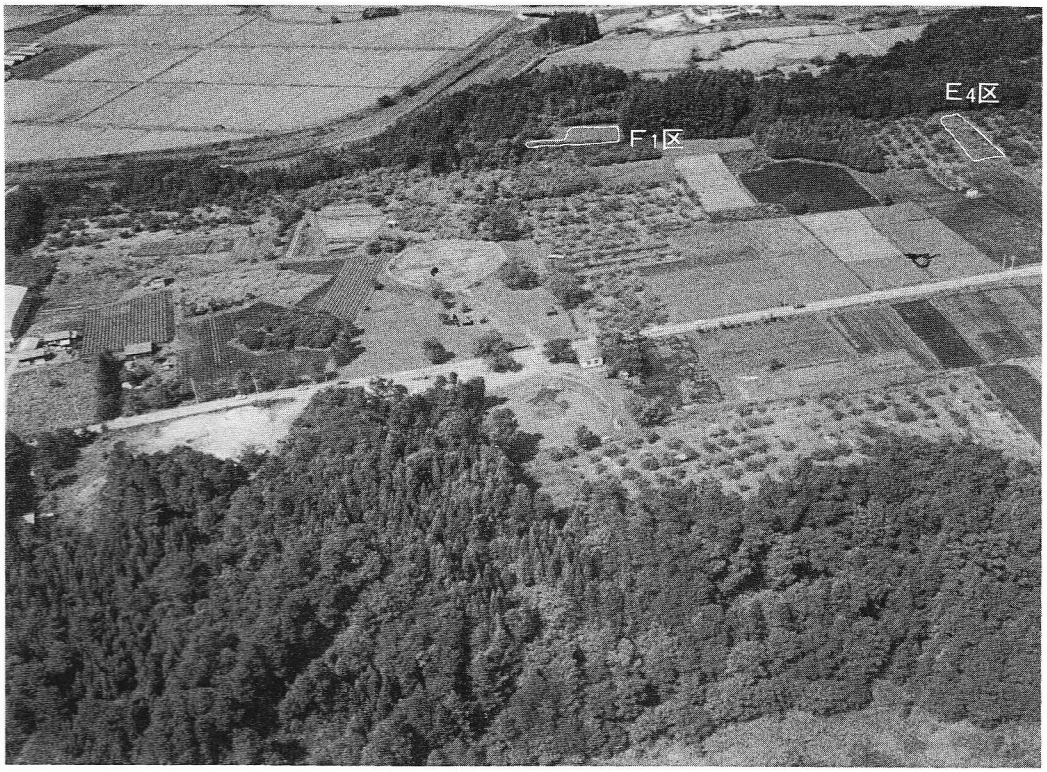
青森県教育委員会　『下砂沢遺跡』　1980年
『上尾駮(2)遺跡II』　1987年
『大石平遺跡』　1986年
『表館(1)遺跡III』　1989年
『長七谷地貝塚』　1980年

秋田県教育委員会　『鳶ケ長根IV遺跡』　1981年
『柏木森遺跡』　1984年

岩手県教育委員会　『西田遺跡』　1980年

大槌町教育委員会　『崎山弁天遺跡』　1974年

鹿角市教育委員会　『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(1)～(5)』　1985～1989年



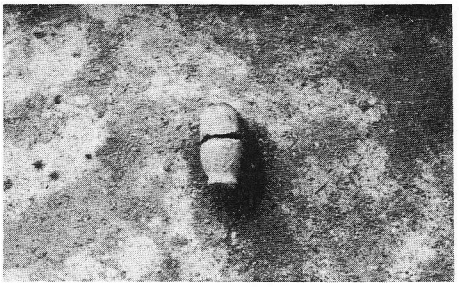
大湯環状列石全景

第403号竪穴住居跡

PL 1　大湯環状列石全景・第403号竪穴住居跡

第403号竪穴住居跡

第403号竪穴住居跡土器出土状況▶



第405号竪穴住居跡

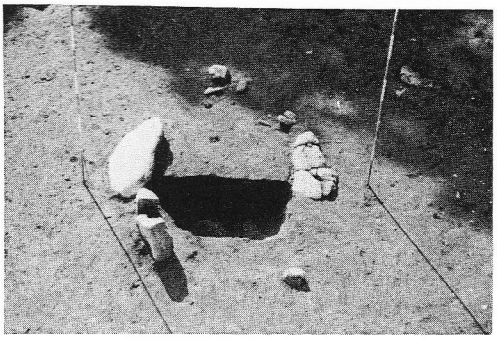
PL 2　第403号、405号竪穴住居跡

第406号、407号、408号、410号竪穴住居跡

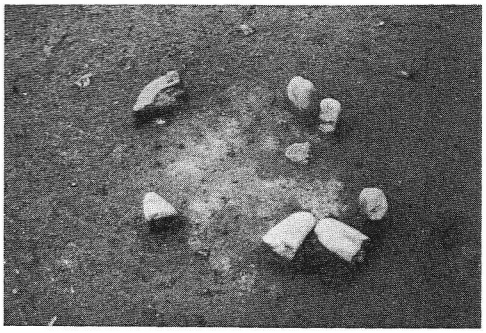
第410号竪穴住居跡

ＰＬ３　第406号、407号、408号、410号竪穴住居跡

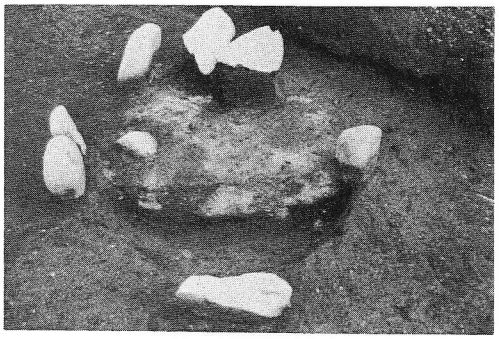
第401号石囲炉



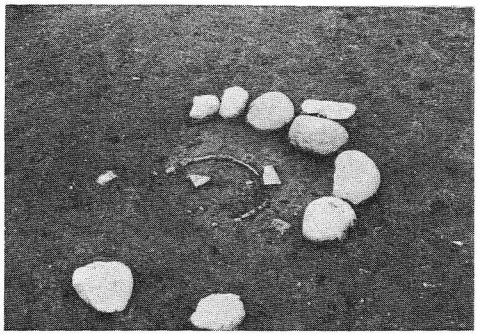
第401号石囲炉断面



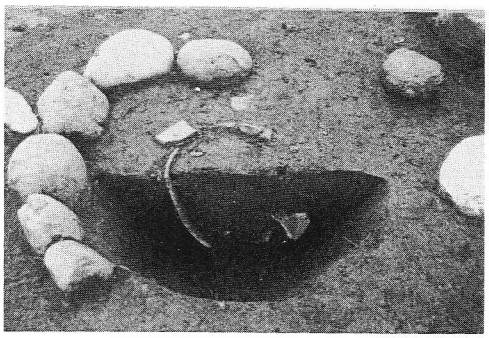
第402号石囲炉



第402号石囲炉断面



第403号石囲炉

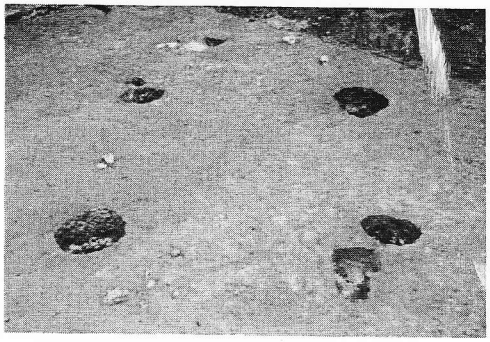


第403号石囲炉断面

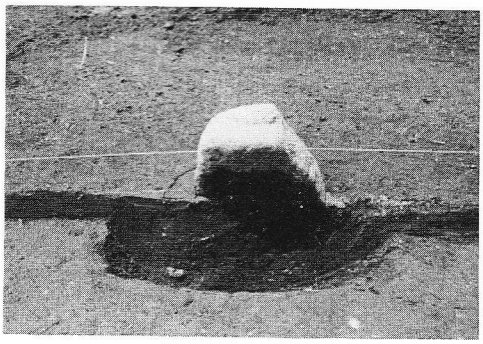
第402号建物跡

第404号建物跡

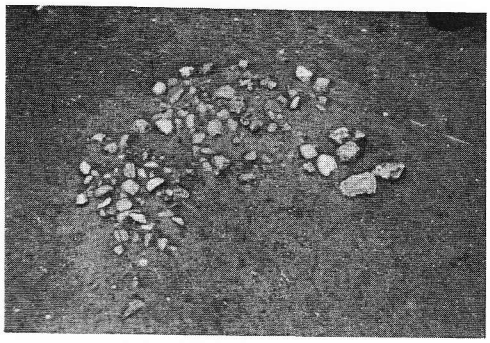
PL 4　石囲炉、建物跡



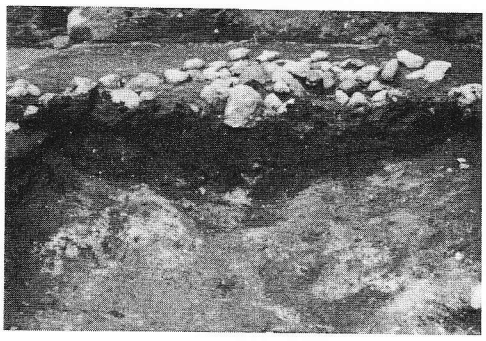
第404号建物跡



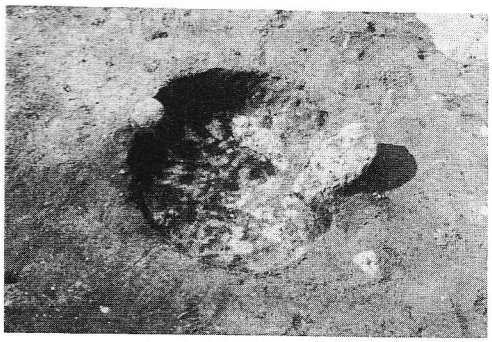
第401号配石遺構



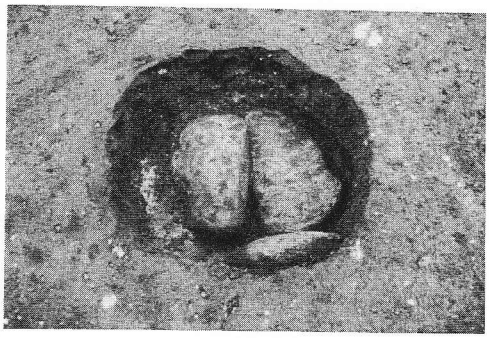
第402号配石遺構



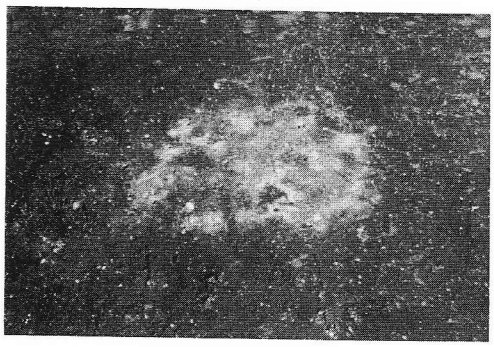
第402号配石遺構断面



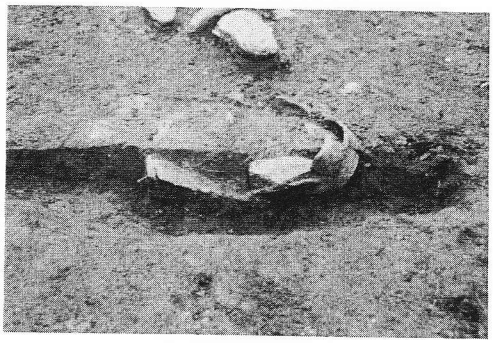
第409号配石遺構



第412号配石遺構



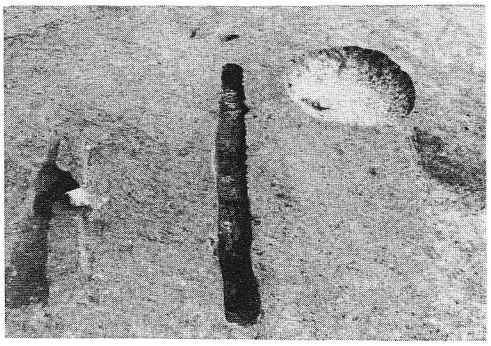
第405号焼土遺構



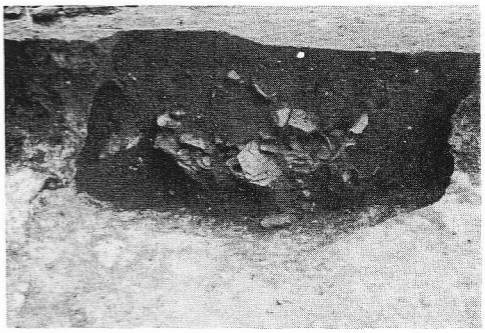
第408号焼土遺構

ＰＬ５　建物跡、配石遺構、焼土遺構

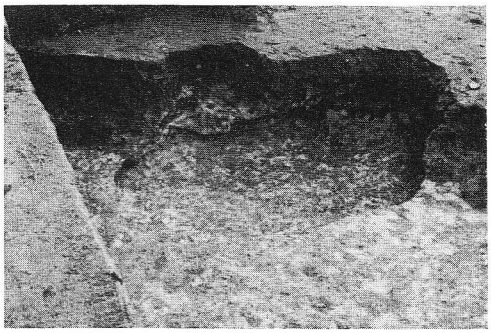
第417～419号焼土遺構



第425号Ｔピット

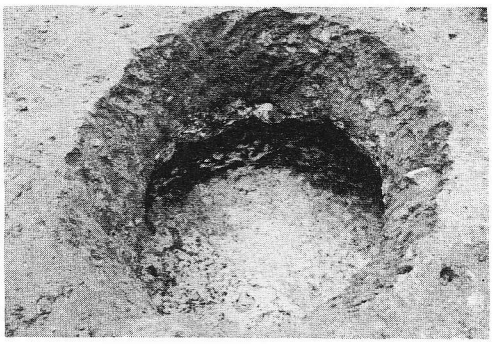


第419A号、419B号フラスコ状土壙断面



第419A号、419B号フラスコ状土壙

第425号フラスコ状土壙

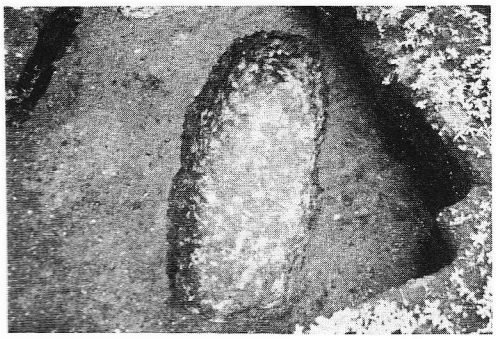


第426号フラスコ状土壙

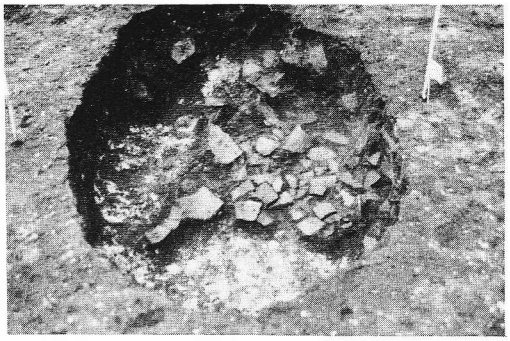
第426号フラスコ状土壙遺物出土状況

指導委員視察

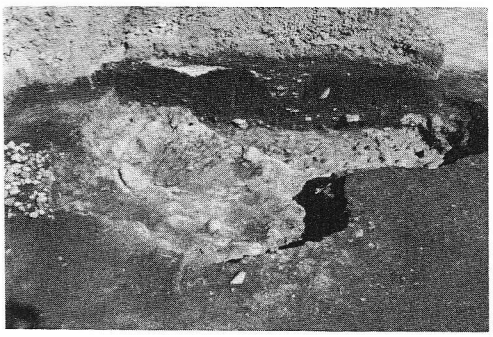
PL 6　焼土遺構、Ｔピット、フラスコ状土壙



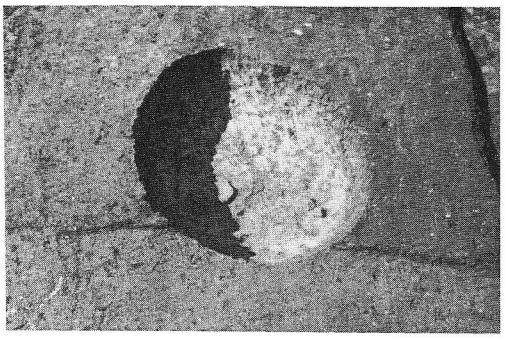
第401号 土壙



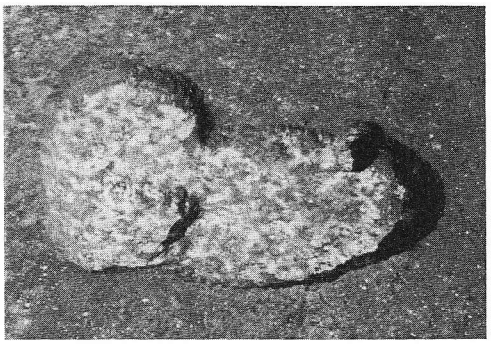
第403号 土壙



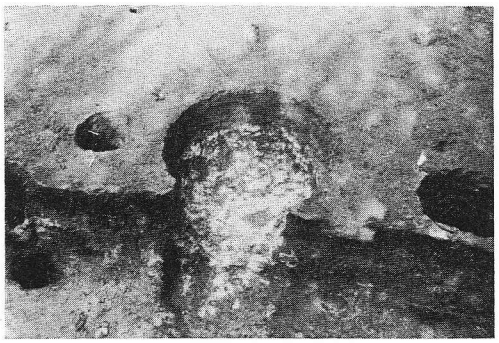
第405～407号・409号土壙、409号配石遺構



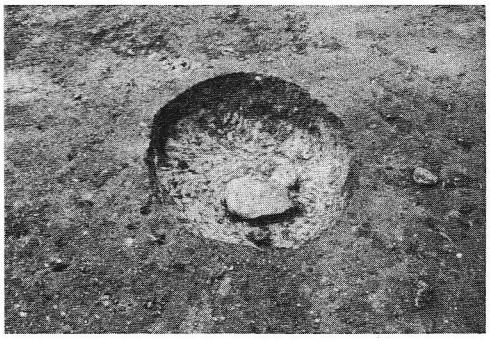
第414号 土壙



第415号・416・418号土壙



第430号 土壙

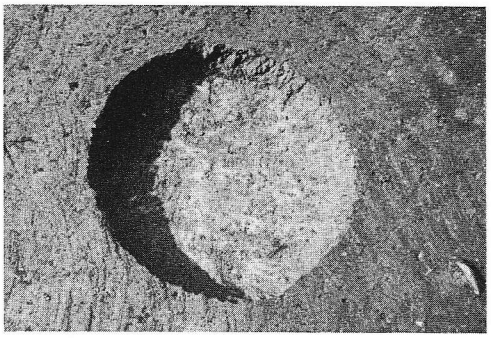


第436号 土壙

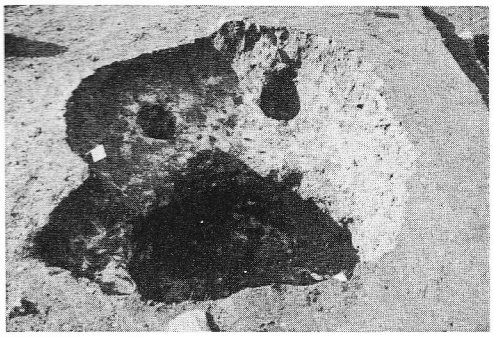
第437号、438号土壙

PL 7　土　壙(1)

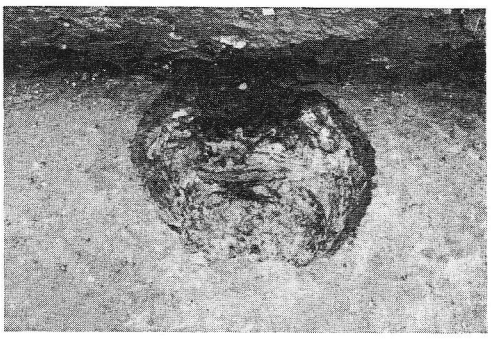
第432号、439号、440号土壙



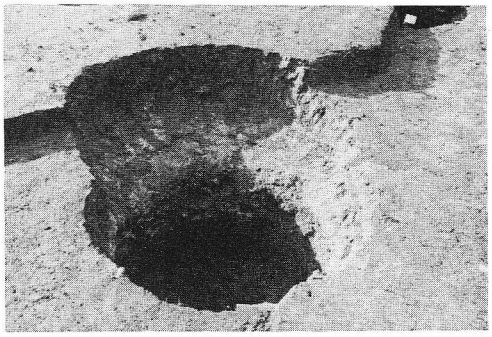
第441号 土壙



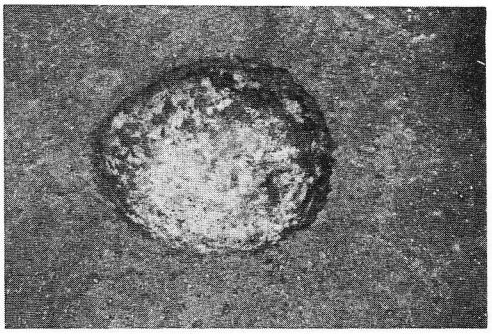
第442号、443号土壙



第445号 土壙

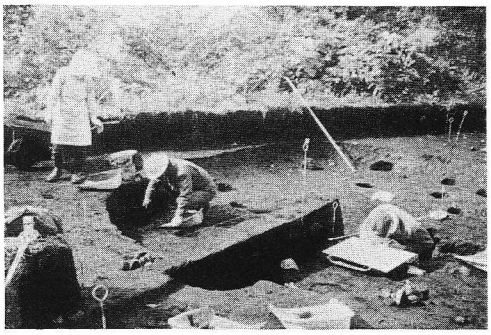


第452号 土壙



第453号 土壙

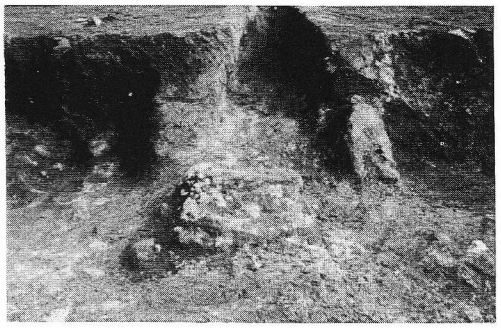
YV—105グリッド（土偶）



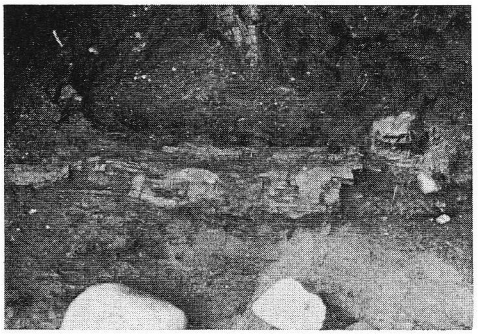
調査風景

PL 8　土壙(2)、YV—105グリッド遺物出土状況

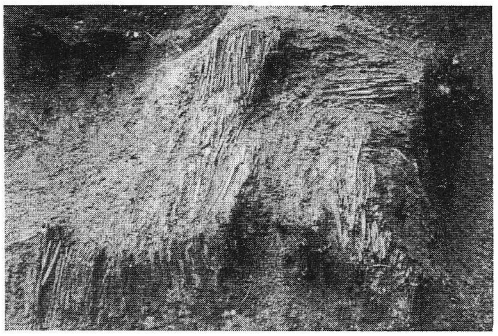
第401号竪穴住居跡



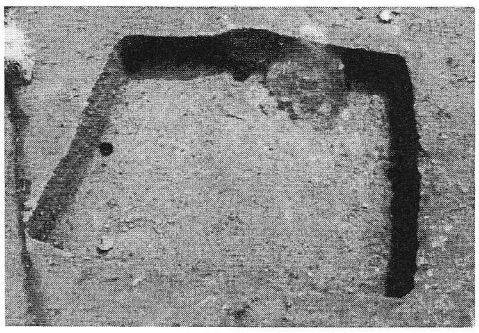
第401号竪穴住居跡カマド



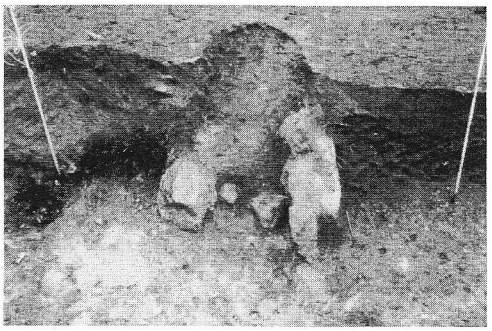
第401号竪穴住居跡炭化材



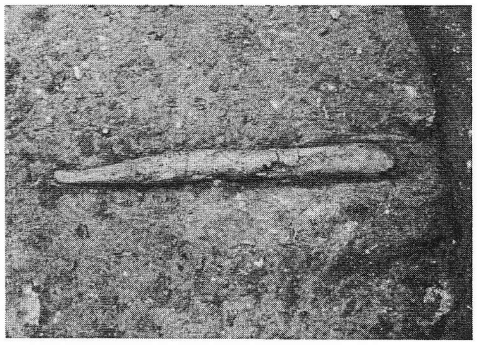
第401号竪穴住居跡炭化植物（カヤ）



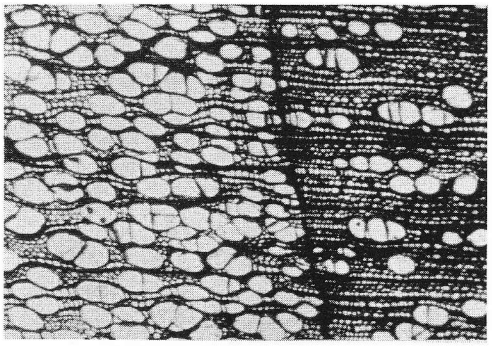
第402号竪穴住居跡



第402号竪穴住居跡カマド

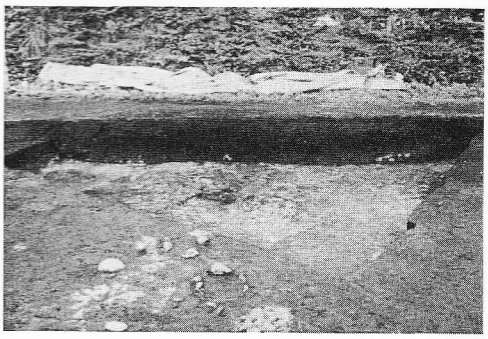


第402号竪穴住居跡炭化材

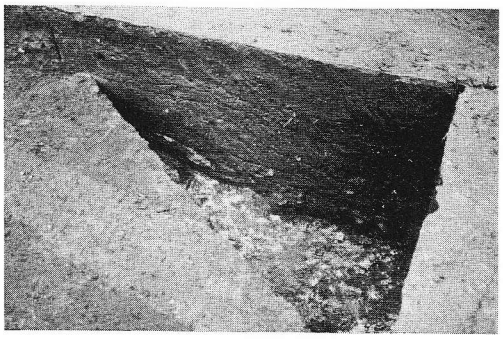


第402号竪穴住居跡炭化材
（樹種：ヤナギ木口面）

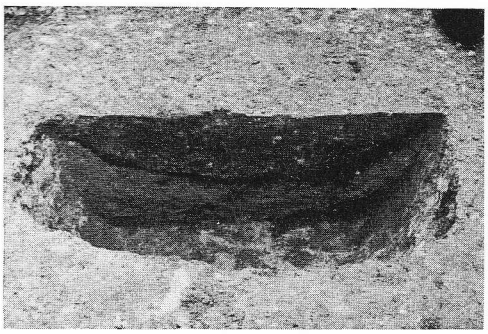
PL 9　竪穴住居跡（歴史時代）



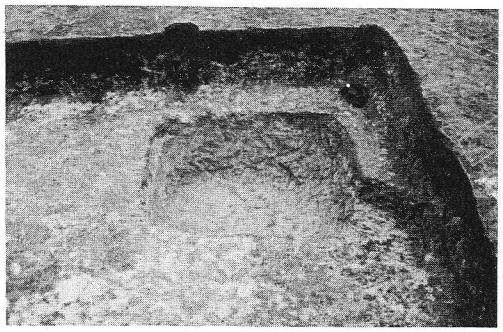
第404号竪穴住居跡



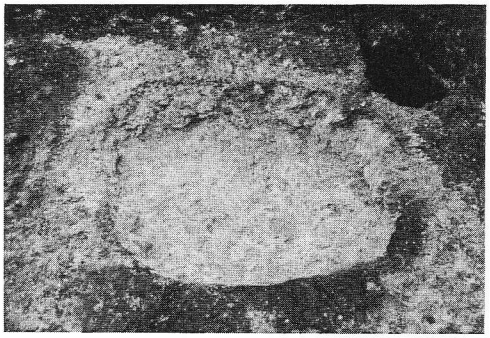
第409号竪穴住居跡



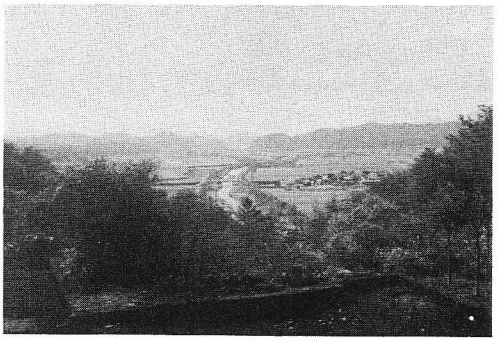
第421号 土壙



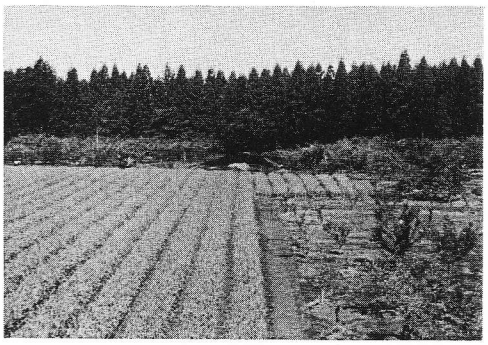
第421号 土壙



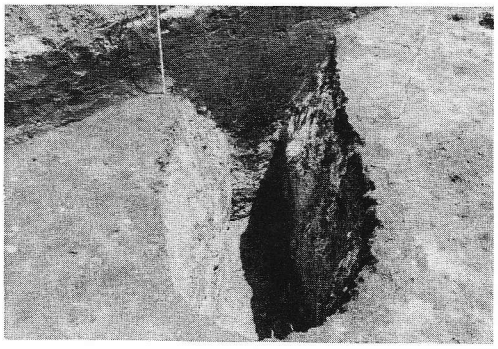
第422号 土壙



F1区より西方を望む

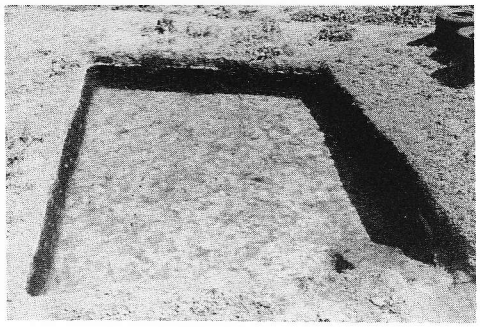


E4区全影

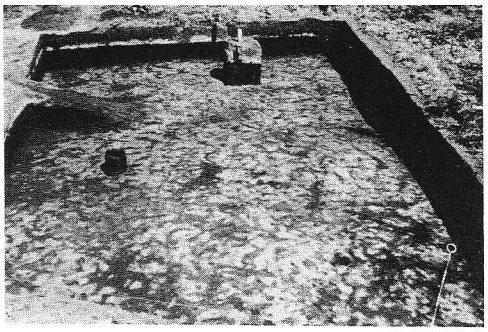


第302号Tピット

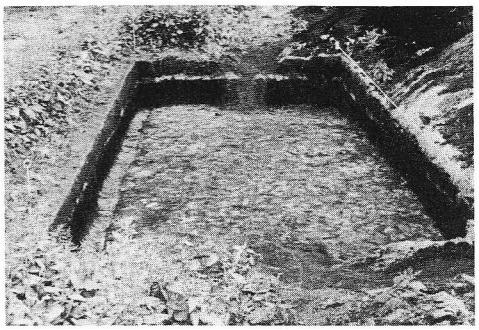
PL 10　竪穴住居跡、土壙(歴史時代)、E4区



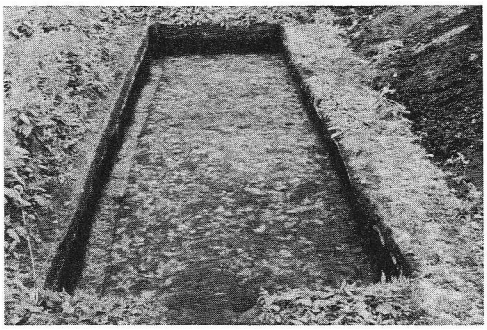
ZY—1グリッド



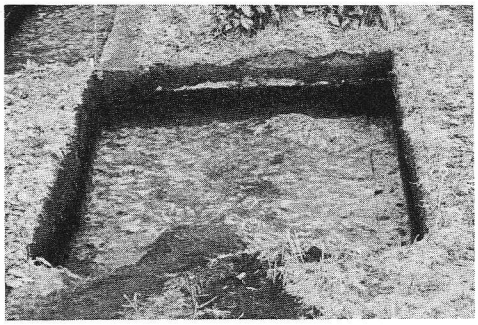
ZX・ZY—3・4



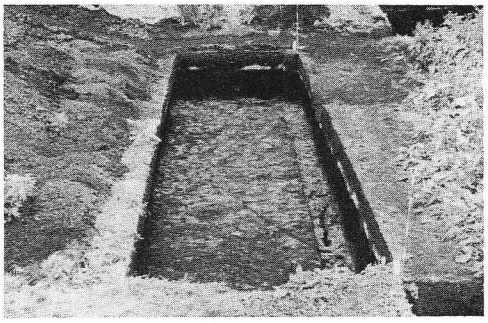
YB—4



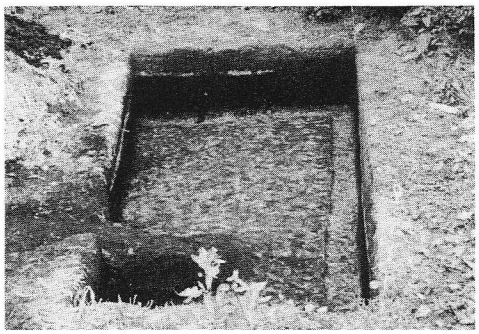
YF—4



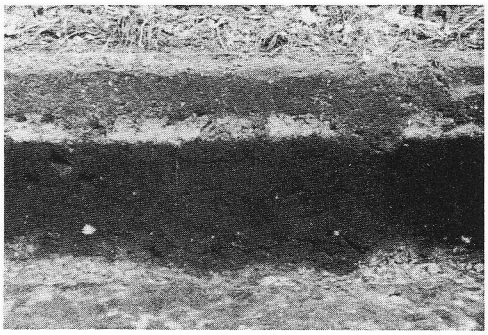
YI—5



YJ・YK—5

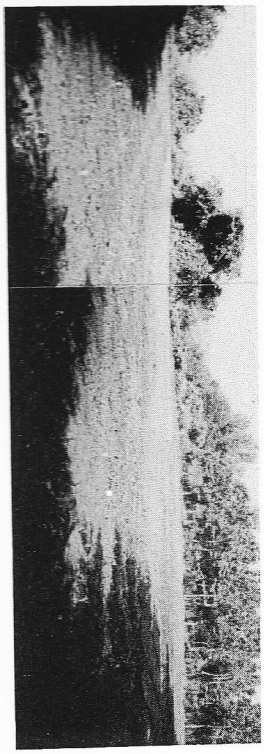


YL・YM—5

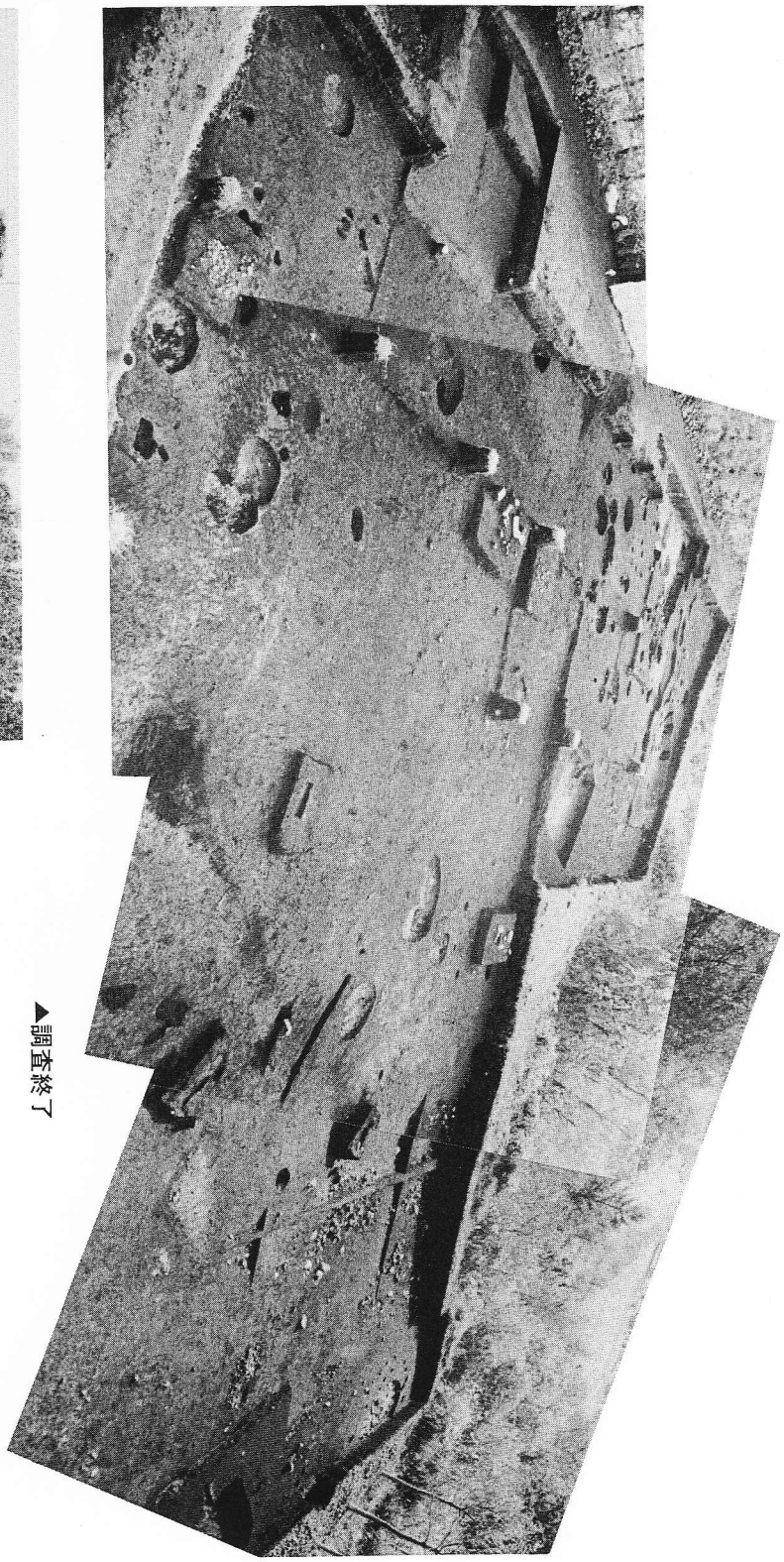


E4区基本層序

PL 11　E4区各グリッド、基本層序

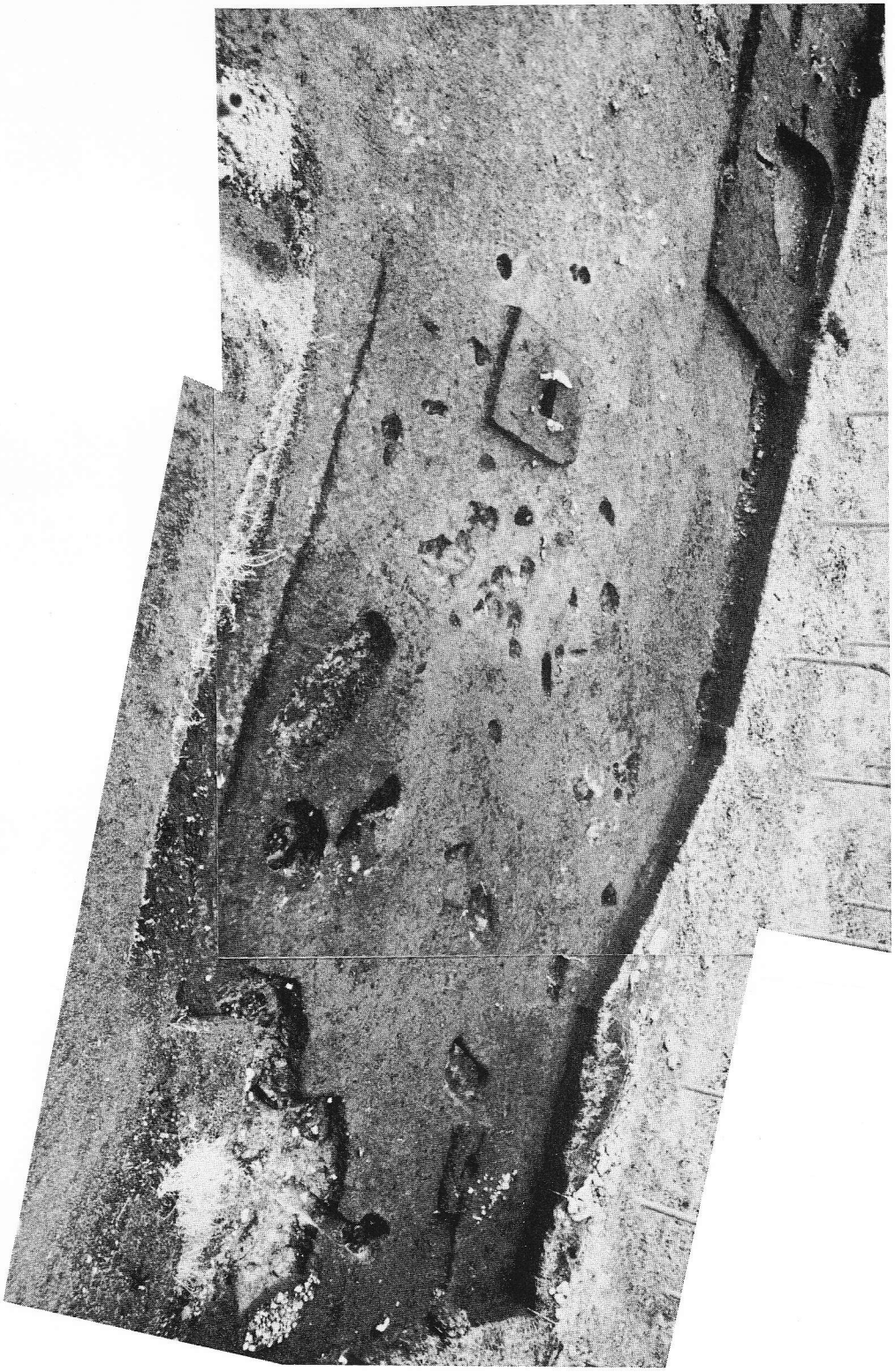


◀調査前

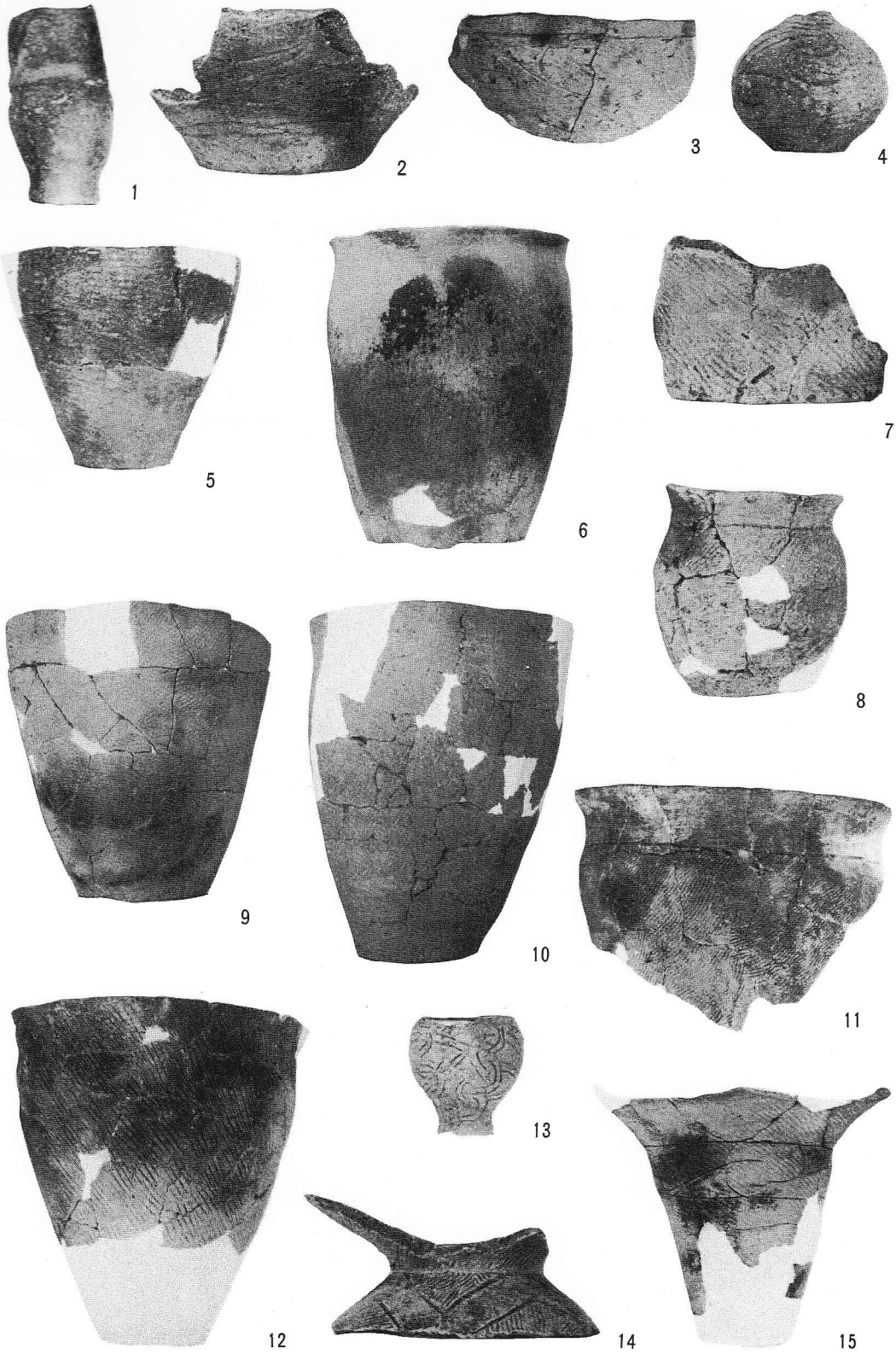


▶調査終了

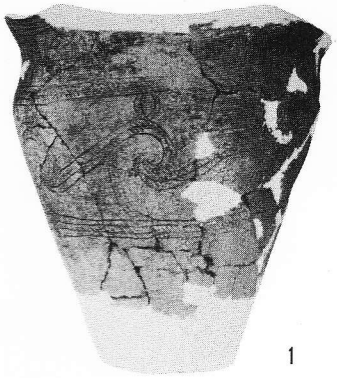
PL 12　F1区調査前・調査終了全景

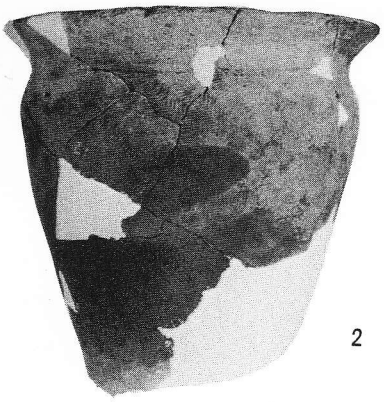


PL 13　F1区北側調査終了

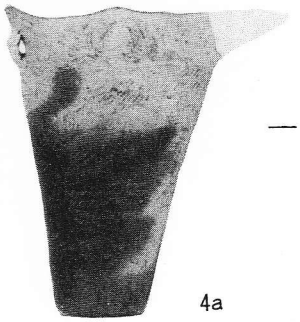


ＰＬ14　遺構内出土土器(1)

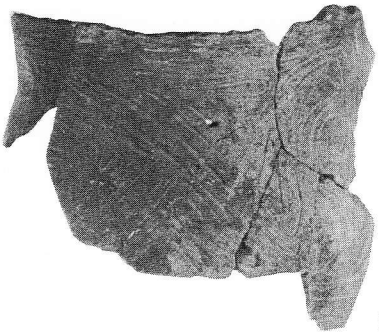

1

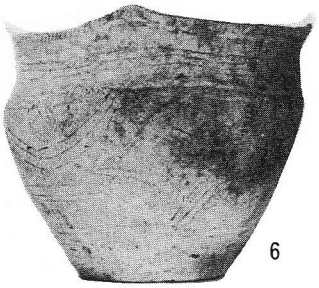

2

3


4a

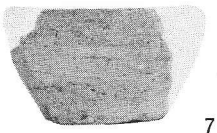
4b

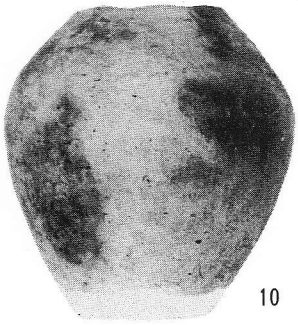

5

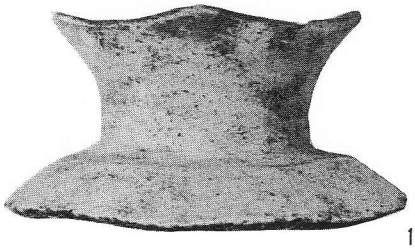

6

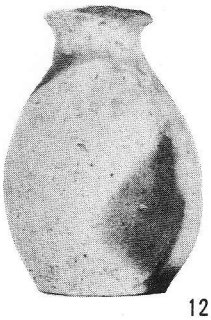
8

9

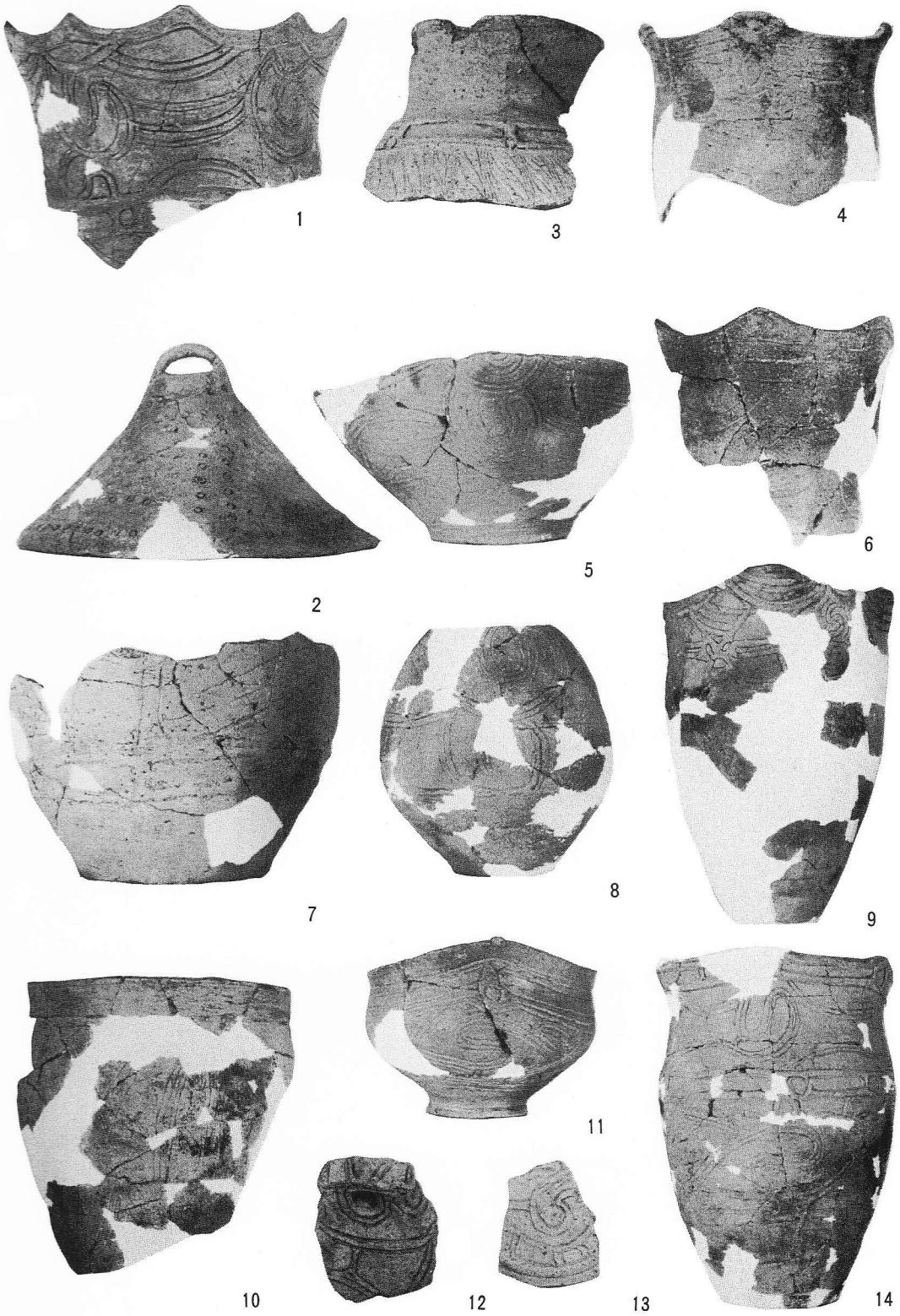

7


10


11

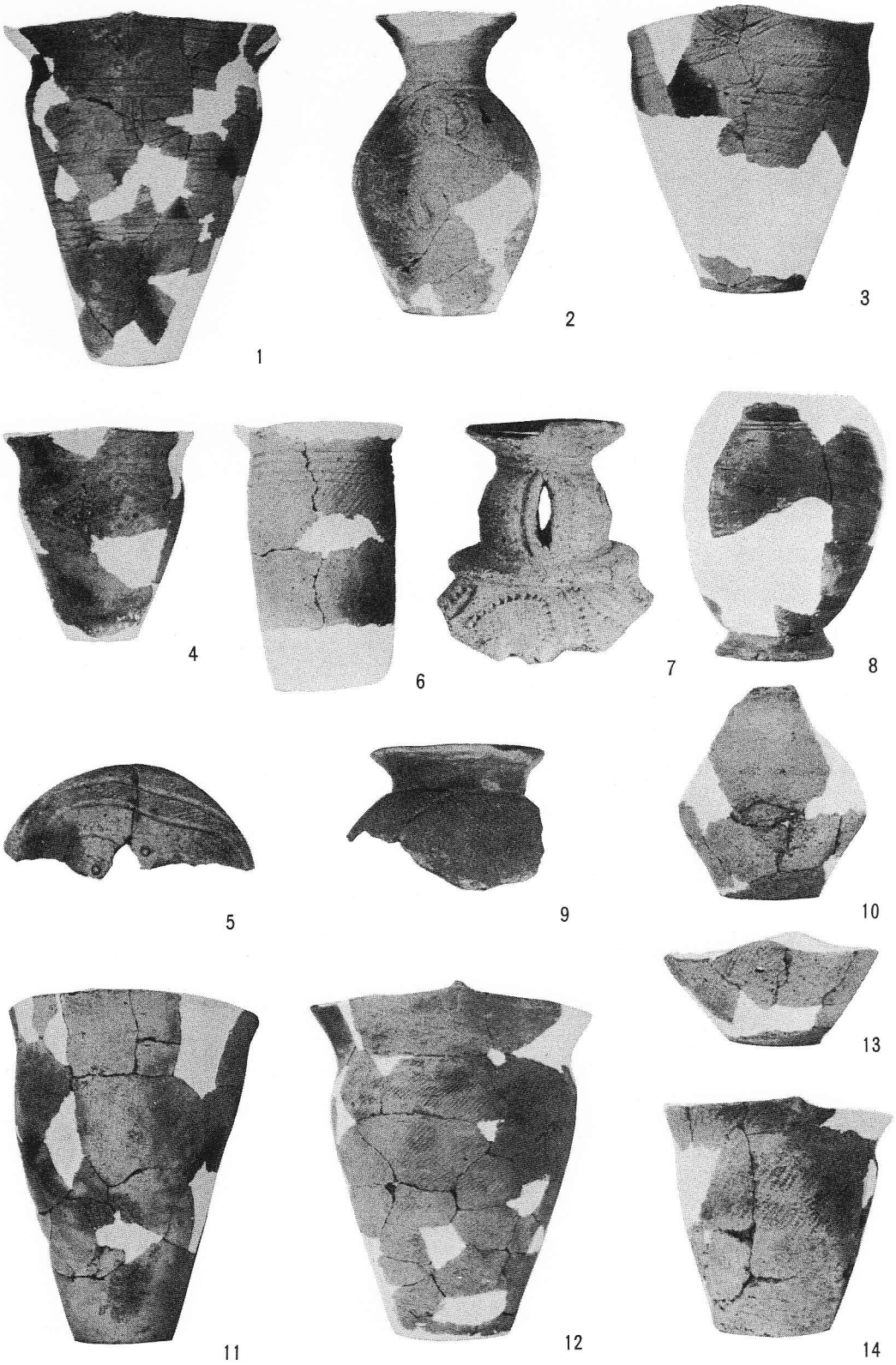

12

ＰＬ15　遺構内出土土器(2)

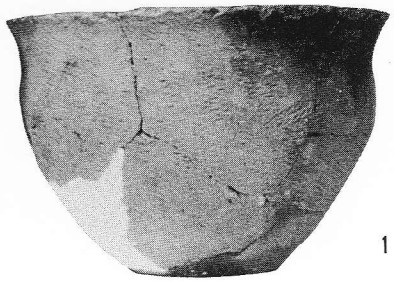


ＰＬ16　遺構内(3)、遺構外出土土器(1)

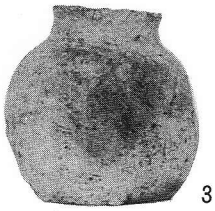
1、2遺構内、3～14遺構外

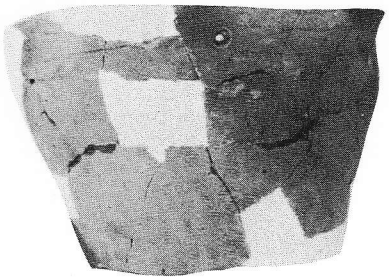


ＰＬ17　遺構外出土土器(2)


1

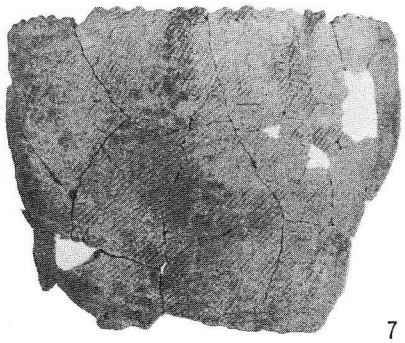
2


3

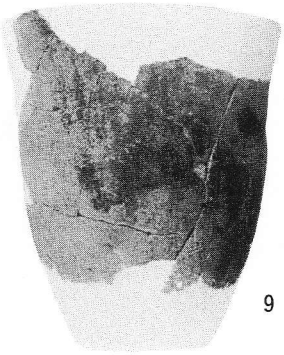

4

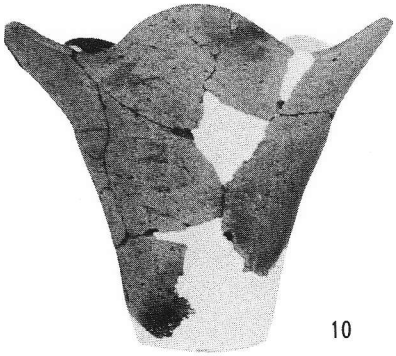
5

6


7

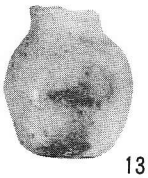
8


9

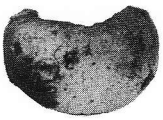

10

11

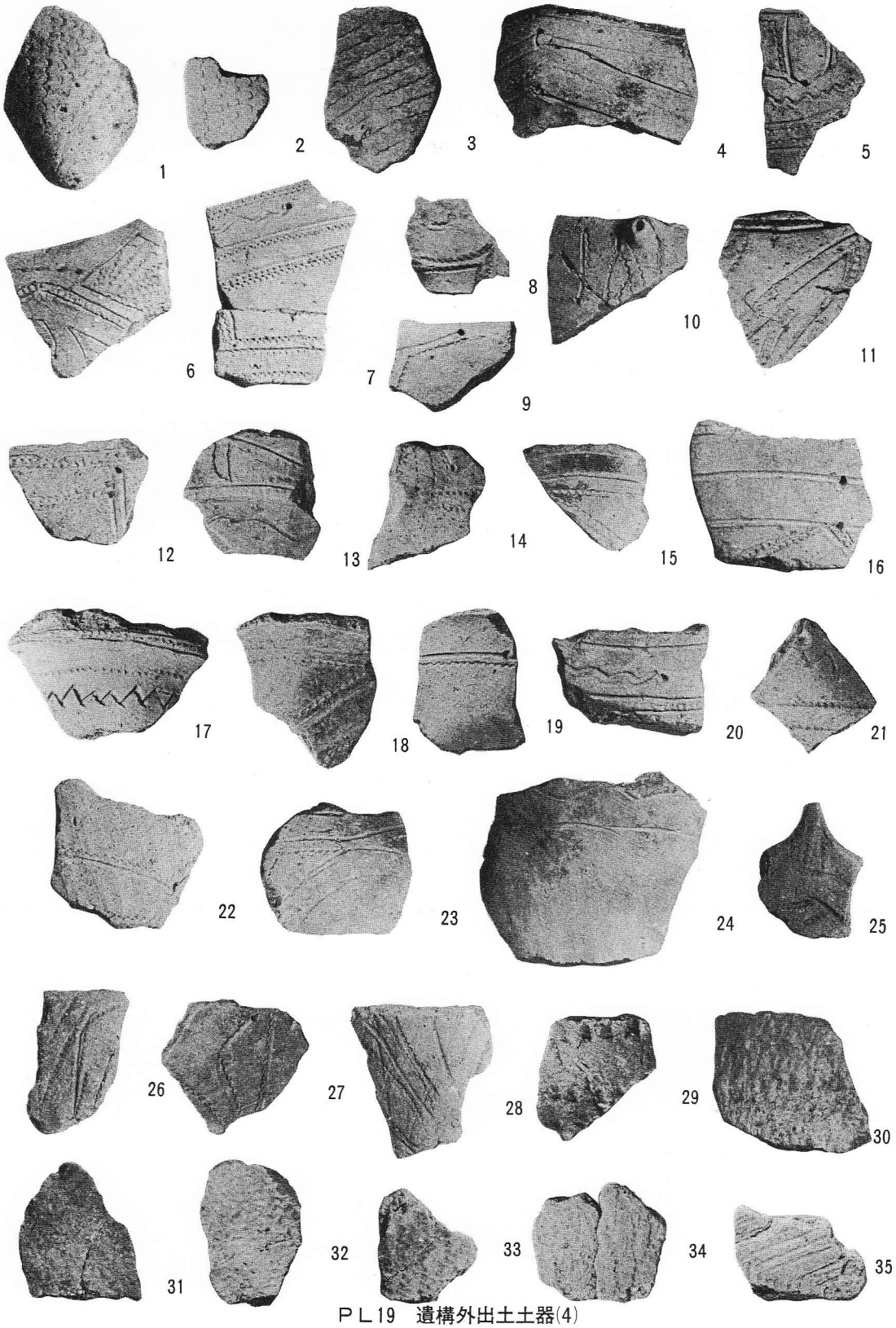
12


13

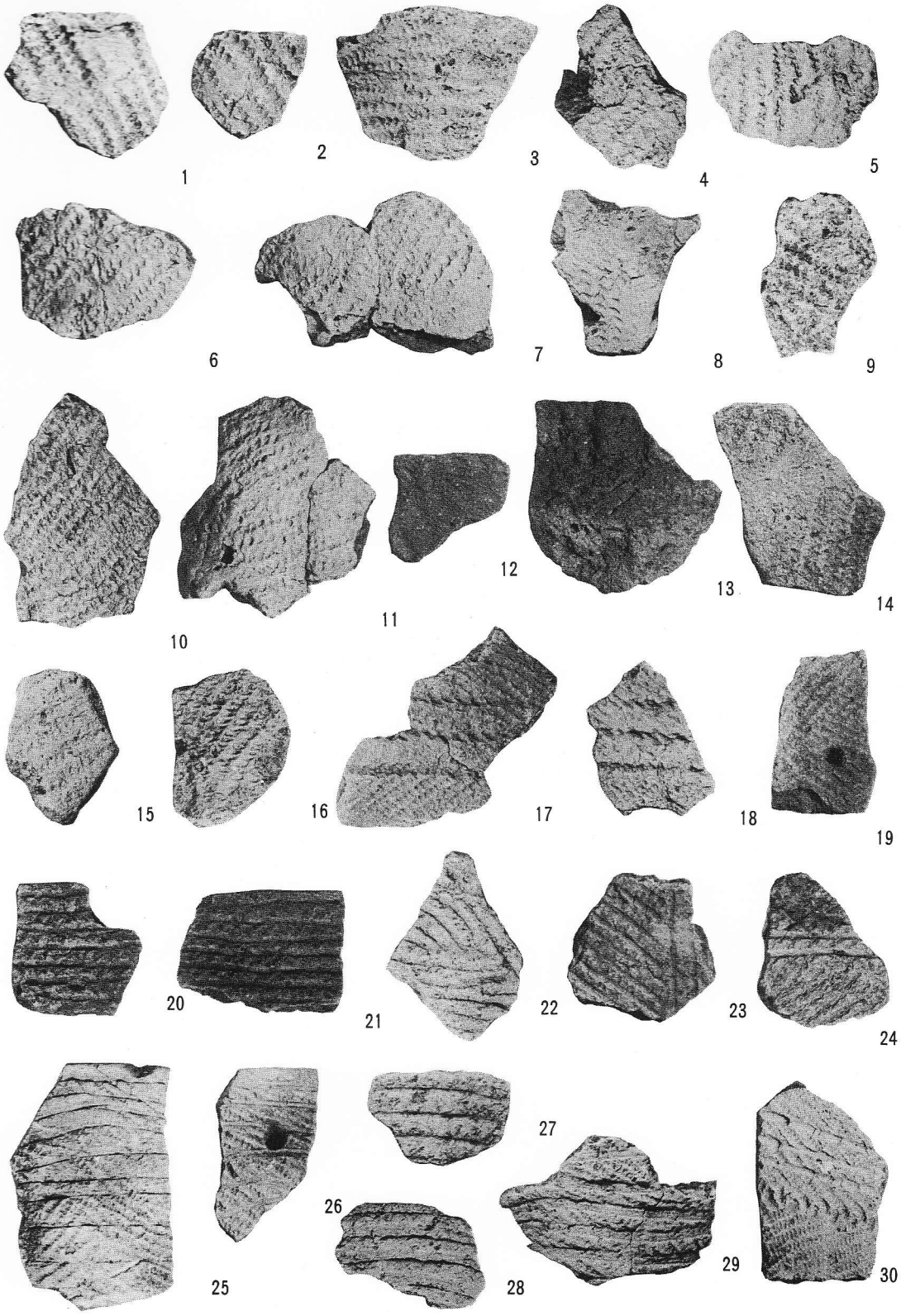
14


15

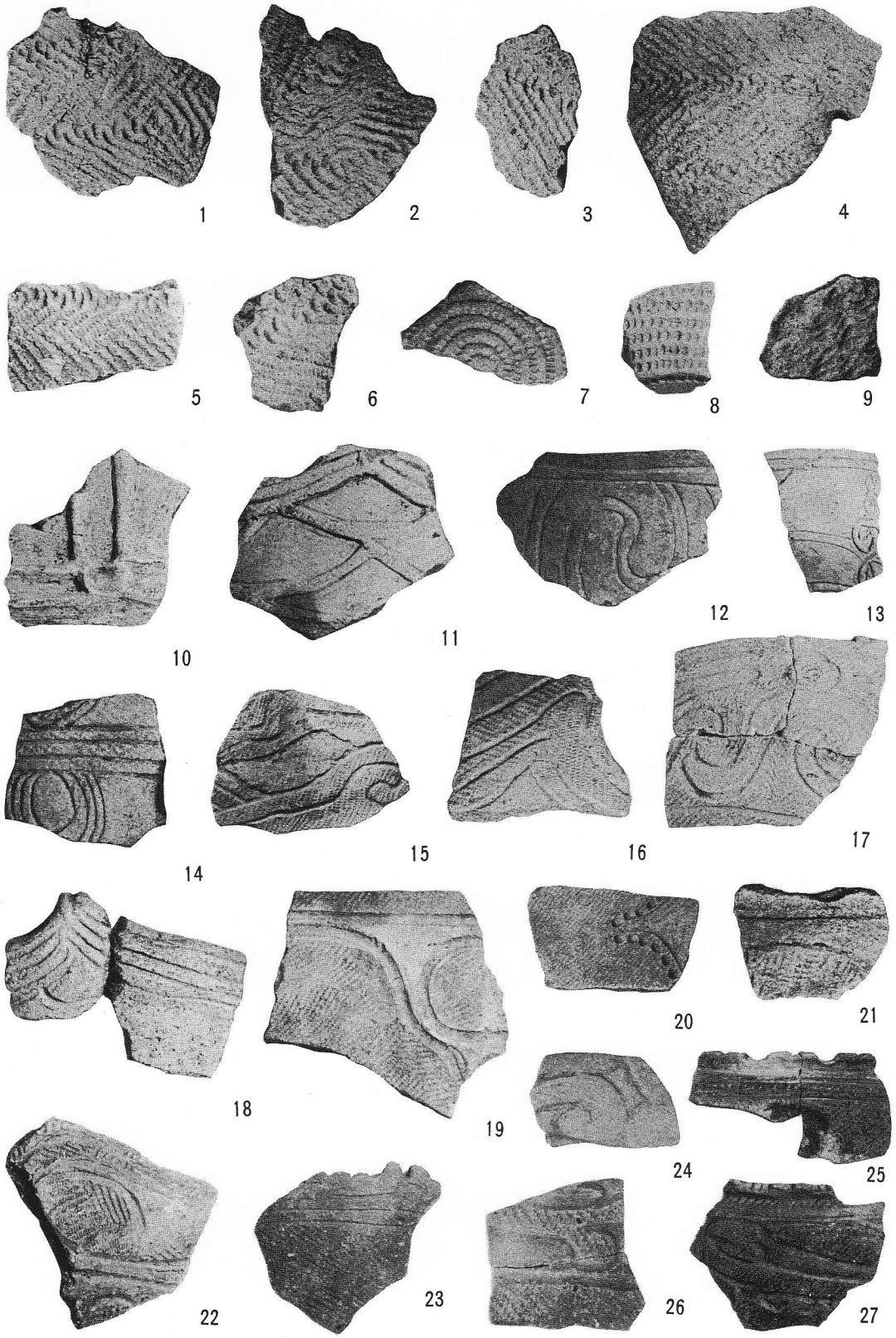
ＰＬ18　遺構外出土土器(3)



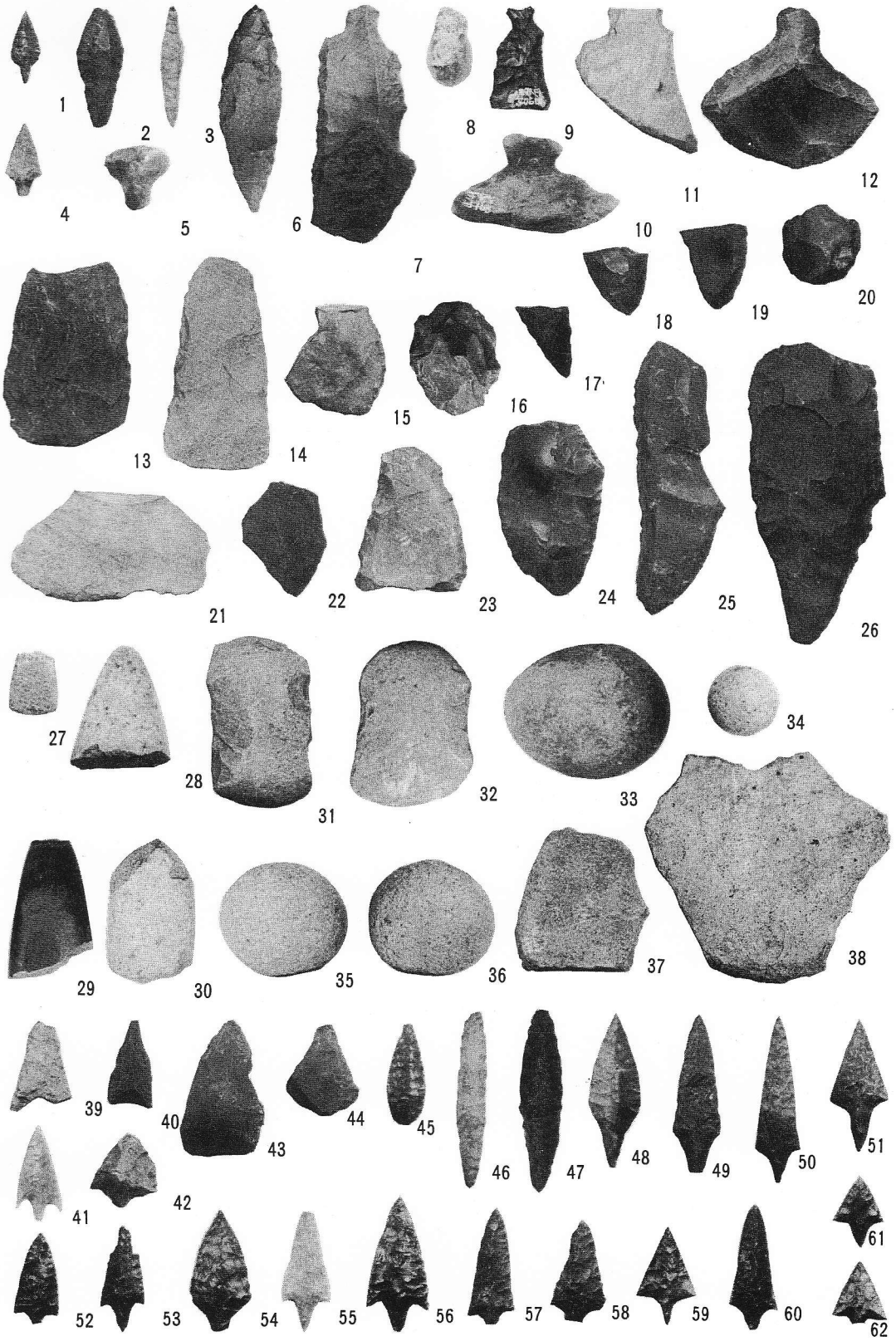
ＰＬ19　遺構外出土土器(4)



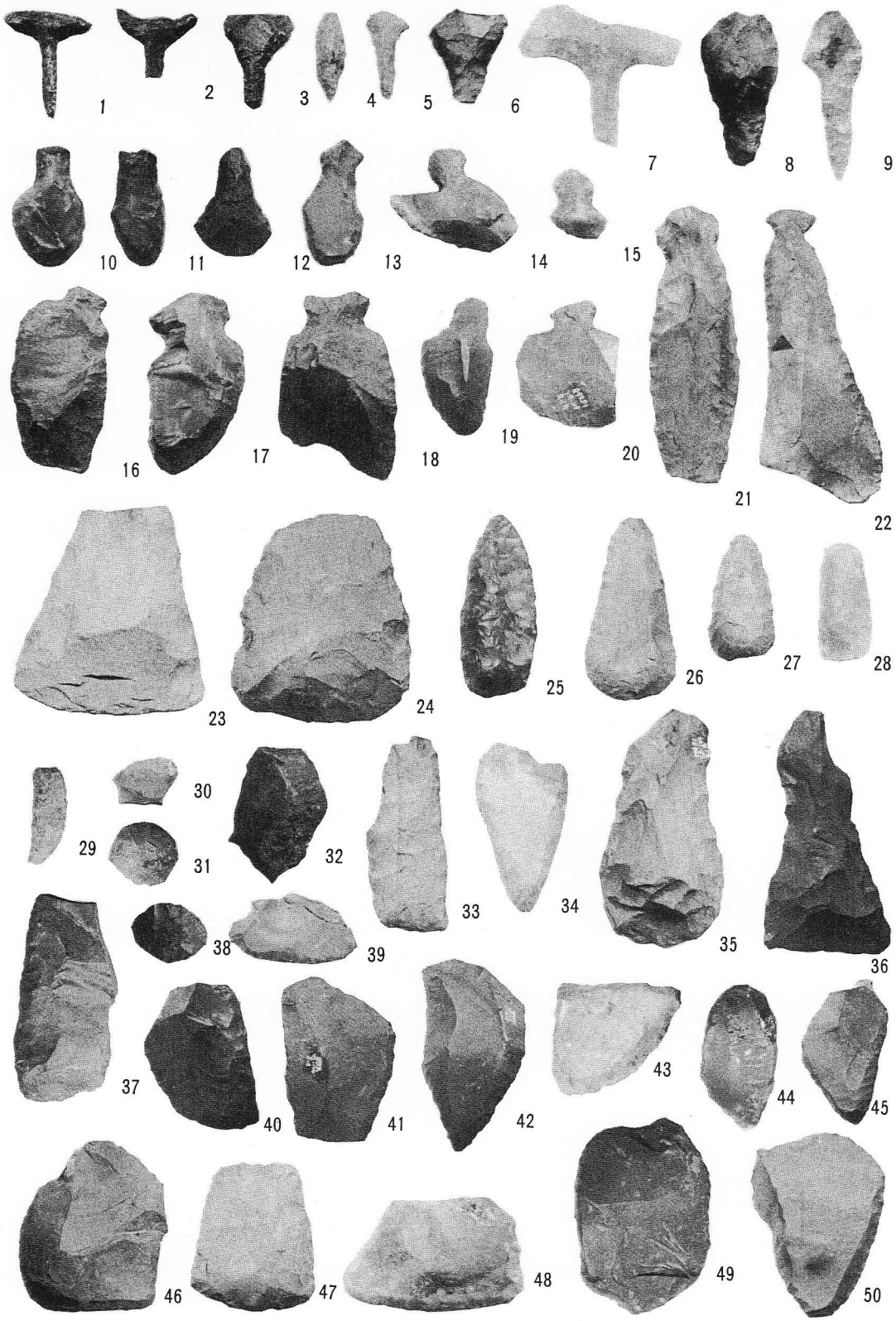
ＰＬ20　遺構外出土土器(5)



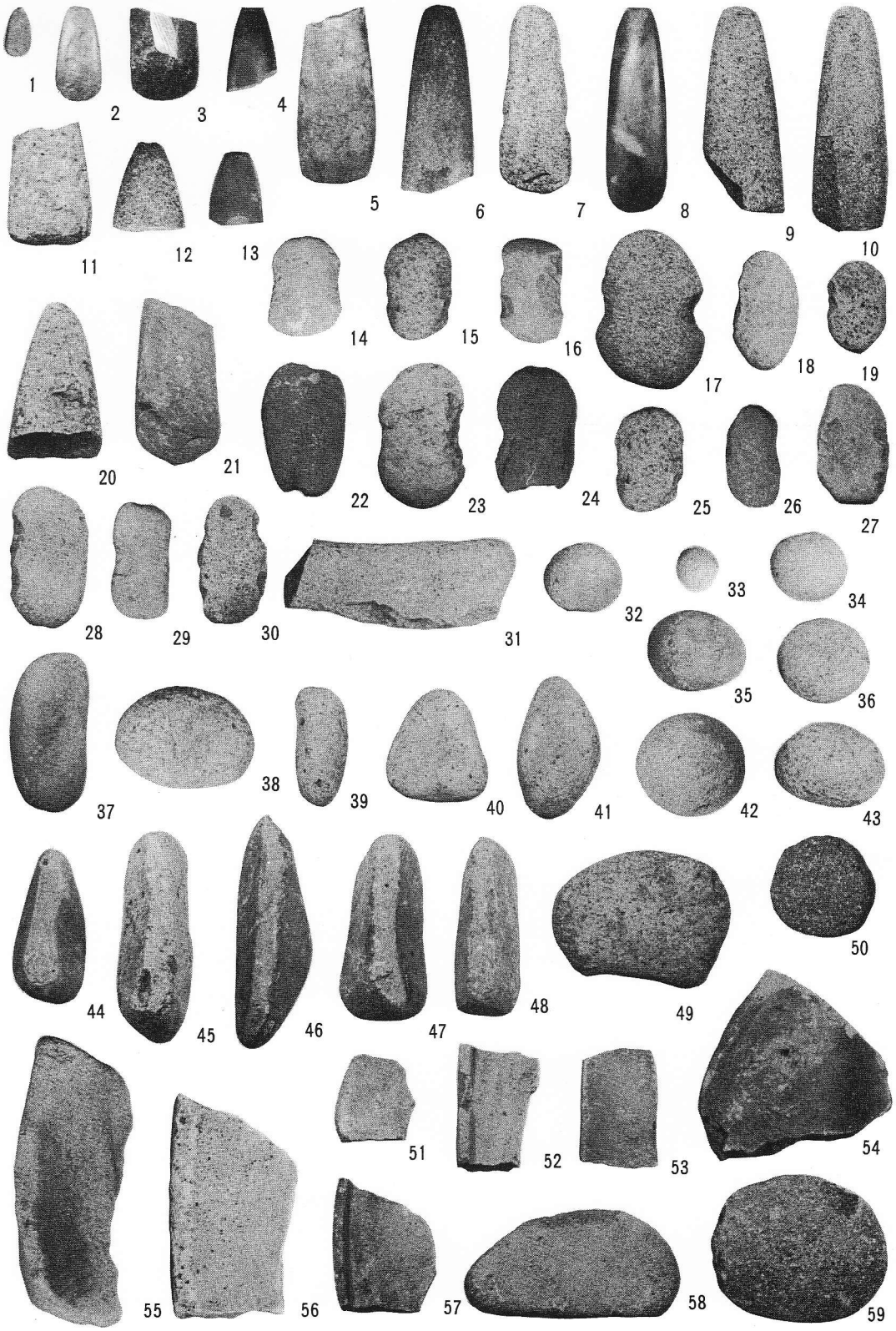
ＰＬ21　遺構外出土土器(6)



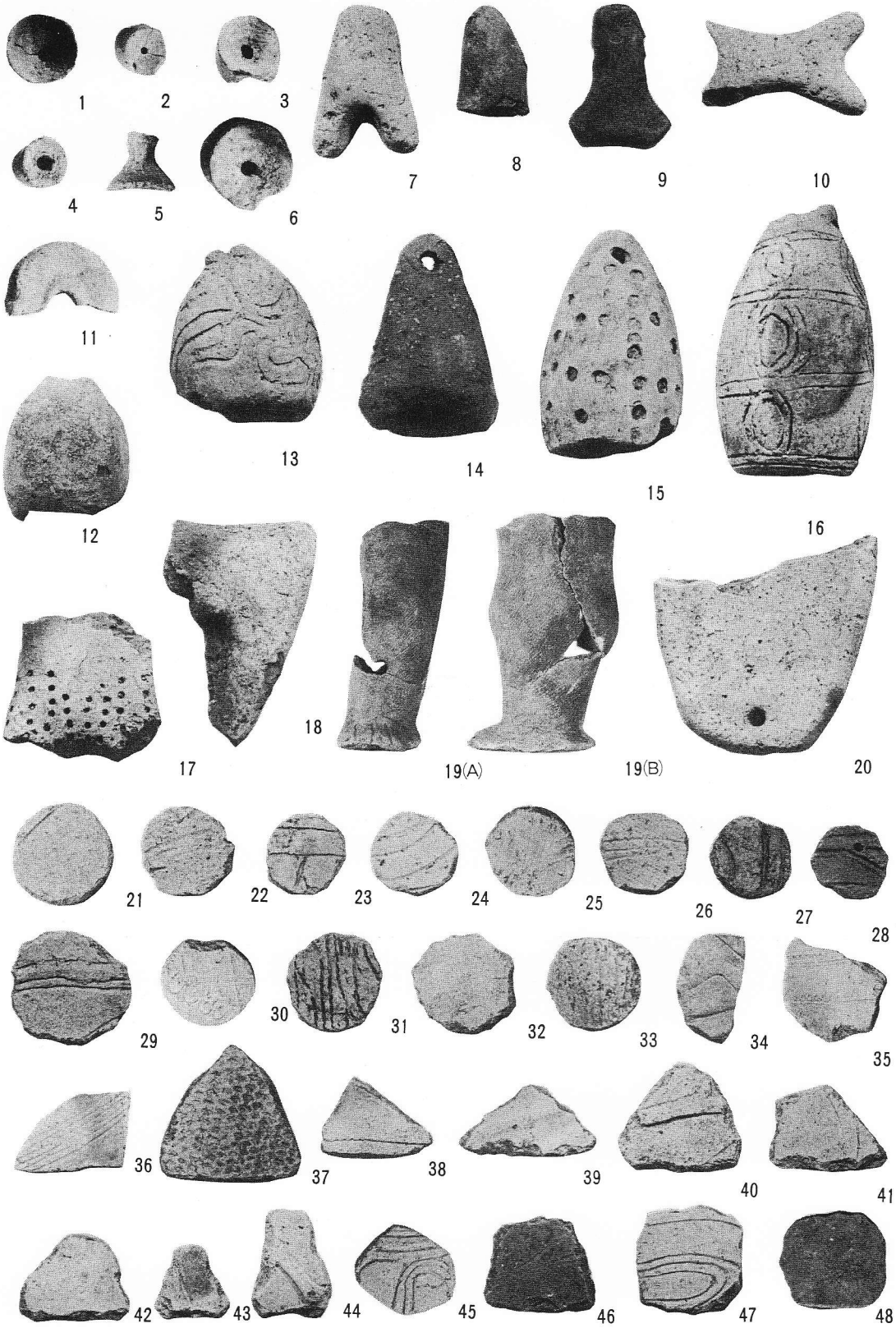
ＰＬ22　遺構内・外出土石器(1)　　1～38遺構内、39～62遺構外



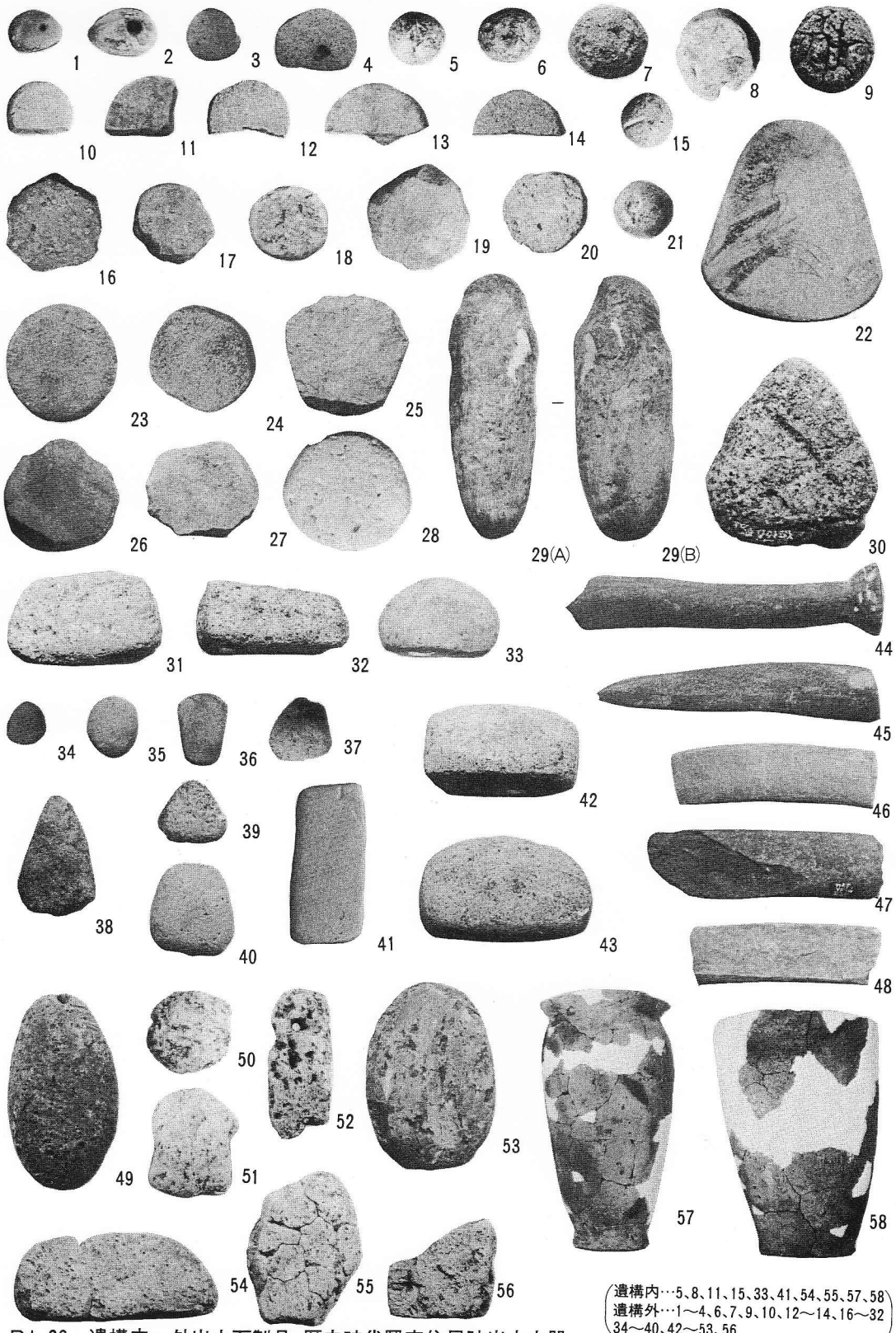
ＰＬ23　遺構外出土石器(2)



ＰＬ24　遺構外出土石器(3)



ＰＬ25　遺構内・外出土土製品　(遺構内…2、8～11、14、15　遺構外…1、3～7、12、13、16～48)



遺構内…5、8、11、15、33、41、54、55、57、58
遺構外…1～4、6、7、9、10、12～14、16～32
34～40、42～53、56

ＰＬ26　遺構内・外出土石製品、歴史時代竪穴住居跡出土土器

鹿角市文化財調査資料38集

大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(6)

発行年月日　平成２年３月31日

発　行　者　鹿角市教育委員会

〒018－52

秋田県鹿角市花輪字荒田４－１

TEL 0186－23－5111

印　刷　所　㈲　大館孔版社